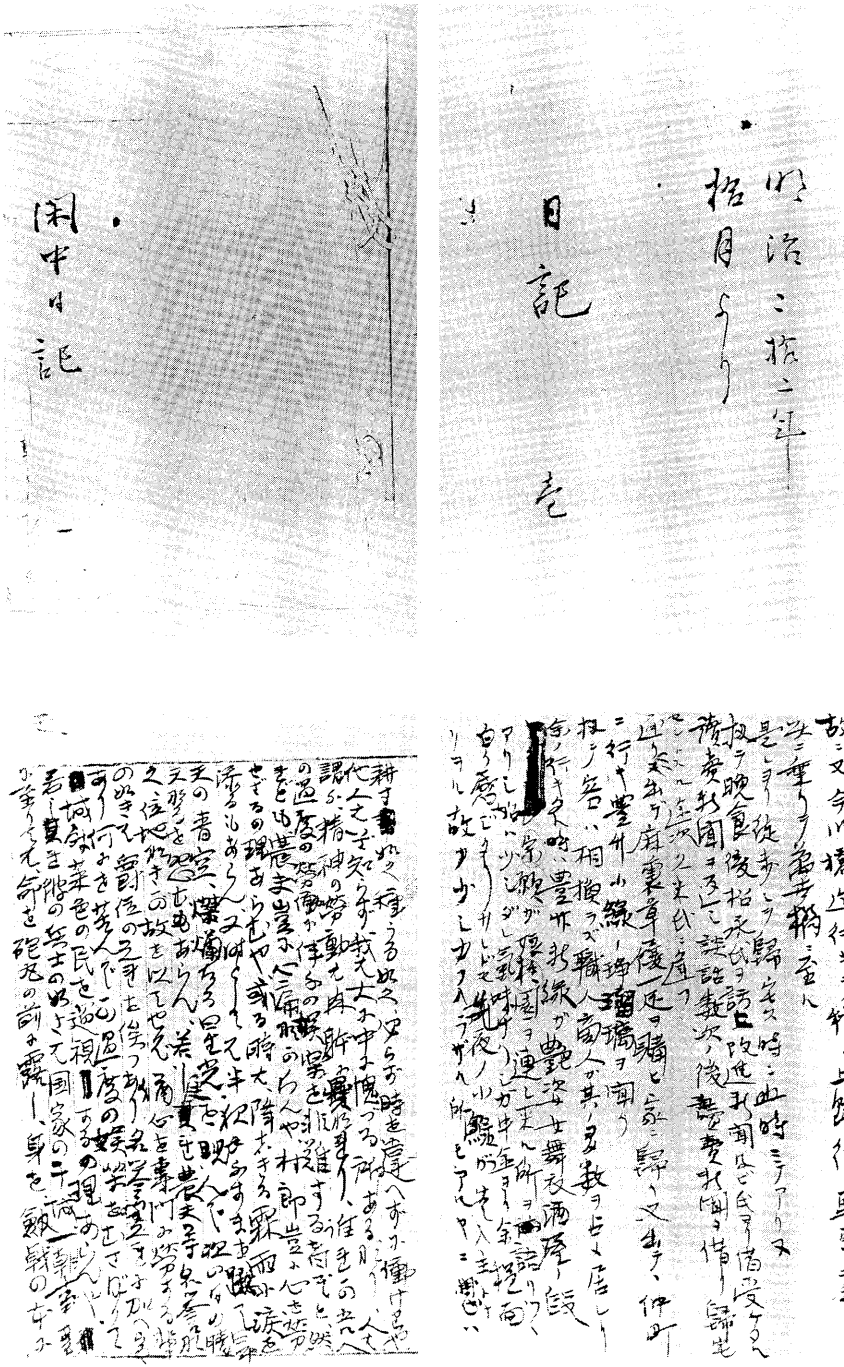
明治学院史資料集

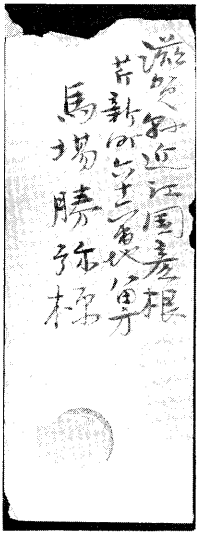
第14集

明治学院大学図書館

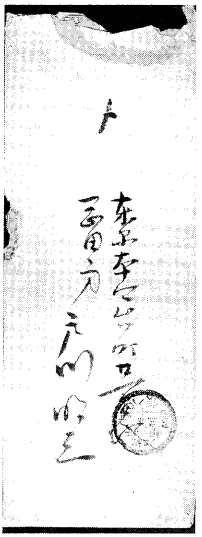


上 左より閑中日記表紙、二十二年日記表紙、下 左よりそれぞれの本文

右　戸川秋骨より馬場勝弥宛英文書簡



宛　名



本人住所

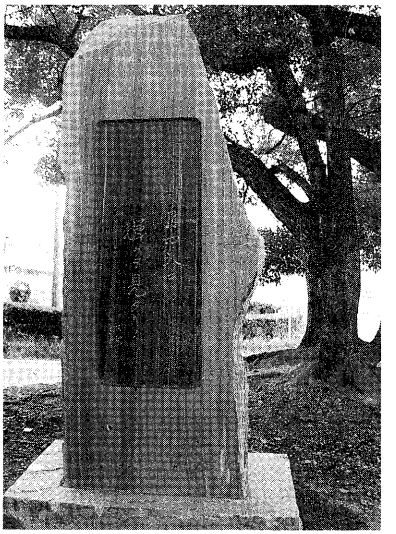
Friday Morning

Dear Kacho,

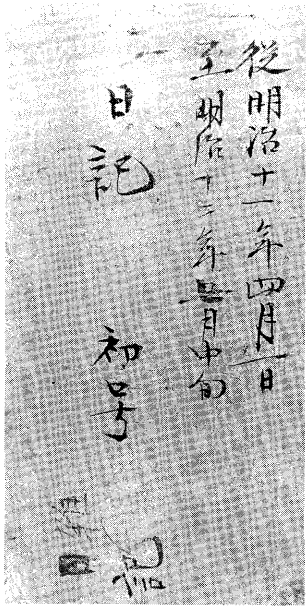
You are so dutiful in every particular! I am fully appreciated the situation in which you are put in.

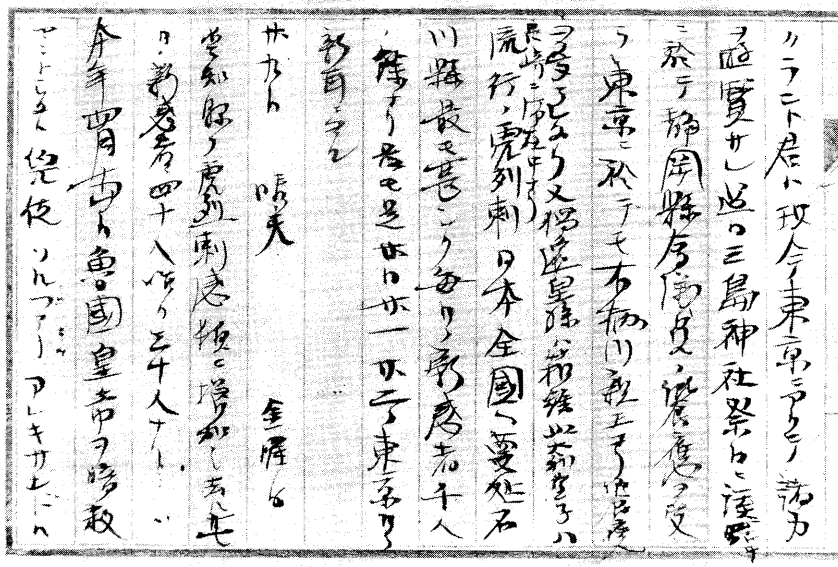
Be sure I am not at all offended with your letter. ~~But~~ Rather I anticipated that you will ~~not~~ be offended on account of disappointment for a prior articles. Well be it so. But there was another failure. O might I have known the age of —— a little earlier. ~~I am~~ As soon as I got your letter, I went to purchase those which you ordered & it was just ready to be sent when I received your second letter & learned that two of Kangashi which I sent beside those of Tsuru & Sumer, were too sombre for a girl of 14 of age. Excuse me. I never imagined that your passion was directed to such a Dantesque or platonic feature as a girl of 14 ages. Yes, I made a great failure in sending you a rather sombre kind of Kangashi. If you order another more fashionable ones, I shall soon send them.

As you take a bath, I am accustomed from childhood



昭和六十二年六月二十一日に高知市鏡川北岸に建立された馬場孤蝶の文学碑。碑文は明治二十三年の「庚寅日記」よりとった「一輪ノ皎月中天ニ輝クヲ見タリ」である。写真は秋山繁雄氏撮影。





上　左より山本秀煌日記初号の表紙と裏表紙の写真と山本秀煌の写真（指路教会百年の歩みの中より）

下　山本秀煌日記第貳号の中の一頁

目次

馬場勝弥（孤蝶）の明治二十二年日記の解題……秋山繁雄……（1）
馬場勝弥（孤蝶）日記壱　自明治二十二年十月一日　至同年十二月二十三日……（19）
孤蝶「閑中日記」の解題……岡林清水……（51）
馬場勝弥（孤蝶）閑中日記　自明治二十五年五月一日　至明治二十六年一月八日……（67）
秋骨の孤蝶にあてた英文書簡の解題……木戸昭平……（107）
秋骨の孤蝶にあてた英文書簡……（110）
秋骨の孤蝶にあてた英文書簡の訳文……平林武雄……（111）
山本秀煌日記初号、第貳号の解題……真山光彌……（113）
山本秀煌日記初号　自明治十一年四月一日　至明治十二年七月十七日……（118）
山本秀煌日記第貳号　自明治十二年七月十七日　至明治十四年五月八日……（142）

凡　例

一、原文に忠実であることにつとめた。漢字は原則としては新字体を用いたが、送り仮名はそのままとし、漢字で著しく一般的でないものには、ママのルビを付した。また判読不能の場合には□であらわした。

一、本文上欄外に記されたものは、当日の最後に＊を付し記した。

一、馬場孤蝶日記の中で、年月日において、月の記されていないものにも、読む人の立場を考えて月を記入した。

一、山本秀煌日記の凡例は、その解題のあとに別掲されてある。

馬場勝弥（孤蝶）の明治二十二年日記の解題

秋山繁雄

この馬場勝弥（孤蝶）の明治二十二年十月一日から十二月二十三日までの日記は、前回の『明治学院史資料集第13集』の中の「庚寅日記」に接続するもので、年代的にはその前であり、発表からいえばその逆である。「康寅日記」は、主として孤蝶の長男故馬場昂太郎氏のご厚意によったのであるが、今回の日記は孤蝶の次女大津留晴子さんのご厚意によっている。いずれにしても、『明治学院史資料集第14集』にこの日記を収録、発表できることは明治学院にとりまことにありがたいことで、馬場家のご厚意に対して心から感謝申し上げる次第である。

馬場孤蝶の日記のもつ意味については、「庚寅日記」について述べた如く、明治学院の歴史にとっても、あるいは孤蝶研究にとってもきわめて貴重であり、ここに発表をみることは、まことに意味深いものがあるといわなければならない。わずか三ヵ月間の日記であるがここに出てくる教師、学友たち、孤蝶が手にした書物、雑誌、新聞、聞きに行った義太夫、等については、「庚寅日記」を読むための予備的資料として、いくつかを掲げてあるので、重複をさけ、必要ある場合にはそれを参考にしていただくことにして、ここではもう少し本文に即して具体的な説明をするこ

とにしたい。

なお孤蝶は明治学院の寄宿舎ヘボン館に寄宿しているので、月曜日から金曜日までは、学院におり、ここに出てくる人物は学院関係の教授や学生たちである。金曜日夜から日曜日までは本郷本妙寺坂の自宅に帰っている。この馬場家を中心に出てくる人物は、馬場家の親戚関係と高等中学校、あるいは今でいう東大などの人たちであったと考えられる。もちろん、一、二の明治学院の学友もあるがこれは例外である。中島という学生が出るが、これは中島久萬吉ではなく、孤蝶に勉強を教わっていた本郷あたりに住む学生である。

一

馬場孤蝶は明治二十二年一月に明治学院普通学部二年に入学した。より厳密には編入したというべきであろう。これは紅野敏郎、木戸昭平の両氏の調査によるものであるが、おそらくは孤蝶自身がそう書いているからであろう。明治学院の記録からは確認することはできない。それは当時の記録が失われていて見ることができないからである。従って孤蝶が明治二十二年一月に明治学院普通学部二年に編入したことは、確定した事実として類推を進めるより他に方法はない。

明治二十二年一月といえば、孤蝶は二十歳で、住居は本郷本妙寺坂である。どうして明治学院に入ることを思い立ったかは明らかではない。孤蝶は明治十八年秋ごろに神田淡路町の共立学校（のち開成中学）に入学した。この共立学校は大学予備門（高等中学校）志望者が多く学ぶ学校であった。孤蝶の志望もまた高等中学校であったから、明治十九年、二十年と二度同校を受験して失敗した。さらに二十一年にはお茶の水の高等師範も受験したがこれも失敗し

たという。一方、家庭においては、自由民権家として有名な次兄馬場辰猪が二十一年十一月一日、遊学先の米国フラデルフィアの病院で病死した。このような状況の中にあった孤蝶は当時共立学校三年生であったので心気一転の意味もあったろうが、海外遊学に最もふさわしいとの評判の高い明治学院への入学を考えたのではなかろうか。

「明治学院一覧」自明治二十年至明治二十一年、は孤蝶も手にして調べたものと考えられるが、それには入学、在学及退学に関して次のように規定している。

一入学ノ期ハ毎学年ノ始メ及ヒ終リノ二回トス　但時宜ニ依リ臨時入学ヲ許スコトアルベシ

一入学ヲ許スベキ者ハ予科第一年級ニ於テハ年齢満十二年以上ニシテ高等小学校卒業者若クハ之ト仝等ノ学力アル者トシ本科第一学級ニ於テハ年齢十四年以上ニシテ予科卒業者若クハ該科卒業者ニ等シキ学力アル者トス

一本科第二年以上ニ入学セント欲スル者アルトキハ先ツ本科第一年級ニ入ルベキ学力試業ヲ経尋テ其入ラント欲スル級ニ合格スベキ諸科目ノ試業ヲ受クベシ

一本学部ト仝等ノ学科課程ヲ具備スル他ノ学校ニ於テ其級ヲ終了シタル者ニシテ該校教授ノ証明ニ依リ本学部ヘ入学セントスルトキハ別ニ試業ヲ須ヒズ直ニ入学ヲ許スコトアルベシ

一他ノ学校ノ生徒ニシテ本学部ヘ入学ヲ願フ者ハ必ズ其校ヨリ転学認許証書ヲ持参スベシ

一臨時入学試業ヲ願フ者ハ試業費トシテ金壱円ヲ納ムベシ

一入学ヲ願フ者ハ入学試業ノ期日ニ先チ左式ニ拠リ履歴書相添ヘ入学願書ヲ差出スベシ

右は共立学校三年在学中の孤蝶が明治学院へ入学するについて適用された規則であるが、どの条項が適用されたのか、試験があったのか無試験であったのかその辺のことはもちろん明からにすることはできない。

馬場勝弥（孤蝶）の明治二十二年日記の解題

しかし明治二十二年一月、あるいはその前年末明治学院普通学部二年編入が認められると、在学証書の提出が義務づけられている。すなわち

一入学ノ許可ヲ得タル者ハ丁年以上ノ者ニシテ東京府下ニ住居ノ戸主ヲ保証人トナシ左式ニ拠リ在学証書ヲ差出スベシ

在学証書

私儀今般入学御許可相成候ニ付テハ在学中御規則等堅ク相守リ卒業ニ至ル迄猥リニ退院仕間敷候依テ証書如件

宿所

族籍、戸主何誰子弟

年月日　　姓　名　印

何年何ケ月

何誰儀今般入学御許可相成候ニ付テハ御規則等堅ク相守ラセ万一不都合ノ廉有之節ハ私一切引受可申候且ツ猥ニ退院致サセ間敷若シ疾病又ハ其他止ヲ得サル事故アリテ退院願度節ハ私ヨリ其事由ヲ申立出願可仕候依テ保証如此候也

但向後宿所移転候節ハ速ニ御届可仕候也

宿所

族籍

年月日　　保証人　姓名印

右は在学証書の書式であるが、入学許可された者は必ず提出しなければならなかった書類であることは既述の如くである。明治学院図書館史料室には、最も古い在学証書として、築地大学校、東京一致英和学校、神田の英和予備校、明治学院初期のもの一部が貴重書類として保管されている。しかし孤蝶のものはない。もちろん孤蝶も在学証書を草郷清四郎の保証で提出したはずである。草郷は姉駒子の夫であり、孤蝶の学費の出資者であったからである。

孤蝶の明治学院普通学部二学年編入は明治二十二年一月とされているが、これをより厳密に見るならば、一月九日が第二学期の授業開始であるから、おそらくこの日から明治学院の授業を受けたことになるであろう。そして三月三十一日に二学期が終り、春期休業の後四月九日から第三学期の授業が始まり、六月二十七日をもって三学期を終り、第二学年を終了して、二十八日から夏期休業に入った。第三学年は九月十五日に第一学期に入り十二月二十三日に一学期の授業が終り冬期休業に入ったのである。

従って孤蝶の明治二十二年日記は第三学年一学期の十月から十二月までの三ヵ月間を綴った日々の記録というわけである。期間的にはわずか三ヵ月と短いものであるが、重要なことが数々記されているので以下にこれを記すことにする。

二

「明治学院一覧」自明治二十年至明治二十一年、で見る限り、明治学院ではフランス語を教えていることは記されていない。

しかるに、この孤蝶の日記で見るとフランス語を教えていることは確かである。この日記の中に出てくるフランス

馬場勝弥（孤蝶）の明治二十二年日記の解題

語に関する所を拾ってみると、

十月二日、「此日仏文翻訳ヲ教師ニ出ス　又ハリス氏ヨリ前日ノ草稿ヲ受取ル」、六日、「朝食後直チニ仏文翻訳ノ清書ヲナス」、八日、「此日仏文翻訳ヲ教師ニ出シ且前回ノ翻訳ヲ受取ル　中ニ四ケ所誤謬アリ」、十日、「ミセス、ランヂスニ仏語科試験施行ノ廃止ヲ請求ス　然レドモ夫人ハソハ試験ニ非ズシテ復習ナレバ別段気遣フニ及バズ聊モ試験ハ学院ニテハ為サザル規定ナルガ故ニ勿論試験ニハ非ザルヲ告ゲラル」、十一日、「此日午後仏文翻訳ノ復習ヲナス」、十六日、「午後二時過ギ仏文翻訳ヲ出シ前日出セシ所ノ翻訳ヲ受取ル　前週水曜日ニ出シタルモノハ錯誤ナク、金曜日ノ者ハ三ノ誤謬アリタリ」、十八日、「此日午後仏文翻訳ヲ教師ニ出ス」、二十三日、「二時マクネヤ氏帰ル故ニ仏語科ハ休業ナリシ」、三十日、「此日午後仏語課業ニ於テ下読ミヲナシ行カザリシ人多カリシガ故ニ教師ハイト不興気ニテ此ノ次ニ書取ヲナスベキ由ヲ言出デヌ且余輩ノ出シタル八、及十ノ翻訳文ヲ見失ヒタルコトヲ語ル」、十一月十二日「六時半頃ヨリ仏文翻訳ヲ始メ七時半頃之レヲ終ル」、十三日、「昼食後仏文翻訳ヲ教師ニ出シ前回ノ訳文ヲ受取ル　誤字一ツアリ　ズット前ノ訳文ヲ催促シタレドモ未ダ見当ラザレバ之レヨリ善ク探ガス可シト答エラレタリ」、十九日、「此日ハ仏文翻訳ヲ終ル」、二十九日、「午後ハ仏文課ニテ仏文ノ翻訳ヲサセラレタルハ少シク弱リタリ」、十二月四日、「午後二時過仏語課ノ時間ニ（Etude Progressive de la language Francaise）ト云フ本ヲ読マセラレタリ」、六日、「昼食後仏語『動詞ノ暗唱』ヲナス」、十二日、「晩食後仏文翻訳ヲナス」、十三日、「此日ハ仏文翻訳ノ古イノヲ受取リ又此ノ間ノ試験ノヲ受取ル　前ノハ一モ誤リナク後ノ者ニハ四ツチガツタ」、十九日、「仏語ノ時間ニ本ヲ代エル相談ヲ成ス」と記されている。

島崎藤村や孤蝶が学んだ頃は、明治学院においては体操、漢文、国文を除いてあらゆる学科が英語によって教授さ

れていたとして、フランス語が教えられていたことは全く記されていない。ただ藤村の「学院時代の戸川秋骨君」（昭和十四年八月二十日、第八十六号）などによって、ドイツ語の初歩がランディス夫人によって教えられたことが記されているが、これとて正科としてではなく希望による臨時の教授であったと考えられる。

しかるに、この孤蝶の日記によると、フランス語科があって正規に教えられているように記されている。もちろん、希望者が多かったので臨時にフランス語科が設けられたのかもしれない。しかし、大切なことはフランス語が教室において多数の学生を集めて教えられていたという事実で、これは孤蝶研究にとってはもちろん明治学院史にとっても、島崎藤村研究にとっても重要な示唆を与えるものである。

次にフランス語の教授はだれであったかということになるが、この日記からは教授名を特定することはちょっと困難である。十月二日の「此日仏文翻訳ヲ教師ニ出ス　又ハリス氏ヨリ前日ノ草稿ヲ受取ル」を見ても教師とハリス氏を同一人と見るかどうかはなかなかむづかしい問題である。また十月十日の「ミセス、ランヂスニ仏語科試験施行ノ廃止ヲ請求ス……」を見ると、ランディス夫人もフランス語の教授に関係していたことになっている。さらに二十三日の「二時マクネヤ氏帰ル故ニ仏語科ハ休業ナリシ」を見るとマクネヤ教授も教えていたようである。このようにフランス語の教師を特定できないのであるが、もし三人が関係していたとしても、かれら三人ともフランス語を教える学識をもっていたことは確かである。

ハワード・ハリスはラトガース大学卒業、ニュー・ブランズウィック神学校卒業であり、マクネヤはプリンストン大学校卒業、プリンストン神学校卒業であり、ともにギリシャ語、ラテン語、フランス語などにも精通していたであろう。もちろんハリスは本来は英語学、英文学の主任教授である。またマクネヤは心理学、論理学、理財学の主任教

授である。ランディス夫人にしても、彼女の履歴はよくわからないのであるが、彼女の夫ランディスはプリンストン大学卒業、プリンストン神学校卒業、その間ドイツのベルリン大学にも遊学している。従って夫人もフランス語を教えることができたであろうことは考えられるのである。

三

この孤蝶の日記を通覧していく時、孤蝶はいくたびか演説文の草稿を書き、演説の下稽古をなし、教室で演説をしている。例えば、

十月二日、「課業終リテ後明日ノ演説ノ下稽古ヲナストテ草稿ヲ閲スレバ不完全ノ点少カラズ　加フルニハリス氏何ニカ取急ギタルト見得エ訂正方非常ニ粗畧ナリ　故ニ余ハ之レ等ヲ少シク修飾シシキリニ文章ヲ暗唱ス」、十三日、「午後演説文ノ草稿ヲ作リ舜ノ種ヲ取ル」、十九日、「午後歴史及ビ修辞書ノ下読ヲナシ演説文ノ校正ヲナス」、二十一日、「午前十時ハリス氏ニ演説文ノ訂正ヲ請フ」『大祭日ニ就テ』及ビ『翻訳課時間ニ就テ級友諸氏ニ告グ』ナル二文章ヲ作ル」、二十二日、「此日ハリス氏ヨリ演説文ヲ受取リヌ」、二十三日、「五時晩食後演説ノ演習ヲナス」、二十四日、「午前十時英語演説ヲナス　題ハ『自知ノ必要』ナリ」、十一月四日、「午後一時過ヨリ演説文ヲ起草ス」、六日、「演説文ヲ清書ス」、七日、「此日演説ヲナス（但シ英語）　暗唱ガ足ラザリシ故カ度々ツカエタリ　ハリス氏ハ余ノ文体ガスムーズナリト褒ラレタリ」、十四日、「十時過文学会邦語演説ノ下書ヲ初ム」、十五日、「昼食後演説文ヲ下書ヲナス　是レハ同窓会ニ向ツテノ者ナリ」、「四時前前夜ノ演説ノ稿ヲ継ギテ之ヲ終ル」、「六時頃ヨリ文学会ニ出ヅ……」、十六日、「四時過演説文ヲ草シ終レリ」、十七日、「午前ヨリ文章ノ清書ヲ始メ十二

時ニ脱稿ス」、二十一日、「此日英語演説ヲナス　ハリス氏ノ評ニゼスチュアーヲナスニハ手ヲ挙ゲテナセ　又此レト云フ時ハ「フロント、ゼスチュアー」ヲナス可キ由シヲ云ハル」、十二月一日、「演説文ヲ書キ終レリ」、四日、「夜ヱ掛ケテ演説文ノ暗唱ヲナス」、六日、「此日英語演説ヲナス」、八日、「晩食後出発ノ用意ヲナシ居リタルニ赤田氏来リテ来二十日ニ文学会中会ヲ催スニ付キ其時余ニ邦語演説ヲナス可キ由ヲ話サル　余承諾ノ旨ヲ告グ」、十七日、「夜ニ入リテ演説文ノ草稿ヲ作ル」、十九日、「六時一片ノ届書ニテ晩禱会ヲ御免ヲ蒙リ演説文ノ下書ヲナス」、二十日、「六時過文学会出席ノ為メ『チヤペル』ニ行ク　今会ハ中会ニシテ客ヲモ少シハ招キシ故カ少々洋人ヲモ見受ケヌ　然レドモ割ニハ多ク来ラザリシ　日本人ノ女生徒ハ三四名見受ケヌ　初ノ中ハ只一名ノ女生徒ノミアリシカバ嶋崎（藤村）氏余ノ袂ヲ引キテ曰ク『万緑叢中紅一点』ト　当夜ハ弁士八人ニシテ余モ其ノ一人ナリキ　此ノ内ニテ一番感服セシハ島崎氏ノ諷刺直諫及ヒ罵倒ト云ヘル文章ニテアリタリ　其他音楽ハ学院生徒及ビミツヘ、モーレー等ニテ勤メタリ　九時前閉会ス」

と記している。右の中で孤蝶は何度も英語演説をしている。これはエロキューションという、英語演説法あるいは雄弁術というもので、その実地演習であろう。当時の英語の課目の中には講読、訳解、作文、文法、習字、会話、講演等があったのであるが英語演説法もあったのである。英語学、英文学の担当教授はハワード・ハリスであったから英語演説が終ると、いろいろ細かい注意を与え批評したのである。当時の明治学院の学生が英文を読み、書き、話すことが自由であったのは外人教授の指導でこのような実地教育が行なわれたからであったと考えられる。

次に孤蝶が文学会に出席したことが記されているが、文学会は通例金曜日夜六時から行なわれた。文学会には明治学院の同窓のみによって行なわれるものと、外部からお客を招いて行なわれるものがあった。十二月二十日の文学会

は文学会中会となっているが、察する処、外部からの招待は小規模で、この場合は築地あたりの外人やキリスト教学校の外人教師などの他、学院近傍の頌栄女学校などの生徒を招いただけでごく小規模のものであろうと考えられる。

この文学会の歴史は古く、明治十三年頃であるが、築地大学校時代の講談会に起源をもつといわれ、学生の自治活動の一つであって、会の目的は互いに学暇の余間を以て意見を吐き弁説を述べ知識を研磨することであった。東京一致英和学校時代になると、名称も英和文学会となり、英和文章の組み立てならびに討論演説の態姿を研究するものとし、学院教師と熟議し、当時欧米で行なわれている方法を折衷して会の運営をはかった。歴史的には変遷があるが、同一テーマを正・反の立場から討論するという方法をとったこともあった。論題は政治、経済、社会、教育、文学、風俗等多方面にわたった。白金時代になると「生徒相謀リ英和文学会ヲ設立シ其規則ヲ定メ、英文朗読、英語演説、邦語演説、邦語討論ノ諸科ヲ設ケ毎週一回講堂ニ集会シテ之ヲ行フ……」とあるごとく、文学会は学校教育の重要な行事となっている。

この文学会は毎週金曜日夜六時からサンダム館二階の講堂で開かれ、既に述べた如く、普通は学院の同窓のみであったが、文学会中会として学院と関係のある外人や近傍の女学校の生徒を招待することもあった。一方、他のキリスト教学校すなわち立教大学、東京英和学校（青山学院）、東洋英和学校、桜井女学校、フェリス女学校、頌栄女学校、横浜共立女学校、新栄女学校などと同盟を結び当番校に集まる同盟文学会もあった。孤蝶の文学会中会というに対してこれは文学会大会とでも名づけるべきものであったかもしれない。これは全く新しい名称で今後の研究をまたねばならない。もちろん同盟文学会は文学会が基礎にありその規模を拡大したものであった。

四

孤蝶の同級生で明治学院普通学部中退の中島久萬吉が彼の自伝『政界財界五十年』昭和二十六年四月三十日発行、講談社刊の中で「学園の『菫草』」の見出しの中で、「私は徳富蘇峰先生の甥に当る河田謙雄といふ人と協力して『菫草』といふ雑誌を発刊した。雑誌とは言ふものの、原稿から筆耕を傭うて之を罫紙に浄書し、其の二冊を学院の図書室に置いて校生の縦覧に供すと謂ふのである」と記している。この「菫草」は島崎藤村、馬場孤蝶、戸川秋骨など同級生が執筆していたというので、研究者の多くが図書館はじめ学院の内外をくまなく探索してきたのであるがいまだに幻の同窓誌となっている。

この孤蝶の日記を見ていくと、同級生が雑誌発行のために学友から文章を集めて雑誌を作っていることが記されている。雑誌名は「甲乙雑誌」となっている。そしてでき上がると学友間に廻覧している。この「甲乙雑誌」は「菫草」とどういう関係があるのだろうか。時期的にどちらが早いのかという問もおこさせる。しかしここではこれを決定づけることは困難である。

ただ十一月二十六日の四年生総代小西氏は、この学生は孤蝶より一年上級生であるが、「鶴鳴雑誌号外」を取消すことを述べ、且つ今後雑誌は幹事（学院）に見せてから、衆人に廻覧すべしと宣言したと記されている。これは一体どういうことであろうか。「鶴鳴雑誌」は一年上級生の廻覧雑誌であって、その内容に不都合な箇所があって学院当局から取消しを求められたのであろう。従って以後は同級生の文章を集めた雑誌は一応学院の幹事に見せよということでこれは学校当局の一種の検閲であったと考えられる。しかしこの検閲も一時的であって間もなく解除された。

これに関連して考えられるのが「菫草」の表紙絵に和田英作が裸体の美人が菫草の叢中から半身を露わしたのを描いて、学生掛に見とがめられて、かかる鄙猥極まるものは図書室に入れることは許しがたいとして没収されたということである。自由にも一定の限界があったことを示している。しかしここで注目すべきことは「菫草」の他にも学友間に雑誌編集があって互に文章を競ったことである。

以下に日記の中で雑誌に関する箇所を拾ってみる。

十月十日、「此日英語演説課休ミナリシカバ礼拝堂ニ於テ雑誌ノ件ニ付キ会議シ比佐、高畑二氏及余発行委員ニ当選セリ」、二十二日「此日午前　時前高畑氏ヨリ作文ヲ受取ル　午後四時織田氏ヨリ翻訳文ヲ受取ル」、二十三日「此日午前八時比佐及稲葉ノ二氏ヨリ作文ヲ受取ル　午餐後高畑氏ト甲乙雑誌ヲ綴ル　二時三十分比佐氏来リテ雑誌ノ表紙及ビ目録ヲ書ク」、二十四日「此日朝雑誌調ヒシヲ以テ校友間ニ回ワス」、十一月二十六日、「此日礼拝堂ニテ四年生総代トシテ小西氏鶴鳴雑誌号外ヲ取消スコトヲ述ブ　近藤氏「会議ノ結果トシテヘボン氏校長、井深氏副校長トナリ杉森氏ハ予備校ノ校長ト定メラレタル由ヲ述べ且雑誌ハ以後幹事ニ見セテ後衆人ニ見セル可シト宣告アラレタリ」。

右の中で近藤氏は近藤忠恕で国漢の教授、ヘボン氏は初代総理J・C・ヘボン博士、井深氏は第二代総理井深梶之助、杉森氏は教授にして学院幹事杉森此馬である。

五

孤蝶は十月二十九日の日記に、「晩食後運動ノ為メ出行キタルニ多田氏ニ逢ヒ耶蘇教ヲ勧メラレシニハ少シク閉口

セリ　サレドモ相変ラズ瓢簞鯰ノ返答ヲナシタリ」と記している。

多田氏は多田素のことで、多田は明治二十一年普通学部卒業、神学部に進み当時は神学部二年生であった。彼はキリスト教に熱心で、共励会の中心的メンバーの一人であった。従って普通学部の未信者にキリスト教を説いて大いに勧誘につとめていたものと考えられる。孤蝶も「……サレドモ相変ラズ瓢簞鯰ノ返答ヲナシタリ」と記しているので、これまでに何度も熱心な勧誘を受けていたことが考えられる。島崎藤村は明治学院時代を中心とした彼の自伝的小説『桜の実の熟する時』の中で馬場孤蝶につき「足立（孤蝶）はまたさかんな気象の青年で、基督教主義の学校の空気の中にありながら卒業するまで未信者で押し通したといふことにも、一つの見識を見せて居た」と記している。この藤村の記述は正しく、孤蝶は学院時代にキリスト教に関する知識は十分にもったが信者となることはなかった。

ここで簡単に共励会について述べておくことは必要と考えられる。

共励会は文学会に対抗するかたちで明治十五年頃に団結された学生の自治活動に起源をもっている。文学会が学術を主とし、西洋の影響を受けて浪漫的気風を重んじ、ハイカラであったのに対し、共励会の学生は万事に地味で、あくまでもキリスト教信仰を中心においていた。いわばキリスト教青年会とでもいうべきものであった。かれらはキリスト教の宣伝につとめ、早くより学院教会の設立に熱心であった。この伝統に立って明治学院となってからは「本学部ニ在ル基督信徒相謀リ共励会ヲ設立シ会員互ニ奨励シ以テ其智徳ヲ高尚ナラシメ有為活達ノ元気ヲ養成シ真正ノ宗教ヲ拡張シ文明ノ基礎ヲ鞏固ナラシムルノ目的ヲ以テ毎月第二土曜日ニ奨励会ヲ開キ感話質問演説会等ヲナシ毎週水曜日夜ニ祈禱会ヲ開ク」ということになった。

共励会の活動は学院内の活動に安んずることができず、やがて学院外、例えば神田の学生街での野外伝道への進出、

あるいは夏期休暇を利用しての地方伝道へとその活動範囲を拡大したこともあった。

六

孤蝶の次兄馬場辰猪は明治十年代の自由民権論者である。孤蝶は生涯にわたりこの兄を敬愛し、誇りとし、そしてその早世を悲しんだ。この日記の中には、兄の一周忌の様子が詳細に記されている。それ故先ず辰猪がどのような人物であったかを平凡社の『日本人名大事典』によって見ると、

「馬場辰猪（一八五〇―一八八八）明治時代の民権論者。嘉永三年五月十五日高知藩士来八の次男として同城下中島町に生る。夙に藩校致道館に学び、慶応三年藩費生として江戸留学を命ぜられ、鉄砲洲奥平邸の福沢諭吉塾（慶応義塾の前身）に入ったが、騒擾頻々として起り、修学に適せざる為めに一旦帰国、長崎に遊学して留まること半歳余、明治二年再度上京して慶応義塾に入り、経済学を専攻した。三年七月藩費生として英国に留学、折柄岩倉大使一行とロンドンに会し、改めて政府の留学生として法律を研究し、その余暇『日本語文典』を著はし、英国社会学協会会頭ホートン公に贈って深く感謝された。七年十二月帰朝したが、翌八年三月旧藩主の許可を得て再び渡英、新文明に対する素養を十分に積み、『日本に在る英人』The English in Japan,『日英条約改正論』The Treaty between Japan and England 等を刊行すると共に、古事記を英訳した。十一年五月帰朝、時恰も自由民権論抬頭し、国会開設の必要がしきりに唱へられてゐたが、先づ民衆知識の開発を急務として、小野梓、金子堅太郎らと共存同衆を再興し、各地に演説会を開き、また雑誌を刊行して思想の宣伝に努め、同年十一月『法律一斑』を著はした。十四年大石正巳と共に国友会を創立し、雑誌『国友』を刊行して政界に活動し、次いで自由党の成るやその

幹部として重きをなしたが、幾許もなく総理板垣退助の洋行問題に反対し、末広鉄腸と共に脱党した。翌十五年加藤弘之が『人権新説』を著はして天賦人権の妄想なること、人権は国家によって賦与さるものなるを論ずるや『天賦人権論』を著はしてこれに反対して、痛烈なる論難を加へた。遂に言論のあまり過激に渉った為め、十六年四月二日警視総監樺山資紀より言論禁止の命を受け、間もなくその禁を解かれたが、時勢に感ずるところあって、暫く政界より遠ざかり、明治義塾を興して青年訓育のことに努め、傍ら訴訟鑑定所を設けて法律事務に従った。十八年英文『自伝』を書き、『雄弁法』を著した。同年十一月十六日大石と共に横浜居留地に到り、英人モリソンに就いてダイナマイトのことを尋ねたのが忌諱に觸れ、爆発物購入の嫌疑で下獄、翌十九年六月二日無罪の宣告を受けて出獄した。その釈放と共に大石を伴うて渡米、『日本監獄論』『日本人論』『日本の政治』『日本政治上の得失』の題下で或は演説に、或は著書に精進し、二十一年十一月一日フィラデルフィア大学病院に於て客死した。年三十九。彼は明治初期の第一の雄弁家と称せられ、外国に在るや英文の著書で日本の紹介に努めたのみならず、その快弁を揮って日本の為めに万丈の気を吐いた。それは単に政治、外交のみならず、古代日本の武器に就いて、米国オークランド・オペラハウスや、フィラデルフィアのフランクリン・インスチチウトで演説したる如き、当時多大の興味を以て見られた。文芸家孤蝶は彼の弟である。（森谷）」と記している。

次に孤蝶の日記に出てくる辰猪の一周忌の所を拾ってみると、

十月二十六日、「五時豊川ニ行キ金ヲモラウ話シヲナシテ帰ル　家ニ帰レバお安来リ居リテ余ニ亡兄辰猪一周忌ノ法会施行ノコトヲ相談シ帰ル」、二十七日、「朝七時過早川氏ヲ訪ヒ左伝ヲ返シ豊川ニ行キ一周忌ノ事ヲ談ジ金三円ヲ受取リ帰ル　昼食後谷中ニ行ク道岡田氏方ニテ荘子ヲ買ヒ谷中ニ行キ墓参ヲ果シ神官ヲ頼ムコトヲ茶屋ニ依頼シ

馬場勝弥（孤蝶）の明治二十二年日記の解題

テ帰ル　晩食後一周忌祭ノ案内状ヲ書キ六時家ヲ発シ学院ノ途ニ上ル」、十一月一日、「昼食後谷中ニ行キ茶屋ニテ休ミタル後墓場ヲ見舞ヒ来島恒喜ノ墓ヲ見ル　幟数本立チ居レリ　梵字ヲ書シタル者多カリシ　茶屋ニ帰レバ二人ノ壮士アリテ来島ノ墓エ参ルニヤ切リニ塔婆ヲ書キテ居タリ　暫クシテ姉及ビ義姉来ラレタリ　実ニ久々ニテノ面会ナレバ義姉ハ余ヲ見忘レ居ラレタル様子ナリシ　ゲニ十年ホド前ニ余国ヲ出タレバソレモ尤ノ事ニゾアル根岸ノ叔父来ラレタリ　次ニ福富氏来ラレタリ　談話少時ノ後墓場ニ行キ神官ノ祈禱ヲ請ヒ拝シ終リテ帰ラントセシニ渡辺又兵衛氏来ラレヌ　ソレヨリ茶屋ニ帰リシニ福富氏ハ本日ハ学校ノ常会議日ナルガ故ニ急ギ帰ラザルヲ得ザル旨ヲ告ゲテ帰ラレタリ　皆々帰リタル後余ハ茶屋ニ茶代及ビ供物花代神官謝儀等合セテ一円六十銭ヲ置キテ帰宅ス

家ニ帰リテ少クスレバ佐伯氏来リテ種々談話ヲ為サレタリ　四時過佐伯氏渡辺氏ト共ニ帰ル　小焉ニシテ豊川及ビ草郷氏来ラル　種々談話ノ中叔父五時過帰ラル　七時前草郷義兄及ビ豊川帰ラル　向島ヨリ清司氏妻君来ラレタリ此ノ日黒岩氏、佐伯、渡辺、清司、ノ諸氏神前ニ供物ヲ贈ラレタリ

嗚呼日月我ヲ待タズ　流水ノ行キテ反ラヌガ如クハヤ一年ハ過行キテ我兄辰猪が「フヒラデルヒヤ」ニ永逝セシ当日ニナリタリ

余ハ此ノ政治界多事ノ今日ニ当リテ我家兄ノアリテ充分ニ其技倆ヲ顕ハシナバ余等イカニカ嬉シカラン　又当人モ望ミ足リテ嘸ヤ満足ナル可シト追想スルゴトニ余ハ実ニ万感胸ニ充チテ思ハズモ帳然タルコト屢ナリキ」、二日、「午前八時豊川ニ行キ勘定及ビ紀念分ケノ処分ニ付キ談話ス　一日ノ「政論」ニハ亡兄ノ墓所ノ画図及ビ之ヲ弔フノ辞掲載シアリタリ　同家ノ倉ニ入リテ遺物ヲ調ブ　新聞紙ノ集メ物手簡及ビ蔵書印ヲ得テ十二時同家ニテ昼食ヲ

喫シ一時過帰宅ス」

と記されている。

右の文に出る豊川は、長兄源八郎氏永の娘安子の夫豊川良平。豊川良平（一八五二―一九二〇）は明治・大正時代の実業家。土佐の人。森下岩楠と神田錦町に三菱商業学校を経営、経済新聞を創始、第百十九国立銀行頭取を経て後に三菱銀行頭取となった。その他第百十銀行、日本窒素肥料会社取締役、猪苗代水力電気会社社長を兼ねた。

お安は長兄源八郎氏永の娘安子で、豊川良平の妻。

義姉は長兄源八郎氏永の妻

根岸の叔父は馬場氏連

姉は孤蝶の姉駒子、草郷清四郎の妻

草郷義兄は草郷清四郎で姉駒子の夫。草郷清四郎（一八四六―一九二四）は明治・大正時代の実業家。和歌山藩士草郷家の四男として生る。開成学校、慶応義塾に学ぶ。大学東校総幹事、横浜正金銀行、筑豊鉄道会社を経て明治三十四年小田原電気鉄道会社社長となる。他に明治生命保険会社監査役、九州鉄道会社取締役も兼任。

黒岩氏は妹小鶴の夫、黒岩徳明。

なお来島恒喜は安政六年十二月福岡黒田藩の藩士の家に生れ、政社玄洋社社員となり国事に奔走。明治二十二年十月十八日外務大臣大隈重信の条約改正案を不満とし霞関に爆弾をもって大隈を襲い負傷させ、自らは屠腹して果てた。

以上馬場孤蝶の明治二十二年日記の中から思いつくままに問題を拾って解説を加えたのであるが、読み方によってはさらにいろいろな問題を考えることができるであろう。例えば同級生の雑誌発行のことにしても、「鶴鳴雑誌」に

関連して、外人教師排斥問題がからんでいるらしいことなど、その具体性に欠けるところがあるとしても、あるいは岩野泡鳴の退学に対しても重要な示唆を与えることになるだろう。

なおこの二十二年の日記に「壱」と番号が記されていることにつき一言するならば、おそらく孤蝶が日記をつけ始めたのはこれが最初であって、二十二年十二月二十三日で終っているのは第三学年の一学期の最終日に合わせたものと考えられる。そして日附けなしで最後の一日が加えられたのは、明治二十二年の最終を区切る意味で特別に三十一日を加えてこの年を完成させたものであろう。従って壱というのは書き始めを意味する一群ということで、当初は順序を考えたであろうが、結局壱で終ってしまった。このあとの明治二十三年一月一日から始まる明治二十三年の日記を「庚寅日記」と名づけたのは孤蝶が最後に名づけた題名であろう。今回発表される明治二十五年の日記を「閑中日記」としているのもやはり同じことで孤蝶がその一群を心に描いて名づけたものであろう。日記であるから連続するのは当然で、孤蝶の日記には、この明治二十年代についても多くの未発表の日記の群が存在することが考えられる。このことは本間久雄氏の『明治文学　考證・随想』を見ても明らかである。

馬場勝弥（孤蝶）日記　壱

明治二十二年十月一日～同年十二月二十三日

拾月一日　曇天

此日朝五時ニ寝起

朝飯後直ニ学校ノ途ニ上ル　家ヲ去ル数町大横町ノ角ニテ上野ノ六時ノ報鐘ヲ聞ク　元来六時四十五分新橋発ノ瀛車ニ乗ラント欲スルヲ以テ人力車ヲ傭ハント思ヘドモ余ノ身装ヲ見テ車夫モ勧ムル者ナシ　故ニ不已得徒歩シテ神田聖堂裏ニ至ル　恰モ善ン一人ノ車夫向ヒヨリ来ルニ逢ヒ新橋迄六銭ノ約束ニテ之ニ乗リ新橋ニ行ク　達スレバ即チ六時四十五分ナリ　直ニ停車場ニ走入リ切符ヲ購ヒ検札場ニ至レリ　然レドモ瀛車ハ余程先キノ方ニアルヲ以テ余ノ近眼ニテハ見エズ　少シクマゴツキタルニ車掌ノ注意ヲ受ケ稍ク場内ニ入リ列車ノ傍ニ至リタレドモ客車ノ戸ハ皆閉ヂラレ居レリ　故ニ少シク取急ギ戸ヲ自ラ明ケント欲シテ隣ノ中等室ヲ下等ト間違ヘ此レニツキ居ル金ヲヒ子クリ廻セドモ中々明カズ　然ルニ掛官ノ余ニ告グルニ此ハ中等客車ナルヲ以テセラレタルヲ始メテ其ノ間違ヒヲ悟リ思ハズ抱腹セリ　稍ク車掌来リテ戸ヲ開キ客車ニ入ルヲ得　一先ヅホツト息ヲツキタリ　此ヲ当日第一ノ失策トス　扨瞬時ニ列車ハ進行ヲ始メ須臾ニシテ品川ニ着ス　此ニ於テ車ヲ下リ八ツ山ヲ登リ学院ニ帰リ直ニ食堂ニ入リ牛乳ヲ呑ム　恰モ善シ牛乳屋ノ来ルニ逢ヒ九月分ノ勘定二拾銭ヲ渡ス　ソレヨリ部室ニ帰ル

扨ソレヨリ当日ノ日課ヲ下読セント欧州史ヲ開キ希臘史ノ始ヲ読ミ居タルニ午前日課始リノ号鐘鳴リ渡レバ是非ナク〳〵モ書ヲ閉ヂ整列ヲナシサンダム館ニ進ム　二十分ノ祈禱時間ヲ逃ゲテ修辞書ヲ読マントスルニ教師バラ室ニ入リ来リテ大喝シテ曰ク　汝等何故ニ此ニ止ルカ直ニ二階ニ行ケト　余吃驚敗モ直ニ二階ニ行キ祈禱ニ列ス　此レ当日第二ノ失策ナリ

此日ハ先ヅハリス教師ノ時間迄何事モナク打過グ　ハリス氏ニ前日脱稿ノ英語演説ノ草稿訂正ヲ請フ　ソレヨリ別段ノコトモナク午前五時三十分晩食ノ後三田ニ行キ麺包ヲ求メ又栗三銭ヲ買ヒ帰途之ヲ食フ　帰校スレバ七時ナリ

十月二日　水曜日　朝来少シク朧ナリシカドモ午後晴天

此日仏文翻訳ヲ教師ニ出ス　又ハリス氏ヨリ前日ノ草稿ヲ受取

ル　課業終リテ後明日ノ演説ノ下稽古ヲナストテ草稿ヲ閲スレバ不完全ノ点少カラズ　加フルニハリス氏何ニカ取急ギタルト見得ヱ訂正方非常ニ粗畧ナリ　故ニ余ハ之レ等ヲ少シク修飾シシキリニ文章ヲ暗唱ス

十月三日　木曜日　朝来晴天

此日演説ヲナス、ハリス氏評、大ニ善シト、扨此日ハ別段ノ事モナク過ギヌ　夜ニ入リテ明日ノ日課ノ準備ヲ終リアルビング氏文抄ノ中英国田舎ノ生活 (rural life in England) ト云フ一章ヲ讀ム

十月四日　金曜日　朝来晴天

此日バラ、ハリス、マコーレー、三教授事故アリ出席セラレズ午後仏文翻訳ヲ受取ル　文中一モ音符ナキハ不都合ナル旨ヲ注意セラル

右終リテ帰途ニ就ク　新橋迄歩キ新橋ヨリ鉄道馬車ニテ万世橋ニ至ル　途次車中ノ人々ノ種類ヲ鑑定センガ為メ苦心セリ　万世橋ヨリ徒歩シテ帰宅ス

晩食後久米助三郎氏ノ宅ヲ訪フニ留守ナリ　故ニ去ツテ松永氏ヲ叩キ談話数次ノ後明日吹抜亭ニ行クヲ約ス　氏ヨリ所持ノ新小説、風流仏二書ヲ受取リ帰リ直チニ仲町ニ豊竹小緑ノ義太夫節ヲ聴聞セント欲シテ家ヲ出デ四丁目ノ菓子屋ニテ麺包二銭ヲ購ヒ吹抜亭ニ至ル　家内ニ入リ左側ニ坐ヲ占ム　亭ノ女明ル晩ノ出物附ケヲ持来レリ

扨当日最初ハ雛緑トカ云ヘル女ニテ年齢十七歳許ナリ　三味線文玉ニテ太閤記小暮栖ノ段ヲ語ル　未ダ声ガコナレザレ様ニテアリシ　次ハ豊竹緑恵十八九歳バカリ引語リニテ鏡山又助内ノ場ヲ語ル　可成面白カリシ　然シマダ落付キナキハ如何ニヤデモ声ハヨク立ツ　次ハ豊竹新緑ニシテ年ハ廿四五　大振ニシテ髪ハ嶋田ナリ　三味線ハ鶴沢海老三ニテ頭ノ光リランプト光リヲ争フガ如シ　太閤記十段目尼ゲ崎ノ段ヲ語ル　中々功手、客ノ中ニモ芸ハ以テ容姿ヲ補フトノ評アリ　大層面白ク聞キタリ此ノ人ハ小緑ニ歌口非常ニ似タリ　然レドモ謡中軽ク落ス所ナドハ大キナ坐敷デハ少シ聞エザルヤノ心配ナキニシモ非ズ「不義ノ富貴ハ浮ベル雲」ノ辺ヨリ「夫ヲ思フ怨ミ泣キ」アタリマデ妙々　ケレドモ光秀ノ妻ガ光秀ヲ諫ムル所ニテヤメシハ甚ダ遺憾モットサキガ聞キタカツタ　次ハ竹本鹿乃子年ハ三十近クナル可シ　ヤサガタニテ髪ハ銀杏返シナリ　三味線ハ矢張リ海老三姫小松春日遊俊寛嶋物語ノ段ヲ語ル　中々骨ヲ折リヲセラレタレドモ音声ヲイタメ居ラレタル故カ少シク聞ゴタエナキ様ナリシ　ナニトモ御苦労ナリシ

大切リハ豊竹小緑　例ノ束髪大層肥タル様見受ケヌ　緑恵例ノ口上ヲ云フ　三味線ハ海老三艶姿女舞衣酒屋ノ段ヲ演ズ　毎モナガラ旨イ物ナリ　就中跡ニ桃園ハヨリ今頃ハ半七サンノ辺実ニ妙々ト申ヤス　半七ノ遺書ヲ読ミ始ムル辺ヨリ二挺三味線ニテ読ミ終ル迄デ語ラレタリ　此所モ余程面白ク聴キタリ　当日ハ是レニテ終リタリ

全体此連中ノ歌ヒロ鹿ノ子ヲ除クノ外他ハ皆同ジ様ナリ　皆小

緑ノ弟子ニテモアルニヤ　海老三ハ三人ノ三味線引キヲナスナレバ隨分骨折ナル可シ

吹抜亭ハ高坐ハ如何ニモ広ケレドモ他ハ非常ニ狭ク空気ノ流通等ハ非常ニ悪シ　客ハ大体商人多ク又池ノ端辺ノ妙ナ書生トモツカズナントモ云ヘザル高帽連ヲチラホラ見掛ケタリ　実ニ書生ノ少キニハ不審ヲ抱キタリ　此日寄席ニテ菓子二銭ヲ求ム

帰途切通坂上リロニテ栗二銭ヲ求メ道々之ヲ食フ

＊「去年の夏ノワヅラヒニ」辺ドヲモ云ヘズ

十月五日　土曜日　朝来晴天ナリシカドモ午後ニ至リ曇ル

朝食後久米氏方ニ行キ栗ヲ落ス　又今夕寄席行キノ約束ヲナス

談話数次ノ後帰宅シ改進新聞ヲ読ム　午前十時医者ノ宅ニ行キ待ツ間ニ歴史ノ下読ミヲナス　診察終リテ胃ノ薬、五日分、喉ノ薬、二日分ヲ求ム　此ノ代価前回分トモ七拾二銭ヲ払フ　家ニ帰レバ海老原氏来リ居レリ　少シク談話ノ後帰リ去ル　次ニ松永氏来リテ読売新聞ヲ貸サレタリ　改進新聞ヲ見、むら竹六号ヲ持チ行カル、其時久米氏モ来ラレヌ　中島氏来リテローヤル読本中ヨーム（ヨーム）ノ一章ヲ読ム　改進新聞及ビ竹取物語ヲ氏ニ托シテ松永氏ニ返付ス

同午後読売新聞ヲ読ミ前日久米氏ヨリ得ル所ノ栗ヲ食フ　晩食後仏文翻訳ヲナス　少時ニシテ久米氏来リ相伴フテ松永氏ニ至リ氏ト例ノ悪口（ワル）ノ舌戦数回ノ後家外ニ出デ相変ラズ無駄口沢山ニテ歩ム　途中麺包四銭ヲ求ム　途上車夫我輩ニ勧ムル頻リナリ　遂ニ仲町ニ至リ寄席ニ木戸銭拾二銭ヲ払ヒテ内ニ入リ左側ニ坐ス　此日モ前日ノ如ク種々ノ客アリタリ　少シ晩レテ数寄町ノ芸妓二人バカリノ入来ルヲ見受ケヌ　入リハ可成リアリサレドモ建物ノ狭キ為メ人数ハソレホド多カラザリシナラン

最初ハ豊竹緑恵ニシテ義経千本桜鮨屋ノ段ヲ語ル　此日ハ引語ニ非ズシテ三味線引キニテアリシ　声ハヨケレドモ少シ急ギスギルヤノ嫌アリ　当日ハ何故カ大分シヤレテ居ラレタ様ナリ

次ハ豊竹新緑、三味線海老三、ニテ祇園女郎三段目（三十三間堂棟木ノ由来）於柳子別レノ段ヲ語ル　中々骨折リノ甲斐アツテ面白ク聞込ミタリ　木遣リノ辺ハ二梃三味線ニテアリシ　然シ大分ヌカシタ所アルハ遺憾ナレドモ皆カタル時ハ一時間有余モ掛ル可レバ之レモ致方ナシ　何ニモセヨ当日客中ノ喝采ヲ拍（マヽ）セラレシハ御手柄ト申ス可シ

竹本鹿ノ子ハ三味線海老三ニテ忠臣講釈喜内住家ノ段ニテアリシ　音声ノ痛ミタル故カ骨折リノ割リニ感ゼザリシハ残念々々、然シ隨分面白クハアリタリ

大切豊竹小緑ハ一ノ谷嫩軍記熊ケ谷陣（マヽ）谷ノ段ヲ語ル　束髪ノ熊ケ谷ハ始メテナリトノ評アリ

扨其筈ナガラ面白キ中ニモ熊ケ谷敦盛ヲ打（マヽ）チタル物語リ、藤ノ局、青葉ノ笛ヲ吹ク所、及ビ相模ガ小太郎ノ首級ヲ見テヨリノ愁嘆ノ辺ナド、余程、聞堪エアリタリ　然シイヤニ通ガ。客ノ中ホドヨリ続々帰リタルガ為メ終リマデ語ラズシテ中途ニテヤメラレタルハ残念ナリ

＊　松永氏紅葉山人ニ逢ヒテ露伴子ノ名ヲ問ヒタルニ子ハ甲田（マヽ）

嬢ノ兄某氏ナル由ヲ聞キタルコトヲ余ニ語ラレタリ

＊「国ヲ隔テ十六年音信不通ノ主従云々ノ辺最モ宜シ」

十月六日　日曜日　朝来曇天十時頃ヨリ雨降ル

朝食後直チニ仏文翻訳ノ清書ヲナス

中嶋氏来リローヤル読本中「象ノ話」ナル一章ヲ読ム　次ニ倉部氏来リ余ノ蔵書信田扶手白猿引キ、殺生石後日怪談ノ二書ヲ持行カル　午後宇佐美、浜田、福島ノ三氏ヲ訪フ　何レモ不在ナルニ依ツテ帰宅ス　三時頃ニ福島氏来リ談話数次ニシテ去ル余ハ直チニ入浴シ四時三十分晩食ヲ喫シ家ヲ出デ万世橋ニ至ル鍜道馬車ニ乗ル　車中余ヲ呼ブ者アリ　驚イテ之ヲ見レバ一年級矢嶋氏ニテアリタリ　此時車中ハ充満シテ一坐ノ余ルナシ故ニ余ハ立チテ居リタルニ京橋手前ニテ先キナル馬車ノ鍜路ヲ外レシニヤ暫時停車セシニ一客ノ去ルニ逢ヒ稍ク其坐ヲ占ムルヲ得タリ　新橋ニ至ルマデ止マルコト数回ナリシ

扨テ新橋ヨリ徒歩シテ帰ラント欲シ矢嶋氏ト共ニ日陰町ニ出デ高等中学試験ノ談話及ビ其他ノ世事ヲ語リテ帰校ス　此日余ハ日寄(ママ)下駄ヲ履キタルガ故ニ下駄ヲ覆ス事数回大ニ困難ニテアリタリ

部室ニ帰レバ未ダ同室ノ人ノ帰リ居ル者アラザリキ　少焉ニシテ赤田氏帰ル　翌朝ノ日課ノ準備ヲ為シタル後アルビルグ(ママ)文集中ノ幽霊女婿(spectre bridegroom)ナル一章ヲ読ム　辞書ヲ用ヒザリシガ故ニ一々明喨ニハ解カラザリシカド余程面白ク感ジタリ

＊日陰町辺ヨリ雨降リ出シ大ニ困難シタリ

十月七日　月曜日　朝来晴天　暖気ナリシカドモ午後三時頃ヨリ雲出デ五時頃ニハ非常ニ暗カリシ

此日晩食後三田ニ行キ麺包及ビ栗ヲ買フ

夜ニ入リ課業ノ用意ヲ終リ　スコット翁ノ湖上ノ美人(Lady of the lake)ノ抜粋ヲ読ム

十月八日　火曜日　朝来天気朦朧タリシカドモ午後ニ至リ少シク日光ヲ見ル

此日昼食後赤田氏ト共ニ三田迄散歩シ聖坂ヲ上リ学院ニ帰ル

此日五時数分前伊皿子ノ薬舗ニ行キ膏薬ヲ買ヒ帰途栗ヲ買フ

夜ニ入リ翌日ノ日課ヲ閲シ終リスコット翁ノ「リチヤード」及「ビナビアン」ト刺客ト題スル一章ヲ読ム

十月九日　水曜日　前夜来ノ曇天益々厚キヲ加ヘ遂ニ午前八時前ニ至リ雨ヲ降ス

此日仏文翻訳ヲ教師ニ出シ且前回ノ翻訳ヲ受取ル　中ニ四ヶ所誤謬アリ

夜ニ入リ日課ノ用意ヲ終リスコット翁ノ「リチヤード」云々ノ一章及ビ「ヤング・ローチンバー」「ソング、ヲフ、ビブリユー、メイド」ノ二詩ヲ読ム　中ニモ「ヤング、ローチンバー」ハ面白ク感ジタリ　此ハ「ローチンバー」ナル一個ノ若武士ガ其ノ看恋セル女「エラ」ノ他ノ男ニ嫁セントスル席ニ入リテ美人ヲ提ヘ去ルコトヲ記シタル者ナリ

十月拾日　木曜日　朝来降雨アリシカドモ午前十時頃ヨリ降リ

止ミ午後二時頃ニ至リ日光ヲ見ル

此日午前奥野氏ニ翌日晴天ナレバ同窓会ノ演説ヲ為ス可キヲ約ス

「ミセス、ランヂス」ニ仏語科試験施行ノ廃止ヲ請求ス　然レドモ夫人ハソハ試験ニ非ズシテ復習ナレバ別段気遣フニ及バズ抑モ試験ハ学院ニテハ為サザル規定ナルガ故ニ勿論試験ニハ非ザル由ヲ告ゲラル

昼食前二番室ヨリ改進新聞ヲ借リ読ム　昼食後近傍ヲ散歩シ帰校後国民の友ヲ見ル　内ニ苦楽、朧月夜、乙女心等ノ批評ヲ載ス

其ノ言フ所苦楽ハ人物ノ為メニ動作ヲナシ朧月夜ハ事実ノ為メニ人物ヲ動作ス　故ニ前者ハ毎回主人公ヲ異ニシ後者ハ一主人公ニシテ毎回事実ヲ異ニス　而シテ前者ニ主人公（終始通徹シタル）ナキハ苦楽ノ欠点ナリト云フガ如シ

乙女心の評は近松の「……此故にあわれをあわれなりと言ふ時は含蓄の意なうして却て情薄く哀れなりと言はずして哀れなるが肝要なり　例えれば松島なんどの風景にてもアゝよき景かなとほめたる時ハ一口にて其象が皆言ひ尽されて何の詮もなし其景を褒めんと思はゞ其景をよそながら数々言立ればよき景と言はずして其景の面白さが自から知るゝなり　此類万事に行はるなるべし」ト云ヘルヲ引キテ乙女心ノ情薄キハ全ク含蓄ノ意ナキニ因ル　著者ハ直チニ乙女其物ヲ写スニ汲々トシテ余所ナガラ云顕ハサゞリシハ欠点ナリト論ゼリ

午後二時頃三省堂ノ手代大家文集ヲ持チ来ル　応接所ニ行キ之ヲ受取ル

部室ニ帰リ文集中ノ「トーマス、グレイ」ノ「エレジー、リツン、イン、エ、チャーチ、ヤード」ナル悲歌ヲ読ム　此ハ彼ノ新体詩歌ニ訳出サレタル者ナリ

此日英語演説課休ミナリシカバ礼拝堂ニ於テ雑誌ノ件ニ付キ会議シ比佐、高畑二氏及余発行委員ニ当選セリ

十月十一日　金曜日　早朝ハ朧ロナリシカドモ八時頃ヨリ晴天至極暖気ナリシ

此日礼拝堂ニ於テ国民之友中文庫所載小説猿虎蛇ノ批評ヲ読ム

其大意ハ此ノ小説ハ小説ヲ以テ目スルハ不可ナリ　ソハ終始貫徹セル主意ナキガ故ナリ　故ニ之ヲ読ム人ハ玩弄物視スレバ愉快ナル可シト云フガ如シ

亜米利加ヨリ新渡ノ人々学院ニ来ル　其多数ハ女子ニテアリタリ

石本氏ノ課業始テアリ　「ゴールド、スミス」ノ「デサーテツド、ヴイレーヂ」ノ残リヲ読ミ「トーマス、グレイ」ノ伝ヲ読マレタリ　此日午後仏文翻訳ノ復習ヲナス

三時学院ヲ出デ帰途ニ上ル　伊皿子ニテ車夫ノ新橋エノ帰リナレバ何程ニテモ宜敷ケレバ乗リクレヨトノ云フニ逢ヒ新橋迄ノ賃金ヲ問エバ十銭ナリト云フ　余ハソハ余リ不廉ナリ四銭ニテ相当ナラント云フニ彼レ今一銭増サレ度シト云ヒテ去レリ　其レヨリ一町許リ来リタルニ跡ヨリ先ノ車夫ト異リタル者走リ来

リテ新橋迄先程ノ賃ニテ参ル可レバ車ニ召サレヨト云フニ余ハ新橋マデ四銭ニテ行クニヤト云ヘバ左ナリト答フ　故ニ直チニ之ニ乗リ行クニ聖坂上ニ犬ノ嚙合ヒヲナスアリ　元来余ハ幼年ノ頃生国土佐ニ於テ犬闘ハ度々見タルガ故ニ左程珍ラシクモナケレドモ東京ノ犬ニシテハ隨分烈シキ嚙合ヒナル可シ　ソレヨリ三田ニ出デ芝公園ニ入リ御成門ニ出ル　松並木ノ辺ニ至ルヤ車夫ハ横道ニ入リ車ヲ止メ余ヲ顧ミテ云フ様此レ迄隨分骨折リテ挽キ来リタレバ七銭ノ所ナレド何卒一銭増シニ八銭ニ増シ給ハレト　余ハ此ニ於テ少シク怒リヲ生ジテ曰ク　我ハ新橋迄四銭ノ積リナリ　然ルニ汝七銭ト云フハ不都合ナリト　車夫ノ云フ様新橋迄四銭トハ余リヒドイ馬車デモソレ位ハ取ルナリ　先ノ車夫ノ言フ様ハ新橋迄六銭ナリト　ソコデワタシハ六銭ノ外ニ一銭烟草銭トシテヤリタレバ大ニ迷惑ナリト云フ　余爰ニ於テ汝モ此レ迄隨分勤メテ挽キ来リタレバ五銭ハ遣ハス可シ　若シソレニテ不都合ナレバ此ニテ下ス可シ　サスレバ此方ニテ相当ト認ムル賃銭ヲ払フ可シト云ヘドモ車夫猶肯ゼス　何ニカグズ〳〵云フニ因リ余ハ大喝シテ曰ク　汝若此ニテモ不都合ナレバ交番ニ行ク可シト　車夫之ニ少シク辟易シテ曰ク　何モ交番ニ行ク様ナ事ハナシト　余曰ク　此方ニテハ大ニ行ク理由アリ汝ニ重テ問ハン　ソモ汝ハ七銭ヲ得ザレバ新橋ニハ挽キ行カズ又爰ニテハ何ニシテモ下サズ　新橋迄強テ挽キ行キテ無理ニモ七銭ヲ得ントスルナルカト　車夫ハ云フ此ハ双方ノ間違ナレバ是非ナシトテグス〳〵云ヒナガラ挽キ行キ遂ニ新橋ニ着キヌ

此ニテ五銭ヲ車夫ニ渡ス　嗚呼今日東京府下ニ於テモ斯ノ如キ奸策ヲ運ラス者アリ　抑モ彼ノ此レヲナスハ全ク余ヲ田舎書生トデモ思ヒテナシタルナルカ　然ルニ余ノ東京者ナルコト言語ニテ分リ且ツ此方ノ気焔強ケレバ彼止ヲ得ズ新橋迄挽キ行キシナル可シ　然レドモ若シ婦女子若シクハ田舎人ナリセバ隨分迷惑ナリシナル可モ白昼猶此ノ如シ　況ヤ夜中ニ於テヲヤ　実ニ心ス可キコトニコソ

新橋ヲ渡ラントスレバ校友鷺津氏ニ逢フ　氏ハ下谷ナル家ニ帰ラルヽ由ニテ鉄道馬車ニ乗ラル　余ハ銀座ニテ雑誌用紙ノ購求ヲ委托サレタレバ此ニテ鷺津氏ニ分レ銀座ノ自笑堂ニテ罫紙百枚ヲ買ヒ、此レヨリ急ギテ日本橋ニ行キタルニ生憎ヤ上野行ノ馬車ハ一モ有ルナシ　故ニ又今川橋迄行キテ稍ク上野行ノ馬車ニ会シ此ニ乗リテ万世橋ニ至ル

是レヨリ徒歩シテ帰宅ス　時ニ五時ニテアリヌ

扨テ晩食後松永氏ヲ訪ヒ改進新聞及ビ氏ヨリ借受ケタル読売新聞ヲ返シ談話数次ノ後読売新聞ヲ借リ帰宅セントスル途次久米氏ニ逢フ　通リニ出デ麻裏草履一足ヲ購ヒ家ニ帰リ又出テヽ仲町ニ行キ豊竹小緑ノ浄瑠璃ヲ聞ク

扨テ客ハ相換ラズ職人商人ガ其ノ多数ヲ占メ居レリ　余ノ行キタル時ハ豊竹新緑ガ艶姿女舞衣酒屋ノ段宗願ガ娘於園ヲ連レ来ル所ヲ語リツヽアリシ　始ハ少シダレ気味ナリシガ中途ヨリ余程面白ク感ジタリ　サレドモ先夜ノ小緑ガ先入主トナリヲル故カ少シ力ノ入ラザル所モアルヤニ思ハレタリ　当日頭ハ銀杏返

シニ結ビ居リタリ
次ハ竹本鹿ノ子ニテ一ノ谷嫩軍記三段目熊谷陣屋ノ段　此日ハ音声モ余程恢復シ大分聞ケル様ニナリタリ　且此日ハ非常ニ骨ヲ折ラレタレバ随分面白ク聞キタリ　サレドモ慾ニハモー少シ声ガ出テヽホシキモノナリ
大切ハ豊竹小緑、緑恵口上ヲ陳ブ　語リ物ハ箱根権現躄仇討十一段目瀧ノ段ニテ三人上戸ノ所ナドハ随分旨イモノナリ　然レドモ物ガ物故アンマリ面白クモ思ハザレドサスガニ小緑ダケアリテ充分ノ貫目ハアルヤニ思ヒタリ　右三人ノ三味線ハ例ノ通海老三ナリ　此ノ連中ノ評判善キハ三味線引キノ力大ニ与レリナニシロ御勉強ト申ス可シ
此ニテ直チニ家ニ帰リ就睡前改進新聞ヲ読ム
十月十二日　土曜日　朝来曇天午後一時頃ヨリ降雨　夜ニ入リ晴ル　十時頃ニ至リテ明月中天ニ皎々タルヲ見ル
寝屋ノ内ニテ都ノ花ヲ読ム
午前九時医士ノ家ニ行キ診察ヲ受ケ薬五日分ヲ得テ帰ル
午後一時頃久米氏来ル
前日松永氏ヨリ借来リタル読売新聞ヲ読ム　内ニ信州小諸地方ノ自由党ハ我亡兄辰猪ノ尽力ニ因リテ大ニ党勢ヲ張リタル由ヲ記セリ
中島氏来リローヤル第四読本中森 (The Forest) ノ一章ヲ読ム
晩食後久米氏ヲ訪フニ不在ナルガ故ニ去ツテ松永氏ニ至リ即チ相伴フテ仲町吹抜亭ニ行ク　此日ハ随分ノ入リニテ大分書生ヲ見受ケタリ　余等ノ行キタル時ハ既ニ七時過ナリシ故豊竹新緑ガ奥州安達原三段目袖萩歌祭文ノ段ヲ語リ始メタル所ナリシ
扨テ相換ラズ旨ヒ者ナレド「此垣一重ガ銕ノ門ヨリ高フ思ハレテ云々」ノ辺モー少シ力ヲ入レラレテハ如何ニヤ　歌祭文「父上ヤ母上ノ云々」ノ所アタリハ妙々、
次ハ竹本鹿ノ子三味線海老三ニテ染模様妹背門松質店ノ段ノ段ナリ　声モ余程ナヲリ余程聞能クナリタリ　加フルニ当夜ハ余程骨折リアリタルガ故ニ充分ニ受ケマシタ　余八月ノ季ニ若竹亭ニテ豊竹三福ノ質店ヲ聞キタルコトアレドモ此ノ鹿ノ子ノ質店ヲ聞キテ前者トソレホド相違アリトモ感ゼス　以テ其一斑ヲ覗フニ足リナン
鹿ノ子ノ語リ様少シク三福ニ類スル所アリ　海老三ノ三味線ハ余程面白シ　語リ人ヲ助クルコト実ニ少ナカラズ
大切ハ豊竹小緑ガ伽羅千代萩政岡忠義ノ場ニテ三味線ハ例ノ海老三　緑恵口上ヲ述ブルコト常ノ如シ「入リニケリ跡見送リテ政岡ガ」ヨリ語出シタリ　余ハ本年二月若竹亭ニ於テ此ノ人ノ政岡ヲ聞キタルコトアリ　然レドモ今度ハ又一層面白ク感ジタリ　実ニ此出物ヲ語ラシテハ独特ノ妙アリ　「五拾四郡久々ノ所存ノ臍ヲ堅メサス　誠ニ国ノ礎ゾヤ」辺ハ実ニ妙々ト申マス少シ下リテ「一年マテドモ」ヨリ「死スルヲ忠義ト云フ事ハ何時ノ世ヨリノ習ハシゾ」云々ノ愁嘆ハ大受ケナリ　然レドモ千松ノ言葉「飯ヲ食ハズモイモジュウナイー」ノ辺ナドハモー少シ涙声ニテ苦シキ様ヲ示シテハ如何ン　八月中三福ノ語リタル

時ハ種々政岡ガ心中ノ苦シサヲ押隠スコトアリシニ此ノ小緑ハ此ノ辺ヲズツト抜シ千松ノ雀ノ歌及ビ栄御前ガ政岡ノ千松ノ死ヲ見テ愁ヒザルヲ見テ取リ換子ト思違エ政岡ニ自ガ巧ミヲ打明ケル所ナドヲ抜カサレシハナンダカ面白カラズ　シカシ寄席ガ寄席ナレバソレモ御尤モカモ知レズ

然シ此ンナ物ハ真打ニ適シタルモノナレバ面白カル可キ筈ナリ

加フルニ海老三ノ三味線ノ妙ナルアリ聾者ニ非ザルヨリハ愉快ヲ感ズルヤ必セリ

何ニセヨ旨ヒ者ナリ　イヨコチノ小緑丈……

＊信州地方ノ自由党ハ氏ノ開墾ニ係ル者ナリ

十月十三日　日曜日　朝来晴天　十二時頃ヨリ非常ニ暖カナリシ　然レドモ午後三時過ヨリ雲出デ八時頃ニ至リテハ一星ノ雲間ニ輝クナシ

此日午前久米氏ヨリ到来ノ栗ヲ食フ

久米氏来リ舎兄ノ書簡ヲ余ニ示シ身後ノ事ニ付キ談話セラル

午後演説文ノ草稿ヲ作リ蕣ノ種ヲ取ル　此時烟草屋来リ無尽ノコトニ付キ談話ス

午後四時久米氏又来ル　余入浴ノ為メ出テ行キ一浴シ直チニ本屋ニ行キタルニ未ダ新小説拾八巻ハ来リ居ラザリシ　サレドモ大坂ニテ出来タル小説無尽蔵及ビ小説叢トヲ見タリ　帰宅後直チニ晩食ヲ喫シ宇佐美氏ヲ訪ヒシニ意外ナル報道ニ接シヌ　其ハ他ニアラズ　朋友某氏兼テヨリ或ル所ニ御馴染アリテ「雨ノ降ル夜モ風ノ夜モ通ヒツメタル九十九夜」ト云フ様ナコトナリシガ遂ニ先月下旬女ヨリ送リタル艶書ハ厳父ノ発見スル所トナリ父ハ或ル人ニ対シテノ面目アレバ切腹ナス可シト云フニ至リタレバ氏ハ衣服及ビ書物ヲ取纒メ先ノ女ト互ニ手ニ手ヲトリガ鳴ク吾妻ノ空ヲ立チ出デ、「落人ノ為メカヤ今ハ冬枯レテ」ト浄瑠璃中ノ人トナリシヤハ知レザレド何処トモナク身ヲ隠サレシハ是非モナキ事ナリ　其後数日萩野氏方ニ函館ヨリ書状着セシ由某氏ノ家ヲ出ヅル前日宇佐美氏ヲ訪ヒ種々ノ事ヲ打明ケラレタリ　即チ氏ハ今ノ所エ入谷ノ朝顔時分ヨリ通ヒ始メラレテ現ニ氏ハ一度金ヲ払ヒシ其他ハ皆「プロ」ノ出セシ所ナリトカ実ニ其ノ艶福羨シキコトニゾアル

扨テ氏ハ終リニ我明日ハ逃走スル積リナレバ汽車ノ時間及ビ賃金表ヲ見セヨトテ之ヲ写シ取リ帰ラレシ由ナリ　宇佐美氏ハ其時ホンノ坐興ナラント思ハレタル故深クモ配慮セザリシ　其ノ翌日某氏ノ家ニ行キタルニ家人ノ曰ク氏ハ昨夜出テ未ダ帰宅セラレズト　宇氏是ニ於テ前夜ノ事思ヒアタリタリト言エリ

之ヲ余ノ母ニ聞ク　本月二十六七日ノ頃ニカアリケン　某氏余ガ家ニ来リテ余ノ帰宅ノ日時ヲ問ヒテ何時頃ハ余ニ面会出来ルカトテシキリニ余ニ逢ヒ度ガリテ居ラレシ由ナリ　今ニシテ思ヘバ氏ハ愈ヨ志ヲ決シテ余ニ別ヲ告ゲン為メニテアリシヤ必セリ　余若シ氏ニ会ヒナバナニトカ調和ノ策ヲ運ラス可キニ僅ニ遅レシ故ヲ以テ事爰ニ至リシヤハ遺憾ノ至ナラズヤ

六時二十分家ヲ出デ学校ノ途ニ上ル

万世橋ヨリ鍊道馬車ニ乗ルニ車中既ニ充満シ一空席ヲ余サズ

故ニ余ハ立チテ居リタルニ京橋ニ至リテ稍ク空キ席ノ出来ケレバ其所ニ坐リテ新橋ニ至リソレヨリ徒歩シテ日陰町ニ出デタリ余ハ此ニ於テ余ノ拾歳頃ロ父及ビ我亡兄ニ伴ハレテ此ノ辺ニ来リ錦絵ヲ求メ又ハ種々ノ玩弄物ヲ求メタルコトヲ追想シテ坐ロニ懐旧ノ情ニ堪エズ思ハズモ悵然タルコト之ヲ久ス

足ニ任セテ歩ミタレバ八時ノ頃ヲヒ三田ニ出デソレヨリ聖坂ヲ上リ学院ニ帰ル　途ニテ栗及梨ヲ買ヒ部屋ニ帰ル時ニ八時二十分ナリ　此日就蓐後凡二拾分計ニシテ地震アリ　可成ノ震動ニテ有リヌ

＊「六時宇佐美氏ヲ辞シ帰宅シ某氏事件ヲ家人ニ告グ」

十月十四日　月曜日　朝来晴天至極暖カナリシカドモ午後三時過ニ至リテハ少シク雲出タリ

此日教授近藤氏ヨリ源氏物語ノ事ニ付キ話シアリ

画学課ハ充分ノ席ナキガ故ニ一級ヲ二部ニ分チ格番即一週置キニ出席ス可キコトニナレリ　部屋ニ帰リ高畑氏ト大祭日課業ノ件ニ付キ談話ス

午後子安氏ヨリ読売新聞ヲ借ル　附録ニハ素人洋食（山田美妙作）、九拾賀（河竹新七作）横笛（田辺龍子作）調布多摩川（竹柴其水作）紅葉狩（河竹黙阿弥）等ヲ載セタリ　此日ノ新紙ハ何レモ伊藤伯ノ辞職及ビ後藤伯ト黒田伯トノ激論ニ附イテノ記事多カリキ

夜ニ入リ課業ノ下読ヲ始メタルニ何故カ睡リ催シテ書籍ニ向ヒタルマヽ居睡ルコト数回ナリキ　此ニ於テ十時前就蓐

十月十五日　火曜日　朝来曇天　午前十時頃ヨリ降雨

此日午前四時頃ニ起キ厠ニ登ル　寝室ニ入リ一睡スルト思フ間ニ早ヤ六時寝起ノ号鐘響キ渡リケレバ是非ナクモ寝床ヲ離レヌ

此日近藤教授和文源氏物語ニ付テノ談話アリ終ニ八十銭ノ書籍ヲ買フコトニ決ス

読売新聞十四日ノ附録ヲ子安氏ヨリモラエリマコーレー教授校内ノ教師館ニ移転ニ付キ休校セラル　午餐時食堂ニ行キタルニ菜ナシ　故ニ余ハ飯耳ヲ食エリ　晴ニ向ヒテ大喝シテ叱リ付ケタリ

午後三田ニ行キ麺包ヲ買フ　往復ノ路程ニ羽織ヲ濡シ大ニ困難セリ

晩食後本日ハ雨天ナル故夕禱会ニ臨ムハ困難ナルヲ以テ該会ニ臨マズシテ塾監ノ探索ニ来リタル時ハ他ニ隠レ居ル可キコトニ決シ部屋ニテ談話シツヽアリシニ程無六時ノ号鐘告ゲ渡リニケレバソロ〳〵逃ゲ支度ヲナシ赤田氏ト共ニ厠ニ登リ数分ノ後部屋ニ帰リ居リタルニ梯子ヲ登ル沓音シケレバスワ塾監ノ来レルナラントテ赤田氏ハ寝室ノ隅ニ屈シタルニ余ハ寝室ノ窓ヲ開キテ廊下ニ出デントシタルニ折悪シクモ窓ハ閉ヂラレ居リタルガ故ニ之レヲ急イデ半開キニナシ先ヅ半分体ヲ出シタルニ赤田氏次イデ来リ窓口ニテ両人トモ躊躇セシガ終ニ窓ヲ開キテ後ノ廊下ニ出デ東隅ノ寝室ニ潜ミヌ　子安氏モ来リタリ

然ルニ階下ニハ戸ヲ開閉スル音頻リナリシハ蓋シ塾監ノ各室ヲ巡検セシナル可シ　而シテ此時余ハ思フ様若シ此ノ所ニ潜ミ居

ヲ発見サレナバ実ニ面白キコトナリト　依テ再ビ部室ニ帰レリ
数分時赤田氏モ亦帰来レリ　実ニ此ノ事ハ追想スル度ニ笑ヲ忍
ブ能ハズ　廊下ニ出シ時ノ如キハ赤田氏ト余ハ終始笑ヒ続ケタ
リ

十月十六日　水曜日　朝来降雨　九時頃ヨリ雨上リ二時過ギヨ
リ日光ヲ見ルニ至レリ
午後二時過ギ仏文翻訳ヲ出シ前日出セシ所ノ翻訳ヲ受取ル　前
週水曜日ニ出シタルモノハ錯誤ナク、金曜日ノ者ハ三ノ誤謬ア
リタリ　晩食後赤田、子安両氏ト共ニ近傍ヲ散歩シ談昨夜ノ事
件ニ及ンデ大笑セリ
夜ニ入リ星野氏ヨリフイツシヤー、万国史ヲ借リ之ヲ読ム

十月十七日　木曜日　朝来晴天至極温暖ナリ　午後二時頃ヨリ
雲出テ、空合少シク朧ニナリヌ
午前九時戸川氏ヨリ国民之友六五号ヲ借ル　内ニ風流仏之批評
アリ
其ノ大意ハ露伴子ノ文章ハ一種ノ妙アリテ言文一致熱ニ狂スル
者モ之レヲ見バ後ニ瞠若タル可シ　著者ハ西鶴ヲ愛シ西鶴ヲ学
ブノ人ナラント云フニ有リ
而シテ風流仏中最モ価値アルノ点ハ第七「如是我報」中岩沼子
爵ノ物語及ビ第十「如是本末究竟等」中亀屋主人ガ珠運ヲ諭ス
所ニ有リ而シテ彼ノ珠運ガ迷霧中ニ彷徨スル状ノ如キハ字々霊
活入神、実ニ全篇中ノ錚々タル者ナラント云ヒテ下ノ如ク其妙
所ヲ指摘シタリ　「年ハ何歳ゾ云々（二三頁）、八頁「御意ニ入
リマシタラ云々」、十一頁「セメテハ一日路程モ云々」、十二頁
「方様早ク云々」十四頁「残念なは…木曽ニ云々」五頁「父ノ
ナイ子……身ノ疾病」三十、三十一頁「七歳頓死サシテ、――
小説家ニハ云々」三十四頁「山々――飛デ来ズ云々」五十一頁
「或ハ山茶モ――一顆ノなさけ云々」七十頁（あれは……せず
ともよい云々」百四頁（御手水……なぶらす云々）然レドモ此
本著中ニ人物ノ最モ善ク現ハレタル者ハ独リ亀屋主人ニシテ珠
運お辰ニ至ツテハ漠トシテ朧気ナレドモ此ノ朧気ノ中ニ著者ガ
如何ナル妙味ヲ寄セタルヤハ分ラズ　故ニ之レヲ非難スル能ハ
ズトテ論結セリ　評者ハ肉食饅頭ナリ

十月十八日　金曜日　朝来曇天七時二十分頃降雨暫時ニシテ止
ミ正午頃ヨリ日光ヲ見ル
此日午後仏文翻訳ヲ教師ニ出ス
三時学院ヲ出デ帰途ニ就ク　三田ニ出デ芝公園ヲ抜ケ愛宕下ニ
出デ日々谷練兵場ヲ通リ丸ノ内ヲ通リテ家ニ帰ル　晩食後久米
氏来ル　相伴ツテ外ニ出デ新道ノ角ニテ氏ニ別レ本屋ニ行キ新
小説ヲ取換エ来レリ　家ニ帰リテ之ヲ読ム　九時過久米氏来リ
テ今日湯屋ニテ桜田ニ於テ大臣ノ遭難ノ由ヲ聞キタリト言ハレ
タリ　就蓐前読売新聞ヲ読ム

十月十九日　土曜日　朝来晴天至極暖気ナリシ
朝食後読売新聞ヲ読ム　此日改進新聞ニ大隈外務大臣遭難ノ顛
末ヲ記載セリ
午前九時四十分医師ニ行キ診察ヲ請ヒ薬七日分ヲモラヒテ帰ル

午後歴史及ビ修辞書ノ下読ヲナシ演説文ノ校正ヲナス　晩食後久米氏来リ談話ナス内於安智恵子ヲ連レ於幸サント共ニ来ラル暫時談話ノ後久米氏ト共ニ若竹亭ニ竹本織太夫連中ノ浄瑠璃聞キニ行ク　途中ニテ思ヒ出シ本屋ニ立寄リ文庫二十七号ヲ受取リ寄席ニ至リ二階ニ登ル　北沢氏及ビ森下氏跡ヨリ来ラレタリ扨テ当日ハ土曜日ノ故カ隨分ノ大入リニテ客ハ相変ラズ吾党ノ士大数ヲ占メタリ

最初ハ竹本旭太夫、鶴沢文十郎ニテ「大閤記局注進ノ段」ニテアリシ　此人ハ余リ気取リ過ギテドタバタヤラレシハ余リ感心シ難カリシ　次ハ豊竹呂篤太夫、豊沢団二郎ニシテ「箱根権現躄仇討天神堤ノ段」ナリ　隨分面白カリシガ賤別場ニナル前ニテ止メラレシハ余リアツケナカリシ様ナ心地セラレシ

次ハ豊竹富太夫、豊沢丑之助ニシテ「摂州合法辻、玉手嫉妬ノ段」ナリ　富太夫ハ声ハ隨分ヨケレドモ調子ニ変化ナキ様ナルハ面白カラズ　丑之助ノ三味線ハ隨分旨イ者ト云フ可シ　語ル中ニ玉手御前ノ母ガセツナカロ、クルシカロト云フ所ニ至リテハノベツ幕無シニクリカエサレシハ聞苦シ　我聞ク浄曲ハ悲哀ヲ以テ主眼トスト　然レバ聞ク人ヲシテ感動セシメ手巾ヲ絞ラシムルハ語リ人ノ巧妙ナル所以ナラン　然ルニ悲シミノ所ニ至リテノベツニ同ジコトヲ繰返シテハ返テ聞ク人ヲシテ笑ワシムルノミ　之レ語リ人ノ為メニ取ラザル所ナリ

大切ハ竹本織太夫、鶴沢文蔵ニテ語リ物ハ「於俊伝兵衛堀川ノ段」ナリシ　呂篤太夫口上ヲ述ベ織太夫モ又口上ヲ述ベタリ

例ノ与次郎ノ母ガ三味線ヲ教エル所ヨリ始メタリ　鳥辺山ハツレ引キ丑之助ニテ謡フ　余程面白カリシ　「ソリヤ聞エマセヌ伝兵衛サン」以下妙ト申ス可シ　猿廻シノ歌ヨリツレ引キ丑之助文十郎ニテ謡フ　三味線ガ中々面白カリシ　全体織太夫ノ歌ヒ様ハ余程豊竹三福ニ類スル所アリ　サレドモ男ダケ余程シツカリシタ所ヲ見受ケタリ

当夜ノ語リ物ノ如キ種類即チ艶物ハ非常ニ能ク適スルナラント思ハル　然シ当夜ノ与次郎ノ言葉ガ余リ年ヨリノ如ク聞エシハ白玉ノ微瑕ナリ　織太夫ハ大坂ニテハ越路、大隅ト並ビ称サルヽト云ヘバ隨分我々ノ面白ク感ズルハ当然ナリ

寄席ヲ出デ帰途柿二銭ヲ買ヒ就蓐前之ヲ食フ

＊大臣ヲ暗殺セントシタルハ福岡県人来島恒喜ナル者ニシテ直チニ其場ニ於テ自刃セリ

十月二十日　日曜日　朝来晴天至極暖気ナリシカドモ二時頃ヨリ雲出デ曇天トナリヌ　然レドモ五時頃ニ至リテハ雲切レタリ

午前七時余ノ未ダ蓐ニ在ル時ニ中島氏来ラレシニ因リ起キテローヤル読本ヲ読ム

朝食後文庫二十七号ヲ読ミ午前九時作文ニ取掛ル　題ヲ同化論トシ例ノ国粋論ヲ草ス　稿半バニシテ倉部氏来リ薬用葡萄酒一壜ヲ贈ラレタリ　英文作文ノ添刪ヲナス　氏去ツテ少時ニシテ福島氏来リ談話数次ノ後帰ラレタリ　午後二時同化論ヲ清書シ終ワル　久米氏来ル

余ハ入浴ノ為メ家ヲ出デタルニ坂ノ所ニテ五十余ノ老人荷車ニ箱ヲ積ミテ坂ヲ上リ兼テ困却シ居リタリ　余ハ余リノ気ノ毒サニ之ヲ押シテヤリタレバ大ニ喜ビテクレ〳〵モ礼ヲ言ヒタリ

真砂町ノ湯ハ此日休ミナリシ故余ハ去ツテ元町ニ行キテ一浴シ帰途本屋ニ行キテ見タルニ都ノ花二十五号ハ未ダ来リ居ラザリシ　柿三銭ヲ買ヒ家ニ帰リ之レヲ食フ

午後五時晩食中烟草屋来リテ無尽ノ談話アリ　六時家ヲ出デ学校ノ途ニ上ル　例ノ如ク万世橋ヨリ銕道馬車ニ乗ルニ車中充満シテ一ノ席ノ明キタルナシ　故ニ余ハ相変ラズ立往生ヲナシタルニ日本橋ニ至リシニ車中稍ク明キヲ生ジタルガ故ニ其所ニ座ヲ占メヌ　然ルニ余ノ隣ニ束髪ノ年頃拾八九位ノ別嬪居リタリ然ルニ折悪シクモ馬車ハ新橋手前ニテ止マルコト数次ナリシガ故ニ余ハ車ヲ見捨タリ　若シ新橋迄馬車ガ事ナク行キシナラバ余ノ如キ色男ハ彼ノ嵯峨之家氏(ママ)ノ「腐レ玉子」ノ人物トナラン者ヲ実ニ遺憾ノ至リ　ハテサテ小説気ノナキ銕道馬車カナト天ヲ仰デ浩歎ナス途端ノ一刹那何物ニカハタト鉢合ヲナシホイ之レハ失敬トヨク〳〵見レバ瓦斯燈ノ柱ニゾ有リケル　余ハ生レテカラ始メテ瓦斯燈ニ誤リタリ　(度々ヤツテタマルモノカ)

扨テ之レヨリ日陰町ニ出テ、殆ンド中程迄来リタル所ニ余ガ千辛万苦シテ稍ク脱稿シタル演説文ヲ家ニ置忘レタルヲ思ヒ出シヌ三田ニ出デ、麺包ヲ三銭ダケ買ヒテ学院ニ帰リ部屋ニ入ルニ赤田氏ハ未ダ帰リ居ラズ

余ハ直チニ演説文ヲ書終リタリ

十月二十一日　月曜日　朝ノ間少シク日光ヲ見シガ七時頃ヨリ空合追々暗澹トナリ荒模様ニテアリシガ八時頃ヨリ降雨一時ハ盛ニ降リタリ　正午十二時頃南方ノ風イト烈シク教場震動セリ

課業終リテ寄宿舎ニ帰レバ入口ノ壁ガ落チタルヲ見タリ　午後三時頃空晴レ日光ヲ見ル

然レドモ風ハ夜迄吹続キタリ

此日比佐氏ヨリ表紙ヲ受取ル　午前十時ハリス氏ニ演説文ノ訂正ヲ請フ

昼食後小倉氏ノ文ヲ復写ス

「大祭日ニ就テ」及ビ「翻訳課時間ニ就テ級友諸氏ニ告グ」ナル二文章ヲ作ル

十月二十二日　火曜日　朝来天気清朗朝ハ少シク冷気ナリシガ十一時頃ヨリ至極暖カニナリタリ　四時頃ニ至リテハ雲出テ〻空合少シク朧ロニナリヌ

此日ハリス氏ヨリ演説文ヲ受取リヌ

此日午前　時前高畑氏ヨリ作文ヲ受取ル

午後四時織田氏ヨリ翻訳文ヲ受取ル

同時和文科仮字使ヒノ筆記ヲ復写シヌ

十月二十三日　水曜日　朝来晴天至極暖気ナリシ

此日午前八時比佐及稲葉ノ二氏ヨリ作文ヲ受取ル　午餐後高畑氏ト甲乙雑誌ヲ綴ル

二時マクネヤ氏帰ル故ニ仏語科ハ休業ナリシ　二時三十分比佐

氏来リテ雑誌ノ表紙及ビ目録ヲ書ク
五時晩食後演説ノ演習ヲナス
七時過内田氏来リテ賄交代ノ事ノ話シアリタリ
十月二十四日　木曜日　朝来曇天寒気甚シカリシモ正午頃ヨリ少シク日光ヲ見ル
此日朝雑誌調ヒシヲ以テ校友間ニ回ワス
午前十時英語演説ヲナス　題ハ「自知ノ必要」ナリ
午食後近傍ヲ散歩ス　此日ハ清正公ノ縁日ニテアリタリ　三時演説法筆記ヲ復写シ和文仮名使ヒ表ヲ清書ス
晩食後赤田氏ト共ニ近傍ヲ散歩シ柿ヲ買ヒテ帰リ赤田氏ヨリ柿ヲモラヒテ之ヲ食フ
十月二十五日　金曜日　朝来曇天十一時頃少シク青空ヲ見ル　夜ニ入リテハ快晴シ十時頃ニハ諸星晴空ニ輝ケリ
此日午前八時過幹事局ニ行キ金五円及源氏物語ヲ受取リ賄方料及源氏物語ノ代ヲ払フ
午後三時学院ヲ出テヽ帰途ニ登ル　三田ヨリ日々谷迄ノ間ハ巡査ガ半町位置ニ立番ヲシテ居レリ　之レ大臣ノ帰途ニ当ル道筋ナレバ戒厳ヲ加エシモノナル可シ　サレドモ少シ「誼譁過ギテノ棒チキリ」ノ感ナキ能ハズ
五時二十分頃家ニ達ス　晩食後本屋ニ行キ都乃花二十五号ヲ受取リ帰途柿三銭ヲ求メ家ニ帰リ且食ヒ且読ム　十時頃眠ニ就ク
十月二十六日　土曜日　朝来曇天ナリシカドモ拾二時頃ヨリ快晴シ夜ニ入リテハ諸星天上ニ羅列セリ
此日朝七時過松永氏ヲ訪ヒ「都乃花」ヲ貸ス　運動会ニ同道スベキヨシヲ約シ帰ル　十時医師ニ行キ診察ヲ請フ
昼食後松永氏ト共ニ運動会ニ行ク　扨テ例年ノ通リ各国ノ国旗ヲ飜シ中央ヲ来賓席トシ其両傍ヲ切符ヲ持チ行キタルモノヽ席トス
午後一時ヨリ競技ヲ始メ午後四時過ギニ終ル　中々ノ盛況ニテ来賓中ニハ貴婦人ヲ多ク見掛ケタリ　中ニモ目立チテ面白カリシハ棒飛、八百八十ヤード競争、障碍物競走、ニテアリタリ
而シテ諸技ヲ通ジテ賞品ヲ得シ人多カリシ　野村、相原、武田、門馬、等ノ諸氏ハ度々勝ヲ占メラレタル様ナリ
五時豊川ニ行キ金ヲモラウ話シヲナシテ帰ル　家ニ帰レバお安来リ居リテ余ニ亡兄辰猪一周忌ノ法会施行ノコトヲ相談シ帰ル
八時過久来氏ト共ニ観工場ニ行キ歯磨及ビ揚子ヲ買ヒテ帰ル
十月二十七日　日曜日　朝来曇天ナリシカドモ九時頃ヨリ快晴セリ
朝七時過早川氏ヲ訪ヒ左伝ヲ返シ豊川ニ行キ一周忌ノ事ヲ談ジ金三円ヲ受取リ帰ル
昼食後谷中ニ行ク道岡田氏方ニテ荘子ヲ買ヒ谷中ニ行キ墓参ヲ果シ神官ヲ頼ムコトヲ茶屋ニ依頼シテ帰ル
帰途ハ団子坂ノ菊見帰リノ人ニテ隨分雑沓ヲ極メ居レリ　家ニ帰リ三時銭湯ニ一週間来ノ垢ヲ流ス
晩食後一周忌祭ノ案内状ヲ書キ六時家ヲ発シ学院ノ途ニ上ル
万世橋ヨリ鐵道馬車ニ乗ル　此日ハ上野ヨリ来テ停車セシバカ

リノ馬車ニ乗リタレバ席モアキ居リキ　前夜ノ如ク立チ居ルニモ及バザリシ
新橋ニテ馬車ヲ下ル時シモ田中氏ニ逢ヒ芝口ニ迄行キタルニガタ馬車アリ　内田氏ハ此レニ乗リタレドモ余ハ余リキタナキ故之レニ乗ラズ　日陰町ヲ抜ケ三田ニ出デ柿ヲ買ヒ学院ニ帰リ赤田氏ト共ニ之ヲ食フ

十月二十八日　朝来曇天寒気甚シカリシ　午後二時頃ヨリ降雨
此日朝二時頃地震アリタリ　其間凡一分余可成強震ナリキ
拾時三十分ハリス氏読書々目ヲ与エラレタリ二時仮名遣ヒヲ写ス
夜ニ入リ源氏物語ヲ読ム

十月二十九日　火曜　朝来晴天至極暖気ナリシ　然レドモ雲ハ大分出居リタリ
此日源氏物語ノ講義アリタリ　昼食ノ際生玉子二ツヲ菜ニ出サレタルニハ少シク驚キタリ
昼食後相変ラズ近傍ヲ歩ク
絵入自由新聞ヲ読ム　内ニ伊藤伯ノ伝、美人ノ獄等ヲ掲載セリ
晩食後運動ノ為メ出行キタルニ多田氏ニ逢ヒ耶蘇教ヲ勧メラレシニハ少シク閉口セリ　サレドモ相変ラズ瓢箪鯰ノ返答ヲナシタリ
六時礼拝堂ニ行キ祈禱中隣席ノ赤田氏余ノ袂ヲシキリニ引キタル故袂ヲ探リタルニ柿アリ　此レ氏ノ余ニ贈ラレタルナリ
七時部屋ニ帰リテ之ヲ食ヒ仏文翻訳ニ着手ス　八時半隣室ノ吉村氏来リテ赤田氏及ビ余ヲ呼ブ　行ケバ菓子アリ依ツテ之ヲ食フ

十月三十日　水曜日　朝来晴天　然レドモ雲勝チノ空ナリシ
此日午後仏語課業ニ於テ下読ミヲナシ行カザリシ人多カリシガ故ニ教師ハイト不興気ニテ此ノ次ニ書取ヲナスベキ由ヲ言出デヌ且余輩ノ出シタル八、及十ノ翻訳文ヲ見失ヒタルコトヲ語ル
晩食前赤田氏ト共ニ寄宿舎ノ頂上ニ登ル　時ニ日輪ハ西天ニ没シ彩雲富士ガ峯ヲ囲ム其様実ニ美ナリ　東ヲ望メバ品海ハ眼下ニ在リ　サレドモ時日暮ニ迫リタレバ朧ニ霞ミテ遠山ヲ望ム能ハズ
晩食後赤田氏ト近傍ヲ散歩ス

十月三十一日　木曜日　朝来曇天時々青空ヲ見ル
此日乳屋ヨリツリ銭二銭五厘ヲ受取ル
昼食時賄ニ向四日間不在ナル故膳立テヲナスニ及バザル旨ヲ告グ
一時学院ヲ出デ帰途ニ就ク　赤羽橋手前ヨリ車ニ乗リ帰ル　途上日比谷近傍ハ用心堅固ニテ数名ノ巡査ヲ見受ケタリ　三時頃家ニ達ス　家ニ入レバ久米氏来リ居リテ我厳父ハ唐紙ノ画ヲ描キツヽアリシ　余ハ久米氏ヲ手ツダヒテ壁ヲ張リ障子紙ヲモ張リタリ
午後七時久米氏ト共ニ若竹亭ニ浄瑠璃聞キニ行ク　客ハ六分位ニテ余程少数ノ如ク感ゼラレヌ　婦人客ヲモ可成見受ケタリ
此日最初ハ竹本旭太夫、三味線鶴沢文十郎ニテ「八陣守護城熊本城閣ノ段」ナリシガ相モ変ラズ気取リ過ギテ面白カラズ

次ハ豊竹呂篤太夫、豊沢団次郎、ニテ「管原伝授手習鑑」寺子屋ノ段ヲ語ル　此レハ少シク面白カリシガ春藤玄蕃ガ帰ル所ニテ止メシハナンダカ厭気ナシ

次ニ豊竹富太夫ハ三味線、豊沢丑之助ニテ、「仮名手本忠臣蔵」六段目勘平腹切ノ段ヲ語ル　隨分面白ク感ジタリ　此ノ日ハ声ニモ大分変化アリタル様ニテ少シク満足ヲ与エタリ　次ハ竹本織太夫、鶴沢文蔵ニテ「おさん茂兵衛大経師ノ段」ヲ語ル　之レハ余程面白カリシカドモ終リノ方ハ卑猥聞クニ忍ビザル所アリ此等ハ何トカ改良アリテ然ル可シ　文蔵ノ三味線余程巧手ニシ吾人ノ耳ヲ楽マスコト少ナカラズ

大切ハ「関取千両幟」猪名川内ヨリ相撲場迄惣掛ケ合ヒニテ勤メタリ　其役割ハ猪名川（織太夫）、銕ゲ獄（呂篤太夫）女房おと巳（富太夫）北野屋（鞆太夫）三味線鶴沢文蔵ニテ終リニハ矢倉太鼓曲引キヲナシタリ　皆ナ車輪ニテ面白カリシガ鞆太夫ガ吉原冠リニテ高坐ノ前ニ出デタルガ如キハ隨分時ノ愛嬌ニテアリシ　終リノ曲引キハ実ニ巧妙ナル者ニテ就中糸ヲツカマズニ音ヲ出セシ如キハ実ニ感嘆措ク能ハズ　マヅ当日ノ価値ハ之レニテ充分ナル可シト思ハレタリ

十時二十分前家ニ帰ル　家ニ入レバお安及ビ姉ガ豊川ニ行クニ逢ヒヌ　就眠前新小説ヲ読ム

＊六時頃姉来リ種々国ノ話シアリお安次ヒデ来ル

十一月一日　金曜日　朝来曇天ナリシガ十時頃雨降ル　午後ハ雨止シカドモ空ハ矢張リハツキリセズ

此日朝新小説ヲ読ム　八時真砂町ノ下駄屋ニテ日寄下駄ヲ買フ

電信局ニ至リ草郷ニ当テ電信ヲ発ス

午前十時家ヲ出デ真砂町角ヨリ車ヲ傭ヒテ三田ニ至リ幼稚舎ニ行キ太一ヲ迎エニ行キ和田氏ニ面会シ其旨ヲ通ジ太一ト同車シテ帰ル　時ニ十二時過ギナリシ

昼食後谷中ニ行キ茶屋ニテ休ミタル後墓場ヲ見舞ヒ来島恒喜ノ墓ヲ見ル　幟数本立チ居レリ　梵字ヲ書シタル者多カリシ　茶屋ニ帰レバ二人ノ壮士アリテ来島ノ墓エ参ルニヤ切リニ塔婆ヲ書キ居タリ

暫クシテ姉及ビ義姉来ラレタリ　実ニ久々ニテノ面会ナレバ義姉ハ余ヲ見忘レ居ラレタル様子ナリシ　ゲニ十年ホド前ニ余国ヲ出タレバソレモ尤ノ事ニゾアル

根岸ノ叔父来ラレタリ　次ニ福富氏来ラレタリ　談話少時ノ後墓場ニ行キ神官ノ祈禱ヲ請ヒ拝シ終リテ帰ラントセシニ渡辺又兵衛氏来ラレヌ　ソレヨリ茶屋ニ帰リシニ福富氏ハ本日ハ学校ノ常会議日ナルガ故ニ急ギ帰ラザルヲ得ザル旨ヲ告ゲテ帰ラレタリ　皆々帰リタル後余ハ茶屋ニ茶代及ビ供物花代神官謝儀等合セテ一円六十銭ヲ置キテ帰宅ス

家ニ帰リテ少クスレバ佐伯氏来リテ種々談話ヲ為サレタリ　四時過佐伯氏渡辺氏ト共ニ帰ル　少焉ニシテ豊川及ビ草郷氏来ラル　種々談話ノ中叔父五時過帰ラル　七時前草郷義兄及ビ豊川帰ラル　向島ヨリ清司氏妻君来ラレタリ

此ノ日黒岩氏、佐伯、渡辺、清司、ノ諸氏神前ニ供物ヲ贈ラレタリ

嗚呼日月我ヲ待タズ流水ノ行キテ反ラヌガ如クハヤ一年ハ過行キテ我兄辰猪ガ「フヒラデルヒヤ」ニ永逝セシ当日ニナリタリ余ハ此ノ政治界多事ノ今日ニ当リテ我家兄ノアリテ充分ニ其技倆ヲ顕ハシナバ余等イカニカ嬉シカラン　又当人モ望ミ足リテ嘸ヤ満足ナル可シト追想スルゴトニ余ハ実ニ万感胸ニ充チテ思ハズモ悵然タルコト屢ナリキ

十一月二日　土曜日　朝来曇天少シク寒カリシカドモ拾時頃ヨリ日光輝キタリ　夜ニ入リテハ風甚ダ吹キアレタリ

午前八時豊川ニ行キ勘定及ビ紀念分ケノ処分ニ付キ談話ス　一日ノ「政論」ニハ亡兄ノ墓所ノ画図及ビ之ヲ弔フノ辞掲載シアリタリ　同家ノ倉ニ入リテ遺物ヲ調ブ　新聞紙ノ集メ物手簡及ビ蔵書印ヲ得テ十二時同家ニテ昼食ヲ喫シ一時過帰宅ス

午後二時過太一ヲ伴ヒ豊川ニ行クニお安及姉ハ未ダ帰ラズ　待ツコト凡ソ一時間余ニシテ稍ク帰リ来レリ　之ヨリ先キ太田米丸ト云フ人即チお安ノ叔父来ラレタリ

午後五時頃帰宅ス　途中本屋ニ立寄リ雑誌代金五拾銭ヲ払フ

坂上ニテ姉ノ帰ルニ行逢エリ

晩食後久米氏来レリ

＊夜ニ入リテハ久米、赤田、倉部ノ三氏来ラレタリ

十一月三日　日曜日　朝来曇天　十時頃ヨリ日光輝ケリ　然レドモ二時過ギヨリハ又曇リタリ　此日前夜ヨリ風吹続キテ寒気甚シカリキ

此日ハ天長節ニテ明宮親王殿下ノ皇太子ニ立タセ賜(マヽ)フ当日ナレバ余モ極ク下等ナル国旗ヲ門頭ニ吊ル

改進新聞ハ附録付キニテ且皇太子ノ御尊影ヲ付ケタリ　余ハ之ヲ額ニ作リヌ　嗚呼之レ叡聖ナル皇帝陛下ガ其儲ヲ定メ之レガ宣下ヲナシ給フノ日ナリ　余輩田野ノ貧生ト雖モ豈ニ之ヲ祝セザルヲ得ンヤ

午後久米氏来リテ新聞雑誌ノ抜粋ニ従事ス　三時過豊川ニ座蒲団、及ビ屏風ヲ返シ反物ヲ受取リ帰ル　途ニテ本屋ニ行キ見ルニ「都ノ花二十六号」ハ未ダ来リ居ラザリシ　柿ヲ買ヒテ帰ル時ニ四時過ギナリシ

＊夜ニ入リテ本屋都ノ花ヲ持チ来ル

十一月四日　月曜日　朝来朧ナリシカドモ九時頃ヨリ日光輝ケリ　夜ニ入リテハ又雲出タリ　此日朝ノ内ハ隨分寒気甚シカリシ

朝食後歴史ヲ読ム　十一時過松永氏来リ種々談話ヲナス

昼食後修辞学ヲ読ム　午後一時過ヨリ演説文ヲ起草ス

三時過入浴シ晩食後車ヲ傭ヒ学院ノ途ニ上ル　美土代町ニテ車夫ヲ換エ和田倉門ヲ入リ桜田ニ出ヅ　此ノ辺ハ諸所ニ電気燈アリテ其光昼ノ如シ　ソレヨリ虎ノ門ニ出デ愛宕下町ニ出デ赤羽根橋手前右ニ折レ麻布ニ出デ迂回シテ学院ニ帰ル時ニ誰モ帰リ居ラザリシ　少焉ニシテ島崎氏来ル　赤田氏モ次デ帰ラレタリ

十一月五日　火曜日　朝来曇天午前九時過ギヨリ霧雨　正午頃

ハ暫時降リ止ミ又降リ出スコト屢ニシテ午後九時過ニハ降リ止ミテ雲切レタリ

此日炭ヲ買フ　午後七時晩禱式ヨリ帰リテ居リタルニ火事ガ始マレリ　火元ハ学院ノ南ニ当ル大久保ト云フ華族ノ家ニテ同家一軒焼ケナリ(ママ)　ソシテ同家ハ丸焼ケニテ荷物等ハ僅ニ運ビ出セリト云フ

其原因ハ洋燈ノ顚覆ナリトカ聞ケリ　鎮火セシハ九時頃ナリシ

十一月六日　水曜日　朝来晴天　正午頃ヨリ一点ノ雲モ見ズ

此日ハリス教師ハ休業　石本氏モ同ジ

高畠氏ヨリ雑誌ノ紙ヲ受取リ之ヲ分ツ

午後三時過四階ニ登ル　天気朗カナリシガ故ニ眺望殊ニヨシ東ニハ品海ノ一面青氈ヲ布ケルガ如キアリ西ニハ遠山ノ霞ヲ破ツテ立ツアリ其景ハ実ニ云フ可ラズ　演説文ヲ清書ス夜ニ入リ赤田氏芋ヲ買ヒ来リテ余ニ与エラレタリ

此日ハ火ニアタリタル故カ非常ニ睡眠ヲ催シタリ

十一月七日　木曜日　朝来晴天　夜ニ入リテハ皎月晴空ニ懸リ一目清快ヲ覚エヌ

此日演説ヲナス（但シ英語）暗唱ガ足ラザリシ故カ度々ツカエタリ　ハリス氏ハ余ノ文体ガスムーズナリト褒ラレタリ

昼食時牛肉ヲ食フ　此レ此ノ週間始メテノ物ナリ

一時頃近傍ヲ散歩シ柿ヲ買ヒ部室ニ帰リ赤田氏ト之ヲ分チ食フ

晩食後近傍ヲ散歩シ赤田子安ノ両氏ト伊皿子坂上ニ迄デ至ル

帰途赤田氏芋ヲ買ヒ部室ニ帰ル　晩禱式ノ説教ナシ　七時過芋ヲ分チ食フ

十一月八日　金曜日　朝来曇天　隨分寒気ヲ覚エシカドモ十二時過ヨリハ日光出テヽ至テ暖カナリキ

此日文学会欠席ノ届ヲ出ダス

午後三時過学院ヲ出デ帰途ニ就ク　矢張リ巡査ノ立番ハ諸所ニ見受ケタリ　五時過家ニ達ス　晩食後薬師ノ縁日ナルヲ以テ立出テヽ菊ヲ見ル　豊川ニ三度許リ行キタルニ毎ツモ留守ナリシ

此日ハ久米氏ト同道セリ　新道ノ出口ニテ早川氏ニ逢フ

十一月九日　土曜日　朝来曇天　八時頃ヨリ降雨、午後十時頃ハ間ヲ置キテ降リタリ　十時頃ヨリ雨止ム　此日ハ非常ニ暖気ナリシ

早川氏来リテ女学雑誌ヲ見ル

此日朝久米氏来ル　昼食後烟草屋来リテ無尽ノ規則ヲ清書ス

此日田舎荘子ヲ読ム（但一、二、三、三冊ナリ）此日中島氏来リ月謝ヲ受取ル

晩食後松永氏、浜田氏来リテ寄席行ヲ勧ム　久米氏次デ来リ「都ノ花」ヲ持行ク　寄席ニ行カント家ヲ出タルニ雨イタク降リ出タレバ之ヲヤメテ浜田氏宅ニ至リ三人ニテ西洋骨牌ヲ弄テ十時前ニ至リ帰宅ス　就睡前歴史ヲ通読ス

＊「ローヤル第四読本」中「バルド、ヲフ、ハラダイス」ノ一章ヲ読ム

十一月十日　日曜日　朝来曇天ナレドモ左程寒カラザリシ

朝食後歴史ヲ読ム　九時前中島氏来リテ「カサビヤンカ」ヲ読

ム

十時過倉部氏来リテ英作文ノ添刪ヲナス　氏ニ八犬伝、天及ビ余ノ文集ヲ貸ス　其時久米氏来リテ皇太子殿下ノ御肖像ヲ持行キタリ

午後烟草屋来レリ　久米氏次デ来ル　余ハ真砂湯ニ一浴シ本屋ニ行キタルニ新著百種第六号（残菊柳浪子著）ガ来リ居リシカバ之ヲ受取リ柿ヲ買ヒテ帰リタルニ杉氏及ビ葛目ノ叔母来リ居レリ　久米氏ニ依頼シテ無尽ノ規則ヲ書キ終ル　三時頃松永氏来リ改進新聞ヲ見、新著百種ヲ持チ行ク　家父ハ客人ヲ伴ヒテ団子坂ニ行キヌ　四時過一回帰宅ス　余ハ用意ヲ整エ学院ノ道ニ登ル　途ニテ本屋ニ寄リ新著百種ノ代価ヲ払ヒ目鏡橋ヨリ銕道馬車ニ上ラントセシニ車夫ノ新橋迄四銭ニテ行カント云フニ逢ヒシカバ之ニ乗リテ新橋ニ至リソレヨリ徒歩シテ日陰町ヲ抜ケ三田ニ出デ学院ニ帰ル　部室ニ入ルニ赤田氏ハ既ニ帰リ居ラレタリ　島崎氏来リテ種々談笑シ十時前帰ラレタリ

十一月十一日　月曜日　朝来曇天　随分寒カリシ

此日ハ別ニ記ス可キコトモ無シ　稲葉氏ヨリ作文ヲ受取ル

十一月十二日　火曜日　朝来曇天　二時前雨少シク降ル　夜ニ入リテハ全ク快晴シ十時頃外ニ出シニ皎月東天ニ輝ケリ

此日朝前田氏ノ北堂来ラレタリ　此日稲葉福間両氏ヨリ作文ヲ受取ル

昼食後赤田氏ト近傍ヲ散歩セシニ雨ニ逢ヒ或ル門ノ下ニテ雨ヲ避ケ雨止ミテ後坂上ニテ柿ヲ買ヒテ帰ル

晩食後子安氏菓子ヲ贈ラル

六時半頃ヨリ仏文翻訳ヲ始メ七時半頃之レヲ終ル

十一月十三日　水曜日　朝来晴天ナリシカドモ寒気甚シ

前田氏ノ北堂来ラレタリ

此日朝「チヤペル」ニテ井深氏ガ教師ノ一人ニ無名ノ書状ヲ贈リタルヲ言出テ、無名ノ手紙ハ即チ責任ナキモノナレバ之レヲ取リ上ル能ハズ且ツ人ノ無礼ヲ責ルニ当リテ己モ又不敬ノ語ヲ用ユルハ恰モ己ノ目ニ在ル梁木ヲ知ラズ人ノ目ニ在ル塵埃ヲ咎ムルガ如キモノゴトナレバ以後学院ノコトニ対シテ意見アラバ公然名ノリテ且相当ノ礼儀ヲ以テセラレンコトヲ望トノ説論アリタリ

昼食後仏文翻訳ヲ教師ニ出シ前回ノ訳文ヲ受取ル　誤字一ツアリ　ズツト前ノ訳文ヲ催促シタレドモ未ダ見当ラザレバ之レヨリ善ク探ガス可シト答エラレタリ

＊此日大同新報ヲ貸リテ見ル　中ニ「嗚呼不忠嗚呼不信」ト題シテ大祭日休業ヲ論ジタル一章アリ　記者霊光居士トカ云エル人ナリ　言辞余程激烈ナリ

十一月十四日　木曜日　朝来晴天　十二時頃ニ至リテハ空ニ一点ノ雲ナシ

此日朝食時汁ナクシテ玉子一ツヲ菜ニ出シアリタリ

サンダム館ニ鶴鳴雑誌ノ号外ノ広告アリ　事皆去ル十一日ノ事件ニ関セリ　和知氏ヨリ作文ヲ請取ル

昼食前赤田氏ト大祭日ノ件ニ付キ論戦ヲ開ケリ　昼食後近傍ヲ

散歩ス　部室ニ帰リ大同新報ヲ読ム　中ニ義士ノ祭文及ビ吉良家ノ首請取状アリ
四時過和文仮名格ヲ清書ス　食後運動ノ為メ外ニ出デ菓子屋ニテ麺包ヲ食エリ　赤田子安二氏ト同行ス
十時過文学会邦語演説ノ下書ヲ初ム

十一月十五日　金曜日　朝来晴天　正午ヨリハ非常ニ暖気ナリシ

此日小倉氏ニ同窓文学会ノ主会者ヲ委托サル　昼食前石本氏ニ「リンコルン」ノ一話ヲ聞ケリ　面白キ儘爰ニ録ス
『南北戦争ノ頃「リンコルン」ノ部下ノ将軍ハ軍勢ノ催促ノミヲナシテ何程軍勢ヲ送リテモ戦争ヲ初メズ　止ヲ得ズ「リンコルン」ハ軍法会議ヲ開キタリ　然ルニ議終リテ衆人立去ラントナシタルニ「リンコルン」ハ衆ニ告ゲテ曰ク「諸君暫ク待レヨ余ハ面白キ話シヲナサン」ト　衆人席ニツケリ　中ニモ「グラント」ハ甚シク其ノ話シヲセキ込ミテ問ヒタルニ「リンコルン」ノ曰ク「或ル時猿共戦ヲナセリ　然ルニ一ノ猿戦ニ出デントスル時ニ当リテ自レガ尾ヲ顧ミテ曰ク「余ノ尾ハ余リ短シ之ニテハ戦ニハ行ケズ」ト　他ノ猿之ヲ聞キテ成ル程尤モナリトテ己レガ尾ヲ切リテ前ノ猿ニツギヤリタルニ猶足ラズトテ他ノ猿ノ尾ヲ皆切セテ続ギタルニ遂ニ部屋中一杯ニナリテモ猶戦ニハ行カズ　彼ノ猿ハ其尾ノ余リ長キガ故ニ動ク能ハザリシナリ」ト語リタルニ「グラント」ノ曰ク「ヨシ、ワカツタ、余ハ最早君ヨリ助ヲ仰カズモヨシ」トテ自ラ軍ヲ督シテ諸所ニ転戦シテ勝利ヲ得タリ』ト
『又或ル時「リンコルン」ノ代言人タリシ時ナリシガ家ニ帰ラントスルニ銭ハナシ　サリトテ歩イテ帰ランニハ寒クハアルシ労レテハ居ルナリ　何トカ銭ナシニテ車ニ乗ル工夫モガナト見廻ハス中ニ彼方ヨリ乗合馬車ノ来ルニ逢ヒヌ　然ルニ其中ニ一紳士ノ乗リ居ルヲ見ルヤ「リンコルン」ハ手ヲアゲテ馬車ヲ呼ビ止メ中ナル紳士ニ一揖シテ云フ様「実ニ申シ兼ネ候ドモ何卒此ノ余ノ外套ヲコレ〳〵ノ家ニ持チ行キ給ラズヤ」ト云ヒケレバ紳士ハナル程貴君御困リナレバ余ハソレヲ持チ行申ス可シ然レドモ貴君ハ此ノ寒天ニ外套ナシニテハ嘸ゾ堪難ク思サレンニ」ト云フ　「サレバニテ候　余ヲ其ノ外套ニクルミテ持チ行キ給ハレ」ト「リンコルン」ハ答ケレバ紳士ハ始メテ其ノ金ナキ人ナルヲ知リテ快ヨク之ヲ其ノ家マデ乗セ行キシトカヤ』
此ノ如ク「リンコルン」ハ頓智有リタルハ此ノ人ノ「イソップ」ヲ読ミシガ故ナリ　又氏ハ「バイブル」ヲ読ミテ正適ノ心ヲ養ヒ「プルターク諸士伝」ヲ読ミテ其士気ヲ振起セリト云フ
昼食後演説文ヲ下書ヲナス　是レハ同窓会ニ向ツテノ者ナリ
三時ヨリ同窓会ヲ開クハズナリシカドモ人数少ナニテ之ヲ止ム
四時前前夜ノ演説ノ稿ヲ継ギテ之ヲ終ル
六時頃ヨリ文学会ニ出ヅ　此日ハ厚生館ニ於テ説教アリシガ故カ聴衆非常ニ少数ナリ、稍五十人足ラズ位ニテアリタリ　此日両部ヨリノ弁士八人ナリ　其中友野星野ノ両氏ヲ除クノ外ハ皆発音ノ悪シキコト話シニナラズ　クジヤ〳〵ト読ミ去リテ少シ

モ面白ミヲモ感ゼズ　マクネヤ氏終リニ評シテ曰ク　当夜ノ弁士ハ皆発音悪シク綴リヲ切リテ読ムコトヲナサズリシハ遺憾ナリ且其ノ読ム紙ニハ「ヲルターネート、ライン」ニ書ク可シ

然スル時ハ読ムニ容易ニシテ肝要ナル言葉ヲ「エムプハサイズ」スル事出来テ可ナラント言ハレタリ

次ハ邦語演説ナリ　余ハ七人目ニ出タリ　其演題ハ「自重セヨ同胞諸君」ト云フニテアリタリ　終リテ宮地氏ノ批評ニハ余ハ余リ言葉ガ始ヨリ激烈ナリシ様ニ思ハレタリ且ツ足ヲ度々動カシテ其ノ音ノ少シ高カリシハ欠点ト云フ可シト　又小倉氏ハ評シテ曰ク「蓋シ氏ハ演題ヲ奮起セヨ同胞諸君トセシヤニ覚エヌ然ラバ始メヨリアレ位ノ勢アリテ然ルベシト思フ　何ンニセヨ充分ナル「インスピレーション」ヲ以テヤラレンガ故ニ善キ演説ナラント思フ　然レドモ時々早ヤロニテ聞キ取リ難キコトアリシハ遺憾ナリ」ト　之ニテ当夜ノ文学会ヲ終リ討論ノコトニ付キ会議ヲ開キ多数ニテ原案ニ決ス　ソレヨリ直チニ部室ニ帰リ支度ヲ整エテ家ニ向テ出発ス　三田ノ薩摩原ニテ九時ヲ聞キソレヨリ日陰町ヲヌケ新橋ニ出デ日本橋ヲ越シテヨリ十時ヲ聞キタリ

家ニ達シタル頃ハ十時三十分ノ頃ナル可シ　就蓐後改進新聞ヲ読ミ居リタルニ十一時ノ鐘ヲ聞ケリ

＊此他「マツゲ」ニ虱ノ止マレルヲ見テ鳥トマチガエタル老人ノ例ヲ引キテ反対党ヲ屈服セシコトアリ　又ハ書記室ノ蠟燭ヲ持チタル時ニ言ヒタル言ノ如キハ氏ノ頓智アルヲ知ルヲ得ベシ

十一月十六日　土曜日　朝来晴天　午前五時頃風出デヌ

此日朝家計上ノコト及ビ神戸ノ伯母ノコトニ付キ談話ス

八時過宇佐美氏来リテ直チニ帰レリ　下読ヲ始ム　午後久米氏来レリ　四時過演説文ヲ草シ終レリ　此時松永氏来レリ

六時前久米氏ト共ニ寄席ニ行ク　客ハ相変ラズ書生沢山　先ヅ最初ハ「梅野由兵衛聚楽町ノ段」ニテ語リ人東一ナリ　声ハ充分ヨク立ツ様ナリ

次ハ東吉ノ「御所桜三段目」ナリ　此ノ夏中ヨリハ充分進歩ヲナシタルヲ見ルニ足レリ

「廿四孝十種香ノ段」ハ三味線東玉、東満玉之ヲ語ル　余リ感心セズ

「お千代半兵衛八百屋ノ段」ハ小末ノ語リ物ナリ　充分音声ヲ痛メ居タル様ナレドモ余程旨イト思ヒタリ

大切ハ「義経腰越状五斗生酔ノ段」東玉ニテ小末ノ三味線ナリ

此レハ充分骨ヲ折ラレタレドモ老人ノ事ナレバ力ノ入ラザル所実ニ少ナカラズ　驥モ老イテハ駑ニ劣ルト嗚呼是非モナキコトナルカナ　此日ハ寄席ノ中ニテ宇佐美氏ニ逢エリ

帰宅後就蓐前新小説ヲ読ム

十一月十七日　日曜日　朝来晴天

午前ヨリ文章ノ清書ヲ始メ十二時ニ脱稿ス　十二時前草郷義兄来レリ　英語文章ヲ之ニ示シ豊川ニ行キ姉ヲ迎エ来ル　三時前浜田氏及ビ倉部氏ヲ訪フ　五時過久米、宇佐美、谷内ノ諸氏来

リ種々談話ヲナシ余ハ劔舞ヲナス　義兄酔フテ無茶苦茶劔舞ヲナス　其後又相撲始マレリ
義兄帰リタル後松永氏来リ種々談話ヲナス　松永氏帰ル時余ハ氏ト同行シテ外ニ出デ本屋ニ行キ都ノ花ヲ取換ヱ帰ル　就寝前種々談話ヲナス
＊此日ハ豊川お安及ビ義姉、智恵子来レリ
十一月十八日　月曜日　朝来晴天　午前ハ日光ヲ見タレドモ午後ハ曇天
此日朝起キテヨリ都乃花ヲ読ム　姉ハ豊川ニ行ク　余ハ鎧ヲ見来レトノ姉ノ命令ニ従ヒ十一時過御成道田代町ニ至リ鎧ノコトヲ頼ミテ帰ル　帰途切通坂上ニテ大弓ヲ引ク
家ニ帰リテ居ルニ三時前谷内氏来リ英国史ノ下読ミヲナス　徒然草ヲ借ス
此日母ハ団子坂ヱ菊見ニ行キタリ
晩食後松永氏ヲ訪ヒ都ノ花ヲ貸ス　中島氏北堂ト談話ス　読売新聞ヲ貸(ママ)リテ読ム　八時過浜田氏来リ談話少時ニシテ共ニ松永氏方ヲ出デ家ニ帰ル
十一月十九日　火曜日　朝来降雨　三時少シク小止ミス　五時頃ヨリ又降リ出ダス
此日朝雨イタク降リシガ故ニ学院ニ帰ルヲ見合ハセ新小説ヲ崩シソレゾレニ揃ヱ終ル　姉来リ鎧ノコトヲ話ス　天神ノ家ノ話シ出デ百円位ニツケテ見ヨト云ヒタリ　十一時過帰ル　此日ハ下元氏久米氏午前ヨリ来ラル　昼食後焼芋ヲ食フ

一時前家ヲ出デ春木町、新花町ヲ通リテ眼鏡橋ニ出デ筋カイヨリ鍐道馬車ニ乗ル　此日ハ雨天ナリシ故カソレ程コミアハズユツクリ居(ママ)ルコト出来タリ　日陰町ヨリ車ニ乗リ三田ニ来リソレヨリ聖坂ヲ登リテ学院ニ帰ル　此ノ途中芝公園ニテ戸川君ニ行逢ヒ又部室ニハ島崎子安ノ二氏来リ居リヌ
此日ハ仏文翻訳ヲ終ル　雨天ナルガ故ニ余ノ咳ニ障ランヲ恐レテ礼拝ニ出席スルヲ断ハリ部室ニテ雄辨(ママ)筆記ヲ清書ス
九時過英国七大家中カムベルノ「チス、ヂスタンス云々」ノ詩ヲ読ム
十一月二十日　水曜日　朝来晴天ニシテ至極暖気ナリシガ八時過少シク雨フル
此日化学教師「マツカルチー」氏ハ学院ニ来リ居ラレシカドモ帰ラレタリ　帰途ランヂスト門口ニテ暫時談話致居ラレタル由ナリ
朝八時過幹事局ニ届書ヲ出ス
十二時過石本氏ノ時間ニ新語ヲ覚ヱヌ「blue-stocking 女作者」「号 Nom de plume」等ナリ　其他或ル説教師ノ理髪師方ニ於テノ話及ビ四月愚痴ノコトノ話アリ　明日ノ英語演説ノ稽古ヲナス
十一月二十一日　木曜日　朝来晴天ニシテ暖気(ママ)
此日英語演説ヲナス　ハリス氏ノ評ニセズチユアーヲナスニハ手ヲ挙ゲテナセ又此レト云フ時ハ「フロント、ゼスチユアー」ヲナス可キ由シヲ云ハル　ハリス氏ニ文章訂正ヲ請フ　昼食後

近傍ヲ散歩ス　帰校後和文仮字格ヲ写ス
晩食後近傍ヲ散歩ス　赤田、島崎同伴ス　七時ヨリポープノ「エッセイ、ヲン、マン」ヲ読ム
此日ノ日本新聞ニ東海悦郎ハ仙台生レノ黒沢三郎トカ云エル詐偽師ナル由記載シアリタリ

十一月二十二日　金曜日　朝来晴天　午後ヨリ天気朦朧トシテ五時頃ニハ全ク曇レリ　夜ニ入リテ一時晴レシガ又曇レリ
此日読売新聞ニハ飯田町ノ十傑トテ歌人ニハ松波資之　詩人国府寺(ママ)青厓　法律家松野貞一郎　宗教家巌本善治　小説家尾崎紅葉。石橋思案。広津柳浪。写真美術ニ、鈴木眞一。国文家落合直文。マタ美形ニハ明治女学校ノHE令嬢ノ十氏ヲ記載セリ
午後三時過書籍室ニ行キ「フイツシャー」ノ万国史ヲ借ラントシタルニ其ノ借ス本ハナシト云ヒタレバ借リズニ帰ルソレヨリ直チニ家ニ向ツテ出発セリ　日比谷迄歩キソレヨリ車ニ乗リ一ツ橋迄来リ徒歩シテ家ニ着ス　然ルニ久米氏来リ居レリ　烟草屋来リ華山ノ画ヲ買ヒ来レリ
六時頃ヨリ寄席ニ行ク途ニテ「小文学」一号ヲ買ヒ求メテ寄席ニ入ルニ松永氏浜田氏ヲ伴ヒテ来リ居レリ
扨テ此日ハ相変ラズ善キ入リニテ書生其多数ヲ占メチラホラ婦人ヲモ見受ケヌ　当日ノ客ハ中々批評家多ク大分賑ヤカナリキ
先ヅ最初東吉ノ「日吉丸若木桜」五郎助住家之段」ニテ隨分面白カリシ　全体此人ハ小政張リニテ熱心ニヤラレシハ感心ナリ
次ハ東満玉ハ三味線東玉ニテ「日蓮記勘作内ノ段」ニテ隨分面白ク感ゼリ　前夜ヨリ余程能カリシ様ナリ
其次ハ小末ノ「播隨院長兵衛」長兵衛住家ノ段」ナリ　之レハ我々ガ望ミヲ属セシダケアリテ隨分面白カリシ
大切東玉ハ三味線小末ニテ「絵本大閤記」十段目尼ヶ崎ノ段」ヲ語レリ　此レハ誰レガヤリテモ面白キモノナレバ面白キハ当然ナリ　サレドモ初ノ部分ヲ語リタル時ニカミツク様ナル様子アリシハ面白カラズ　「コレ申シ光秀殿(ママ)軍ノ門出ニアレ程迄云々」ノ所ハ妙々ト云フ可シ
此レニテ家ニ帰リ就眠前「小文学」ヲ読ミ終ル　改進新聞及ビ日本人ヲモ読ム
此日余ハ寄席ヨリ帰リタルニ姉ガ来リ居リヌ　蓋シ明日於香サンノ婚礼ノ為メナリ

十一月二十三日　土曜日　朝来曇天　四時頃ヨリ降雨
此日朝ノ内ハゴタ〳〵ニテ過ギ午後修辞書ヲ読ム　松永氏来リ種々談話ス　倉部氏モ来リテ英文ノ添刪ヲナス　中嶋氏モ来リテ作文ヲ作ル
松永氏ハ此ノ日記ヲ見テ去月十二日ニ吹抜亭ニテ別嬪ヲ見掛ケタルヲ記セザルハ不都合ナラズヤト云ハレタレバ余ハ之ヲ補綴ス可シト答エヌ
午後二時前車屋来リテ於香サンノ嫁入リ道具ヲ持運ブ　此日父ハ鎧ノ捜索ノ為メ出行キタルガ四時頃ニ帰リ来レリ　此ヨリ少シ前ニ高木来リ家ノコトヲ話ス
四時頃烟草屋来リテ鎧ヲ三拾五円ニテ買フ筈ニシテ手金ヲ打チ

来リシ由ヲ語レリ
五時過松永氏ヲ訪フ　此レ氏ヲ寄席ニ引キ出ス為メナリ　読売新聞ヲ借リテ之ヲ読ム
六時氏ト共ニ寄席ニ行クニ最早其ノ八分通リ位ハ客充チ居リタリ　相変ラズ書生沢山、デモ婦人モ少シハ居リタリ
先ヅ最初ハ東一ノ「伊賀越道中双六」二段目円覚寺」ノ段ヲ中迄語リ進ミタル時ニテアリタリ　此人ハ三味線が鳴ラザルト声ガ立タザルトシテ余リ面白カラザリシ　ケレドモ節ハ少シハ善シ
次ハ東吉ノ「中将姫古跡ノ松三段目雪責ノ段」ニテ相変ラズ熱心以テ之ヲ語ラレシハ敬服〳〵サレドモマダ声が本当ニ出ズ
此ノ夜ノ如キハ声ガ立タザル所アリ　前夜ニ劣ルコト蓋シ数歩ナル可シ　然シ勉強ヲ積ミナバ一通リノモノトナル可シ　前夜モ当夜モ大嶋田ヲ頭ニ載キタルハ嘸カシ重カラント御察シ申上げまいらせそろ　此人ハ当年二十二歳ナル由　東吉ノ中将姫ハ此レデ二度目ナリ
次ハ東満玉、三味線東玉ハ「天ノ網嶋時雨コタツ」ヲ語ル　サスガニ声モコナレテ居レバ面白カリシ　ナレドモ音声低クシテ聞キ取リ兼シ時度々有リタルハ遺憾ノ至ニ御座候
次ノ小末ハ「岸ノ姫松鸞鏡」三段目飯原兵衛館ノ段ヲ語リヌ
三味線ハ善ク鳴ルシ語リ様モヨケレバ隨分面白カリシ　ケレドモ今少シ声ノ出テホシキ所少ナカラズ
大切東玉ハ小末ノ三味線ニテ「伊賀越道中双六」六ツ目沼津平作腹切ノ段ヲ語ル　余程面白ク感ゼリ　且初ノ部分ハツレ引東満玉ニテ語リタレバ大分ニ引立タル様ナリシ　然レドモ惜哉年老リノコトナレバ腹ニ力ノ入ラザル様ノ所度々見受ケラレシハ至極残念トコソ存ジ侍ル　勘作ガ切腹ニ十兵衛ガ河井又五郎ノ在所ヲ明カス所ヨリ少シ過ギタル所ニテ余等ハ帰リタリ
帰途ハ雨烈シク降リテ困却セリ

十一月二十四日　日曜日　朝来曇天　至極暖気ナリ
此日朝中島氏来リローヤル読本ノ「スウイート、ホーム」ノ一章ヲ読ム　十時頃ヨリ豊川ニ行キ十二時頃迄新聞等ヲ見テ遊ビ居リタルガ昨夜ノ料理ヲモラヒテ帰ル　家ニ帰リテ其レヲ食ス
午後二時過入浴時ノ帰途福島氏方ヲ訪フニ不在ナリ　道ニテ柿及蜜柑ヲ買ヒテ帰ル　日本人二冊ヲ読ム
午後五時晩食後直チニ帰ランカト思ヒシカドモ豊川ヨリモラヒタル鯛ノ余リニヨカリケレバ翌朝マデ止マリテ朝食ニ之ヲ食ヒテ学院ニ行ク可シト決意ス
六時過家ヲ出デ本屋ニテ古著百種第一号ヲ求メ若竹亭ニ行ク
此日ハ六時過ギナリシ故客ハ最早九分近クナリシ　相変ラズ書生沢山、シカモ女モ割リニ多カリシ　然シ前夜ノ如ク批評家ハ多カラザリキ
最初東吉ノ「神霊矢口渡」頓兵衛内ノ段」ハ前夜ニハ勝リテ声モ能ク出デヽ大分旨カリシ　加フルニ三味線ノ能ク鳴ルハイツモ感服ノ至デゲス
次ニ東満玉、三味線東玉、ハ「碁大平記白石噺」六ツ目吉原揚

ゲ屋ノ段」ナリシガ前夜ヨリカ声高ナリシガ故ニ能ク聞エタリ
現ニ余ノ如キハ二階ノ隅ニ居シニモ拘ラズ判然ト聞エタルハ満
足ノ至リナリ　隨分骨折リノ甲斐アリテ面白ク聞エタリ
次ニ小末ハ「出世大平記九ツ目嘉平次住家ノ段」ヲ語レリ　此
レハ隨分勇マシキ者ナレバ声モ充分出シテ力ヲ入レテ語ル可キ
ヲ小末ハ少シ声ガ立タザル所アリシガ故ニ余リ面白カラズ　客
ノ「アクビ」ヲ引起セシハ又是非モナキコトナリ　サレドモ三
味線ハ隨分旨イ者ト云フ可シ
大切ハ東玉、三味線小末ニテ揚巻助六、八文字屋ノ段ヲ語リヌ
中ニ「チャリ」ヲ入レテ語リタレバ善ク客ヲ倦マセザリシカド
モ前夜ニ比スレバ声ノ所モ少シ覚束ナキ箇所少ナカラザル様ニ
覚エタリ　然レドモ何ント云フテモ旨イニハ差ヒナシ　猶其上
ニ小末ノ三味線ハ余程客ノ耳ヲ楽マスノ価値アリ　寄席ニテ古
著百種ヲ少シヅヽ読ミヌ
家ニ帰リテモ其ノ先キ少シ読ミ拾時少シ過眠ニ就ク

十一月二拾五日　月曜日　朝来晴天至極暖気
此日朝六時前寝起　彼ノ鯛ノ菜ニテ飯ヲ食ヒ家ヲ出デ真砂町病
院ノ傍ヨリ車ニ乗リ三田聖坂下ニテ下ル　道々古著百種ヲ読ム
八時前学院ニ着ス　赤田氏モ次デ帰リ来ル　部室ニテ古著百種
ヲ少シ読ム
朝ピヤソン氏ヨリ　「フイツシヤー」万国史ヲ買ハンコトヲ請
ヒシニ最初其書ナキ由ヲ告ゲラレタレバ是非ナク幹事局ニ行キ
テ「バラ」氏ヨリ五円ヲ受取ランコトヲ談ゼシニ氏ハ後刻持来
ル可キ由ヲ言ハル
化学ノ時間ニ「クロライン」ノ事ニ付テノ談話アリ　或ル時仏
国ノ或ル医者ノ息子鼠ヲ取リテ之レニ「クロライン」ヲ呑マセ
其後尾ヲ取リテ振リ舞ハシテ蘇生セシメルヲ見テ楽ミ居リケル
ヲ其父見テ或ル時患者ノ「クロライン」ヲカギテ蘇生セザル者
ヲ其足ヲ持テ振リ廻ハシ之レヲ蘇生セシメケルトナン
十時二十分頃幹事局ニ行キ金ヲ受取ル
画学ノ時間ニ学院ニ前夜窃盗ノ忍ビ入リタル由ヲ語ル者アリ
昼食後近傍ヲ散歩シ伊皿子坂ニ行キ西洋紙二帖ヲ買ヒ来ル　晩
食後盗難ヲ恐レ机ニ鍵ヲカヒテ出行キテ学院傍ノ坂ノ所ニテ之
レヲ遺失セリ　故ニ部屋ニ帰リテ寝室ニ点ズル洋燈ヲ持チ行キ
テ捜セシニ坂ノ所ニ有ル家ヨリ老女出来リテ余ノ為メニ提燈ヲ
以テサガシクレタリ　「マコーレー」氏来リテ余ノサガシ居ル
ヲ訝リテ問ハレタレバ余ハ鍵ヲ遺失セシ由ヲ語リヌ
暫時捜シタレドモ見エザレバ老婦ニ若シ見当ラバ明朝持チ来リ
クレヨト頼ミテ帰リヌ　夜ニ入リ古著（百種ヲ読ム）
＊此日ヨリ露伴「雪紛々」ト云フ小説ヲ

十一月二十六日　火曜日　朝来曇天　九時頃ヨリ降雨五時頃迄
　　或ハ休ミ或ハ降ル　一時過ヨリ風吹キ出デヌ
此朝前夜ノ鍵ヲ捜シニ出シニ小児ガ此レヲ拾ヒテ余ニクレヌ
故之レニ礼トシテ五銭ヲ渡シテ帰ル
此日礼拝堂ニテ四年生総代トシテ小西氏鶴鳴雑誌号外ヲ取消ス
コトヲ述ブ　近藤氏「会議ノ結果トシテヘボン氏校長、井深氏

副校長トナリ杉森氏ハ予備校ノ校長ト定メラレタル由ラ述ベ且雑誌ハ以後幹事ニ見セテ後衆人ニ見セル可シト宣告アラレタリ

此日和文ノ時間ニ余ハ当リテ少シ読ミタルガ「八重妻(ムグラ)」ト云フコトヲ知ラザリシ故教授ヨリ妻トハ一種ノ草ニシテ寂シキ家等ニ生ズル者ナルコトヲ告ゲラレヌ

晩食後赤田、子安ノ二氏ト共ニ胸隔及ビ肺ノ収縮等ヲ測レリ

六時過杉森氏説教ヲナス　其ノ大意ハ「我々ハ神ノ子ナレバ能ク一致セザル可ラズ而シテ教師ト生徒ノ間ノ如キハ必ラズ相互ノ間ニ冷却ナラザルヲ期ス可シト云フニ有リキ」蓋シ氏ハ先日来ノ外人攻撃ヲ心配シ居ラレタル故此ノ言有リシナラン

十一月二拾七日　水曜日　朝来曇天ナレドモ晴空ヲ所々ニ見受ク　風ハ少シ吹ケリ

此日朝比佐氏来リ文章ヲ受取ル

此日ハ別ニ記ス可キ事モ無シ　仏文翻訳ヲ此ノ次ニナス可キ由ヲ教授ヨリ告ゲラル

晩食後近辺ヲ散歩シ摺附木ヲ買ヒテ帰ル

十一月二拾八日　木曜日　朝来雲出タレドモ九時頃ヨリハ快晴　至極暖気　夜ニ入リテハ朧月夜ナリシ

此日夜雑誌ヲ受取リ幹事局ノ検閲ヲ請フ

和文科ハ文法ヲ始ム　時間中ニ雑誌検閲ニ付テノ話アリ　歴史ノ時間ハ「羅馬征服ノ進(マヽ)」ト云フ題ニテ四十分答案ヲ作レリ

之レハ隨分込ミ合ヒタル事ナレバ余程閉口セリ　デモドヲカコヲカ書上ゲテ出シタリ

昼食前改進新聞ヲ見ルニ一奇談ト題セル短篇小説アリ　読売新聞ニハ「ヲシ枕」ト題シテ文庫連中ノ春亭九華氏ノ新婚ヲ祝スル為メニ「ヲシ枕」ヲ作リテ贈リタル由ヲ記載シ有リタリ

昼食後近傍ヲ散歩ス　道ニテ富永氏ニ逢ヒ改進新聞ヲ借リテ道々之レヲ読ム　仏文翻訳ヲナス　晩食後近傍ヲ散歩ス

十一月二十九日　金曜日　朝来曇天ナリシカドモ昼頃ニハ晴レタレドモ少シ朧ナリシガ夜ハ朧月夜ナリシ

此日予備校ノ試験アリシカバ山田氏ノ課業休業ナリシ

午後ハ仏文課ニテ仏文ノ翻訳ヲサセラレタルハ少シク弱リタリ

三時赤田氏ト共ニ学院ヲ出デ、帰途ニ就ク　道々種々ノ談話ヲナシナガラ帰ル

晩食後本屋ニ行キ小文学ヲ買ヒ寄席ニ行ク　此日ハ酉町ナレバ客少ナカリシ　故ニ余ハ前ニ行クヲ得タリ　相変ラズ書生沢山女モ少シハ居リタリ

最初ハ東一ノ「絵本大閤記」本能寺ノ段ナリ三味線ハ鳴ラズ声ハコナレザレバ余リ面白クモナカリシガ事実ガ面白ケレバソレニテ補フニ足リナン

次ハ東吉ノ加賀見山六段目又助住家ノ段中々ノ骨折リ三味線モ善ク隨分面白シ　今少シ声ヲコナセバ至極宜カラン

次ハ東満玉三味線東玉ハ「梅野由兵衛長吉殺」聚楽町ノ段」之レハ中々声ハヨク面白カリシ　ケレドモ声ニ変化ナシ

次ハ小末ノ「長光寺」ナリシガ此レハ別ニ評ス可キコトナケレバヤミヌ　サレドモ今少シ声ガ出レバヨイト思フ

次ハ東玉ハ「長光寺」ヲ語ル　但シ引キ(ママ)語リナリ　隨分事実モ面白カリシ　ケレドモ余リヨキ出来ニハアラザリシト思フ　此レハ後ノカケ合ノ為メニ声ヲ貯ハヘタル者カ

大切ハ「関取千両幟」ニテ稲川ガ東吉、女房ガ東満玉、東玉ガ鉄ゲ(ママ)嶽ニテ三味線ハ小末ナリ　東玉ノ鉄ゲ嶽ハ美事ト存ズル

東吉ハ可成ナレドスコシワキニヲサレタル様ニアリタリ　東満玉モ可成リナレドモ今少シ声ノ変化アラマホシ

小末ノ三味線ハ達者ナル者ナリ　就中櫓大鼓ノ曲引キ(ママ)ハ感服ナリ　然シ時間ノセイカ非常ニヌカシタルハ不服ナリ

此日寄席ニテ春川泰亮ニ逢ヒ種々談話シ寄席ヲ出テヽモ本郷ノ通リヲ同道シテ帰リタリ　氏ハ天神町一丁目四十九番地中村方ニ止宿シ居ラルヽ由ナリ

帰途本屋ニ行キ古著百種ノ第二号ヲ受取リ帰ル　就眠前之レヲ読ム

十一月三十日　土曜日　朝来晴天　至極暖気ナリシ

此日朝ノ内ハ鎧ヲ着テ騒ギ居リタレバ空シク過シタリ　午後ハ第一ニ修辞書ヲ読ミ居タルニ赤田氏来レリ　之レニ小文学一号ヲ貸シタリ　午後四時前ヨリ歴史ヲ読ミ五時頃ヨリ外ニ出デ本屋ニ行キ新小説二十一号ヲ買ヒ雑誌代ヲ差引キ六銭五厘ヲ払ヒ帰リタルニ久米助三郎氏来リ居レリ　故ニ之ト同道シテ寄席ニ行ク　此日ハ客隨分入リ居リタリ　松永氏来リ居レリ　北沢夫婦森下氏ヲモ見受ケヌ

最初ハ東一ノ「鶴ケ岡ノ段」コレハ評スル迄モナシ

次ハ二段目「桃井館ノ段」東吉ニテ隨分面白カリキ

次ハ「殿中ノ段」ハ小末、師直」東満玉判官」「若狭之介東吉、三味線ニテ語レリ　可成面白カリケレドモ皆々声ニ変化ノナキハ残念ナリ　然シ三味線ハ存外善カリキ且伴内小末」「おかる東満玉」勘平東吉ナリキ

四段目「扇ヶ谷ノ段」小末ニテ余程骨折ラレタレドモソレ程デモナシ

五段目二ツ玉ノ段ハ東吉ナリ　之レモ余リ善カラズ

六段目「おかる身売ノ段」東満玉之レモ無難トヤ言ハマシ

「勘平腹切ノ段」東玉ニテアリシ　然レドモ余リ善クナイ　声ニ力ノ入ラザル所甚多クシテ引キ立タズ

大切ハ「一力之段」ニテ由良之助東玉、伴内小末、矢間重太郎東一、力弥東菊、弥五郎東造、おかる東満玉、九太夫東吉、平右衛門小末等ナリキ　三味線ハ東玉ナリ　扨東玉ハ余程ヨシ

東一、東造、東菊ハ如何ニモ御苦労ニコソ　小末平右衛門無難ノ出来ナリ　東吉ノ九太夫之レモ同ジ　小末ノ伴内中々面白シ

中ニモ少サキヲモチヤノ籠ヲカツギテ引込シハ御趣向ト申ス可シ　東満玉ノおかる可成ト云フ可シ」

此日ハはやし入リニテアリタリ　中々面白ク感ゼシモ小緑連中ノ「仮名手本忠臣蔵」掛ケ合ヒヲ聞キタルコトアリタル故カ余リ感服スルコトモナカリシ』

寄席ニテ新小説二拾一号ヲ読ミタリ

十二月一日　日曜日　此日朝来晴天ナリシカドモ少シ寒カリシ　五時過ヨリ風イタク吹ケリ

此日朝新小説ヲ読ミ終ル　演説文ヲ書キ終レリ　此日倉部、中嶋、久米ノ三氏来レリ

午後海老原氏来リテ鎧ノ鑑定ヲ頼ム　大石氏久々ニ来レリ

四時頃入湯ニ行ク　帰途本屋ニ行キ「都乃花」二十八号ヲ受取リ之ヲ読ム　此日晩食ゴモク飯ヲ食セリ

八時前本屋ニ行キ拾二月分雑誌代ヲ払ヒ「花乃命」ヲ買ヒテ帰ル　之ヲ読ミ終ワルト床ニ就キ眠ル前古著百種ヲ読ム

十二月二日　月曜日　朝来晴天　風吹キテ可成寒気ヲ覚エタリ

此日朝六時前寝起六時半頃喫飯直チニ家ヲ発ス　水道橋ヨリ車ニ乗リ新橋ニ至ル　道々車上ニテ古著百種ヲ読ム　前夜ノ風ハ可成吹キシト見エ日比谷練兵場ノ南隅ノ柳ノ木ガ折レテ居ルヲ見受ケタリ　愛宕下ヨリ徒歩シテ学院ニ帰ル　時ニ八時十分過ギナリシ

此日ハリス氏ノ時間ニ外来ノ婦人来レリ　演説文ヲ出ス　昼食前画ヲ終ル　昼食後眼鏡ナキニ気付キテ諸所ヲ探レドモ見当ラザリシ　近傍ヲ散歩シタリ

十二月三日　火曜日　朝来曇天　八時半頃ヨリ降雪午後四時頃ニ止ム　中ニモ拾二時過ハ最モ烈シク降リタリ　五時頃ニハ少シク晴天ヲ見タレドモソレヨリ曇ル

此日近藤氏用事アリテ和文科休業　拾時過ハリス氏ヨリ作文ヲ受取ル　中ニ一ツ訂正シタ箇所アリ

昼食後島崎、赤田、子安氏等ト籤ヲ引キテ銭ヲ出シ合ヒ菓子及ビ芋ヲ買ヒ来リテ食セリ　此日雪降リテ寒気甚シカリシガ故ニ子安、島崎ハ度々遊ビニ来レリ　友野氏ヨリ柵草紙ヲ借ル

十二月四日　水曜日　朝来曇天　午前八時頃ヨリ降雨六時過止ム　然レドモ空ハ曇リ居レリ

此日小使ニ眼鏡ヲ見当ラザリシヤヲ聞キタルニ「有リテ机ノ中ニ入レ置キタレドモ何人カ之レヲ持チ行キケン今有ラズ」ト答ヘタリ　「エスセイ、ヲン、マン」ヲ読ミ終レリ　「ギボン羅馬史」ヲ読ミ始ム　此時間ニ「カーライル」ノ話シヲ聞ケリ

「カーライル」ノ仏国革命史ヲ草セシ後之ヲ或ル友人ニ貸シタルニ友人之ヲ読ミテ余リノ面白サニ夜ノ更クルヲ知ラズ　二時頃迄起キテ居リテ後其草稿ヲ机上ニ置キテ眠レリ　翌朝早ク起キテ机上ヲ見ルニ彼ノ草稿ハ何地ニ行キケン絶テ見当ラズ　諸所探ス中ニ下女来リテ云フ様「妾、今朝暖爐ヲ焚キ付ケントナシタルニ中々火起ラザリシカバ此ノ机ノ上ニ在リタル反古紙ヲ焚キ付ケニナシタリ」ト　其ノ人之ヲ聞キテ面色ヲ変ジ直チニ「カーライル」ノ許ニ行キ非常ニ面ナキ様子ニテ其仔細ヲ打明ケタレバ「カーライル」モイト力ヲ落シテ其後ハ暫時文章ヲ書カザリシガ或ル時窓ニ依リテ外モヲ眺メアリケルニ農夫ノ畠ヲ耕ヤス者アリ　「カーライル」之ヲ見テ大ニ悟リ、心中ニ思フ様「文章モ亦畠ノ如ク一度書キタル者ヲ二度モ書ク時ハ先ノ者ヨリモ一層新シキ事等モ出来リテ余程能クナリナン」ト　是ニ於テ彼ノ革命史ノ稿ヲ起シタルニ前ノ思想ハ続々出来ルノミナラ

ズ猶又新キシキ考モ入リテ返リテ前ノ者ヨリ善キ者ヲ得タリトカヤ午後二時仏語課ノ時間ニ(Etude Progressive de la language Française) ト云フ本ヲ読マセラレタリ

柵草紙中ノ悲哀(落合直文作)ヲ読ム　夜エ掛ケテ演説文ノ暗唱ヲナス　七時過「きはらし」ヲ読ム

十二月五日　木曜日　朝来晴天　朝ノ内ハ少シク雲出デ居リタレドモ八時過ヨリ全クノ晴天トナレリ

此日朝食時ニ牛乳代四拾銭ヲ乳屋ニ渡ス　九時過小使ヨリ眼鏡ヲ受取ル

此日ハ島崎氏ヨリ片眼ノ眼鏡ヲ借リテ和文ノ時間ヲ済マシタリ

拾二時過ヨリ友野氏引キ移リヲ始メ余ノ部室ニ来レリ　昼食後近傍ヲ散歩ス

大家論集中「ギボン(ママ)」ノ「ヲバースロー、ヲフ、ゼノビア」ヲ読ム　余程面白ク感ジタリ其レヨリ演説ノ下稽古ヲナス　夜ニ入リテ八時頃友野氏ヨリ餅ヲモラヒテ之ヲ食フ

此日四時前賄ニ土曜日曜ノ食料ヲ引クコトヲ談判シ承諾ヲ経(ママ)タリ　其序ニ新築中ノ食堂ヲ見タリ

十二月六日　金曜日　朝来晴天至極暖気

此日英語演説ヲナス　マコーレー氏歴史ノ時間ハ休ミニナリタリ

昼食後仏語「動詞ノ暗唱」ヲナス　午後三時過学院ヲ発シテ帰途ニ上ル　日比谷門外ノ議事堂ハ外部ハ余程能ク出来居リタリ

堀端通リヲ帰リタルニ彩雲水ニウツリテ余程奇麗デアツタ　五時頃家ニ達ス　六時頃姉来レリ　余ハ外ニ出デ日本人ヲ本屋ヨリ取リ来ル　帰途蜜柑及ビ柿ヲ買フ

八時頃姉帰ル　余ハ福島氏ヲ訪ヒ種々談話ノ末拾一時前帰宅ス

＊六時頃中嶋氏来リ余ニ作文ヲ作ランコトヲ頼ミカエル

十二月七日　土曜日　朝来晴天至極暖気

此日朝新聞ヲ揃(ママ)ツヽアリシニ豊川ヨリ亡兄ノ遺物ヲ送リ来レリ

依ツテ余ハ之ヲシラベテ居リシニ烟草屋高木来レリ　此レニテ午前ヲ費ヤス　午後一時頃ヨリ作文ヲ作ル　中嶋氏来リローヤル読本ヲ読ム

二時過豊川ニ行キ下女ニ頼ミテ遺物ヲ出シテモラウ　此日ハ義姉、土佐ニ帰ルトテ暇乞ニ来ラレタリ　豊川ヨリノ帰リ谷内及早川氏ヲ訪フ　何レモ不在ナリシ

此日時計屋ニ行キ時計ノ鍵鏈ヲ買ヒ掃除ヲ托シテ帰ル　夜ニ入リテ外ニ出デ名刺ヲ注文シ勧工場ヲ廻リ帰リニ夜店ニテ義太夫本三冊ヲ買ヒテ帰ル

十二月八日　日曜日　朝来曇天　然レドモ寒気甚シカラズ　夜ニ入リテハ全ク快晴セリ

此日拾時頃松永氏ヲ訪フ　種々談話ヲナス　読売新聞ハ昨日発行停止ヲ命ゼラレタリト云フ事ヲ聞ケリ　十二時前帰宅ス

昼食後清司氏来レリ　三時頃過入浴ス　帰路本屋ニテ小文学第三号ヲ取リ帰ル

五時頃高木来ル　晩食後出発ノ用意ヲナシ居リタルニ赤田氏来リテ来二十日ニ文学会中会ヲ催スニ付キ其時余ニ邦語演説ヲナ

ス可キ由ヲ話サル　余承諾ノ旨ヲ告グ
五時過家ヲ出デ時計屋ニテ時計ヲ受取リ本屋ニ行キテハ「小文学」ノ代ヲ渡ス
万世橋手前ヨリ車ヲ傭ヒテ新橋ニ至ル　銀座通ニテ鍊道馬車ノ馬ガ倒レ居ルヲ見受ケタリ　新橋ヨリ徒歩シテ三田ニ出デ湯呑一個ヲ求メ七時過学院ニ帰ル
八時頃ヨリ「シエキスピヤー」ノ「ジユリヤス、シーザー」ヲ読ム

十二月九日　月曜日　朝来晴天　然レドモ少シ朧ロナリ
此日石本氏ノ時間ハ休ミナリシ　昼食後近辺ヲ散歩ス　白金ノ通リノ角ニテ鉛筆ヲ買ヒソレヨリ三田ニ出デ紅梅焼ヲ買ヒテ道々之レヲ食フ　二時前学院ニ帰ル
二時頃ヨリ「きむすこ」ヲ友野氏ヨリ借リ読ム　晩食後休日建白書ノ草稿ヲ作ル
同六時ヨリ礼拝堂ニテ植村正久氏ノ演説ヲ聞ク　七時ヨリ草稿ヲ清書セリ

十二月拾日　火曜日　朝来晴天　然レドモ少シ寒カリシ
朝ヨリ休ノ建白一条ノ相談ヲナスニ賛成者多シ　此日体操有リ
昼食後赤田、子安両氏ト共ニ和知氏ヲ訪ヒ帰途二本榎ノ通リニテ蜜柑ヲ買ヒ之ヲ食フ　子安氏ハ余等ヲ伴ヒ金子ニ行キ「カステイラ」ヲ馳走セラレタリ
部屋ニ帰リテ「きむすこ」ヲ読ム三時過ギヨリ「ジユリヤス、シーザー」ヲ読ム

馬場勝弥(孤蝶)日記　壱

晩食後島崎氏ニ休日願ノ書面ヲ書キテモラウ　九時過ヨリ「マーチヤント、ヲフ、ベニス」ヲ読ミ終ワレリ　総テ此等ノ書ヲ読ムニハ辞書ト首ツ引ニテノツツ、リツツ考エルコト屢ナリ
其困難中々大抵ノ事ニハアラズカシ

十二月拾一日　朝来曇天　午後八時頃ヨリ降雨
此日朝賄ノ所ニ火ヲ取リニ行キタリ　休日ノ建白書ノ趣向ヲ少シ変ゼリ
此日ハ石本氏ノ翻訳ハ休業ナリシ
晩食前ヨリ「ベーコン」ノ文章ヲ読ミ始ム　晩食後近傍ヲ散歩シ金子ニテ御馳走ニナル　此時子安、赤田両氏ト同伴ス
其レヨリ部室ニ帰リ九時ヨリ又「ベーコン」ノ文章ヲ読ム　拾時迄ニ読ミ終ワル能ハズ四ページ半許リ余リタリ

十二月拾二日　朝来曇天且降雨　然レドモ暖気ナリ　午後三時ヨリ四時ノ頃ヲヒハ陰雨朦々トシテ二町位先キノ者ハ全ク見エザル程ナリシ　五時頃ヨリ一層烈シク降リ出デ且雨サエモ加リツレバ嵐ニモナルベキカト気遣シニサハナクテ六時頃ヨリ雨止ミテ六時三十分ノ頃ニハ星ガ出タリ
此日朝願書ヲ出ス　昼食時高畑氏ヨリ演説ヲ勧メラレ之ヲ承諾ス
昼食後「きむすこ」ヲ読ミ終ル　午後三時頃ヨリ「ベーコン」ノ文章前夜読ミ残リヲ読ミ終ル
此ニテ「ベーコン」ヲ終リ「ミルトン」畧伝ヲ読ム　友野氏ヨリ三省堂ノ書籍切符二枚ヲ受取リヌ

晩食後仏文翻訳ヲナス　六時ノ祈禱ハ一片ノ届書ニテ御免ヲ蒙リ部屋ニテ仏文翻訳ヲ清書シ終リヌ

＊此日ハ朝六時ニ時計ヲ見ルニ止マリテ居レリ故ニ之ヲ捲クニ二ツシカ捲ケズソレカラ九時頃ニ又一度止マリ又二時頃ニモ止マリタリ

十二月拾三日　金曜日　朝来晴天可成暖気

此日朝ヨリ風心地ニテアリシガ午食時ヨリ少シク烈シクナリタリ

此日ハ仏文翻訳ノ古イノヲ受取リ又此ノ間ノ試験ノヲ受取ル

前ノハ一モ誤リナク後ノ者ニハ四ツチガツタ

午後三時二十分頃ヨリ学院ヲ出デ家ニ帰ル時ニ五時過ギニテアリキ

六時頃姉来ル　中嶋氏来リ文法ヲ読ム　ソレヨリ家ヲ出デ本屋ニテ新小説ヲ受取リ之ヲ読ム　姉八時前帰リ去レリ　八時頃ヨリ心地悪シク臥床ス

十二月拾四日　土曜日　朝来晴天暖気

此日前夜来ノ風未ダ癒エズ　医師ノ宅ニ行キ薬ヲ得テ帰ル

此日ハ誰レモ来ラズ　面白カラヌ日ヲ送リヌ　夜ニ入リテ草郷来リ種々談話シ帰レリ

十二月拾五日　日曜日　朝来晴天暖気

此日モ未ダ癒ラズ臥床シ居レリ　久米氏来ル　中嶋氏ノ依頼ニ応ジテ歴史ノ概略ヲ認ム

道具屋来リテ掛物ヲ見セタリ　松永氏来ル

途中久米氏ニ手ツダヒテモラヒタリ

夜に入リテ都乃花二十九号ヲ読ム

十二月拾六日　月曜日　朝来晴天

此日少シク快シ　九時過医師ニ行キ本屋ニテ最明寺鎌倉奇聞ナル本ヲ買ヒテ医師方ニテ待ツ間之ヲ読ム　薬モラヒテ帰ル　午後久米氏来ル　姉来レリ　道具屋ヨリ文晁ノ画及ビ花活ケ一個ヲ買ヒタリ　夜ニ入リテ帰ル

於安次デ来レリ　種々談話ノ後帰ル　但シ袴ヲ送リクレタリ

此日谷内兄弟余ヲ訪フ　種々談話セリ

十二月拾七日　火曜日　晴天

此日ハ大分軽快ヲ覚ユ　久米氏来リ種々談話ス

午後ハ新小説ヲ纏ム　夜ニ入リテ演説文ノ草稿ヲ作ル　時ニ八時頃ナリケリ

十二月拾八日　水曜日　朝来曇天ナリシガ八時前ヨリ追々晴レ拾二時頃ヨリハ全ク快晴シ可成暖気ニテアリキ

九時頃ヨリ家ヲ出デ真砂町ヨリ車ニ乗リ三田聖坂下ニ至ル　ソレヨリ徒歩シテ学院ニ帰ル　時ニ拾時二拾分ノ頃ニテアリシ

此日翻訳ノ試験アリタリ

昼食後部室ノ者ト鐵ニテ銭ヲ出シ合ヒ菓(ママ)ヲ買ヒテ食フ

夜ニ入リテ課業ノ下読ミヲ終リテ後女学雑誌百八十五号ヲ見ルニ日本最上小説ト題シテ左ノ書籍ヲ記載シアリタリ

好色一代男　井原西鶴、傾城禁短気　江島其碩、きぬぶるひ

山東京伝、お千代伝　風来山人、大悲ノ千録本　芝全交、三

教色　唐来三和、娘節用　曲山人、弓張月　曲亭馬琴、浮世風呂　式亭三馬、田舎源氏　柳亭種彦

次ニ今ノ小説ニテハ

細君　春ノ家先生、浮雲　二葉亭先生、初恋　嵯峨之家(ママ)先生、風雅娘　紅葉先生、いちご姫　美妙先生、風流仏　露伴先生、魂胆　篁村先生、外務大臣　共酔先生、犬枕　紅葉先生　く　され玉子　嵯峨之家先生

又翻訳ニテハ二葉亭氏ノ「めぐりあい」、思軒居士ノ銭世界ハ余程面白シトアリタリ

十二月拾九日　木曜日　朝来晴天ナリシガ追々曇リテ拾一時前ヨリ降雨　朝ノ内ハ隨分暖気ナリシ　夜ニ入リテ、快晴

此日幹事局ニ欠席届ヲ出ス　数学教師ヨリ明日休ミノ多キ者ダケ試験ヲ行フ可シト云ハレタリ

此日マコーレー氏歴史ノ時間休ミ

昼食後近傍ヲ散歩シ坂上ニテ菓子ヲ買フ

仏語ノ時間ニ本ヲ代エル相談ヲ成ス

此日来ル廿一日ヨリ帰宅スル旨ヲ塾監ニ届出ヅ

部屋ニハ子安島崎ノ両氏来リテ談話ス

六時一片ノ届書ニテ晩禱会ヲ御免ヲ蒙リ演説文ノ下書ヲナス

十二月二拾日　金曜日　朝来晴天暖気　霜ノ降ル事甚多カリシ

此日礼拝堂ニテ来学期ヨリ大祭日祝日ハ何時モ休業スル事トシ且雑誌条例ヲ取消ストノ宣告アリタリ

八時過ヨリ数学ノ試験ヲ受ク　問題三題ヲナス

此日午後子安、高畑二氏ト共ニ札之辻ナル比佐氏ヲ訪フ　談話数次近松ノ浄瑠璃本ヲ借リ見ル

学院ニ帰リテむら竹七巻ヲ借リ見ル　三時頃学院ニ本ヲ返ス

六時過文学会出席ノ為メ「チヤペル」ニ行ク　今会ハ中会ニシテ客ヲモ少シハ招キシ故カ少々洋人ヲモ見受ケヌ　然レドモ割ニハ多ク来ラザリシ

日本人ノ女生徒ハ三四名見受ケヌ　初ノ中ハ只一名ノ女生徒ノミアリシカバ嶋崎氏余ノ袂ヲ引キテ曰ク「万緑叢中紅一点」ト当夜ハ弁士八人ニシテ余モ其ノ一人ナリキ　此ノ内ニテ一番感服セシハ島崎氏ノ諷刺直諫及ビ罵倒ト云ヘル文章ニテアリタリ其他音楽ハ学院生徒及ビミツス、モーレー等ニテ勤メタリ　九時前閉会ス　其レヨリ部屋ニ帰リ眠ニ就ク

十二月二拾一日　土曜日　朝来晴天

此日朝三時四十分頃目醒シガ又眠ニ就ク

六時頃起キ出デ帰途ニ就ク　午前九時頃ニ家ニ達ス

此日帰ルヤ否ヤ新聞ヲ読ム　又昼食後新小説ヲ取り来リテ之ヲ読ム

久米氏来ル　午後二時頃ヨリ谷内兄弟来リ種々談話シ帰リ去レリ　四時過切通シニ行キ眼鏡ヲ買ヒ来レリ　靴ヲ直シニヤル

十二月二拾二日　朝来晴天

此日朝ヨリ福島氏来リ種々談話ヲナス　宇佐美氏次デ来ル

本屋ヨリ小文学ノ四号ヲ持チ来レリ

拾二時頃二氏去ル　昼食後赤田氏ヲ訪フニ不在ナリシ　因テ借

金三拾銭ヲ返シ帰途久米氏ヲ訪ヒ種々談話ノ末四時過帰宅ス
五時過ヨリ松永氏ヲ訪フ　岡田氏ニ共ニ行ク　餅ツキ道具ヲ借リル約束ヲナシテ帰宅ス
七時前久米氏ト共ニ近傍ヲ散歩ス　八時頃靴屋靴ヲ持チ来レリ

十二月二拾三日　月曜日　朝来曇天　寒気甚シ　午後ヨリ降雪
夜ニ入リテハ降雨

此日午後姉来レリ　久米氏夜ニ入リテ来レリ　此日赤田氏来リテ種々談話ノ後帰ラレタリ　道具屋来リテ画ヲ買ヒ込ム　此日姉ハ宿リタリ

〔十二月三十一日の日記と考えられる〕
六時頃北沢氏方ニ行キ金ノ催促ヲナス
八時前久米氏ト共ニシヤツ。靴下。羽織紐。及ビ元日ノ用品ヲ買ヒ来レリ
嗚呼白駒ノ足掻隙ナクシテ明治二十二年モ夢ノ間ニ昨日ト過ギ今日ト暮レ遂ニ今日ヲ以テ終ルニ至レリ　而シテ余輩此ノ一年間ニ如何ナル事ヲカ為セシカ　余ハ回顧スル毎ニ慙愧ニ堪エザルコト実ニ少シトセザルナリ　而シテ此ノ暮ハ払ノ金ガ不足シテ少シク弱リタリ　余ハ来年ノ暮ハ今少シク愉快ニ過サンコトヲ今ヨリ期スル者ナリ
此ノ年ノ内余ノ行為中六月二十六日学院ヨリ奨学金ヲ受ケシト義太夫ヲ聞キシコトノ非常ニ多キト此ノ拾二月二十日文学会中会ニテノ演説等最モ著シキモノナリ

孤蝶「閑中日記」の解題

――孤蝶とキリスト教――

岡林清水

馬場家の御好意によって、このたび明治学院から公表されることになった馬場孤蝶（勝彌）の「閑中日記」は、明治二十五年（一八九二）五月一日から明治二十六年（一八九三）一月八日に至るもので、高知共立学校教師時代の孤蝶の日記である。

ただし、この間に、夏休みで明治二十五年七月二十九日高知を離れ、八月一日父母の居る東京に帰っていた孤蝶が、九月に入って眼の血膜炎で春日町の須田病院に通い、十月になってようやく高知に着くということもあって、九、十、十一月と日記を休み、十二月になって再び日記を書きはじめているので、この「閑中日記」は、正味五か月あまりにわたる日記であるといえよう。

馬場勝彌（孤蝶）は、明治二十四年（一八九一）六月、明治学院普通学部を卒業した後、同窓の小倉鋭喜（高知の人・まじめなキリスト教信者、のち明治学院神学部嘱托講師）の紹介で、同年十二月十四日、高知の共立学校（高知市追手筋二丁目）に着任した。いま、土佐女子高校（明治三十六年、高知共立学校と土佐女学校合併）に保存されて

いる「共立学校日誌」によれば、明治二十四年十二月十四日の項に「東京人馬場勝弥氏ヲ本校英学教師ニ聘シ去ル八日京地発十三日着県本日ヨリ出校ス」とある。

したがって、この「閑中日記」は、明治学院を卒業して、最初に就職した高知の共立学校で孤蝶が、いかに新進気鋭の教師として、明治学院での体験を生かして活動したのか、その姿をつぶさに知ることができると共に、当時の高知の風物のなかで孤蝶がどのように生きたかを如実にうかがうことができるものであり、孤蝶文学研究に当たって、まことに有難い資料であるといえようかと思う。

高知共立学校なるものは、明治十五年（一八八二）五月二十日、片岡健吉を校長として、現在の土佐女子高校の土地に開校したもので、もともと立志社の幹部や、東京在住の馬場辰猪（孤蝶の兄）、豊川良平（孤蝶の姪安子の夫）、仙石貢などのいきのかかった英語専門の学校であった。

明治七年（一八七四）四月高知に創立された立志社の創立当初は、旧士族救済を目的とし、製茶・製紙などを担当する「授産課」と、製品の売買や為替などを担当する「運搬課」の二課を置いた企業組織であったが、その一方学校教育に力をそそぎ、立志学舎を設け、慶応義塾の卒業生を招いて英語の講義に重点をおいてきた。だが、明治八年（一八七五）の頃からようやく立志社の、反政府的姿勢が明らかとなり、さらに明治十年（一八七七）六月の立志社の建白を経て、〝立志社の獄〟（西南の戦争に関与した疑いで、片岡健吉ら立志社幹部が投獄された事件）に直面するに至って、反政府的・自由民権運動は熾烈なものとなって行ったなかで、立志学舎は明治十年の秋ごろから閉校状態になっていた。

したがって、立志社幹部は何とかしてこれを復活したいという希望をもっていたが、明治十四年（一八八一）春、

山田平左衛門（当時の立志社々長）・島地正存（立志社副社長）が上京して共立学校創立に着手するや、馬場辰猪も熱心にこれを支援し、四月三十日には自ら旧土佐藩主山内家に参り、資金助力を訴えた。その結果、一万五千円を寄附行為として出してもらい、十二か年と六か月、毎月百円ずつ出金されることにきまった。孤蝶が明治二十五年（一八九二）七月二十一日晩方、高知市の東部にある九反田（くたんだ）の谷重中（当時の高知共立学校校長）邸を訪い種々雑談した時、谷重中が孤蝶に対して、「共立学校は来る二十七年二月にて山内家よりの御出金が切れる故……」（「閑中日記」明治二十五年七月二十一日の項）と語っているのは、この間の事情を述べたものである。

高知の共立学校は、山内家以外からも有志の寄付を募り、片岡健吉を校長にして、明治十五年（一八八二）五月二十日開校した。孤蝶の「閑中日記」の明治二十五年五月二十日の項には、「金曜日　朝来晴　此日は学校は休み　如何となれば此れ設立記念日なるが故なり、…」とある。共立学校設立当時の規則をみると、「校長ハ委員之ヲ設立員ヨリ選挙シ其任期ハ満一年ヲ以テ一期トス」とあり、これに依り選挙した結果、谷重喜が当選したが、上京不在に付き次点者片岡健吉にまわったもので、孤蝶が赴任した頃は、谷重中が校長であった。

谷重中は明治二十一年（一八八八）二月二十四日より明治二十九年（一八九六）十二月七日死亡するまで再選八回、校長をつとめたのだが、そのあと、近藤正英・青山民明・田岡正躬とつづき、松村如蘭が校長をつとめた明治三十六年（一九〇三）三月三十日で、土佐女学校と合併し、その名は消えた。

孤蝶が高知の共立学校を辞任したのは、明治二十六年（一八九三）八月二十一日であった。「共立学校日誌」明治二十六年八月二十一日の項によれば「教師馬場勝弥去ル十三日付郵書ヲ以辞職　依テ本日限依頼ヲ解クベキ旨本日照会セリ　但同人ハ更ニ数年間東京ニテ修学ノ希望ニ依ル」とあるので、孤蝶はすでに八月十三日の頃には、高知を離

れているが、「本日限依頼ヲ解ク」と記しているので、孤蝶の高知共立学校在任期間は、明治二十四年（一八九一）十二月十四日より、明治二十六年（一八九三）八月二十一日に至る間とみておいてよかろうかと思う。

この孤蝶の、高知共立学校教師時代において、もっとも特筆すべきことは、何といっても、孤蝶とキリスト教との結びつきであろう。孤蝶は、明治二年（一八六九）十一月八日、高知城下中島町の西詰金子橋の旧士族の家に生まれ、明治十一年（一八七八）、父来八・母とら子につれられ、姪の安子（孤蝶の長兄、源八郎のこどもで、のち豊川良平夫人となった人で、「閑中日記」明治二十五年八月十三日の項に〝於安帰りし由なりければ、七時頃豊川に寄りお安に逢ひぬ〟とある）と同行で上京した。そして明治十八年（一八八五）の秋、東京神田の共立学校へ入学した。その頃この学校には、島崎藤村（春樹）、堺利彦などがいた筈だが、その時にはお互いに知らなかった。明治二十二年（一八八九）一月、白金の明治学院の二年級に入学した孤蝶は、一か月位たって、藤村を知るに至り、親しくつきあうようになったのだが、この頃孤蝶は全くキリスト教とは結びついていなかった。

藤村はのち、明治学院の青春時代をふりかえり、『櫻の實の熟する時』（大正八年春陽堂刊）という作品を書いているが、そのなかで「足立（孤蝶をさす）はまたさかんな気性の青年で、基督教主義の學校の中にありながら卒業するまで未信者で押し通したということにも、一つの見識を見せていた」と述べている。このほか、藤村は孤蝶のことを、「悲歌の士也」（「かたつむり」）とか、「男らしい額には軒昂とした意氣を示している。」「物言いなどのテキパキとした」「かりそめにも曲がつたことのきらいな」（「春」）男で、「社会のために尽くさうといふ熱い烈しい希望を抱いてゐる」（「並木」）と記したりして、的確に孤蝶の士族的性格描写を行っているのだが、この『櫻の實の熟する時』（八）における「基督教主義の學校の中にありながら卒業するまで未信者で押し通した」（圏点、岡林）という描写は、

とくに大方の目をひくものであり、このため孤蝶は、その生涯を通じて全くキリスト教とは無縁の文学者であり、「未信者」であったと、つい思われがちである。

藤村の『櫻の實の熟する時』における、この説明は決して虚構でも、あやまりでもなく、明治学院時代の孤蝶は、まさにその通りであったのだが、高知共立学校時代の孤蝶は変わったのである。この時期に、孤蝶は高知教会に入り、毎晩聖書を読み祈禱して寝につく生活をまじめに繰りかえすようになった。これは、明治学院時代と大いに変わったものだが、思えば、これこそ明治学院時代にうけた教育が、たんてきにあらわれたもので、同期の島崎藤村（春樹）・戸川秋骨（明三）にもまして、もっとも誠実に、明治学院の教育を社会的に実践したものともいえようかと思う。

たしかに、高知における孤蝶が、キリスト教と結びついたのは、明治学院教育のあらわれであったし、同窓の小倉鋭喜、同郷の柏井園の勧誘・刺激も考えられるし、高知の共立学校（同校は教員中に何名かのキリスト者が居り、高知教会の宣教師が共立学校の教師をつとめたこともある）ならびに高知の風土的影響もあげてよいかもしれない。

よしやなんかい苦熱の地でも粋な自由の風が吹く

よしやどほでもまことを写すかゞみ川かよ筆のやま（「よしやぶし」明治十年）

といったような南国的風土の上で、高知ではいちはやく、明治十八年（一八八五）五月に、高知教会が生まれた。これは、その一月に板垣退助・植木枝盛の配慮で来高した東京下谷教会の牧師植村正久（明治二十五年・二十六年にも来高、孤蝶も明治二十五年七月十二日、明治二十六年一月一日・一月八日高知教会で、植村のはなしをきいている。）の尽力によるもので、その教会創立日に、片岡健吉は受洗している。もともと、板垣退助をはじめ土佐の自由民権運動家たちは、キリスト教に関心を寄せていたのだが、自由党が明治十七年（一八八四）十月解党して以来、キリスト教

精神を自由民権運動の新しい精神的基盤として考えるようになってきた。明治十八年（一八八五）五月十五日、片岡健吉が受洗した時、坂本直寛、西森拙三などの自由民権運動家も高知市中島町において教師ナックス氏より受洗している。

明治二十年（一八八七）十一月、当時の政府の粧政を追及し、租税の軽減・言論集会の自由・外交の失策挽回の三項目をかかげ、三大事件建白のため自由民権運動家たちが一斉に立ちあがった時、片岡健吉・坂本直寛・西森拙三などは、その先頭に立って上京した。政府はこれに対抗し、同年十二月二十五日付けで保安条例を発布して危険人物と目した者を、皇居より三里以遠の地に退去せしむるに至った。片岡健吉・坂本直寛などは、その退去令を拒んだため、軽禁錮三年に処せられ入獄したが、獄中聖書を読み、看守を啓蒙したという。

孤蝶は、高知の共立学校時代に、この坂本直寛と交際し、いろいろ話をきいたりしている。「閑中日記」明治二十五年五月三日には、「坂本直寛氏を訪ひ小時談話し」とあるし、同年六月十二日の項には、「八時前窓に倚つて苓君（小倉鋭喜の姉）と語りつゝありしに坂本直寛氏来りぬ、例の袋野の方を眺むるに火見へしかば必定怪火ならんとて其を見ん為めに坂本君と共に河を渡り…九時過河を越へて小倉君の所迄来り、坂本君とも種々談話し」とある。同年五月二十二日の「閑中日記」の欄外に、「東都の勢日々に非なり　去る二十一日保安条例発布さる　百三十五名東京を逐はる」と書きこんでいるが、孤蝶の胸中には、明治二十年十二月、坂本直寛が入獄して聖書を読んだ、最初の保安条例の頃を思い起こしていたことであろう。

明治十九年（一八八六）のはじめには押川方義も来高し、植村正久の活発な伝道と共に高知の布教に尽力したため、高知では新しい信徒がぞくぞくと増え、力強い躍動を見せたのが高知の明治二十年代であった。明治二十六年（一八九三）二月、高知教会に四代目の牧師として招かれた多田素牧師も大きな力となった。

自由民権運動家とキリスト教との密接な関係のなかで、明治二十年代の高知県はキリスト教王国であったともいえようが、このような環境のなかで、孤蝶がキリスト教と結ばれていっただろうということも当然考えられることである。

孤蝶の随筆集『紫煙』（大正十四年六月十五日発行、大阪屋號書店）のなか「堀端の小樓にて」によれば、「私は島崎藤村、戸川秋骨の兩君と一緒に、明治二十四年に明治學院を卒業した。兩君が基督教信徒であつたが私はさうではなかつた。ところが、小倉鋭喜君の紹介で二十四年の暮から二十六年の夏まで、高知の共立學校といふのを教へに行つて居た。その中に二十六年の春か、夏の初めかと思ふのであるが高知協會（ママ）で洗禮を受けた。それから二十六年の八月に東京へ歸つて來て、二十七年になつてから戸川君の紹介で築地の福音教會のフィッシアといふ人の書記になつたが、その時に籍をその教會に入れて呉れといふことであつたので、福音教會に移つた。その中に、島崎、戸川その他の友人達が皆基督教の信仰を捨てゝ了つたので、私も何時の間にか教會とは縁が無くなつて了つた。さういふ譯で福音教會の記録には私の名も教會員として残つて居るのだらうかと思ふ。」とある。

孤蝶は高知教会で洗礼を受けたのを、明治二十六年の春か、夏の初めかと思うと記しているが、これはどうも「閑中日記」によれば、明治二十五年（一八九二）の春のことと思われる。孤蝶が後になって語っている追憶には、時に誤っていたり、曖昧だったりすることがある。共立学校教師時代の孤蝶をたずねて、島崎藤村が高知に来た時のことを、孤蝶はしばしば随筆（『闘牛』大正八年発行、天佑社・『孤蝶随筆』大正十三年発行、新作社・『明治文壇回顧』昭和十一年発行、協和書院・『明治文壇の人々』昭和十七年発行、三田文学出版部などに所載）で詳細に語っているにもかかわらず、「島崎君が、僕を高知まで尋ねて来て呉れたのは、二十六年の二月の初旬中のことかと思ふ。」（『闘

牛』のなか「明治學院時代の追憶」）とか、「二十六年の一月の末か二月の初めであつたか、その時日の記憶は今確かでないが、教場（高知の共立学校の教室、岡林注）に出てゐると小使が古藤庵無聲といふ名刺を持つて来て、かういふ人が會ひに來たと僕に言つた。」（『明治文壇の人々』のなか「『文學界』のこと」）などと記している。藤村の来高した時を、明治二十六年の〃二月の初旬中〃とか、〃一月の末か二月の初め〃と孤蝶が書いているのは誤りであり、古藤庵無聲こと島崎藤村は、瓢々と明治二十六年二月二十二日の午後、船で神戸を発ち、室戸岬（おはな）をまわり、その翌朝、つまり二月二十三日の午前中に高知に着き、早速孤蝶を高知市追手筋の共立学校にたずねたのである。藤村の来高は、決して一月の末とか、二月の初旬ではない。そのことは当時の藤村の書簡（明治二十六年三月一日付、星野天知宛「……其より先月二十二日高知の知友をおとづれ、海上の苦みを嘗めて、昨二十八日無事神戸へ着仕候。）とか、小品などによっても明らかである。

二月下旬の二十三日、高知に着いた藤村はかなり疲れていた。早速、孤蝶は東京からつれてきていた甥（草郷太一・「閑中日記」に「九月に入りて眼の血膜炎にて春日町の須田病院へ通ひ、十月に入りて漸く癒え、甥の草郷太一を托され、同人を伴ないて土佐へ行き、太一を共立学校へ入学せしむ。」とある。）にいいつけて、藤村を孤蝶の家に案内させて、休養してもらうことにした。孤蝶自身は、学校の講義をすませて家に帰り、そこではじめてゆっくり話をした。その家は鏡川の北岸の堤防の上（鷹匠町と唐人町との境、いま大野氏所有・滝氏在住、昭和六十二年六月二十一日この邸前に、孤蝶の二女大津留晴子氏の筆になる「孤蝶・藤村交歓の地」の碑が建った）にあり、「閑中日記」にも記されている如く、清流をへだてて南方に天満宮から筆山、そして袋野あたりを見渡すことのできる二階で、その一間は樓台の如く川岸へ突き出ていた。

夜になると話のとぎれ目などには、川の瀬の音がはっきりと聞きとれるような一間で、藤村はもの靜かな声で孤蝶に、この年一月創刊の「文学界」のことや、おすけさんへの恋情についても話した。「英雄の事業に何の永遠があらう。戀を索め天地の美を探る凡人の心の方が寔に永遠であり、意義がある」とも話した。（『孤蝶随筆』のうち「『文學界』のこと」）孤蝶は藤村の訪問を受けるまでは、胡蝶という号を用いていたのだが、この鏡川の北岸の宿で、胡の字を孤に改めた方が寂びがあって宜しかろうと藤村が話してくれたので、これより孤蝶と改めることになった。（孤蝶の随筆「高知の一夜」、「文章往來」藤村号・大正十五年四月一日発行春陽堂）

藤村は孤蝶に文学的刺激をのこして、二月二十七日、みぞれ降る日に高知から船で帰って行ったのだが、別れに際し、藤村のもとめに応じて、孤蝶は端座して音吐朗々と、彼の得意とする浄瑠璃太閤記十段目をかたった。年齢的には孤蝶は、藤村より三つ年上だったが、孤蝶はこの五日間で、つくづく藤村を、文学上でも女の道でも先輩だと思ったらしく、「僕はその時分にはまだそれ程までに人情といふものを解してゐなかつた」（「高知の一夜」仝前）などと述べているので、つい高知における孤蝶は女性とは無縁であり、ただまじめに、高知共立学校で生徒に英語を教え、講義が終われば帰宅し、下読して寝に就く道心堅固な男であったかと思い勝ちである。

だが、「閑中日記」をみると、かなり驚くべき記事が目に入ってくるのである。たしかに明日の講義にそなえて下読もしたあと、毎晩欠かさず〝聖書を読み祈禱〟して就眠をくりかえしているが、明治二十五年六月二十一日になると、〝読経、祈禱後就眠〟となり、これより〝聖書を読む〟が〝読経〟にかわってくる。といっても、何も六月二十一日から仏典を読みはじめたわけではなく、〝聖書を読む〟と従来書いてきたものを、簡単に〝読経〟の二字ですませようとしただけのことであろうが、それにしても〝読経〟と記載すると、聖書と仏典とが混融したかたちとなり、

色即是空、空即是色の感慨がいくらか増して来ることも否定できない。

六月十一日、十二日に下の新地（高知市街の東部、堀川に面し船付き場に近い花柳街）の娼婦に刺激をうけて帰宅していた孤蝶は、〝色即是空〟に徹するため、ついに六月二十九日下の新地に行き、金波楼の若浦という妓を買うに至る。「閑中日記」では、「徒歩して下の新地に行き勇を鼓して、金波楼に登り若浦と云ふ妓を相方にして一夜の春を買ひぬ」とある。これは孤蝶にとって、はじめての経験らしく、その日の記事はさらにつづいて、「想像したほど楽しくもなし、始めて娼家の二階を見たり、随分小せついた間が沢山あるものなり」と記したあと、「拾一時前帰るに臨みて宿帳を認めよと云ふにぞ我れは間島豊と認めて同所より徒歩して十二時前帰家、読経、祈禱後、就蓐したれども暑さ堪へがたくして眠る能わざりき」と結んでいる。

一夜の春を買って帰宅したあと、さりげなく読経、祈禱するあたり、なかなか物のあわれを知る者ともいえようかと思うが、流石にその夜は寝苦しかったとみえ、〝暑さ堪へがたくして眠る能わざりき〟と述懐しているのも一興である。その翌日の六月三十日にも、下の新地へ行き若浦にあおうとしたが、先客あり、小桜と云う妓を相方にして帰宅、〝読経祈禱後就眠〟している。

七月九日には、高知の土陽新聞に若浦と情夫との話ののっているのを読み、少し間が遠のいていたが、夏休み後、東京から高知へ帰ってくるや、十二月四日金波楼に立ち寄り若浦に逢い、十二月七日にも若浦をたずね、先客の帰るのを待ってその部屋に行き、十二月十六日にも若浦に逢い、帰家するや読経、祈禱をなし就眠している。十二月二十六日には若浦に先客あり、初桜という妓の部屋に行き、十二月三十一日の大晦日にも、若浦に逢いに行っている。年の暮れに遊廓に行き、馴染みと遊ぶなど、かなりの遊興人ともいえようが、この夜も〝読経祈禱後就眠〟している。

明治二十六年（一八九三）夏の離高以来、三十年ぶりに孤蝶は、大正十一年（一九二二）七月二十九日高知へ帰ってきたことがあったが、その時も樓・宴席であった妓の名前を細かく日記（『帰郷日記』大正十一年七月十一日～同年十一月十七日、昭和六十二年六月十五日発行・土佐出版社）に記している。おはつ、久江、桃若、桃八、梅奴など、次々とその名があがっているが、なかでも、おはつとは特に親しくつきあったようで、東京へ帰ってからも書信を出し、品物をお互いに送ったりしている。三十年前の若浦とどこかイメージの重なりあうものがあったかもしれない。

とにかく、明治二十五、六年の頃、孤蝶は金波樓の若浦にひかれていたのであり、年の明けた明治二十六年一月六日にも、五台山の文殊様を拝んだ後、金波樓に登り若浦に逢っている。同窓小倉鋭喜の姉、苓さんにも親愛の情を抱いていたようだが、若浦には「性」・「色」を通して結びつくものがあったであろう。

この明治二十六年の二月下旬に、藤村と鏡川の宿で、恋愛・人生を語りあったのだから、孤蝶もその時期には、かなり〝女の道〟も心得ていたはずである。高知共立学校教師時代の孤蝶は、キリスト教と結びつく一方、女性についてもかなり開眼していたはずであり、「僕はその時分にはまだそれ程までに人情といふものを解してゐなかつた」（「高知の一夜」）などというのは、社交的謙遜的辞令といわねばなるまい。

高知の共立学校教師時代の孤蝶が、明治学院時代といちじるしく変わったのは、毎晩、聖書を〝読経祈禱〟して就眠するようになったことと、遊廓通いを覚え、女を知ったことであろう。そして交友関係も明治学院時代の交友に新たに共立学校の校長・教員、片岡健吉・谷重中・青山民明・井上昆雄・細川瀏・田岡正樹・久米良弘・田所恒規・岡本勇吉郎・柏井園・岡本勇吉・横田稲恵・濱田正路・徳弘亀次郎・米人ムーア・米人ホープあるいは教会関係の米人クリナン・植村正久・巌本善治・坂本直寛・細川亨吉（こうき）などが加わってきたのだが、明治学院時代と全然変わらないの

は、義太夫への関心であった。

「僕は少年の時代から、義太夫を聴くのが好きであった。(『葉巻のけむり』大正三年十二月五日発行、廣文堂書店)と孤蝶はのべているのだが、たしかに後世の学生が映画館へ通ったように明治学院時代も寄席に行っていたが、高知でも新市町の旭座、桝形の桝形座、堀詰の堀詰座などに行き、浄瑠璃を聴いているが、明治二十五年(一八九二)十二月二十四日には、共立学校の同僚と五台山へ行き、下山した後、新京橋の手前で南行して料亭大貞に立ち寄り、酒の勢いで隅清を呼び「彦山」を語らせ、孤蝶も「太閤記十段目」を出したりした。これは二か月後に藤村にも語ってきかせた孤蝶お得意のものであった。この十二月二十四日の日記には「胸苦しければ家に入りて無理に吐しぬ、其後就蓐せしが度々目覚ぬ」とあり、毎夜恒例の「読経祈禱して就眠」の欠けているのが目を引く。あるいは、この日だけは、「太閤記十段目」(太十)を語ったことで〝聖書読経〟にかえたかもしれない。

「閑中日記」で、もう一つ目を引くことは、孤蝶がみよという女性と高知で親しくつきあっていることである。この女性は吉本身與といい、高知県香美郡赤岡浦中村七蔵の長女として天保九年(一八三八)一月九日に生まれた。のち孤蝶の父馬場来八の妾となり、孤蝶の兄妹菊衛(明治十五年四月没)・小鶴を生んだ。明治二十五年(一八九二)の頃、数え年五十四歳で高知市金子橋に住していた。高知における孤蝶を、みよは母親の如く、そして下女のようによく世話したのであり、孤蝶も当然のように、その好意を受けている。

明治二十五年(一八九二)六月十七日の日記をみると、「晩食後他出せんとしたるにみよ来りぬ　明日の墓参の事を話しぬ」とあるが、十八日には墓参に行かないで、その日は孤蝶の作品「荒野の鴟」を清書したり、新市町の旭座に行ったり、谷内氏を訪ねたりして帰寓し、六月十九日になって墓地に参っている。

六月十九日の日記には、「此日午前八時前起きる、十時頃みよを訪ひたるに留守なりければ此の午後来て呉れる様に言ひ置きて帰寓し翌日の下読に着手す　午後壱時過みよ来りければ直ちに出でゝ筆山の麓を回りて小石木の麓に出で人々を待ち合はせ丘に登る　行く事一町ばかりにして墓地に達す　久しき間人の行きたる事も無ければ雑木、雑草生ひ出でて道も塞り居りぬ　しだを分けて行くに雑木中に埋れて遠祖の墓あり、稍やく近代の墓のみ掃除する事になりて之れに着手す…皆々協力して草を刈り木を折りて、地を清め五時過稍やく終りて礼拝をすませ諸氏に別れ帰宅す」とある。

「御侍中先祖書系図牒」（高知県立図書館蔵）によれば、馬場家の先祖は、馬場平兵衛信義に始まっている。信義は武田家滅却の後、浪人して土佐へ来り、香我美郡香宗の国士六十人の一属として過ごしていたが、長曽我部盛親が関ヶ原の戦いで西軍に加担して滅亡するや、信義もまた牢々して香宗中の村の浪居でなくなった。その伴馬場源助信直も土佐郡で一生浪人にて相果てたが、信直の伴馬場次右衛門信重は、山内忠義公の御代に御用人に召し出され御作事を勤めた。信重の伴馬場源右衛門氏信は、馬場家の元祖といわれている人で、一梯と号し儒者で書に長じていた。この六代の裔が源八郎氏永であり、その弟が孤蝶である。孤蝶が日記のなかで、「雑木中に埋れて遠祖の墓あり」とのべているのは、この馬場源右衛門氏信（馬場一梯）とか、馬場源助（墓石、源介）信直・馬場次右衛門信重などの墓を指したものであり、「近代の墓」とは、祖父源馬氏高、曽祖父源助氏綱及び氏綱の弟民治などの墓を称したものであろうか。

実は馬場家は、元祖馬場源右衛門氏信を継ぎ二代が丈太郎氏幹、三代が養子源右衛門氏興（氏信の三男）、四代が源助氏綱、五代が源馬氏高とつづき、本来ならば六代目は、源馬氏高の嫡子来八氏明（源八郎・辰猪・孤蝶などの父）

が継ぐはずである。ところが、この来八は、趣味豊かな人であったが、どうも女の道などで素行がおさまらなかったかと思われる。「御侍中先祖書系図牒」によれば、文久四年（一八六四）二月十八日、〝平常の暮し方惰弱の赴き、相聞え、不埒の至り御不快に思し召され、之に依りきっと御城下禁足仰せ付けらるる也〟とある。来八は日常の暮し方が惰弱であるとのお咎めをうけたあげく、惣領職を召し放たれ、御城下禁足を仰せ付けられ、来八の長男源八郎氏永が馬場家の第六代を継いだのである。

源八郎氏永は、のち豊川良平（土佐の人、本姓は小野、豊臣秀吉の豊、徳川家康の川、張良の良、陳平の平を取って豊川良平と名乗ったと、大町桂月は「豊川良平先生」で説明している。豊川は明治義塾の塾長をつとめ、のち三菱の元老となった。）に嫁いだ安子の父であるが、上阪中に御陣家の制度をやぶり「乱防等の仕業」があったことにより、土佐の渡川（四万十川）限り東の禁足を仰せ付かり、その弟の馬場辰猪氏保が第七代を継ぐことになった。だが、この辰猪は、明治政府のお咎めを受けたりして、アメリカへ渡り、明治二十一年（一八八八）十一月一日フィラデルフィヤで病死した。

高知における孤蝶は、このお咎めの血脈をうける自己を意識すると共に、平常の暮方惰弱のため惣領職を召し放たれた父来八のことも、秘めたる胸の底に知っていたであろう。馬場家のお咎めの血脈が、暗い影を落とす土佐の風土で、父の若い妾（みよは来八より十八歳年下）だった人の世話になりながら、父の遊蕩の血の流れる自己を制する道として、この高知でキリスト教に入って行ったことも考えられることである。

孤蝶はこの日記に「閑中日記」と題している。たしかに、高知共立学校の教師を悠々とつとめ、講義が終わればすぐ帰宅し、友人知人先輩を訪い、浄瑠璃をしばしば聴きに行き、筆山・五台山・桂浜に遊び、さらには下の新地をさ

まよい、家では「都の花」「早稲田文学」等の文芸誌から「古今集」に至る文芸物を読むという具合で、時に同宿の川本氏の嫁が切られて血だらけになっているのに遭遇したり、高知特有の暴風雨の直撃をうけて鏡川が増水し、孤蝶寓が床浸しになるというよう異常事態が起こったりしても、高知における孤蝶の生活は、まずのんびりしたもので、「閑中日記」と呼ぶにふさわしいものといえるかもしれない。明治二十五年十二月二十四日の日記を除けば、毎晩欠かさず、〝読経祈禱して就眠〟をくりかえし、几帳面にそれを日記に書き続けているのも、一見平和そのもので、のんびりした感さえ与えるのである。

しかし、このように毎晩「読経」と書き続けている孤蝶の、その意識の底に、自己の内にひそむ深渕におののき、写経をつづける人の心にも似たものがあったかもしれない。読経は、惰弱の父が遊んだ土地で、遊蕩の道に赴むこうとする自己を引き止むる手段であったともいえそうである。

「閑中日記」は一見閑中ののどかな日記のようだが、毎晩聖書を読み、読経・読経と日記に書きつづける孤蝶の背後には、土佐の風土の上に影を落とす馬場家の重圧と、ひそかにきびしく闘う姿もうかがわれるのである。

したがって「閑中日記」は、明治二十五年（一八九二）から明治二十六年（一八九三）へかけての時期に、高知の風土を基盤として、孤蝶がいかにしてキリスト教へ入って行ったかを探る好箇の資料であると思うし、いままで欠けていた「孤蝶とキリスト教」というテーマでの孤蝶研究にとっても、まことに有難い資料であるといえよう。

（徳島文理大学文学部教授・高知大学名誉教授）

附記　この稿を書くにあたって資料借覧その他種々御便宜をはからっていただいた勝呂武男・秋山繁雄両氏ならびに土佐女子高

孤蝶「閑中日記」の解題

校井上源兵衛氏にあつくお礼申しあげます。

閑中日記

馬場勝弥（孤蝶）

明治二十五年五月一日～明治二十六年一月八日

五月壱日　日曜日　朝来曇

此日朝八時前寝起、小説など読みぬ　午後も空々の内に費し夜に入り教課書の下読を終り谷内を訪ふて前夜の礼を述べたるに本夜の札もありとて出し給はりければ、そを貰ひ受けて新市町の旭座に行くに満場の聴客なり　相変らず後の方のませ木に腰を掛けて聞く　始めは『日蓮記勘作内』を語り進みて居りき、次は『日吉丸稚桜』之れは先づ可成、次は『梅野吉兵衛』之れも余り感服はせず、次は『玉三』之の人は先づ善き方なりしも中で跡戻りをなしたるは残念　次は『大江山』之れは余り分らざりき　次は『腰越状』之れは可なり面白かりき、次は『布引滝、綿くり馬之段』之れもおも白からず　次は『和田合戦市若初陣』中々面白かりき　此の人は万端越路張りにてありしが惜い哉調子が余り一かぢ故長い間には客の倦怠を来しぬ、之れにて最早拾二時前なりければ帰途に就き丸政の筋向ひの蕎麦屋にて蕎麦及びうどんを食しぬ、此ぞ土佐にてのうどん并に蕎麦の食ひ始めなりける　帰家後聖書を読みて祈禱し、古今集を読みて就眠

五月貳日　月曜日　晴

此日は学校に出でゝ課業事なく終りぬ、家に帰りて後少時にして久米氏来りぬ、横矢、有沢、吉本、久万の四氏も来りて文学会の規則の草案を作りぬ、晩方に至り諸氏去り余は翌日の課書を調べ終りて浄瑠璃を語る、此夜は川本氏に御嫁さんが来りぬ、招かれて儀席に参す　花嫁さんが御酒の通をつとめ御婿さんが肴を取りて呉れると云ふ有様、以て全体の形勢を察す可きなり、隣り座敷は遠慮して二畳に入り聖書を読み、祈禱後古今集を少々読みて寝る

五月参日　火曜日　朝来半晴

此日は学校に出づる事常の如く、拾二時過帰寓す、此日は明日文学会ぎの草稿を総会に提出せん為の準備をなしぬ、帰家後下読をなしぬ、午後四時過南洋会に行きヘスチングス伝を講ず、帰らずに篠原氏を訪ひ少時談話す、晩方運動せん事を約して帰る、師範学校の生徒一人来りければ、明日より『スウイントン』

第四を読みてやる可き由を約しつ、晩食後篠原氏来りければ即ち相伴ふて東行し坂本直寛氏を訪ひ少時談話し、帰途本町の蕎麦屋にてうどんを食し篠氏と別れ帰宅せしは十時頃なりける聖書を読み祈禱後古今集を少々読みて就眠

＊此日井上来られたれば少時談話す　氏は中学校を罷められたる由なり

五月四日　水曜日　朝来半晴

此日学校に出づる常の如し、午後、規則を議する会を開き余は仮議長席に就き、草案を逐条審議に付し、四時前に至り稍く終り其れより役員の撰挙に取掛りぬ　其結果は会長は余、副会長は竹村、会計は吉本、藤田、横矢、同点、編緝掛り藤田、横矢、吉本等なりき、帰寓後、大伴及び師範学校生来り『須氏読本』を一章読みてやる、夜に入り下読をなしぬ　此日は東京より都の花并に新聞を受取りぬ、就眠前聖書を読み祈禱後古今集を少々読みぬ

五月五日　木曜日　朝来曇且雨

此日は学校に出づる事常の如し、午後帰寓しぬ、都の花など読み、晩方大伴、深尾、師範生の三人来りければ此れに、書を講じてやりぬ、夜に入りて下読をなしぬ、小倉君と和学の事に付き打合せをなせり、就眠前聖書を読み、祈禱して後古今集少々見て眠りぬ

＊久米氏来りて本を貸す

五月六日　金曜日　朝来曇、午後は晴

此日学校は事なくすみ岡本氏方に諸氏集りて打合せ会を開くとの事なりければ行きて待ち居りたるに池氏は来らず　午後四時過谷氏方に行き、時間割の工合に付き少々協議を遂げ、余は一週五時間増しぬ、月、土、両日を除くの外は毎日六時間の学校時間になりぬ、六時前帰途に就き種崎町の谷内氏を訪ひ少時談話す、其れより堺町の山中に行き、文学全書第一編と天狗百集二冊を求め家に帰りぬ、晩食後下読をなして後小倉氏を訪ひ帯の代を頼む、少時雑談の後帰り下読をつゞけ、就眠前聖書を読み、祈禱して後古今集を見る事例の如し

五月七日　土曜日　朝来晴午後曇

此日学校の定時間過ぎて生徒を集め谷、青山両氏より一同へ懇々と話ありぬ、余も一場の演説をなしぬ、役員壱同を集め次会（即ち来る金曜日）の弁士を撰び置きて帰寓す、午後壱時過家を出で平尾の従姉を訪ふ　いとも哀れなる長屋に住で居らるゝ様子なりき　少時談話の後小高坂に行き井上氏を訪ふに在宅にて種々談話す、近着の『ミュージヤム』を見るに、余の『自殺論』出で居りぬ、氏と共に柏井氏を訪ふに楠山氏外一名の人ありぬ　少時談話の後諸氏と出てゝ筆山に登り墓原をたどりて水路標の有る所迄行きて四方を眺む　四山青葉に包まれて、いとゞ涼しき心地しぬ　少時立ち尽して後下山し、諸氏余の家に立寄りて少々話をなしぬ、横矢来りて諸氏去りぬ　横矢に都の花八十一号を貸す、同人も去りて後新聞など読みて後、夜に入り種崎町迄散歩し蜜柑を買ひ、之を食す　帰寓後、平尾より送ら

れたる菓子を食しながら、姉、本屋、稲桝、妹などへ宛たる手紙を認む　就眠前『玉藻前』を読み終り、聖書を読み祈禱して後古今集読みて寝る

＊校友会

五月八日　日曜日　朝来晴時々雲出づ

此日朝六時過寝起、朝食中平尾氏来られぬ、七時頃共に家を出で下の新地を過ぎ青柳橋を渡り下田の堤を通りて午前九時過池村の西尾へ行付きぬ　覚八氏も居りて種々談話しぬ　飯を饗られ、十市の浜に行きて魚を取る所を見る　一つの網を挙るに凡て三時間位はかゝりそふなりき　心持ち非常に悪しければ急いで帰りぬ　少々下痢の気味にて腹痛しければ、種々馳走ぶられけれど辞して二時過同所を出でふけより舟に乗りぬ、船頭は堤に登りて舟を引く、中々早かりし、午後四時頃新地に着しぬ、それより徒歩帰寓しぬ、其後晩食後下読をなしぬ　柏井氏来りければ氏と共に下へ向け散歩し、一致教会の講義所に立寄り少々聞きぬ、帰寓後聖書を読み祈禱して後古今集を読み掛けたるに非常に寝りを催しければ就眠しぬ

五月九日　月曜日　朝来晴午後より曇

此日は学校を休み、床を出でず、かゆを食ふ、『艶容女舞衣』を読みぬ、午後二時過起きて医師の許に行き診察を請ひ薬を貰いて後篠原氏を訪ひ少時談話す、素麺の馳走になり、午後六時過出てゝ村岡に行き種々本を見る　森本源、黒瀬の両人に逢ひぬ、『文学一班』を取りて帰途に就き、森にて麺麭を買ひ篠氏に別れ帰りを急ぎたるに散田の角にて井上氏に逢ひぬ　立ながら少時談話し寓に帰り着きしは八時頃なりき　小倉君帰られてありぬ　其後苓君来り給ひて余が為めに麺麭に水飴をつけて給はりぬ、少時談話の後君去りぬ　『文学一班』の戯曲の部を少々読みぬ、就眠前聖書を読み、祈禱して後古今集を読みぬ

五月拾日　火曜日　朝来曇且雨

此日朝は学校に出でず、八時過かゆを食し其後去る一日以来の日記を怠り居りければ是れを付けて午前を費しぬ　午後は下読をなし夜に入りては前日来読残しの『文学一班』など読みぬ　聖書を読み古今集をも見、祈禱して寝る

五月拾一日　水曜日　朝来曇午後晴

此日午前八時前出席す……学校へ……授業終りて十二時過帰寓せずして直ちに堀詰座へ稲垣万次郎の演説を聞きに行きぬ、氏は長軀の人にして弁舌余り爽かならざれど、さりとて吶々聞くに堪へざるが如きにあらず、中々能く解りたり　三時過閉場同所を出で直ちに帰宅す、晩食後出てゝみよを訪ふに寄席がまだやり居るか否を聞きに行き呉れたるが此の日は妹背山の通しなりとの事なりければ明日行く方が善かる可しと思ひてやめぬ、旧邸なれば、桑畠の間を見廻るに、さすが昔しの面影を止むる所もありけり、中にも見覚へある小さき宮に『造立権現』と親父の筆にて書しあるなど特に異様の感を引きぬ、帰途篠原氏に立寄り種々談話中吉岡氏来り給ふて少時談論す、氏去り、九時過余も辞して出で、本町の森にて麺麭を買ひ帰りて後之れを食

し下読を少々なし聖書及び古今集を少々読み祈禱して寝る

五月拾二日　木曜日　朝来晴天

此日は午前九時前学校に行き壱時過授業を終りければ直ちに帰寓す、下読など少々なし午後三時過寓を出で桝形座に行き木戸銭三銭を払ひて中に入りぬ　舞台には芝居の屋台掛りにて後には金地に紅葉を画きたる唐紙を立てありたり　最初は『局注進の切』梅吉、綱登志、余り終りなりければ技倆を覗ふに由なかりき　次は『妙心寺の段』光秀、小三根、母、弥津子、十次郎、小政、四方天、呂玉、みさほ、喜朝、初菊札之助、士卒鶴児、三味線春吉と云ふ役割　皆々可成りに出来たりと思ひし　次は『鶯の森之段』綱吉、隅清先づ可成り、様子頗ぶる稲桝に類せり　次は『同上』中、清司梅花先づ渋い方なりしが、中々聞ける方なりし　次は同切、重成隅清、慶覚綱登代、清秀小浜、雪谷福子、重若綱吉と云ふ割方なりしが別に目立つ程の人を見掛けざりき　次は『瓜献上の段』綱勝、勢見子、先づ大抵の出来、次は『尼ヶ崎之段』梅勢、梅香左程感服せず　次は同上、綱登志、綱時先づ能き方ならんか　然れど今少し力が欲しかりし同切春吉綱吉之れは先づ当日第一の出来ならんか、然し今少し重からば能からんと思ひぬ　何とやらん少しあわて過ぎて居る様なりき　之れに付けても思はるゝは稲桝なり、彼れ程の者は中々、土佐には出来難からん　次は『帯屋』与右衛門勢見子、半齊梅花、於絹山登勢、儀平弥津子、長吉梅勝、ばゞ鐘駒、お半小幾、三味線梅司、種々の趣向ありて顔を塗るやら大騒ぎにてありき、隨分卑褻な所もありき、中にも山とやのお絹は感服致したり、余り晩くならぬ様と思ひて急いで帰りぬ、家にて飯を食し居りたるに小倉君より書状来りければ其事に付き隣りに行きて一時頃迄種々談話し帰りがけ家の前にて祈禱し入りて聖書を読みて寝ねぬ

五月拾三日　金曜日　朝来晴夜曇

此日午前九時頃学校に出づ、田所氏病気引の為共立学会開会の工合あり二級の三時間になす可き物を二時間にて終りぬ

拾二時三十分頃より共立学会の発会を開きぬ、弁士は森本、吉本、吉良、横矢、藤田、岡本、国沢、ムーア、并に余等なりき特に国沢氏の英語演説を竹村氏が通弁したるに度々間違へて大笑なりき、余はム氏の演説の大要を摘みしが終りの部分は一寸忘れければ大概にて止めぬ、午後三時過竹村氏と共に帰途に就き本夜桝形座に行く由を約し一寸竹村氏方に立寄り、少時談話して後帰寓し午後四時過再び竹村氏を訪ふ、相伴ふて桝形に行きたるに先日田所氏方にて見受けたる探偵の男来りて木戸銭なしにて、入場するを得たり、未だ客は左程来り居らざりけり

此の日は後の襖は松に鶯を画きたる者なりき　最初は『妹背山、道行之段』、橘姫梅香、求馬弥津子、三輪勢見子、三味線春吉、ツレ綱吉、梅花、小政、桐之助、之れは終りの方を少し聞きしのみ　次は『鱶七使者之段』呂玉、梅司、左程感嘆もせず　次は『同切』小三根、鐘駒、先づ通常の出来、次は『姫戻りの段』清舞綱登代之れも先づ平凡　次は『竹雀之段』綱登志、隅清、

之れは先づ可成、次は『同切』梅吉春吉、之れ当日第一の出来なりき、余程大きく出来たりと感服せり　次は『花渡の段』大判寺秀吉、定香、喜朝、玄蕃春繁、注進梅勝、弥藤次綱子、三味線梅花、余り面白からざりき　特に入鹿が内にて語りて少しも聞ざりしが如きは一層倦怠を来たせり　次は『山の段』舞台真中に川を作り右傍には茶座敷を一段高く作り之れを背山とし爰には大判寺梅司、久我之助隅清、三味線綱清列び居り左りは後を月に梅を画ひたる襖にて立切りたる家台、之れを妹山に象どり内に春吉の定香山登勢の雛鳥、鶴児の小菊、福子の桔梗、三味線綱登志居列んだり之れは中々面白かりき、殊に春吉、山登勢の二人意気能く相投じて一層目立ちて見へたり　背山の方は妹山に全くおされたる如き観ありき　余りに眠かりければ、之れが終ると帰途に就き拾時過帰寓、聖書を読み祈禱して寝ねぬ

＊姉よりの手紙を請取りぬ

五月拾四日　土曜日　朝来薄曇

此日朝六時三十分頃寝起大急ぎにて朝食し学校に出で三時間の教授をなし帰宅す　新聞など読みて午前を費し二時頃出てゝ柏井氏を訪はんとして路にて篠原氏に逢ふ　氏は高岡行の途に上りたる所なりき、別れて柏井氏を訪ひ午後六時頃迄談話し其れより帰途梅を買ふて、寓に着くと直ぐ楠山氏来りければ氏と談話中、小倉氏も来られぬ、両氏去りて余は早稲田文学を読みぬ、夜に入り楠山氏と共に下へ散歩しぬ　帰りて後は書をも読まず歌など唄ひ、寝る前古今集と聖書を読みて祈禱しぬ

五月拾五日　日曜日　朝来曇且雨

此日朝九時過寝起　新聞并にしがらみ草紙など読み午後二時過みよを訪ひたるに、同人の弟夫妻来りて逢ひぬ　青梅の馳走になりぬ　同所を出でゝ本町を東行し堀詰より曲りて中島町を通り、帰寓す　道にて南洋学塾の人に逢ひぬ、午後五時頃平尾のおさゑさん来り給ひて余に饌餅を送り給ひぬ　十市への手紙を認めぬ　夜に入りても下読を続く　聖書并に古今集を少々読み祈禱して寝ねぬ

五月十六日　月曜日　朝来晴天

此日朝七時過寝起、八時頃学校に出でぬ　城南評論第一号并に新聞が一枚東京より着きてありぬ　之を少々読みぬ　拾二時過帰寓下読をなす、下倉氏にては合奏が始まりぬ、四時過篠原氏来り、横矢氏も来りぬ　談話中師範校生佐々木金久、町田延吉の二人来りければ前の二氏は去りぬ、後の人々に須氏第四読本を講じてやる、去りて後課書の下読を続け九時前稍く終りぬ、文法書には大分解らぬ所多かりき　其後『城南評論』を所々読みぬ、就眠前古今集及聖書を読みて後祈禱す

五月拾七日　火曜日　朝来晴

此日学校に出つる事例の如し、帰寓後下読をなして後家を出でみよを訪ふて本日若狭より届きたる手紙を示す、帰寓後下読を続けぬ、就眠前聖書と古今集を読み祈禱しぬ

＊井上氏并に小倉君は夜に入り来りぬ

五月拾八日　水曜日　朝来晴

此日学校に行事常の如し、課業終りて後、竹村敬凡と共に吉野へ躑躅花を見に行きたるに掛茶屋もなく人も一人も居らざれば之れは晩にけりと思ひて中に入りたるに花がちら〳〵咲き居りぬ、散り残りたるやとよく〳〵見るに、莟のかたきものを多く見ぬ、園守の媼に問ふに未だ咲かぬのなりと云ふにてぞ小時園内をさまよひ共に能砂山に行きて陶器の工場を外から見などして鏡川の辺に出で新地の向を衣をかゝげて徒渡りす、深さは膝位と思ひて入たるに股の辺まで水にぬれぬ、其れより本町に出で桝形にて竹村に別れ小高坂に行き井上氏を訪ふに不在なりければ柏井氏を訪ふて少時談話し帰途浮世饅頭を二銭だけ買ひ求めて築屋敷より柳原を通りて帰る　家にては久米、町田、佐々木の相手をなす　夜に入り下読をなし就眠前聖書を読み古今集を閲し祈禱をなしぬ

＊みよ来りければ若狭への手紙を書きて郵函に投ぜしむ

五月拾九日　木曜日　朝来晴

此日学校に行きたるに東京より都の花が二冊届きけるが、不足郵税を十二銭取られぬ、正午帰寓、都の花八十号并に八十二号を読み晩方終りぬ　小倉君に之れをかす、佐々木、町田の二氏并に久米氏来りければ之れに書を講じてやる　吉良氏来りて三ケ月を借す、晩方家を出たるに楠山氏に逢ひて共に下へ散歩をなす、帰りて間もなく横矢氏来りて種々談話す、氏に此主、桂姫の二書をかす　氏去りて後心理学並に古今集を読み床にて『志いざあ』を少々読み、聖書を見て後祈禱して寝ぬ

五月廿日　金曜日　朝来晴

此日は学校は休み　如何となれば此れ設立紀念日なるが故なり、朝七時過寝起朝食後直ちに心理学を読み始め十一時頃全く読み終り、引続いて古今集を見て正午頃其の終に達す、昼食後小倉氏、豊川、老親へ宛たる手紙を認め二時過出て種崎町の銀行に行き為換を取組み、其後東行して農人町の郵便受取所に郵便を托し、又東して新地に出で菊本に行きて、金を壱円八十銭払ひ其れより一文字に帰寓す　途にて唐蜜柑を求め来り之を食しぬ　稲桝よりの手紙に接す　政は未だ縁附かざる由なり、夜に入りては翌日の下読をなし、篠原氏を訪ひ九時過迄談話しぬ　拾時過帰寓、聖書を読み祈禱して寝る

五月廿一日　土曜日　朝来晴

此日午前七時学校に出で課業事なくすみければ帰宅し新聞など読みて午前を費し、午後は『ジュリヤスシーザー』を読みて晩方に至り晩食後河田氏を訪ふに不在なりければ去つて井上氏を訪ひ種々談話し九時過帰寓　聖書を少々読み祈禱して寝る

五月廿二日　日曜日　朝来晴

此日午前八時過より『シーザー』を読み始め拾時過にて全く終り其れより『風俗文選』を読み始め十二時前に之をも読み終りぬ、十二時頃岡本氏来りぬ、同氏より貸金を受取る、氏と共に家を出で築屋敷を通り通町、水道を経て本町に出たるに久米氏に逢ひたるに氏は中新町へ行くとの事に付き、即ち同行して桝形迄来り同所より引別れてみよを訪ひ金四拾銭を同人に渡し去

つて小高坂の田岡氏を訪ふて四時頃迄談話し其れより帰寓し晩食後種崎町に行き谷内に本を貸す、家の前を通りて河田に行きたるに又居らず、本町を通りて帰寓し、下読中苓君来り給ひぬ、下読を終りて後『貫之家集』の一、二を読みて後聖書を読み祈禱して就眠せり

＊東都の勢日々に非なり　去る廿一日保安条例発布さる　百三十五名東京を逐はる

五月廿三日　月曜日　朝来薄曇

此日は学校に行く例の如し　東京より『早文』十五、及び『城論』の第二、着してありぬ、課業終りて後十二時過帰寓、昼食後、前の二書を少々読み、家を出てゝ小木曽を訪て、東京行の暇乞を申しぬ　帰途本町の森にて菓子を買ひ来り之を食す

午前四時頃篠原氏訪来りぬ　暫時談話の後氏去りぬ　晩食後佐々木来り『須氏第四』を読みて遣る　晩方築屋敷に行き川田を訪ひ八時過迄談話し通町を通りて帰る　寓にては翌日の物理を考へる　苓君来り給ひて新聞を貸し申しぬ　『貫之集』を少し読み聖書をも少し見祈禱して寝ぬ

五月廿四日　火曜日　朝来曇且雨

此日朝七時学校に行き課業も事なく終り壱時過帰りて下読等をなし、二時出ゝて南洋学塾に行くに人が集らざりければ三時前帰る　道にて饌餅を買ひ寓にて下読の片手間之を食ひぬ、夜に入り下読をなし終りて後急に思ひ立ちて腰折数首を作る　題は何も螢火

我恋は音無の瀧に飛ぶ螢
　音にも立てゞもゆるばかりぞ
夏の来て水草にむるゝ螢火も
　うとき学の窓に甲斐なき
なれや知る思ひ河辺による螢
　音にも立てゞ燃ゆる思を

浦辺の螢

涼風に　袂吹せて　夕闇に　立出見れば
波よする　磯屋を照す　螢火は　特につたなき
蜑人小舟　渡り苦き　恋路をぞ　喞つ心の思火か
昔の人の　恋しさに　塩焼衣　塩ならば
露置き添る　袖の上に　仇なる筐　かざしつゝ
松に思ひを　止めたる　はかなき人の　亡き魂か
沖にかすけき　漁火の　影もさびしき　須摩の浦波

五月二拾五日　水曜日　朝来雨午後晴

朝八時過学校に出づ　課業事なく終り午後帰寓　翌日の下読を終りて後五時過佐々木、町田の両人来りければ之れに『須氏第四』を読みて遣はす、郵船会社より荷物の送り状着しぬ、六時過篠原氏方より迎が来りければ即ち急いで同氏を訪ふに鮨の御馳走になりぬ　種々談話して九時過帰寓したるに居間に燈光もなし　はて不思議と台所に燈を求めに行きたるに台所の椽に伏す婦人あり　思はずぎよつとして熟視するに此家の主婦なり

ければ如何せしぞと問へば聊か怪我せしと答ふ、即ち声を挙げて同居の老婦を呼ぶに主婦云ふ、『おばさんは医者を求めに行き呉れたり』と、奚に至りて余は始めて其傷の少々ならざるを暁りて問ふに負傷の由を以てす　遂に此の片町にて何者とも知れざる者に背後より追撃されたる由を知るを得たり、能く見れば頬を押へ居る手巾が紅化せるを見る　即ち大きに驚き水を汲み来りて瘡部を洗はす　猶燈下にて見れば頭部に一帯の疵ありて血流れ出づ、丸髷のふちが二筋三筋切れてありぬ　取り敢ず上にあがらせて介抱せんとするに、余りの事に顛倒しけん、主婦は泣倒れて、余の百方慰諭せんとするに応ぜず、ほと〳〵持て余ましたる所に拾時少々前頃川本氏帰りぬ　之れにて病人も稍やく力を得けん暫時泣声を止めぬ、兎角する内医者来りけるが警官と立合の上にて療治せんとの事なりければ余は本町の警察署に行きて臨検の為警官の出張を請ふ　巡査壱人余と同行し呉れぬ　警官種々尋問すれども瘡者、大きに弱り居るが故に要領を得ず、即ち現場と思ふ所を見んとて川本氏と共に出行きぬ、跡にて医者は治療に着手す、余は終始燈を挙げて医者の施術を便ならしめぬ、疵所は左迄深かからねども、長さは何れも四寸より五寸位、頭、頬、背肩の三ヶ所なりき　一時過全く終りて就眠せり　聖書を読み、祈禱をも怠らず　転々反側、中々寝られざりき

五月二十六日　木曜日　朝来晴天、甚暑し

此日は午前九時頃出校し課業事なく終りて帰家し、小倉君と前夜の出来事に付いて談話す、課業の下読を大抵に仕舞つて種崎町を経て農人町に行き郵船会社にて荷物を受け取り、其れより車にて帰寓しぬ、来客あり頻りに前夜来の出来事を語りつゝありぬ　川本氏余の荷物を解きて呉れたり　午後五時前、単衣一枚を着し、出でゝみよを訪ふて飯を食ひぬ、横田のまつさんが病気なりとの事に付き、同家に行き官六氏に見舞を云ひぬ、病甚篤しと氏云ひぬ　帰途篠原氏を訪ふに在宅なりければ種々談話し前夜の出来事など語り出でぬ　午後七時前帰寓、八時過苓君来りて種々談話の中、片岡の御嫁さんが前夜九時過大橋の越戸を過ぎたるに後より大慌てに慌てゝ走り来る者あり　余りに怪しとて能く見たるに二十二三とも思はるゝ男子なりしが橋のきわより東へ折れ下へ飛び行きぬとの事なれば若しや兇行者其れにては無きやと云はれたれば即ち苓君と共に川本氏に逢ひて此の事を語りぬ　思ふに川本氏も此の事に付きては隨分の疑を抱き居らるゝは言語の間に歴然なりき、苓君去り給ひて余は『貫之家集』を読み、聖書を見、祈禱して寝る

五月二十七日　金曜日　朝来雨午後晴

此日出校する事例の如し　田所氏今の川本の妻は先に大困却にて淫売をなして我々とは義絶したる位の人なれば、或は他に約束の人でも有りし事の爰に及びしには非ずやなど云ひぬ、課業終りて文学会に出席し当日の弁士の批評をなしぬ　帰寓後小倉君を訪ひ晩方まで種々談話す　楠山氏と共に天神社内に行きたるに木下園に梅を盗む小児を見て熊なるやと楠氏に問ふて大き

に笑はれぬ、家に帰るに井上氏も来り共に家にて談話す、午後八時過出でゝ高知教会に行きぬ　此れ小倉君等の帰途を護衛の為めなり　九時過祈禱会も終りて諸姉を安全に送り付けぬ、帰家後下読をなし『貫之家集』並に聖書を読み祈禱して寝る

五月二十八日　土曜日　朝来晴天

此日は課業終りて後平常点の件に付き教員会を開き種々談議したれど、纏らずして散会しぬ　午後二時前井上氏を訪ひ種々談話す、日本英学新誌を見せて貰ひて五時前帰寓しぬ、晩食後久米氏来りければ同道して柳原に行き中学校の生徒の運動を見る、其後田所を訪ふに不在なりければ川端を伝ふて九反田に行き岡本を訪ひ、五連、をなして拾時前迄遊び同家を出でゝ拾一時前帰寓し『貫之家集』と、聖書を少し読み祈禱して寝る

五月廿九日　日曜日　朝来晴

此日朝八時頃寝起、午前は何んでもなく費し午後は柏井氏を訪ひ少時談話し、井上、楠山両氏と共に浜田氏を訪ひ種々談話しぬ、女学に関する議論もありて大分八釜しかりき、六時頃帰寓、下読をなしぬ　貫之家集、聖書を読み、祈禱すること常の如し

五月三十日　月曜日　朝来晴

此日は午前九時前学校に出づ　浦戸へ明日行き運動会を開く可きの議纏まり十二時過帰寓、食後、新聞雑誌など見たる後本町に行き南洋学塾に断りを述べ去りて篠原氏を訪ひ、螢籠の修繕を手伝ひ居りたるに、宮内、久武の両氏来りければ、余は辞して出で直ちに帰寓す　晩方迄をぐず〳〵に送りぬ　六時前師範生来りければ之れに書を読みてやる　両人より謝金五十銭を送り呉れぬ　七時前篠氏来りければ、同道して種崎町に行く　又上へ戻り本町にて篠氏に別れ、独り村岡に行き文学一班の代を払ふ　森にて麺麭壱斤を六銭にて求む、澡州潟への言伝を頼まれぬ、家に帰り小倉君を訪ひ種々放談、例の空漠談をなして苓君を驚かし拾時過同家を辞し聖書を読み祈禱して寝る

五月三十一日　火曜日　朝来晴

朝六時過竹村敬凡来りぬ　為換(ママ)の間違ありて是を取り代にやるまで二円五十銭だけ貸し呉れよと云ふにぞ貸しぬ、七時過学校に出づ　八時過なりけん、出でゝ菜園場に行きたるに諸氏待つゝありぬ　船に乗りて待つ事少時諸氏来り人勢も揃ひて九時過漕ぎ出でぬ　舟中新聞紙并に文学一班を読みぬ　拾時過浦戸に着す、共に桂浜に行きたるに余り狭ければとて岩の間を通りて長浜に行く、余は同所より山越しにて百舌潟に行くに浦戸の方より登る丘の中程にて汽笛を聞き、其後丘顛に達して顧みれば早遠く沖中に一汽船あり、我れもさ来月は斯の如く航海するを得なんと、喜ばしき想像を画きて其方を凝視す、澡州潟にて茶を貰ひ麺麭を食しぬ　壱時過、前の山を越へ、長浜に来りたるに漁夫は出でゝ網を引き、娘等は松林の内に枯枝を拾ふ、運動場に来れば諸氏裸体にて奮闘しつゝありし、忽ち岡田涼児が登りて赤の勝となりぬ　其の後も、一番ありて竹村敬凡登りて白の勝となりぬ、跡はどんまの勝負あり競走等もありて、勝者には毛布一枚宛を与へぬ、海水に浴する事二回、地引の網の上る

を見ぬ、魚は余り居らざりき、五時前同所を出で六時過菜園場に帰り着き、七時前帰寓、晩食後、前の芝原を散歩しぬ　夜に入りては別になす事なく、聖書を読み祈禱後寝ねぬ

＊細木にて豊川の子の写真を見ぬ

六月一日　水曜日　朝来雨甚し

此日午前九時前寝起、拾時過郵便局に行き、若狭よりの金壱円五拾銭だけ受取り、みよを訪ひ金を渡す　同人大に喜びぬ　横田の舛さんが昨日永眠に就きしと云ふ事を聞きければいとゞ気の毒に感じ、帰寓昼食後壱時過、再び出でゝ横田を訪ひ吊辞を述べ見舞金五拾銭を贈りぬ　みよを訪ひ内紫及び枇杷を買ひ来らせて之れを食しぬ　二時過帰家後別になす事もなく晩方迄、なまけ、夜に入り稍く、下読をなしぬ　師範校生来り、小倉君も玉子を持来り給りぬ　就眠せしは拾一時前なりき　聖書披読、祈禱例の如し

六月二日　木曜日　朝来曇且雨

此日学校に出づる事例の如し、課業終りて帰宅後下読に着手す午後五時過師範校生二人来りぬ、例の如く『須氏第四読本』を講じてやりぬ　夜に入り柏井氏来りて種々談話す　話中浜田氏に関する事あり、篠原氏の不評判実に甚し　柏井氏去りて後、貫之歌集及び聖書を読み寝ねぬ

六月三日　金曜日　朝来晴

此日学校に出づる例の如し、放課後共立学会第一回の討論会を開き題二つにて大に論争せり　竹村、藤田、久万、吉本等の人々重に弁論せり　右終りて帰寓し、下読少々なしぬ　夜に入り苓君来り給ひて種々談話をなしぬ　井上氏も来りて、彼の浜田氏一条の噺ありぬ　其れに付き井上、坂本等の人々列席の上にて篠原、山中、の両氏を呼びて所置を付ける筈なりとか　九時前井上氏と共に高知教会に行き祈禱会に列し、終りて後む氏に逢ひ質問を少しなしぬ、帰りて後は直ちに聖書を読み祈禱して寝

六月四日　土曜日　朝来晴

此日出校常の如し、放課後教員会を開き、生徒の出席点に関する件を決す、（但し点数は百に対する二十なる事、）教員にかゝる罰金の件は纏らずして十二時過帰寓後、本日着の早稲田文学并に新聞を読む　柏井楠山の二氏訪ひ来りぬ、四時過出でゝ管廟の境内に行き暫時逍遙す　又家の前を通り過ぎて柳原に行き藤波社の燈台石に腰を掛けて、大に雄弁法を談ず、帰寓後師範校生二人来りて『須氏第四』を講じてやる、晩方小倉君を訪ひ少時談話の後出でゝ種崎町迄行き谷内を訪ひ少時談話の後帰途に就き、端書二枚を買ひ来りて寓にて、戸川及び父母に宛て消息を認め、拾時過聖書を読み祈禱して就眠

＊午後二時頃深尾、田所の二氏来り『エミネント、ウイメン』を読みてやる

＊横矢氏来りて松花録、文使の二書を貸す

六月五日　日曜日　朝来曇、雨、晩方晴

此日朝九時過寝起、拾時頃池氏来りぬ、氏と少時話す　拾時半

過出でゝ金子橋に行き横田を訪ふて吊辞を述ぶ　みよを訪ひたるに長も共に居りぬ、牛肉の菜にて飯を饗せられ二時前迄雑談し帰途鷹匠町にて柏井楠山の両氏に逢ひぬ　二氏は青年会に入りければ余は後刻を約して帰寓し菓子を買ひて、待つ内両氏来り種々雑話の後出でゝ雨を冒して潮江山に登り雨中の景を賞す帰寓後課書の下読をなす、小倉君はしきりに孤苦里をやつて居らるゝ様子なりき、七時頃下読を終り窓に依つて晩景を賞す、八時頃国沢亀良氏来り、フイッシャー万国史を返し来りぬ、又モントゴメリイの英国史を貸す、

時鳥てふ題にて

くれかゝる空にきこゆる、一声に
　旅行く人の袖ぞ露けき
都路に待るゝおりは音もせで
　片山里何名乗るらん

旅路の杜鵑

五月闇　更行く野に
　鳴く声は　露けき床の
くさまくら　結びかねたる
　たびびとが　敢果なき夢を
おどろかし　そがふる里に
　のこしつる　いとしき人の
ねざめには　いか聞らん

大方の　哀は我も
かわらじと　かげいと薄き
ともしびに　涙を照らし
　いとゞなを　深き闇路に
まどふなる　悲しき事は
　ほとゝぎす　なれが身のみに
あらざらん　哀れをそふる
　ほとりには　こひにやつるゝ
あたりには　忍音になけ
　声な高めそ

拾壱時過聖書を少し読み祈禱後寝ぬ

＊暁方平尾氏来りぬ

六月六日　月曜日　朝来曇朝寒かりき

此日出校する事例の如し　放課後生徒に出席点の件を申渡す、帰寓後下読みをなし三時過小倉君を訪ひ、梅を饗せられ、種々心裡問答をなす　五時頃篠原氏来りて種々雑談す　師範校生来りければ帰寓して書を読みてやりぬ、七時過篠原氏を訪ひ暫時談話し出でゝ本町を逍遙し、八時過帰寓し、物理を少々読みぬ、夜拾一時前聖書を読みて祈禱後就眠

＊朝東京への端書を投函す

六月七日　火曜日　朝来薄曇

此日学校に出づる例の通り　別に変つた事もなかりき　帰寓後二時過井上氏来り給ひて種々雑談しぬ　四時過氏と共に外出し

柳原を通り鷹匠町を横切り、桝形に出でムアー氏を訪ひ課業の事に付き談話し、蔵書を見せて貰ひナサニエル、ホーソンの“Twice told tales”を借り、午後五時半過帰りしに師範生二人来りければ之れに『第四読本』を読んでやりぬ、夜に入り下読を終り『TTTS』を読み始の一章だけを読み終りし時に小倉君余を呼びたれば同家に行きたるに諸氏集りてこつくりをなし居りたり　此のむれに加はりて度々之れを験するに確に竹が足を挙ぐ、種々実験をなして余は手にて人々が知らず〳〵動かす事を断定しぬ、帰寓後聖書を読み、祈禱後寝る

六月八日　水曜日　朝来雨

此日八時過出校、壱時過帰寓、直ちに下読に取掛る　前日来、風邪の心地なりければ医師の診断を受けぬ　小倉氏へ菓子を売りに来りければ、三銭だけ買ひたり　書を読みながら其を食ふ、一寸昼寝をなしぬ、四時過十市の叔母来りて玉子を呉れければ、返礼金十銭を送りぬ　直に急いで帰られたり　夜に入りTSの内の『婚儀の葬鐘』并に『牧師の覆面』の章を読みて後聖書を読み祈禱して寝ねぬ

六月九日　木曜日　朝来雨

此日朝九時前出校課業無事に終りて午後一時過帰途に就きたるに女子師範学校の傍にて下駄を切らし大きに弱はりようやく紙綯にてはなををしばりて帰寓しぬ　家にては新聞を読み下読を続いてなす　晩方東京より着の都の花を読み中々面白く感じたり　夜に入りTS中の『楽山の五月柱』の一章を読みぬ　歌など唄ひて拾時頃、聖書を読み祈禱して寝ねぬ

六月十日　金曜日　朝来晴、午後二時過雷雨晩方晴

此日出校例の如し　午後壱時過より共立学会を開きぬ　弁士数人あり余は一々之れが批評をなしぬ　四時過大虹を東南に見る実に絶景なりき　五時過帰寓　菓子を買ひ、下読をなし晩食後師範生を二人教へ、其後又下読をなしぬ　東京よりの書状に接し直ちに其の返事を認めぬ　九時過窓を推せば明月筆山を照し、月光前川に落ちて金瀲砕けて流る、就眠前聖書を読み祈禱をなす

六月十一日　土曜日　朝来晴天

此日朝七時前学校に出で午後拾時過帰寓、井上君家に待ち居給ひぬ、即ち拾一時前家を出で菜園場より舟を傭ひて漕ぎ行く涼風軽衣を吹いて、四山の翠色搦す可し、十二時少し過ぎ、浦戸に着し、宿屋にて飯を食し其れより燈台の本に行きて岩の間に汐をあびる、僅か潮水中にあれば忽ち寒気を覚へて戦慄す、又上りて暫時するとほか〳〵暖かになる、で、又潮につかるかくなす事三四度にして三時過同所を出で、舟に揺られて、四時過菜園場に来り木屋橋にて井上君に別れ、同所より直ち帰寓、家にては師範生の相手をなし午後八時過家を出で下に向つて行きたるに種崎町にて下方氏に逢ひぬ、即ち伴ふて農人町に行き船本に逢ひ三人にて新地を通り抜け吸口の橋に行きて月を見る明月鯢山の山頭にかゝり金瀲、江中に洋々たり、青風に袂を弄ばせて立つ事小時九時頃なれば急いで帰途に就き新地の出口迄

来りたるに下等の娼婦にやあらん余の後より来り袂を捕へ体をよせかけて、行路を遮ぎる、余少しく不平なりしかば取つてつきのけんかとは思ひけれど、其れも余りに大人気なしと思ひて、其侭押し行きたるに彼れ遂に其の止む可らざるを暁りしにや我が腰部をくすべりて逃げ去りぬ　十時前帰寓、聖書を読み祈禱して寝ねぬ

六月十二日　日曜日　朝来晴天

此日朝八時過寝起、下読を終り、昼食後みよを訪ひ暫時談話し其後井上氏を訪ふに柏井野村楠山浜田の四氏あり　例の如く埒もなく騒ぎ居りぬ、四時頃迄談話し同家を辞して帰寓後直ちに『荒野の鴎』の稿を起す　七時頃少しく出来たり　八時前窓に倚つて苓君と語りつゝありしに坂本直寛氏来りぬ、例の袋野の方を眺むるに火見へしかば必定怪火ならんとて其を見ん為めに坂本君と共に河を渡り田道をたどりて行き近きたるに此はいかに此の辺の新平民が蚊遣の為ならんか藁をたきつゝあるなり、きゑんとすれば藁をそへるが故に消たりあかつたりする様丁度唐人町辺から見ると、全く怪火の如く見ゆるなり　爰にて『怪(ママ)け物の正体見たり枯柳(ママ)』の句も思ひ合はされて可笑しかりきされど此の辺りのほたるの居るのは実に驚くほどにて一つの小き木の枝に五つも六つも居るなりき、九時頃河を越へて小倉君の所迄来り、坂本君とも種々談話し、拾時過氏去り余は家の前にて少時月を眺め、其れより下に下り朝倉町に出で農人町を通り新地に入ると例の昨夜の娼家の前に来りたるに、女が余を捕へんとなすにぞ、二三度突き飛ばして持てる杖を打振りしに彼れが手にや当りけんこつと音しぬ、我少しこれは気の毒に感じたれど、今更詮なければ急いで行き過ぎ吸口の橋に立つて月を賞し拾一時過同所を出て帰路に上る、拾二時前帰寓、聖書を読み祈禱して寝る

六月十三日　月曜日　朝来曇且大雨

此日午前七時過寝起、八時過出校、拾二時過帰寓、直ちに下読に取掛り二時過之れを終り其後『荒野の鴎』の稿を続け四時過完く脱稿、六時前師範生二人雨を冒して来りぬ　之れに書を講じてやる、空腹を堪へ居りたれば、食後水落ち痛みて大きに弱りたり　七時過小倉君を訪ひ先き程買ひ置き給はりたる菓子を貰ひ小倉君に『荒野の鴎』の草稿を示しぬ　八時帰寓、其後くず〳〵中に時間を費し十時前聖書を読み祈禱して寝る

六月十四日　火曜日　朝来曇且雨

此日朝七時出校事なく課業を終り其れより帰寓後四時頃迄に下読を終り、五時過師範生を教へ、七時頃篠原氏を訪ひ少時談話す　山中氏来りむ氏の時間減少の事を青山が承諾したる由を語りぬ　八時頃、同家を出で帰寓、窓に倚つて浄瑠璃を吟ず　拾時過聖書を読み祈禱後寝る

六月十五日　水曜日　朝来曇且雨

此日午前九時過学校に出で午後帰寓、二時頃揚桃(ママ)を五合買ひ之れを食ひつゝ下読をなす　四時前苓君を訪ひ揚桃少々を送りぬ、帰寓後別になす事もなく時を費し、晩食後久米并に師範生の三

人を教へ楊桃を食ひつゝ浄瑠璃を吟ず　東京へ向けての手紙を送りぬ、夜に入り拾時過聖書を読み祈禱して寝る

六月十六日　木曜日　朝来晴

此日朝八時前学校に出づ　課業事なく終り帰寓後下読を終り、四時過晩食中十市の叔母来りて揚桃を呉れぬ、五時前出でゝ種崎町に行き谷内氏を訪ひ新市町に出で旭座に行きたるに看板提燈はあれどテンともツンとも音がせぬ故今日は何うかと危ぶみて真直ぐに東行し田甫道を通りて五台山に行かんと種々に畦路を曲折して進みたるが遂に沼に行当りて先に越るを得ず　加ふるに泥濘中に足踏み入れて足袋も下駄も大汚れになりければ後へ引き戻りて農人町の下へ出で又東行して招魂社に行き同所より諸所を眺め緑陰に憩ふて種々の事を考ふ、赤陽西山に没し横雲そむる晒色も次第〳〵にさめ行きて、水面より黒みそむる景色得も云はれず、湾内にもやふ船檣にともす炫燈、影水に落ちて金蛇を画き、新地あたり茶屋が燈も此の辺より見ればさすがに風雅を添へぬ、しばし風色を賞し八時過同所を出で急いで帰途に就き九時前帰寓、其後歌など唄ひて時を費し拾時頃聖書を読み祈禱して寝ねぬ

六月十七日　金曜日　朝来晴

此日八時頃登校、課業結了後、共立学会第二回討論会を開く　出席者僅かに六七名　されど出席者は皆熱心に其持論を戦はし中々の賑ひなりき　四時前閉会、帰寓す　小倉氏方には楠山氏来り居りぬ、余は小倉を訪ひ楊桃を贈りぬ　晩食後他出せんとしたるにみよ来りぬ　明日の墓参の事を話しぬ　篠原氏来り談話中楠山氏来り三人にて種々談話す　二氏九時前去り余は下読を少々なし、聖書を読み祈禱後寝る

六月十八日　土曜日　朝来曇且雨

此日朝七時頃登校、課業事なくすみてければ帰寓す　『荒野の鵠』を清書し四時過晩食し新市町旭座に行きたるに札なくては入場かなはずとの事なりければ、谷内氏を訪ひて札を所望したるに隣家より翌日の札を貰ひ来り呉れたりければ直ちに帰寓す　夜に入りては浄瑠璃を吟じ拾時頃聖書を読み祈禱して後就眠

六月十九日　日曜日　朝来晴

此日午前八時前起きる、十時頃みよを訪ひたるに留守なりければ此の午後来て呉れる様に言ひ置きて帰寓し翌日の下読に着手す　午後壱時過みよ来りければ直ちに出でゝ筆山の麓を回りて小石木の麓に出で人々を待ち合はせ丘に登る　行く事一町ばかりにして墓地に達す　久しき間人の行きたる事も無ければ雑木、雑草生ひ出でゝ道も塞り居りぬ　しだを分けて行くに雑木中に埋れて遠祖の墓あり、稍やく近代の墓のみ掃除する事になして之れに着手す　余も掃き(ママ)を取つて自ら之れを手伝だひぬ、みよの知人一人娘を連れて来りしが此人々は自家の墓を探ぐる為めとて上に登り行きぬ　余も暫時の後山上に行きたるに揚桃ありとの事に行き見るに余り大きからぬ木に一杯実が付き居りぬ　即ち登りて枝三ツ四つ折り取りぬ　其後墓地へ戻り皆々協力して草を刈り木を折りて、地を清め五時過稍やく終りて礼拝をす

ませ諸氏に別れ帰宅す　午後七時頃外出し新市町旭座に行き浄瑠璃を聴聞す　最初は『沼津の切』余り感服せず　次も〳〵余り感服致さず　次に『関所の段』は頗る猥褻　臨監の警官は何故に黙過したる　次の枝鳳は、中々に面白かりき　次の人は余り感服せざりき　終りの八つ太夫は左程上々にてはあらねど先づ聞けしが、少し語り口が下品なりと思ふ　大切の阿古屋の越智は感嘆さすが大坂仕込の腕前確かな物なり　春吉の三曲中々御多芸な事なり　之れにて帰寓す　時に十二時過　家にて、聖書を読み祈禱して寝る

六月二十日　月曜日　朝来曇午後雨

此日朝八時頃登校　一級二級の歴史の日課点を取る為めの試験をなす　月給を受け取り帰寓後昼食し、打くつろぎてある内苓君来り給ひければ『読売新聞』を貸し参らせぬ、二時過外出し種崎町の銀行に行き為換を組み本町の郵便局より書留を出す、帰寓後翌日の下読をなす　四時前みよ来りぬ　同人に金四拾銭を遣しぬ　種々談話中師範校生来りければみよは去りて、師範生の書を講じてやりぬ、人々去りて後余は晩食し浄瑠璃を語りぬ、拾時過聖書を読み祈禱して寝る

＊早稲田文学を読みぬ

六月二十一日　火曜日　朝来曇雨且大風

此日午前七時頃登校、一時過課業終りて後帰寓し下読をなし終り、昨日の答案の評点を付す　晩方師範校生徒来り、書を講じてやりぬ　夜に入り『文学一班』を読みぬ　拾時過読経、祈禱後就眠

六月廿二日　水曜日　朝来雨、風

此日午前八時過出校、学校にて『文学一班』の叙情詩の部だけを読み終りぬ　此日は三級の文法并に壱級の物理の日課を取りぬ、午後帰寓後下読、点附ヶ等を終り、夜に入りては浄瑠璃を吟ず　苓君夕方訪ひ来り給ひぬ、東京の両親に宛たる手紙を書きぬ　拾時頃読経、祈禱後就眠

＊此日は日本文典を読みぬ

六月廿三日　木曜日　朝来曇少雨

此日午前八時頃出校　此日に而「ゴールド、スミス」の寒村行を読み終りぬ　帰後翌日の下読をなしぬ　小倉家には来客ありしにや笑声頻りに我窓に音づれぬ　小倉君が此の節源氏にのぼせて外山の上など〻日記に記るす様になりたる由の事も聞へぬ思ふに君が理想は彼の紫女と共に才識絢爛たる境に遊ぶにやあらんか　五時前菓子を買ひ之れを食す　晩方楠山、山中の二氏先づ来り柏井、篠原の両氏次いで来りぬ、種々談話をなし、遂に幽霊、妖物の話出て〻大笑しぬ　九時過諸氏去り、余も窓を閉ぢ、読経、祈禱後就眠せり

六月廿四日　金曜日　朝来晴夜雨

此日午前八時過出校、一級の席に而、セキスピアー、のシーザー（英文学所載）を講じぬ、帰寓後直ちに新聞を読みぬ、五時前久米氏来りぬ、師範生来りければ之れをも教へ七時頃出て〻井上氏を訪ふに浜田、柏井、野村の諸氏集り来りて種々放談す

九時前帰寓、其後小倉君を訪ひ雨羽織の件に付き少時談話しぬ其後十一時前帰り読経、祈禱して寝ねぬ

六月廿五日　土曜日　朝来曇少雨

此日午前七時前登校、拾一時過帰寓、但し明日より向ふ八日間休校の事なり、楊桃を三合買ひ、新聞を読みつゝ之れを食せり、夜に入り種崎町迄行く　谷内氏を訪ひ少時談話の後辞す、家にては浄瑠璃を吟ず　就眠前読経、祈禱例の如し

六月二拾六日　日曜日　朝来曇且時々雨

此日は朝八時頃寝起、拾時頃みよを訪ふに不在なりければ、桝形に行き髪を理む　拾一時過再びみよを訪ひ、蓆織の事を話す、はかまをさがす事など依頼して帰る　此時櫃を拾八銭にて求めぬ、夜は家にてさかレーのヘンリー、エスモンドを読みぬ　義太夫を吟誦し読経、祈禱後就眠

六月二十七日　月曜日　朝来曇雨

此日朝いと遅く起き出でぬ　午前を点調べなどにて費し、午後は楊桃を買ひ之れを食せり、みよ午後三時過より来り、五時頃迄話して行きぬ　師範校生来りて之れに書を講じてやる、夜に入りては別になす事もなく唄など歌ひて、拾時過読経祈禱後就眠しぬ

六月二十八日　火曜日　朝来薄曇晩方晴

此日朝遅く起き出でぬ、拾時頃みよを訪ひ袴を古着屋より取り来らせて見るに面白きものもなし　衣は此方より出行きて見んとて通町二町目の田村屋と云ふに行き、着物の外しや何にかいろ〳〵見たる末、遂に仙台平の袴を一つ、三円六十銭にて求めぬ、十二時頃帰家、午後三時頃小倉君を訪ひ種々談話し、楊桃及び菓子を買ひて食しぬ、晩方十市の母親来りければ出で談話す　楊桃を呉れぬ　夕方なればとて急いで去りぬ　夜に入り小倉君に楊桃を少々贈りぬ　井上君来り給ひて明後日の浜行を約して去り給ひぬ、少時の後余も帰家し只空然と時間を費し拾時過読経祈禱後就眠

六月二十九日　水曜日　朝来晴

此日午前九時前井上氏を訪ふに不在なりければ去つて柏井氏を訪ひ少時談話の後、午前十一時過、帰寓、昼食後新聞などを読み二時前家を出で、新地迄行き其処より舟に乗る、同舟の乗合多くて村郎野父種々の談話中、語次いつしか徴兵の事にたどり行きて皆々弁を闘はす、親は老ひて耕す能わず、壮年の子は出て軍事に従事せざるを得ざれば誰か我が数頃の田畑をや耕さんそを思へばいとゞ当惑の事なりとは数口一致の述懐なりき、語益〻進んで官吏特に高等官吏の月給を減じて兵士に今少し豊に給しなば、益〻進んで兵役に従ふ者いとゞ多きに至らんと云ふまで進みぬ　同じく人にして、或る者は六百円をむさぼるあり、又五百円を給せらるゝあり、あゝ之れ何等の幸福ぞ、彼れ等豈に実際左る価値ありとは、信ずるを得ず、さるは余りなる事ならん、其が上、月にかく鉅額の金の費さる理あらんや、若し彼等に今少し少なく給するも又決して彼等の衣食に事欠かざる可し、然るに彼等に給さるゝ侭に浪費をなす故、月々五六百円入

る訳ならむか、嗚呼之れ等しく吾人、同等の人間にして実際其価五六百円、其生計も又五六百円を要すとは吾信ずるを得ず――』と一人の村翁は謚きぬ、我之れを聞いて嗚呼かの農夫が時をたがへず耕し日をたがへず種へ、一個の破笠に風雨をしのぎて倦まず、怠らず、耕事に従事するは如何に苦しき事にやあるらん、猶彼等数月の労力も、数知らぬ玉の汗も時としては只徒労に属し去りて秋の収納は貢だに償ふに足らぬ事あり、之れを吾人読書の輩の悠々光陰を談笑の間に費すに比して其軒輊幾何ぞ、我等業を取るに当りて果して彼の農夫の耕す如く種うる如く、必らず時を違へずに働けりや、他人はいざ知らず我は大に中に愧づる所あるなり、人は謂ふ、精神の労働は肉躰に異なれり、誰れか吾人の過度の労働に伴ふの娯楽を非難する者ぞと、然れども農夫豈に心痛なからんや、村郎豈に心を労せざるの理あらむや、或る時は、降しきる霖雨に涙を添るもあらん、又時としては半夜ふすまを蹴て旱天の青空、燦爛たる星光を睨んで次の日の晴天なるを怨むもあらん、若し夫れ農夫等名誉なく、位地なきが故を以てせば、猶心を専門に労する輩の如きは爵位の之れを俟つあり名誉是れに加へらるゝあり何を苦んでか過度の娯楽をむさぼりて城尉菜色の民を過視するの理あらんや　若し其れ彼の兵士の如きは国家の干城、一朝事あるに至りては、命を砲丸の前に露し、身を、剣戟の本に擲たざるを得ざれば、之れ等の輩を平時に撫するは決して、徒ならんや、我れ、村翁の語を聞ひて大に悟る所ありぬ、然れども廟堂雲深きの辺に座するの人々真誠に下民と休戚を共にし兵士の苦を察して之れを労ふに至るの日は何時にてやあるらん　我其の時の甚近からざる思ふは深く嗟声をもらしぬ、四時前ふけに舟つきければ同所より上陸し山ぞひの道をたどりて、池村の西尾に着く、叔母は病気なりき、楊桃を貰ひ、一飯を饗せられ、午後六時頃同所を出で帰途に就く　七時過招魂社の所に登り夕晩の風色を眺む、夕陽西山に入り、南方の天僅かの青空、水に落ちて一種の色を添へぬ　くれ行く様を賞しつゝ少時休息して後足を家路に向くるに九時前稍やく帰り着きぬ　其後晩食し、徒歩して下の新地に行き勇を鼓して、金波楼に登り若浦と云ふ妓を相方にして一夜の春を買ひぬ　想像したほど楽しくもなし、始めて娼家の二階を見たり　隨分小(ママ)せついた間が沢山あるものなり　相方は大坂者にやあらん　年歯は最早二十四五位にやあらんと思はれぬ　拾一時前帰るに臨みて宿帳を認めよと云ふにぞ我れは間島豊と認めて同所より徒歩して十二時前帰家、読経、祈禱後、就蓐したれども暑さ堪へがたくして眠る能わざりき

六月三十日　木曜日　朝来晴

此日は夜前より夢に入らずあくるを待ち兼ね四時過登厠、五時半過寝起、新聞などを読み時を費し九時前井上昆雄君を訪ひ同道して森亀齢を伴ひ農人町より舟を傭ひて、湾を漕ぎ出でゝ拾一時過浦戸に行着く、宿屋にて昼食し、例の燈台の下に行きて、浴を取り泳のまねをなす、度々汐水を口に入れぬ　三時過迄に四回許り浴し、帰途に上り午後五時過、帰り着きぬ、佐々木金

久来り、来月来る事出来ず、故に来る九月よりは又読みに来る可き由を云ひ謝金五拾銭を置きて去りぬ　晩食後八時前家を出で、徒歩、下の新地に行き金波楼に行きたるに若浦は先客ありければ他に譲り小桜と云ふを相手にして種々談話す　此の人は何うやら土佐の人の如くなりき、若浦とは違ひて大分快活なる人の如くなりき　余の商売の鑑定をなしぬ　違ひしかば大きに笑ひて帰りぬ　途より車に乗りぬるにぞ十一時頃帰着しぬ　家の前を少時散歩し小倉君と語りつゝ十一時過家に引込み、読経祈禱後就眠

七月一日　金曜日　朝来晴夜曇

此日午前七時過学校に出で、種々質問を受く、種々の決議を（試験に関する）なして帰寓す　新聞など読みて日を費しぬ　夜に入り浄瑠璃を吟じぬ　十時頃読経祈禱後就眠

七月二日　土曜日　朝来曇晩方少雨

此日は七時過学校に行き諸般の打合せ等を終り帰寓す、午後二時過家を出で郵便局にて小鶴よりの送金を受取りみよを訪ひて之れを渡し置き、其れより井上氏を訪ひ四時過迄談話し、帰寓す　夜に入り柏井君来り少時話して去りぬ　相変らず浄瑠璃を吟じ十時過読経の後祈禱して寝ぬ

七月三日　日曜日　朝来晴　雲少しく出づ

此日朝遅く起き出で、壱級の物理の日課に評点を付し午後に渡りぬ　森武興氏来りぬ　植村正久氏本日着せられし由にて家の事に付き余に相談ありけれども、今の家は余り手狭なれども聞き合はせ見る可しとて、氏を帰し六時過出寓、森に立寄り、宿の事を話し、郷宿に行き植村氏に逢ふ　相変らず天眞の溢れたる容儀を以て余を迎へ給ひぬ、七時辞して出で、みよを訪ひ同家にて八時頃迄談話し、それより高知教会に行き植村氏の説教を聞きぬ、〇〇の学院で聞きしとは違ひて大分能く出来たりと感じたりき　論旨は……イソーとヤコブとを引きて、此の世の中に対して厳かに、恐れ(ママ)みて身を処せざる者は決して大人たる能ずとて種々論ぜられたり――拾時過帰寓歌を唄ひて涼みしが十一時頃読経祈禱の後就眠しぬ

七月四日　月曜日　朝来晴午後は少雨

此日は午前七時学校に行きて英作文并に壱級の歴史の試験をなす　壱級生の内書を写す者多かりければ之れを発かんかとは思ひたれどまづ思ひ止まりぬ　十二時過帰寓、昼食後直ちに本日の答案に評点を付す　三時過よりツレンチの英語論を読みぬ　七時過小倉君を訪ひ河田氏に逢ひ少時談話の後、高知教会に行き植村氏の『宗教の永続』なる説教を聞く　十時過帰寓、拾一時前読経祈禱の後就眠

七月五日　火曜日　朝来晴天

此日七時登校、二級の歴史、三級の文法等の試験をなしぬ　此の日壱級に於て妙な事が起りし由なり、午後〇時二十分頃帰寓、食後直ちに試験答案に評点を附しぬ　楠目伊奈伎氏より手紙来り病気の由にて小説書を借せとの事を申し来りければ、三ヶ月、

女之助の二書を借しぬ　夜に入り隣家を訪ひ弘松、河田、楠山の三氏と談話す、国沢来りければ一先づ帰る　談話中久米氏来りぬ　少時談話の後、出て高知教会に行き、植村氏の『神の子イエスキリスト』てふ説法を聞く、半ば睡りければ能く得聞取れざりき　教会にて篠原氏に逢ひぬ　拾時過帰寓、窓に倚りて歌を唄ふ、祈禱して寝ぬ

七月六日　水曜日　朝来晴天

此日学校に出で、物理の試験中、浜田安太郎の奸曲を発見して大に之れを譴責す、同人は一端帰宅せしも之れを呼び来りて種々青山氏より訓戒を加へぬ、午後一時前帰寓、昼食後直ちに手紙を書きて竹村に送る　貸金催促の為めなり、其後本日の物理課の答案に評点を付す　此日は矢田へ向け手紙を出しぬ、菓子屋より菓子を買ふ　夜に入り久米氏来りければ採点の相談をなしぬ　窓下涼風を迎へて浄瑠璃を吟ず　十時過読経祈禱後就眠

七月七日　木曜日　朝来晴天晩方雨降

此日は午前八時過登校、別に用もなく只監督の手伝ひをなして正午頃帰寓、昼食後暫時くず付き三時過、篠原を訪ふに方愛氏の父君来り居給ひぬ　思ひの外若き人なり　四時過同所を出で小高坂に行き井上昆雄君を訪ふ　浜田陳重君に始めて逢ふ、種々談話の後五時頃帰途に就き、かしわを五銭だけ買ひて来り、之れを食しぬ　中々旨かりき　六時過楠山氏訪ひ来り、種々雑話の末、河原伝ひに、朝倉町に出で種崎町を経、本屋をひやかし境町にて背妹(ママ)門松を買ひて帰り、一々之れを読みぬ、十時過読経祈禱後就眠

七月八日　金曜日　朝来晴天

此日学校に出づる事例の如し、壱級の物理の欠試業をなしぬ受験者は国沢、浜田の両人なりき、十二時過帰寓、其後東京への手紙を認め、晩食後出て葛目を訪ひ少時談話し、七時過出でゝ谷内を訪ひ雑話数次の後、帰途に就き、午後九時過より窓に倚り歌を唄ふ事例の如し　十時過読経、祈禱後就眠

七月九日　土曜日　朝来晴天

此日午前七時過登校、む氏の文典課を手伝ひて後、十二時過帰寓、楠山氏并に森亀齢待ちつゝありぬ　壱時頃共に家を出で農人町より舟を傭ひて浦戸に行く、干汐に風を受けたれば、舟中々進まず　稍やく四時頃浦戸に着しぬ、直ちに桂浜に行き海水に浴す、大波屢来りて全軀を没し鹹水を呑む事数次、然れども、水少しも寒からず、中々に愉快を感じぬ　浴一回して後楠山、森を相手にして相撲を取る、又其後一回浴して最早五時過なりければ急いで帰途に就き、浦戸の宿屋にて食事をなす　丁度新しき差身(ママ)にてありしかば皆々大喜びにて飯を食ひ、飯櫃七分通りをあけぬ、六時頃舟に乗り、急いで帰る、月東山を離れて金龍大江に躍る、涼風徐ろに面を吹きて、俗塵を洗ふの心地いとゞよし、八時前帰寓別になす事もなくて例の如く歌を唄ひぬ、此日の土陽新聞には彼の若浦と云ふ妓の情夫に別るゝの愁嘆場あり、我之れに対して屢〻笑を止め兼ねつ、十一時頃読経祈禱後就眠

＊此日東京への手紙を出しぬ

七月十日　日曜日　朝来晴天

此日午前七時過起床、九時過洋服を着用してみよを訪ひ浴衣の事を話し通町を方々さがしたれど善き縞柄の者一つもなし　其後一先づ帰り午後二時頃みよを伴なひ出でゝ下町の呉服屋を軒別に見散かしたれど、之れぞと思ふ者もなし、即ち五時過空しく帰寓、夜に入り八時過他出せんとしたるに浜田正稲氏来りけるが故に氏と雑談す　九時過氏去り余は窓に倚り例の如く歌を唄ふ、十一時過読経祈禱後就眠

＊此日川本に金三拾銭貸す

七月十一日　月曜日　朝来晴天

此日午前七時前登校、壱級貳級の訳解の試験をなす　少々打合せ等もなし正午過帰寓、昼食後訳読の答案に其れ〴〵評点を付しぬ　夜に入り小倉の北堂の病気を見舞ひ、九時頃迄雑話し出でゝ天神橋上に行き月下を逍遙する事少時にして帰寓、歌を唄ひなどして、拾壱時頃読経祈禱後就眠

七月十二日　火曜日　朝来晴

此日午前九時頃出校、岡本氏并に壱級生数名ありぬ　直ちに点数の調に着手す、竹村に逢ひ貸金の催促をなすに二三日待ち呉れよとの事なりき　壱時前帰寓、大橋の少し上にて網を打ち居る者あり　鮎、鰡など中々多く入り来りぬ、井上君に逢ひ、明日昼頃より円行寺の湯に行かんと約す、家にては新聞并に城南評論を読み点数調べをも終りぬ、六時前国沢来りぬ　横矢より手紙来りぬ　脚気にて急に赤岡に帰りたる由なり、夜に入りむあ―氏を訪ひ書籍を返却す　明日出立の準備最中の如く見受けぬ、まく氏も来りぬ、九時前同家を辞し高知教会に趣き、植村氏の談話を聞きぬ、氏は主として教会の現世済度に力を尽す可き由を語りぬ、十時過帰寓、窓に倚り歌を唄ふ事例の如し　十一時過読経後祈禱して寝る

＊三時前小倉君を訪ふに苓君は女学校の卒業式に御臨席の為めに御化粧最中なりき

七月十三日　水曜日　朝来晴天八時頃降雨

此日午前八時起床、只々空想を肆にし、筑前の姉に贈る手紙を認む、午後壱時過出でゝみよを訪ひ少時談話し同所を出で桝形にて郵書を投函し小高坂に行き井上昆雄がり訪ひ、四時頃迄雑話す　帰宅後は別になす事もなく時を費し八時頃折りから降りしきる雨を冒して種崎町まで行き藤越にて『奴の小万』を買ひ谷内を訪ひ少時談話し、九時頃帰寓、直ちに上の書をひもとき拾二時頃迄に読終る　読経祈禱後就眠

七月十四日　木曜日　朝来晴、夜雨

此日朝七時過出校、点数調をなしぬ　十二時過帰寓、新聞など読み衣類を干しなどし午後二時過、植村氏を訪ひ種々雑話す　外山、小倉の両女史、津田、河田、篠原の三氏集まりぬ、婦人客去りて後、種々の可笑しき話出でぬ、五時過帰寓、衣類を畳みつゝありしに十市の叔母来りて鷹匠町の平尾へ来る可き由を云ひ来りぬ　八時前稍やく行く　種々馳走になりて午後九時過

帰寓、十時頃雨激しく降り来りぬ　読経後祈禱して寝る、涼風枕に音信れて、夢もいとゞ静かなりき

七月十五日　金曜日　朝来半晴、午前は小雨

此日午前七時過登校、片岡氏来り給ひぬ、十二時頃帰寓、晩食後窓に依りて苓君と語る　君は来る十七日の船にていよ〳〵安芸に趣かるゝ由なり、甜瓜を買ひて、之れを食す、中々旨し、二時過久米及び国沢来りぬ　少時にして両人共去りぬ、晩方より夜へ掛けてデビス氏の『エビデンス』を読む、十時過読経祈禱後就眠

七月十六日　土曜日　朝来晴天

此日七時頃登校直ちに点調べに着手し、午後壱時前に至り少し結了に近づきければ帰宅しぬ　別になす事もなくして晩方に至りぬ、細木の義姉来り少時談話して本町の森へ行くにぞ之れを送りて行きぬ、其後引返して種崎町に行きて谷内を訪ひ雑談する少時にて帰途に就き、端書を二枚買ひぬ　大橋の上より東を望み、万燈千火、いとゞ賑しきさまなれば、一見せばやと思ふて東行す、潮江に渡る最東の仮橋を中にして其東西に数多の仮小屋ありて氷店、菓子店、料理店など中々に多かり、其の間の往来の路は僅か壱間位に過ぎず　之れでは人が込み合ひなば隨分熱からんと思はる、俳優の氷店にやあらん、中々客の多きもあり、多くは粉屋の鼠然たる女が店先きに控へ居りて嬌声を振立てゝ客を呼べり　可成殺風景なりき、九時過帰寓後、窓に倚り浄瑠璃を語りしが、十一時頃、読経、祈禱後寝る

七月十七日　日曜日　朝来晴天

此日午前九時過寝起、午前は別になす事もなく終り午後楠山氏訪来しければ共に出でゝ金子橋に行きみよを訪ふに病気なりければ、少時雑話の後帰寓しぬ、夜は家にありしに柏井君訪ひ来りて種々談話の後氏去りぬ、余は、其後、歌を唄ひて、十一時前読経祈禱後就眠

七月十八日　月曜日　朝来晴天

此日午前六時半登校、七時頃より点調べに掛り、午後壱時少々前に終り、一旦帰りて昼食し又再び出でゝ学校に行き打合せ等も少々なし二時過帰寓、此日は竹村敬凡に宛つる貸金催促の手紙を発しぬ、みよを訪ひて薬を遣る、五時頃帰寓六時過晩食、入浴後、東行して稲荷新地に行き松鶴楼を覗ふに、酒酣の有様なれば東行して吸江に行き青柳の橋畔に立ちて少時涼風を受け又引返して、松鶴の前に来りたるに最早追々散会の模様なりければ、直ちに帰途に上りぬ　種崎町にて谷内を訪ひ暫し笑話しつゝありしに青山氏前を通りしかば後より追付きて種々雑話して大橋通にて別れ境町の川崎に行き黄帷を壱円〇二銭にて買ひて河原に出で帰る、小倉君を訪ひ、少時談話し帰寓せしは十時過なりき　読経祈禱後就眠

七月十九日　火曜日　朝来晴

此日午前七時半登校、諸種の打合せ等をなし、十二時頃帰寓柏井氏と浜行を約せしかば、其来るを待つに来らざりければ四時頃みよを訪ひ、衣類を縫ふ事を托して帰りがけ、篠原氏を叩

〻に留守なりければ、一直線に帰る、晩方楠山氏来りければ此と共に河原に行きたるに南端の料理屋は大抵出来上り居りて、白粉細工の人間多く客を迎へつゝありぬ　一周して帰るに家の前にて柏井、野村両氏に逢ふ、家に誘ふて種々談話す　三氏去りて後演説の草稿を作る　十一時頃読経祈禱後就眠

七月二十日　水曜日　朝来晴天

此日は午前七時過登校、八時頃より続々来賓ありき、片岡、山田、三浦、柏井、森、横田、徳弘、藤田の諸氏生徒の数が余り多からざりき、八時半頃式を挙げ谷重中氏祝詞朗読、次は余、㈠偏頗の見なからん事を望む、㈡厳正なる風習を作る事、㈢人生の問題を研究し能青年の立脚点を立つる事、㈣貧者の友たる事を期す可し等の諸点に付き極簡単に語りぬ、次は池君が貧富の懸隔に付き所見を述べられ、森本、国沢、横矢等の演説ありて十一時過、茶菓の饗応をなして十二時頃諸氏散じぬ、学校より給料の外に慰労金を壱円貰ひぬ、帰寓後、二時前横矢重吉訪ひ来りければ本を少しかす　久米栄之助来りて郷里に帰る由を云ひて礼金三十五銭を置きて去りぬ　篠原氏来りぬ　氏も少時にして去り、横矢も四時過去りぬ　五時過、寓を出でみよを訪ふに衣類はまだ出来上り居らず、帰りがけ篠原氏を訪ひ暫時談話の後、井上氏を訪ふに不在なりければ是非なく帰寓しぬ、晩食頃久万俊泰来りぬ、少時談話の後同人去りぬ、暮れ合頃入浴す、姉よりの手紙に接す、若松の方へ転居したる由なり　別に外出もせずして家にて夜を送り午後十一時頃読経祈禱後就眠

七月二十一日　木曜日　朝来晴

此日朝七時頃寝起、九時頃学校に行きたるに青山氏在らず　去つて第三尋常小学校の教育高知市部会に趣きたるに別に差したる議案もなく只大石保吉の補欠に余が当撰したる位にてありき、十一時過学校に行き青山氏に逢ひ問題を頼み、且来月分の給料郵送の儀を依頼す　正午頃帰寓晩方まで荷物の片付等をなし晩方田所を訪ふに不在なりければ、手紙を置きて又天神橋を渡り、東行して九反田に行き谷重中氏を訪ひ種々雑話す、共立学校は、来る廿七年二月にて山内家よりの御出金が切れる故其れから先きは、資本金をなしくづしにして六年位は続くならんと存ぜらるゝなれど、何時までも無尽蔵などゝ思はれては余程当が違ふ故或は其前に他に方向を求めらるゝも差支なしとの話ありぬ　余も此の事に付き、聊か所見をも述べぬ、来月の給料は本月先きに渡さんと云はれければ、厚く謝して退出せしは午後十時の頃なりき　其れより河原に出で水を飲まんと方々見廻すに家々しつくい家の化け物みた様な人間揃故、いづれも前をすどをりし或る氷屋に行くに静かな代りに砂糖が赤砂糖なりければ少しも旨からず　三盃で四銭だけ置きて早々に立出で急いで帰寓しぬ　十一時過読経祈禱後寝ねぬ

＊此日午後おさへさん来り給ふて餞別として余に十銭贈りたり、

七月二十二日　金曜日　朝来薄曇夜雨

此日午前九時前登校　谷氏并に青山氏居りぬ　十一時過金を請取る積りになして同所を出で公園を越へて柏井氏を訪ふ不在

井上氏も全断　進んで田岡君を訪ひ種々雑談し、十時過同所を出で、本町の上詰にて久米良弘君を訪ひ少時談話し、帰途横田を訪ひ暇乞を述べ、みよに逢ひ衣物の仕立を見、十二時前西川へ暇乞を云ひ学校に行き金を請取りて帰寓前篠原氏を訪ひ、明朝五時の出船に同船す可き由を語りぬ　氏云ふ本夜宿りに来る可しと、余は厚意にまかす可き由を云ひて帰る　家にては少々疲れければ、荷ごしらへにて時間を費しぬ　三時過小倉君来り給ふて紙を贈給はりぬ　晩方小倉を訪て菓子の御馳走になりぬ　六時過久米氏来り、田所の金の延期を頼み来りぬ　余は詮方なければ之れを諾しぬ　七時前十市の叔母来りぬ　直ちに去りぬ、出でゝ篠原氏を訪ひ明日の天気余程悪くして到底出船覚束なきやふなれば明日は余は見合さんと云ひぬ　種々談笑し、去つてみよを訪ふに余の家に行きたりとの事なりければ急いで帰宅途にて井上君に逢ふ　帰りてみるにみよが新調の着物及び、熊引二枚を持来り贈りぬ、九時過出寓川本氏と共に天神社内に行き花台を見る『佐倉惣五』『恨保川』『近江源氏』『すゝき主水』『伊賀越保津』等ありき　□□の生けるが如きはさすがに土佐の特有ならんか、管廟にも詣で終りて橋を渡り、磧に行き　□□□ぬ　雨少しく降り出ければ急いで帰る　十一時過祈禱して寝る

七月二十三日　土曜日　朝来曇雨風いと烈し

此日午前九時過寝起、戸を開くる能はざれば闇夜の如き中に眠りぬ　午後三時頃稍やく出寓竹田医院に行き首のでき物を見て貰ひ患部のたゞれを洗ふて貰ふ　膏薬を貰ひて帰寓す　其後別になす事もなく、晩方に至りたるに、十市の叔母来りて東京へとて鰹節を呉れぬ　明日を約して去る　夜に入り風益々荒れ、河水いとゞ張りて崖下の道を埋めぬ　若狭への手紙を認めぬ夜に入り讀書などなし、祈禱後就眠

七月二拾四日　日曜日　朝来雨夜風雨烈し

此日午前より家を出でず、十一時過、武田に行き患部を洗滌して貰ひぬ、午後三時前久末良弘君来り訪ひ給ひければ、仝氏と種々談話して後氏去りて田所を呼びに行きぬ　谷内氏訪ひ来されぬ、菓子を賜はりぬ、五時頃より、牛肉を食ひて酒を呑む、小使が青山氏よりの手紙を持来りぬ、明日中学校の卒業式へ臨まずやと書しありぬ、使には、委細承知の由答へやりつ、八時頃良弘君雨を冒して去りぬ、余は例の浄瑠璃を吟ず、読経祈禱後就眠

七月二十五日　月曜日　朝来雨風甚

此日朝七時前起きる　八時前家を出で堀ばたの水深き所を徒渉して共立学校に行くに青山氏は既に中学校に行きたりとの事なりければ、直ちに中学校に行き、講堂の近辺にさまよひ居る内、漸く引かれて校長室に入る、青山氏あり伊加倉氏あり村岡氏あり諸氏談話中なり、九時前式場に出で着席するや、敬礼をなし勅語朗読、校長演説、長官祝詞、職員祝詞、生徒答辞等ありて後式場を退き茶菓の饗応ありぬ、式場にある内頻りに警鐘の音響きければ、何事ならんと思ひ居たるに、水増して総出の鐘なりと云ふ、おのれ家を出る頃には屋下の崖壱尺位は水面に出

居りしが、昨夜よりの風雨なれば可成の増水になりたらんなど思ひつゝ、御馳走の菓子もそこ〳〵に見捨て、袴の股立ち高く取りて、大橋筋を一文字に南行するに、中島町以南の堀端は水溢れて、脚を没す、男女の大橋より来る者も、さして行く者も皆惜しげもなく衣を掲げ居りぬ、若し空を翔るの久米仙もあらば或ひは墜落するやも知れず　北向する者は云ふ、水いとゞ高し　橋台も今は既に水越る許りなりと、越戸のきわは水浅きにぞ、稍く息をつぎ、片町を通りて東の越戸に登りて見るに水はいと高く己が家の傍門に濁浪うづまきて流入る様凄しかりけり、先づ家に入りて見んと門を入らんとするに人あり中より出で来れり、水はそが股に達するばかりなり　その人の云ふ『中々深うございます』と　余も笑ふて高く衣を掲げて渡る、家の中を見るに、床上六七寸位に水浸し来り、床板は浮きて流れんとし、畳は剝れて長持と中床との間に渡されて家具を支ふ、哀れとも、またはかなきさまなれや、家には川本氏の友数人来りて種々手伝ひ呉れ居りぬ、長、細井など見舞ひ呉れぬ、川本氏澪標を作りて藁を上に結びて此れ迄来りなば大変なりと云ふ、暫時にして水、藁に達しぬ、又藁を五六寸上に上げて、よも之れ迄は来るまじと　暫時にして水それをも犯しぬ　遂に棒自身水中に没しぬ、人々大に笑ふて曰く『今日は大変が幾度来たかしれん』……座敷に立ちて水脚を浸す、十一時前後には其の最高に達しぬ、物見より見れば隣家の小倉家の出窓に水当りて波いと高く揚るを見る、家の中と外とにて水の高さが凡、五寸位の差なりき、目を挙げて遠く望めば、柳の馬場、藤並宮、は水に沈みて八幡、袋野、小石木の麓まで一面の泥波を湛へ一望漂渺たる湖水の如き観ありき、東を望めば天神橋畔の潮江堤には村人にやあらん、恰も人の山をきづきたるが如し　土俵をはこび来りて、其の場所に積む、大橋下は酒桶の如きものゝ積まるゝを見受けぬ、十二時前食事する為めに外出せんとするに水深かければとて、川本氏余を負ふて門を出し呉れぬ、その頃は水が庭にても人の帯ぎわに達する位にて、越戸石壇稍く一段を残すのみ、今増水七八寸に及びなば必らず水堤を越なんとするにぞ水防夫は、土俵二つ三つ積み重て一帯の越戸を塞ぎ、之れを守り居りぬ、其れより、洗足にて篠原氏を訪ひ少時談話し、其れよりみよを訪ひ飯を貰ひ又出てゝ、武田に行て患部洗滌して貰ひ、三時頃帰宅するに、最早余程退水して石蜌と平行位になり居りぬ、窓に倚りて見居る内、漸々減水の模様なるにぞ四時過出寓、大橋を渡り、天神社の堤防の上に上るに唐人町の方は、まだ石蜌の見へざる家も多かりき、橋上の北端には八石仕舞とか名付る酒桶二つ、三つに水盛りて据へありぬ　南端には石燈籠、石台等の物、置きありぬ　之れぞ橋の浮き立ちて流失するを防がん為とぞ知らる、それより橋を元へ渡り、本町を下へ下り種崎町の谷内を訪ひ少時談話の後六時前帰寓、久米氏訪ひ来りぬ、夜に入りみよを訪ひ一宿す　就眠前読経祈禱す

七月廿六日　火曜日　朝来雨

此日午前八時過、篠原を訪ふに、山中氏あり、昨日の天気に拘

らず高知丸入港し井深先生、着高、延命軒に投宿いたされける由にて、両氏訪問の出掛けなりければ、折よしと、相伴ふて延命軒に行くに井深氏は、吉岡先生を訪問せられし由にて不在、直ちに帰寓す　水は余程引きて下の芝路の高き所は点々緑を水面に顕はし居りぬ、窓に倚りて四顧するに篠、山、両氏下駄を手にし泥水を渡りて門前を過ぐ　即ち尾して泥波を徒渡りて大橋迄行かんと企つ、わが寓より、大橋迄に殆んど中間と覚ゆる辺よりは追々深くなり行き松岡と云ふ質店の辺に至りて我が股を湿すに至り、止を得ず同家を通らして貰ひて裏の土手迄つたひて、大橋の袂より車行し植村氏の寓を訪ふ不在なり、帰寓後、下の細工場に行き小憩す、出でゝ平尾を訪ふに西村氏帰りてありぬ　種々馳走になりぬ　晩方帰寓、夕飯を終り間もなくみよ方に行き、長に酒を飲ませ、浄瑠璃を語りなんど大に騒ぎぬ、十一時過読経後祈禱して寝る

七月二拾七日　水曜日　朝晴晩雨

此日は多分雨ならんと思ひ、度々みよの所へ宿るも気の毒と思ひ、宿屋に行かんと思ひ定めつ、拾時過、種崎町に行き銀行為換にて金四拾五円を東京へ送る　谷内を訪ひ少時談話す、家に帰れば、天気宜しくなりぬとて明後廿九日の船にて出立の事に定む、午後は諸所ぶら付き、晩方、武田氏を訪ひ、少時談話し、下知に行き小松の老人を訪ひ、七時前帰寓、晩食後浄瑠璃を唄ひなどし、拾時過、祈禱後就蓐

七月二拾八日　木曜日　朝来晴午後少雨

此日朝荷物を纏め正午頃井深氏を延命軒に訪ふに、郷宿へ行きたりと云ふにぞ、又中西方に行くに氏は不在なり、名刺を托して去る　越前町の井上を訪ふに不在、柏井氏をも訪ふ、河田に行き、みよに逢ひ、篠原にも逢ひ又井深氏を訪ふ、未還らず、帰りて待つにみよ来りて種々世話して呉れぬ　五時頃荷物を楠目に預け、晩食の馳走になり、暮合に帰り夜に入り上に行きみよ及び篠原氏方を訪問し車にて九反田に行き岡本を訪ひ少時談話して後谷内を訪ひ馳走になり楠目をも訪ひ十時前帰寓、読経後明日の海路の安全を祈禱して就蓐

七月二拾九日　金曜日　朝来晴天

此日朝五時過寝起、六時頃みよ来りぬ、七時頃家を出で、車にて東行し中島町の片岡氏へ名刺を投じて別辞を申入れぬ、途にて細川亨吉、楠山、浜田、山中の諸氏に逢ひぬ、農人町の会社前の舟宿にて別府氏を待つに暫時にして氏来りぬ　即ち舟を傭ひて漕出づ　孕、五台山などの風色も今を限りになるべきも知れずと思へば、座に名残り惜かりき、八時頃、高知丸に乗り込む、船には井上、柏井、の両氏を始めとし植村氏并に仝氏を送る連中大分居りぬ、室を取り、又甲板に出でゝ待つ内、久米栄氏並に川本氏も来りぬ、此の舟には朽木の郡長に任ぜられたる陽等氏あり　其が縁りの人か、女二人ばかり、涙に袖を湿し居りぬ　掛け構ひなき我なれど之れを見て座ろに哀れさまさり眼の中自から湿ひぬ、……他所の哀れ見るに付けても忍ばるゝ我が身の上にぬらす袂は……一人の叔母并にみよの心やいかにと

思ひ出づ、九時過、船進行を始む、入江の島々も打過ぎて種崎、浦戸をも見る間に打過ぎて桂浜を右に見る頃より船の動揺追々烈しくなり、或る時は空中に投げ上げらるゝが如く又或る時は奈落の底に引き入れらるゝが如し　其の揺りあげらるゝ時は左程にもあらねど其の揺り下げらるゝ時の心地何共名状す可らざる程苦し、されど船中は風通しも悪ければ苦しからんと思ひて忍びて船の端に倚りて浪を見居る内に嘔吐する事数回に及べり、然れど猶忍びて居りぬ……たらちねに逢ふを頼みの旅なれば、山なす浪も物の数かは……天地を動かすを本務の歌なれど腰折なれば效験もなし、川本氏下より来りてぼをいを呼びて甲板に蓆を敷かせ呉れたれば其の上に打伏すに心地少しくなをりぬ、時々頭を挙げて見るに陸は数町位隔り居りぬ、海浜の風色愛す可きが如し　午後三時頃にやありけん、船上の人々、海に溺屍見ゆとて罵り騒ぐ、我も少しく頭を挙げたれど精しくは見ず　五時頃にやありけん、阿波ノ伊島の間を抜ける、此の日はヲハナを廻りてより船の動揺いとゞ烈しくなれり、横に傾く事甚しく、時とし船上の器具の動移するを見る、或時浪上等室に打込みて植村氏は頭から汐を浴びし由なり、夜に入りては船の動揺中々止まず、加ふるに、月も雲も隠れて空くもりて何にとなく荒れ模様なりければ、猶々弱り果てぬ、拾時前友ヶ島の燈台見ゆ　兎角する内、其辺をも過ぎ内海に入る、動揺別に止まらず、十二時頃神戸に着く　船が安着する迄は、甲板にありぬ、上陸して海岸通の安松と云ふ宿屋に入る　客大分込み合たればとて六畳位の部屋に客四人同居す、二時前食事し、横臥す、祈禱をなしぬ

七月三拾日　土曜日　朝来薄曇

此日朝入浴、湯屋は大分奇麗なりき、九時過出てゝ河崎町に行き勝木をさがしたれど知れず、帰宿後車を傭ひ、長田村に行き増田山に登るに山上巍然たる城の如き家立ち居りぬ、人に問ふに番地は勝木氏の所に当りぬ、然しかゝる立派な所にかと恐る〳〵進み行くに、格子口に勝木其二と記しありぬ、玄関に良さんが居りしかば之れに礼す　舜さんも居りぬ、お律さんも次いで出来れり、種々雑話、座敷の間取り庭の木石の工合中々物寂て古雅なる所あり、昼飯の馳走になり、少時の午睡をなし、午後四時過同所を出で田道を歩きて、湊川に行き楠公社に賽す、五時前、帰宿、川本氏当地の用事を仕舞ふて余の帰るを待ちつゝありぬ、即ち晩食を喫し、荷物を船にて東京へ送り呉れる様に頼み置き七時前の汽車に乗る積りにて、三の宮停車場に行くに、川本氏下駄が違ひしとて元へ引返す、汽車は其の跡にて出でぬ、停車場際の氷屋にて休憩しラムネなど呑む　八時過の汽車にて大阪に行き、車にて唐物町に行き高見と云ふに宿る、能勢、別府の二氏既に爰に在りぬ、余と川本氏はかしわの鍋を取りて食しぬ、十一時頃読経祈禱後就眠

＊太一が昨日当地に来りし由、筑前に帰る為めならん

七月三拾一日　日曜日　朝来晴、晩方雨

此日朝六時頃寝起、九時前より別府、川本の二氏と共に心齊橋

通を散歩し空気枕并に扇を買ふ　道頓堀の辺まで行きて引返し十時頃帰宿、十二時前別府氏帰り来りぬ　喫飯後少時車を傭ひて梅田に向ふに所々河に掛け出したる宿屋などある所あり　見るからが涼しそをなり　曽根崎など過ぐ　一時前、梅田停車場に至る、切符を求めて待つ事しばらく、汽車来りしかば此れに乗る、直ちに走り出でぬ、途中の光景を窓より眺む　田あり畑あり山あり、隨分面白し、車中の人と談話す、京都、山科など見る間に過ぎ、馬場停車場にて折詰の弁当を求む、近江八景の中粟津并に瀬田を明かに見る、大湖の風光、頗る明美なりき　米原に来りたるに雨降り出でぬ、昔し父母に伴はれ、此の辺り過ぎりし事を思ひ出でぬ　其れより汽車はひた走りに走りて関原をも過ぎ大垣をも過ぎ岐阜に着す、間に長良川、木曽川の鋳橋中々長し、此の辺り去年の大震の名残り、壁も塗りあへで破れたる雑具只押片付けたる如く積める家も多し、折りから日暮れて引戸漏る火かげ風に明滅たり、満目荒涼の景、草間にすだく虫の声いとゞ、しめりがちなる袖をうるをさしむ、夜の八時過名古屋に着す　窓より弁当を買ふ、其時、我が後に年二拾六位にやあらんと思わるゝ男子来りて座しぬ、其が後より大急ぎにて三十恰好の背高き男来りけるが、前の男に向ひて切符を見せよと云ふ　其状恰も番頭が手代に対する如くなり、若者切符を出すに丈高き漢之れを見て後、若者を二三つ続けざまに打ちぬ、『おのれは名古屋の停車場を知らずや、不届者めが』と云ふ、若者大に恐れてひた謝りに過りぬ、されど、一人の漢は聞かずして、襟を取りて車室より引き出でぬ、車外にて又散々に欧打して何れへか連れ行きぬ　皆々不審して種々の取沙汰ありけるが、こは多分巷賊ならんと思ふ者ぞ多かりける、暫時にして先きの背高き漢、窓より云ふ、『今夜はすり中々多し、余程注意して居れども、或は見のがすやも知れず　人々余程注意あらん事を望む、殊に革鞄の中を気を付け給へ、其が中の金は一番取り能ければ』と、爰に至りて始めて知りぬ、此の人は探偵にして先きの若者は巷賊なりし事を、探偵は猶各車室に付ひて注意を与へてありぬ、車は闇を走りて進む　浜松其他は夢の間に過ぎ天龍の橋を過ぎしは午前壱時頃なりき

八月一日　月曜日　朝来晴、暁方雨

静岡、沼津、興津の辺など、三時頃に過ぐ、佐野停車場にて白み始め御殿場の方に登るに隨ふて益ゝ明るくなりぬ　暁雲峯を包んで白雨の車窓を打つなど、爽涼俗腸を洗ふに堪へたり、御殿場小山、山北等も見る間に打過ぎて国府津に着きしは六時過なりき　其れより大磯等も過ぎて横浜に着く、人の車を出入するさながら蟻の如し　我の如き此頃の田舎漢はそゞろに眩せんばかりなり、午前九時前新橋に着す、其れより徒歩芝口の通りに出で、同所より車にて帰家す、家には父及び伯母ありて余の無事の着京を喜びぬ、母も豊川より帰りて共に健康を賀す、取敢えず朝食を喫し就眠、其後起きて種々土佐の話をなしぬ、夜に入りて町を散歩し本屋に行き早稲田文学并にしがらみ草紙を

取り、代価を払ひ唐物屋にて襯着、香水、股引等を求め、足袋下駄等をも買ひて帰家す、十時頃打つかれて就眠せり

八月二日　火曜日　朝来晴

此日朝豊川に逢ふて少時談話す、午前十一時頃より大石氏を訪ふ　早川も来り談話中、岡本と云ふ人も来り昼食を饗せられ、早川の別家に行き種々雑話中、内村鑑三と云ふ人の天皇の御肖像を拝せざりと云ふ事に付きて一条の議論に花を咲かせぬ、夜に入りては家にて早文、しがらみ等を読みぬ、十時過就眠、読経祈禱例の如し

八月三日　水曜日　朝来曇、雨（午後）

此日朝遅く起き出でぬ　昼頃松永を訪ふて亀彦氏と談話、由熊、武吉、全熊の三氏不在なればなり　去つて四丁目の先の家に行き政治、下元を訪ふて菓子の馳走になる　去つて赤田氏を訪ひ種々談話し午後三時過帰寓、夜に入りて大石氏来りぬ　共に出てゝ本郷通りをぶら付き城南評論并に帽子、銭入れ等を求む、帰家後少時にして就眠、読経祈禱例の如し

八月四日　木曜日　朝来晴

此日朝父と共に切通の射場に行き、弓を射、弓一張を壱円にて買ひ来る、午後は豊川に行き新聞など見る、豊川にて湯を貰ひ一浴し、暮方大石を訪ふ　不在なり、早川も居らざる様子なりければ出てゝ春木町を南行し若竹に行く、可成の聴客なり、相変らず書生ばかり、南の縁端に座を占む　風いと涼し、最初は鹿の子清花の『姫小松島物語』此の人大分上手になつた様なり、中々聞けたり　次は小緑、東玉の『金比羅利生記百度平住家』相変らず落着いてよし　其上、声の工合益々善き様ならん　あわれ今一度此の人を真打として充分の伎倆を見たし　切は綾之助、鶴加津の『先代萩、御殿場』艶のみにて力なき事、奇麗な紙雛の如し、余りにだるき様な気味合にて十時前同所を出でぬ、帰家後読経祈禱後就眠

八月五日　金曜日　朝来晴

此日朝重枝氏来りぬ　種々談話しぬ　十時頃帰り去りぬ　十二時過赤田氏来り明日はいよ〳〵鎌倉の方へ旅行せんと企つる由を語りぬ、四時前氏去りぬ　晩方、豊川にて入浴、外出本屋にて都の花を三冊及び野守鏡を取り来りぬ、夜に入り之れを読みぬ、十一時頃読経祈禱後就眠

八月六日　土曜日　朝来曇天

此日朝倉部氏来り、種々談話して去りぬ、午後は豊川へ行きなどして費しぬ、其他諸方へ手紙など出しぬ　夜に入りては、雑誌など読みて十一時頃就眠しぬ

八月七日　日曜日　朝来晴

此日は朝より家を出でず、豊川へ午後行きぬ、夜に入り外出し、本屋にて本を買ひぬ、福島氏を訪ふに旅行中との事なりければ直ちに帰家しぬ、家にて都の花を読みぬ、十時過就眠

八月八日　月曜日　朝来晴

此日午前拾時頃荷物着しぬ　開いて見るに中が余程破損し居たり　夜に入り豊川にて一浴す、家に帰れば下元のお兼さん来り

てありぬ、外出し本郷の通を散歩し神田の方迄行き池の辺を通りて帰家す　十一時頃読経、祈禱後就眠

八月九日　火曜日　朝来薄曇

此日午前七時頃外出、岩崎邸を訪ひ久弥氏に逢ひ病人の見舞を云ふ、少時雑談後帰寓、此日も豊川へ行きなどして日を費しつ、夜に入り、入浴後、別になす事もなかりき、十一時頃読経後祈禱して寝る

八月拾日　水曜日　朝来曇午後雨

此日朝九時前家を出で六銭にて車を傭ひ、南鍋町に行き野崎を訪ひ、種々談話し、鰻飯の御馳走になり晩方迄遊び居りて帰家す、帰途鉄道馬車に乗りぬ、晩方入浴して後は別になす事もなかりき、午後拾時過読経祈禱後就眠しぬ

八月拾一日　木曜日　朝来晴

此日朝の内家に在り、午後出てゝ春木町の理髪店にて髪を切りて貰ひ、松永氏を訪ふ、未だ帰らず　金熊氏と共に語る中武吉氏帰りぬ、由熊君にも逢ひぬ、桃及び葡萄酒の馳走になりて五時帰家す　晩方入浴後吉川栄次郎氏来り種々談話す、十時過帰る　直ちに就眠

八月拾二日　金曜日　朝来晴

此日朝より家にありぬ、午後豊川に行き本など見ぬ　夜に入り入浴、書見等をなし、十一時頃読経後就蓐

八月拾三日　土曜日　朝来晴

此日朝八時頃小石川の清気館に中村啓氏を訪ふ　種々談話し、昼食の馳走になり、午睡を貪りけるが五時頃同所を出てゝ一旦帰家し又出てゝ早川を訪ひ大石氏と三人にて種々談話中於安帰りし由なりければ七時頃豊川に寄りお安に逢ひぬ、八時頃帰家晩食す　夜に入りて別になす事もなくて十時過読経祈禱後就蓐しぬ

八月拾四日　日曜日　朝来晴

此日午前七時頃出で弓町より車に乗り上六番町に行き千頭清臣氏を訪ひ共に種々談話す　十時過帰途倉部氏を訪ふに氷を饗せられ、種々雑話し十二時頃同所を辞し帰家す、午後二時前岩崎邸に行き会葬者の名刺受取所に名刺を投ず　三時頃野村氏と共に病院を抜け、赤門前より車を傭ひて染井の墓地に行きて暫時待つ内に種々の人々来りぬ　江口、林氏などの知人数輩に面す五時頃式終りて帰途に就き豊川にて貰来りし菓子を食し入浴したる後帰家すれば清司氏来り居りぬ、種々雑話しぬ、大石氏も来りければ、鰻飯を饗しぬ、其後出てゝ早川を訪ふ　萩野、岡本など居りぬ、歌などしきりに唄ひぬ、深更に及びて帰家す祈祷のみして寝る

八月拾五日　月曜日　朝来晴天

此日午前より豊川に行きつ本など見ぬ、林氏に逢ひぬ　晩方帰家す　留守に赤田氏来りし由なり　島崎氏の手紙来り居りぬ、夜に入り入浴後、家にて別になす事もなく時を費しぬ、十一時頃読経祈禱後就蓐

八月拾六日　火曜日　朝来晴天

此日午前より外出せず、豊川へ行きぬ　本など見たり　晩方大石氏を訪ふに不在なりければ本屋に行きて早稲田文学と『義経腰越状』とを買ひ、仲町に行き鼻掛眼鏡を求む　代価壱円二十五銭なり　帰家後十一時頃読経祈禱後就眠

八月十七日　水曜日　朝来晴天

此日午前は家に在りしが、午後は豊川に行きなどし午後三時過家を出で天神下より車にて稲桝を訪ふ　内に遊び人の如き者二人昼寝してありぬ　少時雑話す、隅清と云ふ人土佐より来り居りぬ　弥昇は結婚せし由なり、五時頃帰る、夜に入り別になす事もなく十一時過読経祈禱後就眠

八月十八日　木曜日　朝来晴天

此日朝八時頃杉浦氏を訪ひ、種々依頼して来る。帰りに清気館に立寄り、吉川氏と談話す、十二時頃帰途に就きぬ、午後三時頃出家、四丁目の中黒にて撮影せしむ、帰家何にもなさず、夜に入り入浴、後、少時豊川にて談話しぬ　十一時過就眠読経祈禱例の如し

八月拾九日　金曜日　朝来晴

此日朝福島氏来りぬ　種々談話後、将碁(ママ)を戦わす　散々に敗北しぬ、午後は家にありしが時々豊川に行き関原戦争図誌を閲して薩人の義気に感じぬ、夜に入り、於安に付ひて本郷通りを散歩し切通にてアイスクリームを食し、下つて仲町に行き筆を買ひつ、十一時過帰家就眠読経祈禱を忘れず

八月二拾日　土曜日　朝来曇

此日朝は家に在り午後豊川に行き遊ぶ、夜に入り入浴後吉川栄次郎と共に吹抜に行く　始めは識子太夫義之助の『御所桜三』先づ熱心なりと感じぬ　次は豊竹和田太夫、三味線義之助の『箱根霊験記三人上口』少しも感服せず　次は大和太夫、喜之助の『妹背門松質店之段』之れは先づ平凡の出来なりき、然し今少し能く出来たらんには余程聞きである可きか　切は識太夫文造の『先代萩政岡忠義之段』之れは中々能く出来たらんと存ずる、余り艶に流れずして聞き能かりき、十時過帰家しぬ　読経祈禱後就蓐、百花園など見ぬ

八月二拾一日　日曜日　朝来薄曇

此日朝九時頃上六番町に行き千頭氏を訪ふに不在なりければ、帰途和田氏を訪ふに倉部氏は本郷に在りとの事なりければ、去つて江橋を訪はんと飯田町に行きたるに折善く途にて江橋氏に逢ひ、閑を得ば遊に来れと云ひ置きて帰途に就きしが、思ひ出して市ヶ谷田町の江口君を訪ふに同氏不在なりければ引返して十二時頃帰家す、午後は昼寝をなし夜に入り入浴後松永を訪ひたるに不在なりければ干物と皿を置きて帰途、中黒にて写真を受け取り矢田にて都の花并に金波浄瑠璃集を買ひて帰り家にて都の花を読む　十一時過読経祈禱後就眠

八月二拾二日　月曜日　朝来晴天

此日午前は家にて金波浄瑠璃集を読みぬ、午前(ママ)二時頃梨を買ひて之れを食ふ、大石氏を訪ひ少時談話す　早川は十九日に船に乗りたれば多分廿一日頃には着高せしならんとの話ありぬ、四

時過帰る　六時過吉川栄氏来る　直ちに伴ふて家を出で、池の端を経て、広小路に出で同所より車にて浅草迄行き東橋亭に行くに、小政が『恋飛脚新口村』を語りつゝありぬ　さすが流暢にやつてのけらるゝ手際感服の外なし　次は小虎、永吉の『岸姫松、飯原兵衛館の段』、之れも中々面白く聞きたり、然しいま少し強くは出来ずや、次は呂幸の『紙治、内之段』先づ例の出来ならんか　少し新内的の所が少々出来た様な心持が致したり、切りは稲桝永吉の『御所桜三段目』先づ能き出来ならんか　然しいたく声を痛めて居るゝ様なりし故いつもの如くならず　甚残念なりき、十時過同所を出で車にて、上野迄来り、十一時頃帰家し直ちに就眠

八月二拾三日　火曜日　朝来晴

此日午前十時頃手紙を姉に宛てゝ認む　午後新聞など読む、晩方豊川に行き入浴す、談話中宅より呼に来りければ帰りたるに赤田氏あり　種々雑話す　九時過氏去る、祈禱して、就寝後浄瑠璃を語る

八月二拾四日　水曜日　朝来晴天

此日午前九時過豊川に行き新聞を借覧す、臨淵言行録を借り来りて午後は之れを読みぬ、こは故福富孝季氏の書翰、言行をも掲げ、友人諸氏の手に成りたる論文等もあり、我れ此の書に対して頗ぶる感慨多かりき、三時頃より金波浄瑠璃集の中『秋田義氏伝』并に二葉の楠を読みぬ　行文未だ成熟せざる所ある様にて何にとなく不快を感じたり、夜豊川に一浴す、拾時過読経祈禱後就眠

八月廿五日　木曜日　朝来晴

此日午前は家にありぬ　午後福島氏を訪ひ種々談話し三時過帰宅しぬ、夜に入り豊川に行き入湯後談話中赤田氏来れりとて家より呼びに来りければ帰り、九時過迄種々談話しぬ、十時過読経祈禱後就眠

八月廿六日　金曜日　朝来薄曇、午後晴

此日九時前吉川氏を表町の清気館に訪ひ少時談話す　去つて垣内氏を訪ふに不在なり、又大石氏を訪ひて種々雑話しつ、十二時前帰途に就きぬ、午後二時過より大石良凡君を訪ひ、種々雑話し晩方帰る　夜は家にありて『箱根霊験覿仇討』を読みぬ十時過就眠

八月廿七日　土曜日　朝来曇午後晴

此日午前は家にありしが午後豊川を訪ひ、預金帳を受取りて百十九銀行に行き、金十六円だけ受け取りぬ、矢野氏非常に周旋して呉れたり、江口、藤岡の二氏と共に扣所にて雑話しぬ、四時頃家に帰り着きぬ、六時過家を出で吉川氏を訪ひ共に出てゝ九段の富士本に行きぬ、客も未だ来らざりき、小照と云ふが『三日太平記、嘉平治住家之段』を語り居りぬ、先づ無難に終りぬ　次は東吉の『嫩軍記、熊ケ谷陣屋之段』此の人は今少し能く語る筈なるが此の日は如何にしてか、先づ出来よからざりき　次は駒之助の『菅原手習鑑寺子屋之段』之れは余り感服せず此の人は先頃は大分力もあり、声も強く出でしが、此の頃は何う

やら、艶に落ち時々肩を上げ下げして声をかすませんとするなど頗る細工に過ぎる如き様子なり、為めに聞き堪えなかりき、次は東代玉の『璧の仇討』例の埒もなき者なれど客は大受け、実に浄瑠璃聞く趣味の乏しきは憐れむべし　大切は越子花友の『天網島時雨炬燵治兵衛内之段』、年齒二八位の小娘にして、音声に力は入らねど、越路の僻をよく呑み込みて一挙一動、其の心持をすてず宛然たる一個の雛形の如き、むしろ聞くよりか見る方が余程面白く感じたり、然し語り口も大分善き方なれば、益ゝ切磋の功を積みなば、隨分聞ける様になる可しと存ぜらる、十時前同所を出で坂下にて吉川氏に別れ、神保町、小川町等を経て帰家しぬ、十一時頃読経祈禱して後就眠しぬ

八月廿八日　日曜日　朝来曇午後雨

此日午前より豊川を訪ひ、昼食を喫し、智恵子の画を彩どりなどし夜に入り入浴せり、別になす事もなくて十一時過読経祈禱後就眠しぬ

八月廿九日　月曜日　朝来晴

此日午前より智恵子、静江など遊びに来りぬ、午後三時過戸川氏来り、久振りの出会なれば種々放談し午後八時頃帰り去りぬ、女学生の夏期号外を借りぬ、氏去りて後豊川に行き湯を貰ひ一浴せりき、十時前外出し本屋にて桂園叢書并に柵草紙卅五号を購ひぬ　十一時過読経祈禱後就眠

八月卅日　火曜日　朝来晴

此日午前豊川に行き、新聞を借りて見る　午後は柵草紙を読みぬ、『忍の乱』と銘じたる我文集を作らん事を思ふ

九月に入りて眼の血膜炎にて春日町の須田病院へ通ひ、十月に入り漸く癒え、甥の草郷太一を托され、同人を伴なひて土佐へ行き、太一を共立学校へ入学せしむ。初めは植村屋（郷宿）に宿りしも、間もなく中島町に庭広く梅樹多き家を借り、みよをつれ来りて炊事をなさしめ、此の家に翌年春頃まで住ひたり。草郷姉上の東京より筑前へ帰らるゝみちすがら立ち寄られしは十一月頃なりしならんか。

去る九月の初めつかたより少しく眼を病みて、久しく日記の筆取るを息みつるに、其後俗事纏綿、稍やく怠りがちになりぬ、されどかく数年来思ひ立し事全く打捨んも如何やと思ひあれば、爰に、拾二月の壱日と云へるに再び筆次ぐ事になしぬ

拾二月壱日　木曜日　朝来晴風寒し

此日午前八時過、出校、授業例の如し、自助論の課を岡本氏に譲り渡す、去れば来る三日には一時間も出席するに及ばぬ訳になりぬ、三時前学校を出で帰途郵便局に立寄り若狭並に筑前に宛たる手紙を托す、家には土居氏待ち居りぬ、仝氏にバーンス第二、四読本を教ゆ、五時前、篠原氏を訪ふ、仝氏は風気にて就蓐中なりき、少時談話の後帰家す、物理書を少々読む　縫直しのどてらを始めて着す、拾時過就眠読経祈禱をなす

拾二月二日　金曜日　朝来晴天

此日学校に出づる例の如し　二級生の歴史の日課を取る　拾時半過より県会の傍聴に行く、公報布告費の件に付き議論大分に有りたり、拾壱時半過帰校、壱時過より会議を開き、種々の件を議決す、三時頃帰途に就き、道にムアー夫人に逢ひぬ　横田氏を教ふる事は一週間に二度位は出来るとほヲプ氏云ひぬとの答を得たり、途に柏井氏に逢ひ仝道して家に入り談話中、南洋会の人来りければ此の人等に文明史を読みてやりぬ、柏井氏去りて少時三森の妾来り相手にして種々雑談す、日暮れて帰る、夜に入り二級生の歴史答案に評点を付す、三上良吉氏よりの手紙に接す、眼鏡の繕出来て運送に付し呉れたる由なり

拾二月三日　土曜日　朝来晴

此日午前八時久米氏訪ひ来りぬ、臥したるまゝにて仝氏と語る、午前九時過出校、拾壱時過久米氏等と共に柳原に行き高等小学校の運動会を見物す　午後二時過帰宅昼食をなし仝氏と仝道、田岡氏を訪ひ吊辞(ママ)を述ぶ　帰途井上に逢ひ同道す、新聞を見るに高知日報にムアー氏の事誹謗しありぬ、午後四時頃帰宅、五時前外出し桝形の角の理髪屋にて髪を刈り入浴して帰る　八時前家を出で稲荷座に行き演説数番を聴きぬ、別に感服する程の事もなし　拾壱時前終りて後余の名が弁士の中へ掲げありしは何故なるやと発起人に質問す、其答へは兼て余に相談す可かりしに其手続を果さずして前に書き置きたる看板を其侭出したるなれば其の軽急の段は免じ呉れよとの事に付き、立帰りぬ

拾二月四日　日曜日　朝来晴

此日午前九時頃起床、拾時過、昨夜の演説会の発起人中西楠吉外一人来りて前夜の挨拶をなしぬ、人々去りて、翻訳の添削并に下読をなしぬ　四時頃外出河本を訪ひ小倉氏をも叩く、来客ありければ直ちに去りて松岡の持ち家を見る、其れより直ちに帰家、五時過晩食六時過河本を訪ふに右太郎氏在宅しぬ、二三軒先きの池田と云ふ人の家が近々明くならんと思はるゝが故に其所にしては如何かなど云ふ話あり　兎に角に明早朝行きて見る事に決す、其れより月下をたどりて種崎町の谷内氏を訪ふに娘さんのみ居りぬ、本を返して貰ひ其を持ちて東行し新地を通りて五台山の方に行き青柳橋上に立つて徘徊し、冬夜の月景を賞す　四顧人影なく長江悠として山影をひたす、実にや絶景爰に止めたりと感じぬ、帰途金波楼に立寄り若浦に逢ふ　此の夜は大きに騒ぎしかば彼れ余を堅き人と思ひしに、こは頗ぶる意外なりとて呆れぬ　拾壱時前帰途に登り車を傭ひ、帰着せしは拾壱時過なりし　読経、祈禱後就眠

拾二月五日　月曜日　朝来薄曇九時前より晴

此日朝八時過河本氏を訪ひ池田氏の家を見る、先づ堪へ得可きさまなりければ、若し此れが明けば借りる事に取極めぬ、学校に出で授業事なくすみ午後二時前帰宅、土居氏を教ゆ、小倉君来り給ひければ靴下のつくろひを頼みぬ、夜へ掛けて下読をなしぬ、早稲田文学廿八号を読みぬ　拾時過就眠　読経祈禱例の如し

拾二月六日　火曜日　朝来晴頗ぶる暖気

此日午前八時前坂本氏来りぬ　ユニオン第四を少し読む　金を

五拾銭月謝として呉れぬ　学校に出で、授業事なく終り帰途、郵便局にて小為換に壱円を取組む、家に帰りて、土居氏を教ゆ、氏去りて後別になす事もなく少時を費し其れより夜に掛けて下読をなしぬ　就眠前読経祈禱す

拾二月七日　木曜日　朝来雨

此日学校に出づる例の如し　終りて後帰宅す、岡本勇吉郎君を全道す　五時前横田氏来る、三人相伴ふて延命軒に至る　来客は追々詰め掛け来りて午後六時頃より開筵す　小杉と云ふ人は四拾六七位の躰格肥満の人なり、宴酣にして視学官、余に杯を属して云ふ　『余は子の兄辰猪氏と同窓且草郷とは同郷なれば至極懇親なり』と　我は相応の挨拶をなしぬ、八時前、同所を出で本町の下より乗車し新地に行き金波楼に至りたるに若浦には先客ありとの事なりければ、二階にて暫時待ちぬ　拾時頃客去り、我れ彼れが部室に引かれぬ、相変らず詰らぬ事を云ひて、拾二時頃まで止まり、其れより車を走せて帰る、就眠前祈禱読経をなしぬ

拾二月八日　金曜日　朝来晴

此日学校に出づる例の如し、午後壱時過小杉視学官吉田為本村岡の諸氏を伴ふて来校、午後二時帰宅、四時過、延命軒に小杉氏を訪ふ、座に村岡、吉田の二氏あり　追々来客ありければ晩方辞して出ず　歴史の下読并に雑誌類を読む、就眠前読経祈禱す

拾二月九日　土曜日　朝来晴

此日朝坂本、其他の人を教ふ、午前九時過出校、拾二時前生徒を集めて演説をなす、終つて帰宅、午後楠山柏井両氏来りければ種々談話す、少時にして二氏去りぬ　七時前柏井氏来りて、余の被盗品の都の花を本町の書肆にて見掛けたる由を云ふにぞ直ちに伴ふて行き見るに其の品に相違なきにぞ警察署へ持ち行きて捜査の件を依頼す　本の賣主は本多小次郎ならんと思われぬ、午後八時過帰家するに巡査は柳田の内へ調べに行きし様子なりき　拾時頃就眠読経祈禱例の如し

拾二月拾日　日曜日　朝来晴

此日午前八時過外出、鷹匠町の角にて本多に遇ふ　巡査にも道にて逢ふ、其の云ふ所に依れば本多を今朝調べたれど別に疑ふ可き所もなく、犯人は他に有る如しとの事なりき　即ち引返して帰家す、拾時頃柏井、楠山の両氏来りぬ　相共に教会に行きぐりなん氏の説教を聞く、午前拾壱時過帰宅、昼食後下読をなし午後二時頃桝形より車に乗りて本町筋の久米氏を訪ふ　談話中為本田所の二氏来りぬ　家を出づるに池氏にも行き逢ひぬ　相伴ふて築屋敷の河田を訪ふ　座に五六の人々あり、囲碁の最中なりき　追々時も立ち晩方より酒になり、笑ひつ語りつ飲食す　八時前帰家、翌日の下読をなしぬ、就眠前読経祈禱を忘れず

拾二月拾一日　月曜日　朝来晴

此日午前八時過出校、先日来の盗品事件に付き少時談話す、青山氏は頗ぶる本多に疑を置きぬ、警察署より盗難品の件に付き

呼び来りぬ、青山氏行きぬ　昼食後警察署よりは使を以て片岡公吉を呼びに来りぬ、余も午後二時過一度帰り其後警察署に出頭し警部に逢ひ捜査の模様を聞くに未だ終極の点迄は至らねど、先づ此の人々の内は外れまじと云ふ所には進み居れり　然し其の誰れが犯人なるや等に至りては今此れを公言する事頗ぶる迷惑の至りなり』と云ふにぞ直ちに学校に行き、青山氏に其の事を話し大橋通りを南行し鏡河辺を通りて帰宅す、種々取調べなどをなして日を暮し、午後七時頃になりて本多小次郎来りて、『人違ひにて警察署より盗賊の嫌疑を受け今や罪、罪に陥らんとするの悲境にあり、願はくは一言を添へて警察の方を猶豫して貰へずや』など云ふに我れ大抵に話をなして帰しぬ、拾時過就眠、読経祈禱

拾二月拾二日　火曜日　朝来晴

此日午前九時頃寝起、上野、片岡の両人来りて前夜本多の来りたる事に付き話し出し、何うか内裁(ママ)にして呉れよなど云ふ　余は只漠然たる事にては少しく取り計らひ(ママ)憎しと云ひたるに彼等は本多が余の盗まれ品を携帯せる由を語るにぞ余は直ちに彼等を柳田に行かしめ余は学校に行きたるに久米青山の二氏あり、今朝の事情を語りたるに『若し彼等が品を返し来りたるに内裁に出来ぬとあらば之れ恰も人を釣り出す様にならん』の注意を受け、直ちに藤崎朋元氏を訪ひ、盗賊捜査願下げの件を相談したれども別に名案もなく、只教師と云ふ職務の表面より警察官に頼む事あるのみとの事なりければ青山、谷氏の所に来りて其の報告をなし直ちに警察署に行き西本と云ふ巡査に逢ひ、種々談判して見たれど、到底内裁には行かぬとの事故詮方尽きて其旨谷、青山両氏に申し出で、帰家せしは午後二時頃なりき　四時頃上野、片岡の両人来りたれど私裁の手段尽きし旨を以て両人を返しぬ、夜に入り種々取調をなし拾時頃就蓐、読経祈禱を怠らず

拾二月拾三日　水曜日　朝来晴

此日午前八時過久米君来りぬ　前日来の事件を話す、試験の問題を作る　小倉君午後来りぬ　君去り横田氏来り共に語りぬ　夜に入り氏去る　問題を作り終る、拾時過就眠読経祈禱常の如し

拾二月拾四日　朝来晴

此日は午前拾時頃横田氏来りて種々談話す　拾二時頃警察署より召喚状来りぬ　昼食後直ちに出頭するに意外にも余の盗まれたる衣服もあり且届けになき品ありとて追加の届をなす可き由を命ぜられぬ　学校の品も届け出なき物あれば仝様の手続をなせとの事なりしにぞ学校に行き青山氏に其旨を伝へ直ちに帰家して追加の届出をなす、青木氏も警察署に居りぬ、品物を渡して呉れしかば領収書を出しぬ、書肆は皆被害者に書物を返すとて警察署にて諸種の書を書肆の主人より渡し呉れぬ　帰宅後四時過本町の樋口と云ふ本屋に行き日本地文学、長沢算術書、如氏地理教科書の三冊を買戻す談判をなしぬ、四時過帰家しぬ、夜に入りては別になす事もなくて就眠しぬ　読経祈禱をなす

＊此日東京へ書状を出す

拾二月拾五日

此日学校に出で種々質問を受け拾二時頃帰途に就きぬ、二時過横田氏と共に家を出で諸所を歩き廻りぬ　夜に入り日課点の調べをなしぬ、就眠前聖書を読み祈禱

拾二月拾六日　金曜日　朝来晴

此日午前八時過出校、翻訳并に読方の試験をなす　午前拾二時前帰宅す、午後小倉君を訪ひ、暫時談話す、夜に入り点数調べをなす　八時前家を出で木屋橋より車に乗り、金波楼に行き若浦に逢ひ、共に語ること中々面白かりし　彼此の夜は酒気を帯びてありぬ　拾時過車にて帰家す、就眠前読経、祈禱

拾二月拾七日　土曜日　朝来晴

此日午前八時過出校　文法の試験をなす、午後二時前久米、横田、池の諸氏と学校を出で九反田なる岡本氏を訪ひ令嬢の死を吊ふの辞を述ぶ、帰家後、別に用事もなし、夜に入り堀詰座に行き、浄瑠璃を聞く　最初は『日吉丸』なりき　左程感服せず次は高尾太夫の『恋娘鈴ヶ森』此の人余りに一本調子の様なりき　次は相生太夫の『合法下の巻』左程名人とも思はず、拾時頃帰寓　就眠前読経祈禱

拾二月拾八日　日曜日　朝来晴

此日朝拾時前横田氏来りぬ　共に外出し、天神社内迄散歩し又帰つて横田氏の寓を訪ひ、種々雑話す、拾二時過帰寓　昼食後直ちに衣服を更めつゝありしに横田氏来りければ共に出てゝ西山の内に居る久米氏を呼出し永国寺町の池氏を誘ひ岡本氏令嬢の葬儀に会す、二時頃出棺下地の堤迄見送る　帰途横田氏を訪ひ雑話数時、五時前帰る、みよ今朝よりの病気未だ癒へず、夜に入り医者を聘して診察を依頼す、我が足の腫物をも見て呉れたり　拾時頃就寝読経祈禱をなしぬ

拾二月拾九日　月曜日　朝来晴

此日学校に出づる例の如し　試験をなす　午後帰宅　晩方迄答案を調ぶ　別になす事もなく日を費しぬ　拾時過就眠　祈禱、読経を忘れず

拾二月二拾日　火曜日　朝来晴

此日学校に出づる例の如し　岡本氏は前日来病気の故を以て出校なく、地文学の試験を監督す、帰家後別になす事もなくて過ぎぬ、夜に入りて早稲田文学を少々読みぬ、拾時過就眠読経祈禱例の如し

拾二月廿一日　水曜日　朝来晴

此日朝出校、午後二時前帰宅、午後五時過、横田氏を誘ひ本町堀詰座に浄瑠璃聞きに行く、最初は相之助綱吉の『朝顔小屋之段』稲恵君評して云ふ不達者と　蓋し公評なり　次は住清の『安達宗任物語之段』之れも余り感服せず　惜むらくは、声の低き事よ、次は綱吉の『増補管原、松王屋敷之段』之れは四辺の喧囂にまぎれ能く聞き取れざりし　次は相寿太夫の『彦山六助住家之段』可成、然し明亮ならざりしは残念、次は高尾太夫の『拾種香』余りに感服もせず　少し一本調子になりそうなり

き　次は相生太夫の『恋女房、沓掛』之れは始めの部分少々聞きて立出でぬ。岡林に行き牛肉を食し酒を呑みぬ、拾一時前帰家就眠

拾二月廿二日　木曜日　朝来晴

此日朝より家を出でず　足の腫物并に風引きの故を以てなり

森亀齢の東上に托する為め二三の品を買ひ来らす　午後腫物を潰す、森には太一を遣しぬ、夜へ掛け試験点の調をなす　拾時頃就眠　読経祈禱を忘れず

拾二月廿三日　金曜日　朝来晴

此日学校に出で点調に着手す　午前にて終りぬ　午後より諸所を歩く、壱時過昼食後別になす事もなし　雑書を渉猟しぬ　夜に入り就眠前読経祈禱をなしぬ

拾二月廿四日　土曜日　朝来晴

此日朝九時頃出校、懇親会の事を議す、議中々に纏らずして、一度公園に行き、其後、稍やく安金にて呑むと云ふ事に決し、三時頃会合の事に定め五台山行を決し東行し、行く一町余、稲恵氏頃として異議を唱ふ　余は勝手の言合ひなれば、此方も怠る可しと引別れて帰宅す、暫時にして久米氏来りて余を誘ふにぞ又々出て稲恵氏方を訪ひ、田所、久米、横田三氏と共に岡林に行き酒飯を調ふ、其後、拳を打ちて最後に負けた者が動議を提出すべしとの事にて、かたの如く行ひしに久米氏負けて一先ず南河原に出べしと云ひ田所氏之れに次いで五台山迄行かんと云ふ、余は直ちに新京橋迄引返して解散すべしと云ひ、之れにて先づ施政の大方針定まりければ、先づ南磧に出で其れより下へ行く、四人続きて歩くは都合悪るしとて二人宛別る　余と田所氏とは掛川町より朝倉町に出でたるに歩行も苦しければ乗車せんと云ふに別に車もなし　種崎町に出でたるに他の二氏の影だに見へず、田所氏は二氏の信実を疑へども余は兎に角、約束通り青柳橋に行くべしとて菜園、農人町を経て、新地を歩するに此の日大坂俳優の着船を迎ひの為めとかにて、車が旗を立てゝ多く并び居り、娼家の婦女多く出でゝ外を眺め居りぬ　金波楼の如きは家中総出の有様、田所氏は大に閉口の有様にて帽子を眉深に冠りて足早に打過ぎぬ、青柳橋に至るに二氏を見ず、田所氏は「扨こそとて」帰らん事を主張す、余は先づ兎も角も橋を越ゆべしと云ふ中対岸に人を呼ぶ声す　多分二氏ならんとて、橋を渡りて行くに山上、二氏あり曰く車にて先き程来りぬと　其れより田所氏の進まぬを促し立てゝ墓を探り路を求めて文珠に行き又本道を求めて下る時、既に四時頃なりき　雑話笑話し再び青柳橋に出で車を求めて帰途に就き新京橋の手前にて下り、南行し大貞と云ふに立寄り酒を呑む　話次隅清の事に及びて彼れを呼ぶべしとて呼び来り『彦山』を語らす　余の『大十』をも出し大に騒ぎぬ、其後八時前にてやありけん帰らんとするに横田氏隅清を家に連れ行かん事を云ひ出たるに余も賛成を表し久米氏も同道にて横田氏方に行き又々大きに騒ぎ拾時過帰途、胸苦しければ家に入りて無理に吐しぬ　其後就蓐せしが度々目覚ぬ

拾二月廿五日　日曜日　朝来晴

此日午前九時過寝起、堤上を散歩す、午後は別になす事もなく書を懐にして家を出で、下地の堤を廻り青柳橋を越へ五台山に行き大島崎にて、書を読む　あぢそん伝なり、其後午後五時前帰途に登り急いで帰宅しぬ　夜に入りあぢそん伝を読む、拾時過就眠、読経祈禱す

拾二月廿六日　月曜日　朝来薄曇、夜に入り静暖

此日朝より書を読み、あぢそん伝を終り、次いで鶉衣を読み始む　文章なだらかにてそゞろに humour の溢るゝが如きを見る　昨はあぢそん伝を読み、今は此の文を読む　何にとやらん脈絡あるが如き心地せしも我が迷ひなるべしや　午後六時頃出家、農人町迄徒歩し車にて金波楼に行く　若浦には先客あり　他に代りをとて初桜と云ふ妓の部屋に引かれぬ、初めての出会故余りに話しもせで別れぬ、拾時前帰途に就きぬ　家にては読経祈禱後就眠

拾二月廿七日　火曜日　朝来晴

此日朝九時頃寝起、坂本を教ゆ　午前より鶉衣を読む、午後二時過入浴す　別になす事もなく矢張書物を読みぬ、晩方鶉衣を読み終りぬ　其後しがらみ草紙など読みぬ　夜に入り拾時過就眠読経祈禱を忘れず

拾二月廿八日　水曜日　朝来晴

此日九時過坂本に書を教ゆ　午食前太一に訓戒を加ふ、午後は地文学を読み、夜拾時過迄に二百頁読みぬ　就眠前読経祈禱す

拾二月廿九日　木曜日　朝来晴

此日朝九時寝起、坂本を教ゆ、午食後出家、池氏を訪ひ挨拶を述べ東野氏を訪ひ弔辞を述べ、其れより帰路、岡本氏を訪ひ見舞を云ひて帰りぬ、別になす事もなくて夜に入り就眠す、読経祈禱は忘れず

拾二月卅日　金曜日　朝来晴

此日朝九時過起る、午前は新聞など見、午後二時頃出てゝ東野氏に薬代を払ひ、第七銀行に行き金二拾円を預け、其れより五台山に行き風色を賞し、読書す　『かれりつぢ』の『くりすたべる』を読みぬ　五時過帰途に就きぬ　種崎町にて昨日義末氏安着の由を聞きぬ、六時頃晩食、太一に端書を買ひ来らせて年賀状を認む、拾時過就眠、読経祈禱例の如し

拾二月卅一日　土曜日　朝来薄曇

此日午前九時頃寝起　午前は別になす事もなく送り午後も別段の事なかりしが、午後五時頃家を出で、井本に行きて家賃を払い、其れより種崎町に行き谷内家を訪ひ暫時義末氏と語る、六時頃仝所を出で東行し木屋橋より車を傭ひ、金波楼に行き若浦に逢ひ種々の話をなして拾一時頃迄遊びぬ　此の夜は彼れ鑑札を見せて呉れぬ、大坂の者にて岩槻いくと云ふ本名にして明治二年六月生なり　仝所よりは車にて帰宅す　家には拾壱時過帰り着きぬ、読経祈禱後就眠　姉より手紙届きてありぬ　嗚呼明治廿五年の事歴は余に於て実に慙愧すべき事のみ多く、只々自活の道を立て行く事が出来し事のみ喜ばしとや云はん

明治廿六年壱月壱日　朝来晴天昼頃より風あり
此日午前八時頃寝起、雑煮餅形の如く祝ひて、出でゝ太一を伴ひ、河田、青山、久米、横田の四家に名刺を投じ、帰途小高坂に行き太一を帰へし、楠山、田岡の二家に刺を投じ、其後井上氏を訪ひ、少時談話の後教会に行き植村君の演説を聴く、昼前帰家し午食後衣類を更めつゝありしに小倉姉来り給ひて東京行きの工合宜しきが故にまづ他に引移る事はやめるとの事なりければ余はあとの家を借りることできずなりしかば大きに失望せりとて別れぬ、其れより篠原、山内家、川本、小倉、田所、谷、岡本、坂本の諸家に刺を投じ谷内氏を訪ひ仝氏方にて紙を貸(ママ)り、名刺を作り、東野、池、西内、片岡の四家を廻りて帰宅し、又出てゝ竹田、楠目の両家に刺を投じぬ　其れより河原通を帰る、柳原にて職人躰の若者三人しきりに相撲を取りつゝありぬ　我暫時之れを見物し、四時頃帰家しぬ　晩食後六時過高知教会に行きたるに植村氏余を岩本氏に紹介し給はりぬ、片岡氏にも逢ひぬ、岩本氏并にナックス氏の演説を聞き、九時頃帰家其後ぢきに読経祈禱なして就眠しぬ

一月二日　月曜日　朝来晴昼頃より風出づ
此日午前九時過寝起、学校の小使が新聞を持ち来り呉れたれば之を読む　拾壱時過、谷内義末氏来りぬ、少時談話の後出でゝ本町の木屋に行き植村、岩本氏に逢ふ　氏等は種々余の為に宗教の必要を説き給はりぬ　一時前帰宅、又義末氏と語り二時過出でゝ南磧を経、天神橋を渡り天満宮に賽し其れより東行し農人町を経、稲荷新地を通り青柳橋を渡り靖国神社に行き所々を眺め又、本の道に依り、種崎町の谷内氏に立寄り、少時談話の後直ちに帰宅す、時に五時過なりき、晩食後、歌など唄ふ

一月三日　火曜日　朝来晴夜雪
此日午前九時頃起き出づ　午前はうやむやに送りぬ　午後柏井氏来りぬ　共に出でゝ唐人町の土田氏を訪ふ、小倉氏にも至りぬ、帰途篠原家を訪ふ、方愛君は高岡に在りて此週間は帰家せざる由を妻君より聞きぬ、晩方帰家す、寒かりければ外出せず拾時過読経祈禱後就眠

一月四日　水曜日　朝来曇午後雪降る夜晴
此日九時過寝起、拾二時過降雪いとゞ盛んなりければ装を調へ外出したるにぢきに降り止みぬ　寒風を冒して天神の森に至る夜に入り六時過高知教会に行き小倉、グリナン、岩本三氏の説教を聞きぬ、九時過帰家　拾時過読経祈禱後就眠

一月五日　木曜日　朝来晴
此日午前九時過苓君来り給ふて、西山の家を借りるに依り唐人町の家を借(ママ)す事が出来るとの話ありぬ、午後二時過池氏を訪ひ太一を教へる事を頼む　去つて種崎町に至り義末氏を訪ひ暫時雑談す、帰家後別になす事もなくて夜を費しぬ　拾時過読経祈禱後就蓐

一月六日　金曜日　朝来晴
此日午前学校に出づ、別段の事もなかりき、只岡本氏引籠り中故、我々が二三時間宛、担当増しをなす事になりしのみ、昼食

後出でゝ横田氏を訪ひ、雑談後共に出でゝ天神社内に至る　其れより大橋通りを北行し本町に出で、仝所にて横田氏に別れ、単騎東行し種崎町を通り材木町新町を経て、下地に行き小松を訪ふ　老人は不在なりければ去つて田畦を伝ひ青柳橋に出で、五台山の県庁跡に登り四方の眺を取り、其れより少しく登りてテーブルトークを打開きて数頁読み又道を求めて文珠堂に至り其れより又山の彼方に下り水に沿ふて帰路を取る、大嶋岬に至りて夕陽の西山に入り、家路に急ぐ船人の様などを眺む、六時少々前仝所を打立ち、金波楼に来り若浦に逢ひ、鮨を取り共に食す、此の夜は実に笑ふ可き事度々ありき、拾時過、仝所を出でたるに車ありければ之れに乗りたるに木屋橋の此方にて町を間違へたれば下り呉れよと云ふにぞ下車し徒歩して帰宅しぬ、拾壱時頃読経祈禱後就蓐

＊朝井上君訪来り給ひぬ

一月七日　土曜日　朝来晴暖気

此日午前九時頃、横矢重吉来りぬ　種々談話の後拾一時前仝人去りぬ、奴の小万、都の花、夏小袖を貸しぬ、学校に出で拾二時迄教授に従事す、帰家昼食後久米氏来りて上町の青年会に来りて書を講ぜよとの依頼あり、余は一週間に壱度ならば宜しと云ひぬ、氏去りて後は都の花を読みぬ　晩食後都の花を小倉君の許に持ち行きぬ　本町に出で西行し桝形にて細井より椎の実二銭だけを買ひ益々西行して蜜柑を買ひて帰家し、地文学を開き且読み且食ふ　拾壱時頃読経祈禱後就蓐

＊二時頃入浴しぬ

一月八日　日曜日　朝来晴　温暖春の如し

此日午前九時過寝起、昼食後下読をなし、壱時過桝形に行き髪を刈りて貰ふ、細井より椎の実壱合を買ひ、入浴後家に帰り、之れを食ひぬ、三時過家を出で南磧を経て唐人町に行くに苓君の御老母に謁し、西山の家が近々に明くとの事を聞きぬ、東行し雑喉場より一つ手前の越戸を越へ南行し種崎町に出で本町を経て帰家す　晩食後文法書、物理書等を読みぬ　七時過高知教会に行き岩本氏の『基督教と教育』、植村氏の『罪』の演説を聞きぬ、九時過帰家し拾時頃読経祈禱後就蓐

秋骨の孤蝶にあてた英文書簡

——恋と文学の栄えを願う秋骨の訴え〔解題〕

木戸昭平

明治二十九年三月、東京市本郷の戸川秋骨（明三）から滋賀県彦根の馬場孤蝶（勝弥）に宛てた英文の返書である。秋骨、孤蝶はともに明治学院の同窓生で、明治二十一年、秋骨が同学院普通学部本科二年に編入したあと、遅れて孤蝶も入ってきた。年齢は秋骨が十九、孤蝶は二十であった。同二十六年、秋骨が『文学界』創刊に参加し、その後、孤蝶も加わった。『文学界』では最初、平田禿木が一葉の原稿を督促する係であったが、のち孤蝶に交代した。孤蝶が禿木や秋骨とつれだって一葉を訪ねることもあったが、その大半は孤蝶単独の訪問であった。「文学界」の所用にかこつけてか、孤蝶の一葉訪問は連日にわたり、禿木、秋骨もあてられ気味であったろう。そのピークは同二十八年の四、五月であった。当時、秋骨は二十六歳で東京帝国大学英文科選科に入学したばかりであり、孤蝶は中等教員検定試験の受験勉強に熱中していた。そして孤蝶の一回目の試験、二回目の試験、合格の喜びなどをわがことのように刻明に日記に記録する一葉であった。五月末に合格通知をもらった孤蝶は滋賀県彦根中学校の英語教師として赴任することになる。孤蝶はなぜ、彦根のような僻地に甘んじて赴いたかという疑問には『一葉に与へた手紙』（昭和十八

年一月、今日の問題社刊）の解説や註釈がある程度答えてくれる。それには

小金井の紀行文前後から天知との間に面白くないことがあり、孤蝶はすでに文學界脱退を決意してゐたらしく見えるから、或ひはその邊に東京を離れる心理的契機があったのではなからうか。

とある。同四月二十八日の一葉の日記には「《孤蝶が》小金井の紀行文社よりは掲載をことはられたるに君だに見すて給ひそとて見す、此夜もいたくふけてかへる」と孤蝶の心情を伝えていた。

「文学界」の編集人は星野天知であり、孤蝶の原稿は没になったのであろう。このあたり天知の言いぶんは

池ノ端へ秋骨が下宿してから藤村、孤蝶の舊友も集り禿木も往來繁くなったので、自然理想論も高潮してくるのは青年活氣の通習である。何れも若い器だ。即ち純文學の一點張りとなって、誘導の雜誌といふ事も忘れて、一つの不平を捲起した。其結果は排他主義となって毛嫌ひが始まる。

（星野天知『黙歩七十年』昭和十三年十月、聖文閣刊）

というようなことで、また天知は雑誌の金主兼編集人であり、孤蝶より七歳の年長でもあったからその溝は埋めにくくなったにちがいない。しかしもともと孤蝶、秋骨、禿木のグループは仲がよく、孤蝶に同情した秋骨が出した便りのひとつがこの返書であったと思われる。孤蝶は東京を去ったものの、一葉との別れは大いに未練があったらしく、恋文まがいの長文の手紙をなん回も彼女に送っている。孤蝶が東京を去って、代りに足しげく一葉を訪ねたのは秋骨だった。だから一葉の消息は二人の間で取沙汰されたはずである。

秋骨が度々伺候してお邪魔をするよし當人も夜分などはさぞおうちのお方など御迷惑な事であろうと頗ぶる恐縮のあまり僕よりよろしく御詫を申し上げて呉れと申し來つた云々（明治二十九年二月四日付）

というのは孤蝶から一葉にあてた手紙である。ところがこの文の末尾には、東京の親類から結婚のすすめがあって逃げまわっているといったことを臆面もなく書く孤蝶だ。秋骨の英文の書簡はそれから一か月半後に来たものである。だから、その中にでてくる「例のひと」というのは、結婚話の当の相手であっても別に不思議ではない。「芳紀十四歳」というのは若すぎる感じがしないでもないが、対女性関係ではかなりしたたかであった孤蝶がこのような「プラトニックなのに御恋着」というのが、またかえって自然であるとの見方もできる。このときにはまだ一葉の病気については、本人はともかく孤蝶は自覚してなかったと思う。孤蝶の長男故昂太郎氏が筆者に語ったところによれば「おやじは一葉の恋人の本命はボクだったよ」と述懐していたというから、一葉や、結婚の話題になる新しい女性をならべて迷っていたのかもしれない。しかし五月十七日付の孤蝶の手紙によるとあきらかに「君〃一葉のこと〃が御身體の御健全ならん事を祈り申候」とあるから、そこへいきつく過程にこの書簡はある。秋骨は先年、一葉に宛てた手紙のなかに孤蝶を「兄サン」などと書いて甘ったれているが、「例の海岸」というのは文学界同人とも関係深い湘南海岸であろうか。文学仲間の川上眉山は世評高かった「書記官」や「うらおもて」（ともに明治二十八年）を発表してまもなくのことであり、落ちこんでいる島崎藤村も奮起さして終りかけた文学青年のロマンを孤蝶ともども回復したい秋骨の願いがにじみ出ているといえる。

（国立高知工業高等専門学校非常勤講師）

Friday Morning

Dear Kocho,

You are so dutiful in every particular! I am fully appreciated on the situation in which you are put in.

Be sure I am not at all offended with your letter. Rather I anticipated that you will be offended on account of disappointment for a poor articles. Well be it so. But there was another failure. O might I have known the age of……a little earlier. As soon as I got your letter, I went to purpose those which you have ordered & it was just ready to be sent when I received your second letter & learned that two of Kanzashi which I sent beside those of Tsuru & Samisen, were too sombre for a girl of 14 of age. Excuse me. I never imagined that your passion was directed to such a Dantique or platonic feature as a girl of 14 ages. Yes I made a great failure in sending you a rather so sombre kind of Kanzashi. If you order another more fashionable ones, I shall soon send them.

As for Hakubotan's place I accustomed from childhood to be impressed to be Ginza where I learned this time, chiefly oshiroi is sold, while same Hakubotan at Kyobashi chiefly deals with Kanzashis.

If you can come to that seaside, I am very glad to meet you there at my own expence. But anyhow it is so much expense to you especially in present circumstance when your passion is attached to another fairland of lakeside. Please do as you please. Perhaps, I might accompany you to that place when you return to Hikone.

To spend a few days there is my sole delight now, beside to have a converse with our few groups. I am wretched, nothing delights me. Private home affairs, public literary world & everything annoy me. Nay, this is caused because of the lack of my resolute will. But I will not say this any more. I will persuade Bisan to go with that beach, if we have to meet there. Toson is getting out of his illusion, but his circumstance got worse & miserable. He must be rather pitied now. Be of good Health & give my humble Yoroshiku to that fair "fille".

Expecting to see you soon,

Yours truly,

M.T.

―訳　文―

明治二十九年三月二十一日彦根局消印・東京市本郷区台町二一岡田方戸川明三より滋賀県彦根芹新町六六番地八田方馬場勝弥あて（原文は英語）

拝復　行き届いた御配慮には敬服の至りです。また、御近況慶賀に堪えません。

貴君の手紙で小生が立腹しただろう、などとはとんでもない。それどころか、当方からの粗品に失望して貴君が御立腹だろうと、当方こそ心配していたところだ。それはさておき、失敗はまだある。例のひとが何歳なのか、それがちょっと早く分かっていればよかったのだが――。実は、小生お手紙を見てすぐ御注文の品々を買いに出かけ、発送する間ぎわに第二信を受け取った。そこではじめて、鶴と三味線のカンザシはいいとしても、あとの二本は、十四歳の娘さんには地味すぎる、と気付いたわけだ。申訳もない。芳紀十四歳というような、ダンテ式というか、プラトニックなのに御恋着とは夢にも思わなかったよ。あんな地味なのを送って全く大失敗だった。もっと洒落たのを御注文なら早速お送りする。

白牡丹という店の場所は子供の時から銀座とばかり思い込んでいたが、銀座のは主に白粉を売っており、京橋の白牡丹が主としてカンザシを扱っているということを、今回はじめて承知した。

貴君もし例の海岸に来てもらえるならば、小生よろこんで自弁で出向きます。もっともそちら湖畔の美景に御熱中

とあらば、諸般の費えも相当なものでしょう。まあ貴意に任せましょう。彦根にお帰りの節は、あちらの方へお供しても宜しい。

そちらで数日を過ごすこと、仲間と語り合うことは、目下小生唯一の楽しみです。当方何をするも面白くなく、内は家庭のこと、外は文壇のこと、一切合切厭なことばかりだ。とは云うものの、元はと云えば小生の優柔不断が事の起こりなのだが——まあ、よそう。

海の方で会うとしたら、眉山を引っぱって行くことにしよう。藤村も夢がさめかけたようだが、かれ身辺悪化の一途をたどり、何とも気の毒なこのごろだ。

ではお元気で。その麗人によろしく。再会の日を楽しみに。

敬具

金曜日朝

M・T・

孤蝶兄

注　原文第一一行 *purpose* は *purchase* の誤記と認めて訳した。

（平林武雄）

『山本秀煌日記初号』
『山本秀煌日記第貳号』

解　題

真山光彌

山本秀煌（一八五七～一九四三）の名古屋伝道については、『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局、一九八六年）では、「〔一八〕七八年牧師試補となり、東京、横浜、名古屋、土佐、大阪などに伝道する」とひとこと言及されているが、この名古屋伝道に関する一次史料は、この山本秀煌の二冊の日記（明治学院大学図書館図書課史料室所蔵）と、植村正久が名古屋から井深梶之助に宛てた三つの書簡（明治十一年十二月十八日付、明治十二年二月十四日付、明治十二年三月□（ママ）日付、いずれも東京神学大学図書館所蔵）および『七一雑報』（明治十一年十二月二十日付他）以外には、ほとんど残存していない。この意味において山本の二冊の日記は、名古屋伝道に関する第一級の史料である。

さて、『山本秀煌日記初号』は、七五㎜×一五五㎜、また『山本秀煌日記第貳号』は、一一四㎜×一六一㎜の和紙に記されている雑記風の日記で、前者は、明治十一年四月一日から同十二年七月十七日までで四三ページ、後者は明治十二年七月十七日から同十四年五月八日末までで八三ページの日記である。従ってこの日記は、明治十一年四月、

山本が日本基督一致教会第二回中会で受けた聖役試補の准允の記述から、同年十二月、植村正久と共に名古屋で開始した伝道、植村が帰京した後は、米国メソジスト監督教会（美以美教会と略す）の定住伝道者たちと協力しながら名古屋と岡崎で行った伝道、さらに彼の故郷丹後国峰山の二回の訪問までを取り扱っている。

後年山本は、若き日の尾張名古屋伝道を回顧して、「傳道の草分け」『日本傳道めぐみのあと』（卜部幾太郎編、アルパ社、昭和五年）を著したが、これは『山本秀煌日記初号』に基づいて記されたものである。

名古屋はもともと浄土真宗の「金城湯池」と言われたように、仏教の勢力が強く、キリスト教の伝道が開始された時代は、仏教徒の厳しい迫害を受けていたので、プロテスタントの諸教派が互いに反目し合っていては、伝道ができなかった。従って、名古屋伝道事始の特徴の一つは、一致と美以美両教会が互いに協力して伝道を行っていたことである。現在もまだ、日本基督教団中部教区愛知西地区で継承されている初週祈禱会の起源が、明治十三年一月に遡ることを示すのもこの日記である。

また、名古屋教会、瀬戸永泉教会、岡崎教会の初穂の名前、授洗者名、日付などが、横浜『海岸教会人名簿』より正確に記されているのも、また、名古屋中央教会では忘却されてしまっていた初期の講義所名や受洗者名が確認できるのも、この日記によってである。

日記によると、概して山本は、名古屋の清水町講義所と岡崎の康生町講義所を二週間毎に往復しており、とくに岡崎においては彼を訪問する求道者たちに対して馬太傳を一章ずつ講義している。彼が用いた聖書のほとんどが馬太傳であったので、当時の求道者の関心が何処にあったかを示唆することができよう。

また、名古屋・岡崎の往復や彼の故郷丹後国峯山への旅行記は、現代の伝道旅行とは異なり、如何に困難だったか

を示す数少ない貴重な史料の一つである。岡崎への旅行は、人力車で早くても四時間半から五時間、丹後国峯山への旅行は、人力車、蒸気船、徒歩などで三日ないし七日もかかっている。定められた居留地以外での宣教師たちの伝道は、このようにして行われた、と推定できよう。

『第貳号』の終わりに記されているメモによると、彼が信徒や求道者に読ませた伝道用冊子と書物名が載っているが、これらからは明治十年代前半の伝道の内容や若き日の山本の神学的関心についても知ることができよう。山本が信仰に入る契機となった書物が、『漢譯天道遡源』と『天路歴程』だったので（『信仰三十年基督者列傳』三〇二ページ）、彼もまた、これらの書物を求道者たちに勧めていたことがわかる。

しかもこの日記は、以上述べた名古屋伝道だけでなく、山本が准允を受けた直後の、東京一致神学校時代の講義の状況や、彼の交友関係を知る意味においても重要であり、さらに、山本の関心だった当時の世界史についての記述も興味ぶかい。とくに、ハワイ皇帝の横浜海岸教会訪問、米国前大統領グラントの来訪、「佛國皇子陣没の顛末」「伊犁事件」「樺太千島交換條約」などは、今日なら簡単にコピーできるものだが、彼が丹念に筆で記述していたことは、彼の関心がすでに世界史にあったことを示す。後年彼がキリスト教史家として大成するその萌芽が、すでに彼の名古屋時代にはあった、と言っても過言ではあるまい。

ところで、筆者と山本秀煌の日記との出会いは、こうであった。一九八五年七月中旬、新教出版社で開かれた植村正久研究会で、筆者が「名古屋発植村正久の井深梶之助宛二書簡の年代について」という研究発表を行った時、秋山繁雄氏から名古屋時代の山本秀煌の日記が明治学院大学図書館図書課史料室に所蔵されている、というご教示を受け、翌日、同史料室を訪れ、それを一覧して感動した。これは長い間探していた原史料であるだけでなく、名古屋教会の

初穂である二人の受洗者の名前が、日付と授洗者名と共に明記されていたからである。これに基づいて記されたのが、拙書の『尾張名古屋のキリスト教』（新教出版社、一九八五年）である。

当時筆者は、植村正久と山本秀煌の名古屋伝道の史料としてだけでなく、尾張名古屋の伝道事始の貴重な一次史料として、この日記の翻刻を願っていたが、この度、明治学院大学図書館図書課史料室前主任・勝呂武男氏のご好意により、その機会の与えられたことは、明治学院大学に対して心からの感謝を申し上げるとともに、確認のための史料を提供してくださった国立国会図書館と東京神学大学図書館に対しても、感謝の意を表したい。

最後に、この翻刻に際しては、金城学院大学では同僚であり、かつ敬愛する高橋博巳助教授のご教示を得た。氏は国文学専攻で、貴重な時間をさいてこの翻刻にご協力くださった。もし氏のご協力がなかったら、翻刻が専門でない筆者には、ここまで正確に記すことはできなかったであろう。この場を借りて改めて感謝の意を表する。

（金城学院大学教授）

凡例

一、翻刻に際しては、できる限り原型に近い形で翻刻したので、漢字は原則として原文のままにした。

二、原文の体裁を維持することを原則とし、句読点は原文にあるものに限定したので、読みやすくするためには空白を入れたが、原文以外は句読点で区切ることをしなかった。

三、俗字・略字および異体の文字は、正字に改めることをしなかった。

四、明らかに誤字あるいは当字である場合には、「(ママ)」または正字を付した。
　ただし、字（時）、当着（到着）、新耳（新聞）などのような平字はそのままにした。

五、片仮名・平仮名はそのままとし、ヒもフもそのままとした。

六、解読困難な文字は□で示した。なお、近字の文字はルビの「カ」で示した。

七、文意の通じない個所も原文のままとした。山本が消去した文字は、「(ミセケチ)」とルビを付した。

八、本文中朱筆した個所があるが、「(朱書)」とルビを付した。

九、【　】内は、原文のページ数（和紙一枚で一ページ）を示す。

十、欄外の記事は［　］として収録した当該ページに入れたが、文中の挿入個所がわかるものについては、その該当個所に置いた。

十一、〔　〕内は、編者の注記である。

十二、注は、必要に応じて編者が付けたものである。

山本秀煌日記初号

明治十一年四月一日ヨリ二周間学校休業　三日ヨリ五日迄テ東京新榮橋會堂ニ於中會々議アリ　小生及ヒ他ノ書生是中會ニ於テ試験ヲ受ケ〔聖役試補ノ〕ライセンスヲ得タリ(1)

六日　好晴　雨森〔信成〕植村〔正久〕両人　高崎表ヘ傳道ノ爲出立(2)

七日　好晴　常ノ如ク麹町會堂ニ集會　奥野〔昌綱〕講義

八日　好晴　月曜日

此日暇ヲ得　井深〔梶之助〕藤生〔金六〕石原〔保太郎〕諸君ト上野ニ漫遊ス

九日　雨天　火曜日

十日　雨天　水曜日

午後七時采(ママ)東練塀町植村宅ヘ行テ講義　夜九時帰宅、

十一日　雨天　木曜日

十二日　雨天　金曜日

十三日　雨天　土曜日

十四日　朝曇　午〔後〕雨　日曜日

常ノ如ク麹町會堂集會〔ジェイムズ・H・〕バラ氏講義　午後二時長瀬ヘ至リ宿ス

十五日　雨天　月曜日

昨夜長瀬氏ニ宿シ　正午帰宅　午後二時出校　蓋此日学校初ナリ　馬久拉廉(マクラレン)氏以後日課ヲ改革シタルヿ演舌　則チ左ノ如シ

馬久拉氏聖経歴史ノ演舌月水金ノ三日【2】午後二字ヨリ　但シ金曜日暗誦　延武利(エンブリ)氏月火木ノ三日耶蘇ノ譬ヲ演説ス　亞麻門(アマモン)氏宗教比較論ヲ演舌火水金ノ三日午後三字ヨリ四字ニ至ル　午後四字帰宅〔是日奥野高崎ヘ出立〕(3)

十六日　晴天　火曜日

連日霏雨初テ晴ル　午前九字出校　十一字帰宅　午後出校常ノ如シ　午後五時頃ヨリ風邪氣ニ而臥ス　是夜吉田〔信好〕氏　浅川〔瀬〕〔浅〕氏　石原氏光來

十七日　晴天　水曜日

風邪未タイヘズ　半日床臥　午後ニ至リテ少シ快意アリ　午後二時出校宗教比較論演説休止　午後三時帰宅　仝五時藤生氏植村氏宅出講ス　午後七時井深氏光來　芝會堂〔築地六番館ノ長老教会〕開〔設〕并ニ高橋〔安川亨〕氏牧師ノ職ニツクヲ礼アルヲ聞テ　井深君仝道ニテ芝會堂ニ至リ　八時半頃帰宅　十二字就眠

十八日　晴天　木曜日

午前九時出校　十一時帰宅　仝時近事評論ヲ郵送シ來ル　午後学校林業〔休〕節部〔穡〕〔進村漸〕氏ヲ問フ　石原氏來ル

十九日　晴天　金曜日

是日病氣未タ全快セズ　午【3】後学業如常　午後八時吉田氏ヲ誘ヒ十時帰宅、雨森氏ヨリ來狀アリ

廿日　晴天　土曜日

終日病臥　午前出馬氏光來、

廿一日　晴天　日曜日

病氣未ダ全快セズ　午前十字麹町會堂集會如常　山本氏講義　正午十二時帰宅　午後三時頃川村氏光來　夜ニ至リテ帰宅、夜吉田氏ヲ問　適桂（タマタマ）　斎藤両氏アリ　閑談数刻ニ抵ル

廿二日　晴天　月曜日

午前九字出校　十一時帰宅　午後学業ノ如常、五時頃吉田氏來ル　雨森氏ヘ郵便差出ス

廿三日　曇天　火曜日

病氣追ヽ快シ　午後学業常ノ如シ　三時頃雷鳴風雨　四時ニ至リテ快晴　学校ヨリ帰宅ノ時田村〔幾何〕〔直臣〕氏至ル　七字出馬氏來ル　今日ヨリグリーキ学　機化学　ロジツクヲ始ム　午後十二時就眠

廿四日　快晴　水曜日

午前及ヒ午後学業如常　午後一時田村氏光來　仝七時銀坐街道運動　仝十一時就眠

廿五日　快晴　木曜日

午後学業如常　但シミ【4】ラル氏留守ニ付講義試験休業　三時ヨリ四時迄テアマモン氏讃美歌ヲ教授ス　七時吉田氏ヲ問フ　十一時帰宅　十二時就眠、是日学校ヨリ自助論ヲ借用シ來ル、

廿六日　快晴　金曜日

午前学業〔常〕如シ　午後学校休業　馬久拉廉氏病氣　アマモン氏欠ク可ラサルノ用事アリ　帰宅後直ニ入湯　節部〔穡〕氏ヲ問フ　手塚〔新〕來ル　午後十一時就眠、

廿七日　雨天　土曜日

終日雨天　午後井深　田村両君光來　七時石原氏光來止宿ス　十二時就眠、

廿八日　快晴　日曜日

午前七時半醒眠　八時半石原君帰宅、十時麹町會堂集會如例　聽衆者三十二人　藤生氏講義終テ植村君ト仝道　練塀町講義所ニ至リ三時仝四十分迄テ約翰傳三章十六節ヲ講ズ　聽衆者凡ソ

十五人、不信者九人程、午後四時須郷君同道ニテ帰宅　道ニシテ藤生君ノ吉田氏ヲ問フニ遇ス　同伴ス　六時帰宅　七時半鶴〔鶴徳次郎又ハ鶴儀三郎〕氏光來　蓋余ガ住文〔注〕セシ神道總論ヲ持參セシナリ　九時就眠　此日【5】奥〔野〕氏ハ息女横濱ニ在テ病氣ニ付　昨夜高崎ヨリ帰宅　直ニ横濱ヘ至リシノ報聞得タリ

廿九日　快晴　月曜日

七時二十分起眠、午後学業如常　四時近事評論二十五号并ニ附録ヲ郵送シ來ル、七時ヨリ三十分間運動　仝ク九時ヨリ微雨十一字就眠、

三十日　快晴　火曜日

午前七時醒眠、学業如常　但シ十八史略ハ休業、帰路アマモン氏ニ至リ月給受取ル、午後アマモ〔ン〕氏ノ演説休業　譬ノ演説ハ余出席セズ　仝四時雨森氏高崎ヨリ帰宅　仝道ニテ入湯　仝七時吉田氏ヲ問フ不在　藤生　雨森両氏ト寄席ヘ行キ　十二字帰宅、

五月一日　快晴　水曜日

七時醒眠　午前私業ナリ　午後学校如常　午前十一時植村君來ル　十字就眠、

二日　快晴　木曜日

七時醒眠　午前午後学業如常　午前学校ヨリ帰宅ノ節吉田氏光來　午後帰宅ノ節近事評論ヲ排函ス　但シ附録トモ四冊ナリ　午後十一時就眠、

三日　快晴　金曜日

【6】六時醒眠　午前私業如常　今日地方官閉會式ヲ行ハル、天皇臨幸アリ　午後学校如常　仝五時田村君（ミセケチ）　井深君光（ミセケチ）來　十一時就眠、

四日　快晴　土曜日

午前私業如常　午後親睦會ニ至ル　横井〔時雄〕氏主會　粟津〔高明〕氏ノ演舌アリ　ツヽイテ大親睦會ノコトヲ議ス（5）　仝ク七時半吉田氏ヲ問フ　十一時就眠、

五日　快晴　日曜日

午前麹町會堂集會　浅川氏講義　晩餐禮ヲ行并同氏授洗　午後牛込會堂ニ至リテ講義　帰路鈴木氏ノ宅ニ至リ　午後七時半帰宅　十一時就眠、午後川村万君來リタレドモ　余留守ナルヲ以テ面會スルコトアタハズ　〔丹後国中郡〕峰山（ミネヤマ）荻野氏ヨリ來狀、

六日　快晴　月曜日

午前午後学校如常　但シ延武利氏ノ演説休業　午前田村氏光來十一時就眠、

七日　快晴　火曜日

午前五時半醒眠　水星太陽ノ表面ヲ経過シタレトモ（6）　余見ルコトヲ得サリシ　佛歴史終　土歴史ヲ初ム　【7】午後学業如常　九時就眠、

八日　快晴　水曜日
午前午後学業如常　午後練塀町植村宅出講、風雨甚シク帰ルヿ
アタハス　同氏宅ニ止宿ス　十二時就眠
九時(ママ)　快晴　木曜日
午前六時起眠、八時帰宅　午後学業如常　吉田氏來リテ明日快
晴ヲトシ閑歩センヿヲ約ス　仝七時運動　十時就眠
十日　快晴
午前五時起眠、峰山ヘ文学雑誌(朱書)廿二廿三号(朱書)〔并〕互ニ近事評論百廿六、(朱書)
七仝附録(朱書)ヲ郵送ス　午後学校休業　吉田　井深　植村　雨森
出馬　藤生の諸君と共ニ金杉村ニ遊歩　帰路芝公園内ニ至リ
午後七時帰宅　蓋出馬箱館ヘ出立ニ付離別ノ爲ナリ
十一日　快晴　土曜日
十二日　雨天　日曜日
雨天ニ付麹町會堂ヘ至ラズ　午後新榮橋會堂ヘ至ル
十三日　快晴風　月曜日
学校休業　出馬君出立ニ付手塚君宅ヘ會ス
十四日　快晴　火曜日
【8】午前午後学業如常　十八史略宗教歴史ハ休業　此日大久保
〔利通〕内務卿紀尾井町ニ於テ暗殺サル(7)
十五日　快晴　水曜日
十六日　曇天　木曜日
昨日朝野新〔聞〕停止ヲ蒙ル(8)　西京松田　谷部の両君ヨリ報知
ヲ得　直ニ答報ス
十七日　曇天　金曜日
学業如常　土國歴史ヲ素讀シ終ル
十八日　雨天　土曜日
私業如常、ヘブン氏心理学ノ素讀ヲ初ム
十九日　雨天　日曜日
雨天ニ付キ麹町會堂ヘ會スルヿアタハス　止ヲえず終日私宅ニ
偶居ス
廿日　快晴　月曜日
午前午後学業如常　午後帰路横井氏宅ヘ至ル　夕ニ至リテ吉田
氏并ニ田村氏光來
廿一日　曇天　火曜日
廿五日　好晴　土曜日
是日ヨリ朝野新聞停止差許サル(8)　午後石原君　芦原甫ノ書状ヲ
持参セリ　開封スレバ氏ハ去ル十五日ヲ以テ當地到着ノ由　止
宿所ハ萬年屋ナリ　直ニ行テ面會ス　夕ニ至リテ帰ル
廿六日　好晴　日曜日
麹町會堂ヘ至ルヿ常ノ如シ　須郷【9】氏講義　奥野　山本祈禱
ス
廿七日　好晴　月曜日
午前〔櫛〕節部氏ヘ至リ　芦原君ヨリ托セラレシヿヲ談セシ所　早速
承ダクセリ　依テ是段芦原君ヘ報知ス　時ニ川村君萬年屋ニア

リテ共談話　午後ニ至リテ帰宅ス
廿八日　大風雨　火曜日
廿九日　好晴　水曜日
アマモン氏横濱ヘ行クニ付て休業

七月十五日ヨリ新榮町(橋)會堂ニ於テ日本基督信徒ノ親睦會アリ
京坂及ヒ各地ノ諸兄來會シ　互ニ信睦(ママ)ヲ爲シテ愉快ヲ尽セリ(9)
明治十一年七月十九日　東京出発〔埼玉県杉戸在〕和戸村ニ至
リ傳道(10)シ　八月廿六日ニ帰京〔八月廿三日ノ頃ナリシ東京竹橋(11)
ノ変アリキ　近衛ノ暴動アリシト〕
仝十二月六日横濱港ヨリ乗船　七日午前四時出航　八日午前八
時四日市ヘ上陸　仝午後十二時名古屋ヘ到着ス(12)

名古屋傳道中記

九日　有松村ニ傳道ス　聽衆大凡五十人　植村氏義立方滅并ニ
人ハ信ニヨリテ救ヲ得ルヿヲ説明ス　僕ハ聖経ノ人心ニ必要ナ
ルヿヲ説明ス(13)
十日　夜舟山氏(14)來リ馬太傳【10】ヲ讀ム　蓋シ舟山氏ハ毎夜來リ
テ馬太傳ヲ研窮ス
余當地ヘ到着以來面會セシ者左ノ如シ
メソチス(ママ)〔ト〕教會員　尾原〔英吉(15)〕
〃　吉田
〃　岡村
一致教會員　鈴木甲(鉀)次郎君(16)
舟山
川出真清
研(トギ)屋町三丁目
十四日　夜〔カナダ・メソジスト会員〕山田菊藏(17)方ヘ傳道ノ爲
メ派出ス
十六日　有松傳道　聽衆大凡五十人
第三區春日井郡中水野村東光寺住職小野祖芳
十二月廿二日
京都府ヘ左ノ届書ヲ出ス
用紙半紙界
奇(ママ)留轉居届
丹後國中郡第三區峰山吉原町四十八番地　京都府士族
當時愛知縣下何國何郡何町何番地奇(ママ)留　山本秀煌
私儀
從來神奈川縣下武藏國石川町五丁目百貳番地寄留罷在候處　此
度都合有之　前書之通轉居寄留仕候間　此段御届申上候
明治十一年十二月　山本秀煌
京都府知事　槇村正直殿
【11】**廿七日**　雪　初降
十二月分下宿拂　金二圓八十戔

卅日　有松村傳道　聽衆僅ニ十人

明治十二年

一月五日　親睦會之爲　信徒十一人　山田菊藏宅ヘ集會ス

一月七日

夕景ヨリ末廣町ニ至リ　耶蘇教書肆ノ楼ニテ説教ス　聽衆十人、

仝十三日　有松村傳道　聽衆七人

十(ママ)　末廣町耶蘇書肆ニ於テ講義　聽衆大凡十五人

十六日　午前雨　午後晴天

午前九時當地出立　大曾根ニ至リ山田〔菊藏〕氏ヲ訪イ氏(ママ)ニ水野村迚テノ人力周施(ママ)ヲ請ヒ　凡十一時人力車テ駕シ速行水野村ニ至ル　夜ニ至リ東光寺ニ於テ講義　聽衆十五六人　仝十七日晴天　午後東光寺ヲ出テ山路ヲ大凡一里ヲ経テ浄光寺(定)ト云寺ニ至ル　此寺内ニ尾張藩祖義直ノ墓　其傍殉死人ノ墓十人ナリ

仝午後三時東光寺ヘ帰ル　夜講〔義〕聽衆三人　十八日瀬戸道ヲ経テ帰宅[18]　大曾根山太田氏(ママ)ニ至リ【12】先日ノ周施(ママ)ヲ謝シ　小杉〔亮平〕[19]ト共ニ講義ス　聽聞五人

十九日　日曜日　曇

廿六日　日曜日

此日始テ上茶屋町ニ講義所ヲ開キ　午前第十字ヲ以テ集會ス

聽衆僅二人　蓋此未ダ講義所整頓セス　衆人(ママ)知ラサルヲ以テナリ　夜七時再ヒ集會ス　聽衆十一人　植村氏宗教ノ學術ト返(ママ)對セサルヲ論シ　小生ハ宗教ノ人性ニ備ハルヿヲ論ス

廿七日　有松村傳道　聽衆僅ニ七人　明日鳴海ニ於テ佐田千石ノ佛教講義アル趣ニて　其風評甚ダ高シ

廿八日　夜門前町本屋ヘ至リシカトモ　不都合ノ赴ニテ休講ス

三十日　午後大雨

午後三時鈴木〔鉀次郎〕氏ト共ニ茶屋町〔美以美教会員〕服部〔福治〕[20]氏宅ヘ至リ談話　日暮ニ至リ晩餐ヲ喫シ　植村氏講義シ終テ上茶屋町説教所ニ至ル　集會スル者八人　夜十字頃外雨冒テ帰宅、

二月一日

都合ニヨリ上茶屋町【13】二丁目十番地〔美以美教会員〕岡村氏宅に轉宅　今夜岡村氏ノ客アリ　別亭ニ於テ酒宴ヲ爲　放歌泥醉ス

二月二日　日曜日

午前十字ヲ以テ開講ス可ノ處　未ダ講義所看板等整ハサルヲ以テ聽衆來ラズ　依テ休講ス　小野祖芳氏來リ　約翰傳三章ヲ講ズ　夜八字頃ヨリ講義　聽衆大凡ソ卅人、其中ニ眞ニ教ヲ求ムル者三四人ナリ

五日

今夕ヨリ森岡氏毎夜來リ　馬太傳を手開(解)ス

六日　植村氏講〔義〕　聽衆大凡二十人〔未来ノアルヿ、〕

七日　金曜日

鈴木　岡村　植村ノ諸君ト共ニ清水村出講ス　大凡三十人　尓後毎金曜日出張ヲ約(ヤクシ)て帰ル[21]

九日　日曜日

午前十時開講　小生神ノ賜ヲ善用ス可キヿヲ講ズ　聽衆五人

水野村ノ鈴木〔雅彦〕氏來ル　全夜第七時ヨリ開講　植村氏天下ニ義者ナキヿヲ論ス　聽衆二十人　皆席上ニ登ル

【14】十日　月曜日

有松村傳道、希伯來書并ニ種蒔キノ譬喩ヲ講ズ　聽衆僅ニ五人、青木〔金太郎〕氏ノ父母耶蘇教ヲ聞ク勿レト云テ其子ヲ責(カ)メタルノ報ヲ聞キ　憂悲ニ堪ス　神ニ祈念ス[22]

十三日　木曜日

午後第七時半開講、聽衆大凡二十人　席上ニ坐スル者十人程

靈魂説ヲ講ス　終テ船山氏上京ニ付き離別會ヲ開キ　直(眞)神ニ祈禱ス

十四日　金曜日

清水村傳道　午後八時頃開講、聽衆大凡四十人　未來ノ説ヲ講ス、

十六日　日曜日

午前第十字開講　植村氏講義　聽衆十人斗リ　席上ニアル者四五人　午後清水村ヨリ來ル者四人

午後七時開講　山本氏講義　聽衆十五人斗リ　席上ニアル者十人　終テ裁判所庶務課長　植村氏ト議論シ　十一字頃開散(解)ス

此日坂野氏有松村ヨリ至リ　傳道ノ便宜ヲ議シ　尓後有松【15】傳道隔周トナス

十七日

舟山氏東京ヘ発足[23]、傳道會社ノ書金五十戔　十二月ヨリ　〔四月迄テノ分舟山氏托ス〕

廿日　木曜日

午後七時より開講　植村氏勤之　聽衆三十人位　席上ニアル者八九人、

廿一日　清水村講義ニ參(マイル)ニ付　赤塚分署ヘ左ノ届書ヲ出ス[24]

春日井郡清水町弐百廿六番地屋敷　私宅於テ

本日午後ヨリ聖教講義仕候ニ付　有志輩数人相集候間　講義者連署ヲ以テ此段御届候也

明治十二年二月廿二日　右

林　榮助
講義者
山本秀煌

赤塚分署御中

廳長　某　印

今朝横濱ヘ當地傳教ノ景況を報告ス　并ニ峰山表ヘ書狀差出ス

廿二日

午後風雨ヲ押シテ清水村ヘ出張傳道　聽衆大凡三十人　植村氏講義

廿三日　日曜日

午前午後とも小生勤之　聽衆三四人、

廿六日　此日中水野ヨリ日曜日有志輩〔總會スルトノ嘉音ヲ得タリ〕

廿七日　木曜日

講義如常　聽衆僅ニ二人

三月一日　今日風雨甚しきニ付清水傳道休

【16】二日

午前集會　聽衆三人　小生ことも　午後聽衆十人斗リ　昨日盛岡氏ハ故郷ヘ帰レリ　去ル〔廿〕八日頃芦原君ヘ書狀差出ス

今午後大曾根山田氏ヲ訪　服部氏　吉田氏不斯(マヽ)シテ來會シ　礼拝式ヲ爲ス、去ル廿八日ニ有松村より青木氏來レリ

四日

午後七時ヨリ風雨ヲ冒シ清水村傳道　聽衆二十人　此日最モ雨天ナリ　且ツハ土曜日ヲ以テ今日ニフリカヘタルヿ故　其か爲聽衆モ斯ク減少セシナリ

六日　午後晴天、

開講如常　聽衆四五名　植村氏勤之、

八日　土曜日

午後三時ヨリ清水村傳道　聽衆大凡二十人　此中信徒　吉田植村及小生ト三人ノミ　六時帰宅　夜ニ入テ愛原氏來ル　此日横濱ミラル氏ヨリ出張ノ日限確定セサル趣申來ル

【17】九日　日曜日

午前十字開講如常　聽衆一人モナシ　只岡村　植村及小生ノ三人ノミ　午後七時ヨリ集會　聽衆大凡十四五名ナリ　中二三人ハ前會モ來リシ者ナリ　今日藤生氏ヨリ書狀到來、小生講義

十日　日曜日

午後二字當地立発　有松村ニ至リ傳道ス　當地傳教ノ景況ハ追々退縮シ當時ニ至リテハ聽衆モ僅二三人已　坂野富次郎君ハ暫ノホドハ漸ク進教ノ様子ナリシガ　三四周間前ヨリ其信仰頓ニ衰ヘ　今日ハ芝位(居)ヘ出席セント云　蓋シ氏以前ヨリ役者ナリ青木氏ニ付　上旬ヨリ教ノ爲メ　養父母ヨリ窘逐迫害ヲ受ケ書籍等ヲ素讀スルヿ禁セラレシカドモ　其信仰確乎トシテ揺カズ　益々進教ノ様子ナリ　是則チ吾輩上帝ニ感謝ス可キ所ナリ

十一日午前十一字　有松村ヨリ帰宅、

十三日　木曜日

開講常如　山本氏勤之　聽衆四人、

十五日　土曜日

【18】午後十二時　午飯ヲ喫シ終リ　大曾根ニ至リ山田〔菊藏〕氏ヲ訪ヒ　同伴ニテ午後三時頃清水村ニ至ル　聽衆三十人斗リ中二三人ハ大ニ正教ヲ欽慕スルノ様子見ヘタリ　可賀可賀　今

日風雪甚シク寒氣迫膚厳ナリ

十六日 日曜日

午前開講義常如　小生勤之　聽衆一人モナシ　午後集會ニハ鈴木氏一人來ルノミ、當講義所種、不都合ノ事アリ　其ヨリ當處引移ルヿ相談ニ度々　鈴木氏ニ至ル　偶柿崎氏　鈴木氏ニアリ　暫時正教ニ付テ植村氏ト論談ス　講義〔所〕引越ノ義相談整ヒ　岡村氏此ノ旨通知センヿヲ鈴木氏ニ委頼ス〔今午後陸軍〔軍〕曾〔曹〕石田啓藏君來ル　氏ハ三四人ニテ曾テ大阪ニテ講義ヲ聞シ趣ニテ随分教ヲモ信仰シタル様子ナリ〕

廿日（三月）木曜日

小生今朝ヨリ腹痛ニテ牀ニアリ　赤塚尾原君光來　神ヲ讃シ或ハ詩書ヲ吟シテ靈魂ヲ慰ス折柄　突然ニ車夫アリ　來リテ異人サン來レリト呼ブ　直ニ出迎エレバ是則チ〔ミセス・M・T・〕トルー氏ナリ　互ニ握手シ礼ヲ爲シ其無事ヲ祝シ　傳教ノ景況等ヲ談ス　氏今夜宮ニ宿スルニヨリ小生共今夜再ビ宮ニ到ラシヿヲ約シ分袖ス　午後六時頃ヨリ尾原　盛岡　植村同伴宮ニ至リ　トルー氏及ヒグ【19】ルデー氏ヲ訪フ　祈禱ノ集會ヲ爲シ神ヲ讃美ス　偶清水陸軍中尉夫婦トルー氏ヲ來訪スルニ遇ス[25]　清水仲子ハ曾テ東京銀座學校ニアリ　授洗シタル者ノヨシナリ　九時半臥　各台□帰宅、

廿二日 雪　土曜日

午後七時　清水村傳道　聽衆十四五人　植村氏講義　鈴木氏十誡ノ初ノ第四條ヲ講ズ　今日横濱ヨリ初學問答二百冊到來

廿三日 日曜日

午前集會如常　聽衆ハ大曾根ノ山田氏　其他ニ一人ノミ　午後有松村ヨリ坂野氏來リ[26]　赤塚ヨリ尾原氏　吉田氏來ル　互ニ神ヲ讃美シ　祈禱ヲ爲ス　午後七時講義　小生勤之　聽衆十五六人

廿四日

午前七時頃　坂野有松ヘ帰　十二時頃森岡氏故郷ヘ帰ル　午後植村　岡村　尾原ノ諸君ト鈴木氏ニ至ル

廿五日 晴天

午後尾原氏ヲ訪父至リテ帰宅　今朝下婢其義兄死スルヲ以テヲ〔奥〕ク田〔田〕ニ至ル　留守中水野〔村〕東光寺ヨリ使來リ　序ノ物ヲ【20】返開〔ヽヽ〕ス

廿六日 雨天

今朝京都府ニテ郡區改正アリシヿヲ讀ム[27]　則左ノ如シ

上京區　杉浦三郎兵衛　下京區　竹村藤兵衛　紀伊郡　竹中兼和　愛宕郡　太田爲善〔荒井公木〕　葛野郡　戸田高富　宇治久世両郡　長村保固　乙訓郡　大崎官次郎　綴喜郡　宮本三四郎　相楽郡　森鳥清右衛門　南桑田郡　柳島誠〔太田爲善〕　北桑田郡　藤井齊〔齋〕　天田郡　田井忠和　舩井郡　荒井公榮　何鹿郡　宮崎清風〔政〕　加佐郡　野田　新　與謝郡　長田重遠　熊野郡　川村正道　中郡　粟飯原鼎　竹ノ〔野〕郡　大西雲根、

廿七日

峰山荻野ヨリ京都府区画改正ニ成リシ趣　報知シ來ル　今夜七時開講　聽衆二三人

廿八日　大曾根山田氏ニ到ル【21】大坂親睦會ノ演舌ノ義ニ付執事古木寅次君ヨリの書狀ヲ讀ム　山田氏の委頼(ママ)ニヨリ返書ヲ差出ス可キ旨厥託し帰リ　廿九日午後投函ス

廿九日　土曜日

午後七時頃ヨリ清水町説教　聽衆二十人斗リ　小生洪水のはなしを爲ス

卅日　日曜日

午前十字開講　聽衆一人モナシ　午後尾原　吉田光來　午後三時頃ヨリ禰宜町山田堅藏君宅ニ出講　今日初テノ事ニテ聽衆ハ四人耳　次周金曜日ノ夜再來スルヿヲ約シテ帰ル　午後八時頃開講　聽衆二三人　新旧約〔ヲ〕講ス

三十一日　月曜日

午前尾原君來リ談話中　横濱ミラル氏ヨリ金子ヲ郵送シ來ル直ニ尾原君同道ニテ賣茶翁ヲ訪フ　午後二時頃帰宅　其ヨリ荷物ヲ整ヘ上園町三丁目平野黙二(28)方ヘ轉居セリ　[午後有松ヨリ青木氏來ル]

四月一日　好晴　火曜日

【22】午前尾原氏來リ　午後鈴木甲次郎君并ニ清水ヨリ山田氏及ヒ他ニ一人來對話ヲ爲ス　ふとん代二円　鈴木氏ニ嘱ス

四日

午後禰宜町山田精一君宅ニ至リシカト　不都合ニテ休講ス　午後一時清水氏ヲ訪フ　今日大坂愛国社ノ會議最ヤ大カタ片付タル趣ヲ讀ム　又大坂ニ交誼社員ノ演舌會アリテ　社員ノ中西村三郎君ナル者ノ演説国安ヲ害スル者ト認メラレ　巡査附添ニテ本田警察署ヘ拘留セラレタルヨシ　是去ル廿五日ノ事ナリ又去ル三日當鎮臺ノ兵卒大凡五十人斗リ　本町分署ヲ襲ヒテ相方大喧嘩ヲ爲シ　巡査三人程負傷セシト云　其一人ハ半死半生ナリト　最モ兵卒ノ中ニモ二三人傷ヲ受ケシ者アリト云フ、秋田縣ハ去ル廿日　宮城縣ハ廿四日ニ縣會開場式ヲ行ハレシト云フ

五日　土曜日

午後清水町傳道　聽衆大凡ソ十五人〔清水〕

六日　好晴　日曜日

【23】午前九時頃　石田君來ル　仝ク十時森岡　石田　植村君ト四人ニテ集會ヲ爲ス　午後二時清水町傳道　聽衆五人程　夜ニ入テ鈴木　岡村君光來　禰宜町山田方ヘ傳道、

此日鎮臺兵橘分署ヲ襲ヒ巡査ト互ニ接戰アリ　相方死人一人ツヽ負傷四五人アリシ趣、

九日　大雨　水曜日

午後大曾根山田君來リ　小生同道ニテ不二見町ヘ至リ説教ス聽衆十人斗リ　夜九時人力車雇テ帰宅ス

十二日　土曜日

午前横濱ミラル氏方ヨリ書狀到來　教會政治ヲ贈送而來ル　植村君明後十四日東京ヘ帰宅決定ス　午後名古屋博物館ニ至ル　館中大桐板アリ　長廿一、大五尺　幅三尺五寸　代價百五十円ト云　又ケヤキ大本(ナヤ)アリ、大三間　幅五尺　代價五百円　其他瀬戸物等種々アリ

〔午後清水村傳道　聽衆大凡十五人〕

十三日　日曜日

【24】午前相原(29)〔尚褧　明治十五年四月六日、岐阜デ板垣退助ヲ刺ス〕氏光來　三人ニテ集會ヲ爲ス　石田君ハ公用有之不來　午後二時清水町傳道　聽衆四人　五時清水　山田君光來　祈禱會ヲ爲ス　昨日水野村鈴木〔雅彦〕氏來リ　洗礼ヲ請フ　去五日琉球藩廃サレ、沖縄縣ヲ置レ　鍋島直彬(ナオアキ)君縣令ニ任セラレリタル報ヲ新耳ニテ讀(30)ム　又京都府會議長ハ山本覺馬君ナルヨシ　又昨年竹橋暴動ニ関係アル岡本柳之助君ハ官位ヲ褫奪サレ修身(終)文武ノ官ニ補スルヲ禁セラレタリ(31)　昨東京藤生君ヨリ書狀(誌)到來　氏ハ陸羽道ヘ傳教ノ爲出張スルヨシ　又今午後地學雜紙三冊郵送來ル

○四月　植村歸京の遲に答へる

十四日　曇天

今日植村氏當地出立　帰京セリ(32)　午後鈴木甲次郎君來ル

十五日　大雨

終日異狀ナシ

十六日　好晴　少シク風アリ

午後森岡氏帰宅　同伴シテ不二見町若原【25】氏ニ到リ講義ス　聽衆大凡十人　偶一人アリ　昨晩(ヨフ)來リテ余ニ講義センヿヲ請フ　余之ヲ承諾ス　蓋シ彼人ハ其口頗ル傲慢ニシテ　なか〳〵教ヲ聽ク可キ人ニアラズ　何ガロニ基督教ハ不可思議ノ事アル　殊ニ口巧テ居ル様子ナリ　今午後石田啓藏君來レリ

十七日　木曜日

午前尾原君光來　氏ハ過日來三州西尾ニアリ　去ル日曜日帰名ノ折柄　植村君ノ帰京ト鳴海ニテ値(カ)遇セシヨシ聞及ベリ

十九日　土曜日

午後清水村傳道　聽衆十人位　今日ヨリ毎集会(ミセケイ)毎ニ山田君ニ洋學ヲ教授ス　〔今夜花屋(茶)町ヘ至レリ〕

廿日　日曜日

午後清水町傳道如常　聽衆四人

廿三日　水曜日

不二見町傳道　聽衆十人程

廿六日　土曜日

午後清水村傳道如常　聽衆七八人

【26】植村君ハ去ル十四日當地出立　十九日東京ヘ着サレシ趣

一昨日報道アリタリ　又藤生君ハ去ル十七日傳道ノ爲和戸村ヘ出張ノヨシ

廿七日　日曜日
午前愛原氏來リ講義ヲ爲ス　午後尾原君仝道ニテ清水町傳道ス
廿八日　曇天
午前尾原君光來　午後清水山田君光來　文典書ヲ素讀ス　新耳讀ム
去ル十四日賊アリ　魯皇帝ヲ途ニ銃シ、微ク傷ケタル趣キ　又清國公使何如璋氏ハ本月八日附ヲ以テ左ノ通リ其政府ヘ電報シタル由ナリ[33]
日本政府ハ琉球ヲ領取シタリ、琉球王ヲ廢シタリ　日本ノ官吏ヲ以テ琉球王ヲ代ヘタリ　此事タルヤ日本ニ取リテハ實ニ過激ノ措置タルガ如シ　如何トナレバ琉球ハ清國ノ嘗テ本國ノ領屬ナリト明言シ居タルモノナレバナリ　仍テ余等ハ【27】清廷ノ敢テ異議ナク　此措置ヲ看過セサルヲ信スルナリト
附テ云　琉球王〔尚泰候〕ハ近ク日本ヘ到着サル、ヨシ、
地方官會議今年都合ニヨリ見合ト成リ趣　過日號外ヲ以テ大政大臣ヨリ達セラレタリ
三十日　水曜日
不二見町傳道　聽衆六七人
五月二日　横濱ミロル氏ヨリ書狀來ル　氏今月十六七日頃米國ヘ帰省ノ赴
三日　四日
清水町傳道　聽衆如常　四日日曜日ニハ大津町
七日　水曜日
今夕不二見町休講
十日　土曜日
清水町傳道如常　聽衆六七人〔會堂開　講義アリ　二弦琴ヲ讃美歌ニ和ス〕[35]
十一日　日曜日
清水山田　井出の両君所用アル趣ニテ出席スルヿアタハサル趣ニ付　他ニ聽【28】衆モナケレバ休講ス
此頃東京ニテハ新學校生徒討論會を始めし由[36]　石原君ヨリ參ル
又築地〔新榮橋〕教會服部〔章藏〕氏老母看病ノ爲ニ　去二十五日山口表ヘ帰省ノよし
魯西亜皇帝ト東宮ノ間ニ不和ヲ生シ　東宮ハ一室ニ閉チ込ラレテをりますよし　又聞東宮ハ虚無黨ナリト
東京府會ハ去七日閉會式を催行セシよし〔『朝野新聞第千六百九拾五號附録』參照〕
十二日　月曜日
五六日前ヨリ腹痛ニテフラ〳〵然タル處　昨日ヨリ一層甚シク不得已今朝縣立病院ニ至リ診察ヲ請フ　服薬ス　此周間中ニ水野村ヘ派出スヘキノ處　毎日腹痛ニて行を果サズ　水曜日不二見町の講義モ休業セリ
十六日　金曜日〔二〕

今夕ハバシタ〔市下〕辺ニ失火アリ　一時頃ヨリ始マリ二時頃終ル　石谷君ト共ニ火事見物ニ至ル

十五日　木曜日〔五月（一）〕

【29】〔青山君來る〕午後青山〔昇三郎〕君ヨリ當地ヘ宿セシ趣使を以て申來ル　直ニ行ニ面會ス　氏ハ明日晴天なれバ前原ニ至リ　湖水を漕船ニテ大津ヘ至リ　神戸ニて安息日を守リ其ヨリ乘船下ノ関ニ至リ　服部〔章藏〕氏ト共ニ傳道ニ盡力スルヨリ　氏二三日岡崎ニアリテ講義セシ處　其景況太宜敷き趣ニて　尓後小生ヨリ派出センヿ乞ひ　且ツ聽衆人ノ姓名を報ス余之ヲ諾ス[37]　其人名左ノ如シ

三河岡崎康生町ニテ

正村　基
河面　晋

両人ノ内ヘ手紙ヲ差し出スべし

同　同　下傳馬町ニテ
青山君が兄
山路　雪揮

同　同　籠田町ニテ
荻須　簾三

同　同　伊賀村ニテ
林　餘し枝
熊谷　某

學校教師ニテハ
斎藤　粟野　石橋〔重則〕等なり

十七日　土曜日

清水町傳道　聽衆【30】十人　尾原君講義

十八日　日曜日

午後清水村傳道　聽衆四人

廿一日　不二見町傳道ハ病気ニ付休業

廿二日　今夕魁眞樓より　江州本多氏より并ニ中島よりの書狀持來ル　蓋シ彼地教會設立ノ報知なり

廿四日

清水村傳道　聽衆十人程　此夜ハリス氏當着[38]

廿五日

清水町傳道　聽衆一人　此日井出　山田ノ両君已ヲ得サル用向アリテ欠席ス

廿九日　風雨ヲ冒シテ水野村傳道ス　聽衆五人　蓋シ當時農業繁多ナルヲ以テ久シク滞在スルヿアタハス　卅日直ニ帰宅ス

卅一日　雨天

此夜清水町傳道　聽衆五人　連日大雨ニテ道路甚ダ悪く　且ツ人力車ナキヲ以テ已ヲ得ス林氏ヘ宿ス

一日帰宅ス　今日ハ日曜日ナレドモ東照宮ノ祭日ナルヲ以　聽耳人來ラズ　因テ休【31】講ス

六月一日　雨天　日曜日

午前八時頃清水ヨリ帰宅　當日ハ東照宮ノ祭日ナルヲ以テ　井出　山田ノ両君來ルアタハサル趣　因テ休業ス　午後朝日町〔美以美〕講義所ニ至ル　ハリス氏夫婦ハ明後日帰宅ニ成ル趣　氏當地ニアルヿ一周間餘　其間授洗セシ者十人餘アリ　愛原お銀并ニ松前屋ノ娘二人及ヒ主人等アリ　尾原氏ハ去ル廿八日ハリス氏夫婦同道ニテ三州西尾ヘ赴カレタリ[38]

二日　晴天　月曜日

今日初テ晴天ニ成タルヨリ東照宮ノ祭モ一層盛ニシテ屋臺等ヲ出シ中々賑シキヿナリ　劣生モ午後より散歩ニ出掛ケ　六時頃帰宅ス

三日　雨天

四日　雨天

五日　半晴　木曜日

二周間程ノ宿雨　今朝ニ至リ漸ク晴ル　倉卒旅宿ヲ出テ廣小路ヨリ人力車ヲ飛シテ宮ニ至ル頃　又シモ一天俄ニ掻曇(カキ)リ急雨盆ヲ覆スカ如シ　漸時ニシテ晴レ　再ヒ【32】車夫ヲ雇ヒテ鳴海ニテ新ニカヘ　岡崎ヘ至リ時ニ午後四時ナリ　直ニ康生町ニ至リ正村君ヲ訪フ　折悪しく留守シテ残念ナカラ面會スルヿアタハズ　再ヒ車ヲ飛シテ下傳馬ニ至リ宿ス　其旅宿ハ一新(カ)講中ニテやまかたやト云ひし下等ノ宿屋ニテ諸事等不潔ヲ極ム　然(シカレ)ドモ今更宿ヲカヘル理ニ行カズ　先ス何事モ明日ニこそ致セト其まゝ打臥しぬ　今日道路運日ノ雨ニテ甚だ悪し　泥濘車輪ニ粘し運轉自在ナナラズ(ナマ)　ガタヒし〳〵なるを行て身心大ニつかる

六日　晴天　金曜日

今朝疾(ハヤ)ニ起出テ正村君ヲ訪フ　互ニ初對面ノ交誼ヲ述ブ　〔暫〕ざん時ニして河面君來リ　劣生の下宿ノ處色々御周旋ニ成り　一先同道テ下宿所ニ至ル　是則康生町牧〔暮四郎〕氏方ナリ　之ヲ下宿ト定メ　再ビ下傳馬ニ至リ　ふろしき包を持來りて下宿ニ至ル　午後二時より岡崎旧天主臺辺ヲ運動ス

夜ニ至リテ河面　橋本　楠ノ諸君來リ余講義ス【33】其他聽衆十人程、講義終テ後　橋本君種々質問を爲す　午後十一時頃退散

七日　晴天

午後九時より開講　聽衆拾五人

八日　晴天　日曜日

午前下傳馬町山路雪揮君宅ニ至リ　初對面を爲し　道ノ談ヲ爲し　午後帰宅　三時頃深井君を尋ふ　午後九時開講　聽衆十五人　山路雪揮君來ル

九日　雨天　月曜日

午前如常　午後二時頃正村君來ル　尋(ツイ)テ深井　石橋　河面ノ諸君來リテ神道ヲ談ス　午後再ビ説教　聽衆十五人位　十二時終リ二時眠ニ就く

十日　晴天　火曜日

午前和田傳八君來リテ聖経を談ス　午後石橋兄光來　夜九時開講　聽衆凡十人　裁判所　但深井　井上　其他一人　和田夫婦

山路君【34】おふじさん及吉長ノ諸兄姉ナリ　今朝東京アメルモン氏宛ニテ新約聖書等ヲ送ラ〔レ〕ンヿヲ請フ、仝時ニ植村君方へ書狀差出ス

十一日　晴天　水曜日

午前下傳馬山路君宅へ至リ　帰路平野ノ娘ニ遇シ　愛知ヨリノ書狀ヲ渡ス　午後四時頃石橋兄光來　馬太傳第二章ヲ講ズ　夜ニ入テ聖書ノ預言ヲ講ズ　聽衆十人　山路　林　熊谷　和田正村　鬼頭　おふじさん其他三人斗

拾二日　早朝雨　九時頃より晴天　木曜日

午後集會如常

拾三日　午前九時頃出立　人力車を飛シテ西尾へ到ル　尾原君及其他ノ信徒ニ面會　拾七日迚滞在ス　滞在中ハ毎夜傳道　聽衆七八人位つゝなり　尾原君ハ拾六日横濱へ向け出立　小生ハ十七日名古屋へ帰ル　西尾ハ旧松平和泉守ノ城下ニて六万石なり

【35】米国ノ大統領〔グ〕クラント氏ハ去月二十一日長崎へ着サレ接待ノ爲兼テ該縄へ出張シテ居レし吉田全権公使　伊達從二位ヲ始メ　同縣会以下形ノ如ク出テ迎ラレ　師範学校ヲ旅館〔ニ〕シテ善美ヲツクシテ饗應サレシ趣ナリ　其ヨリ軍艦〔リンチモンド〕リンモント号ニ乗リ込　去ル三日横濱へ着サレ　同日上京　翌日参内アリテ御對顔アリ　其ヨリ東京横濱ノ市民ヨリ種々饗應ヲ受ラレタリ〔七月六日頃ノ部ニ入ル可シ〕

(39)(朱書)

廿一日　土曜日

清水町集會如常　聽衆四五人

廿二日　日曜日

午後ノ集會如常　聽衆三人　此頃井深　藤生君より書狀到來アメルモン氏より傳道費、并ニ給料を送リ來ル　京都同志社ニて十一人卒業シタル趣　新耳ニて讀ム、

廿三日

山田氏來リテ英文典ヲ讀ム

【36】廿八日

午後清水町傳道　聽衆五人

廿九日　火曜日

午後三時よりノ集會如常　聽〔衆〕五人

七月三日　水曜日

午前九時名古屋発足　午後三時頃岡崎表へ到着　今夜集ル者唯一人なり

四日

今夜集ル者唯二人なり

五日

午前下傳馬ニ山路君宅に到ル、午後集會スル者一人　則石橋氏

なり〔三時頃三人程來ル〕

六日　日曜日

午後下傳馬山路君ノ處ヘ到ル　折悪留守中なり　夜小生ノ留守中石橋君來ル、夜ニ入テ深井　正村　和田　河面ノ諸兄來ル

七日　晴天　月曜日

午前亜米留門　井深　玉木〔満〕藤生ノ諸君ヘ出ス書狀ヲ認ム、午後石橋氏來ル

八日　半晴ニ雨　火曜日

【37】午前運動之爲明太寺村ニ至ル　爰ニ日下寺ト云寺アリ酒井雅楽守ノ墓アリ　又本多家代々ノ菩提所ナリ　東照宮曾テ夢ニ是ト云字ヲ握ル　醒テ群臣ニ語　衆能ク解スルヿナシ　明太寺ノ法印之ヲ解　日ノ下ノ人ヲ握ルハ天下ニ覇タルノ兆ナリ公大ニ喜ビ此寺ヲ名〔ツケ〕テ日下寺ト云　且賜物有差(40)、帰路傳道町ヘ出　山路君ヲ訪ヒ同道シテ粟雪ニ至リ午飯ヲ喫ス午後四字頃石橋、深井ノ両君來リ　馬太傳ヲ讀ム處　八字過正村　河面　和田ノ三君來ル

九日　曇天　水曜日

午後一時頃牧龍太郎氏愛知ヨリ帰リ來ル　四時石橋　深井ノ両君來ル　馬太傳ヲ讀ム　午後八時和田　林　山路ノ三君來ル、此頃聞ク所ニヨレバ　愛知縣下ニ尾張國ニハ虎列刺類似ノ症六七名　本病ハ名古屋古渡ニ一人アリシ由　大坂ハ稍減少セシ由

十日　晴天　木曜日

山本秀煌日記初号

【38】今日暑氣甚しく〔午後〕四時頃深井君來ル　午後八時頃和田　林　正村ノ諸君光來　馬太傳四章を講ズ

十一日　晴天　金曜日

午前九時頃石橋君光來　馬太傳六章を講ズ　午後二時頃肴町教會櫻井君來ル　同九時頃山路君來ル、十二時就眠

十二日　晴天　土曜日

今朝冷氣少シク催ス　午後林　和田　石橋ノ諸君光來

十三日　晴天　日曜日

午前九時頃より下傳馬町山路君宅を訪ひ聖經を講ズ　午後三時頃帰宅ス　同四時石橋君光來　九時正村、和田、林、吉田、鬼頭ノ諸君光來　馬太傳五章ヲ講ズ〔今朝十日ノ日附ヲ以テアメルモン氏方ヨリ書狀到來　フラオン氏(44)病気ニ付本国ヘ帰省ノ趣傳耳ス〕

十四日　曇天　月曜日

午後四時頃石橋君光來　馬太傳ヲ講ズ　仝九時正村　吉田　加藤　其他二三ノ聽衆者アリ

十五日　晴天　火曜日

午前九時籠田町櫻井氏ヲ訪不在　則歩ヲ轉して伊賀村ニ至リ林氏ヲ訪フ【39】暫時對話午前十一時帰宅　午後九時頃林　和田　吉田ノ諸兄姉來ル　午後四時頃石橋君光來　馬太傳九章を講ズ

十六日　晴天　水曜日

山本秀煌日記初号

午後九時開講　聽衆五人、

十七日　半晴　水曜日

〔『山本秀煌日記初号』は、明治十二年七月十七日で終わる。なお、ルビのついている単語の羅列の箇所【40】は省略、【41】と【42】の住所録は、次のとおりである。〕

【41】東京築地明石町拾九番地　アメルモン〔方〕井深梶之助
知多郡太田村四百十四番地　森岡七兵衛
横濱山手四十八番　先志町學校　雨森信成
不二見町三番地　七番屋舗　若原敬経
砲兵第一中隊　左小隊　石田啓造(ママ)、
赤塚町壹丁目　松前屋傳八方　尾原英吉
名古屋塩町二百七拾四番地　陸軍中尉　清水　仲
下茶屋町四十五番地　玉屋方　三澤梅三郎
春日井郡滋(志)賀村　八十七番地　大谷彌右衛門

【42】東京築地明石町十七番
東京築地二丁目四拾貳番　石原保太郎
三河國西尾矢場町　士族　玉木　満
横濱住吉町五丁目(中町カ)六拾四番地　栗村左衛門八方　尾原英吉
三州西尾中根町　尾原拙郎(41)
大坂東区嶋町一丁目四拾番地　養父　米四郎
扣家シフニノ二丁目　小笠原長通君〔方〕　小室信介
江州彦根下藪下町十八番地　中島君方　本多重度

【43】(朱書)丹後中郡峰山吉原町四十八番地
山　本　秀　煌
明治十二年十月　二十一年十ヶ月〔【43】は後日ノ加筆〕

【表表紙裏】明治十二年二月二日　名古屋茶屋町二丁目　山本
秀煌

【裏表紙裏】明治十二年六月　岡崎　康生町　牧暮四郎君方
Yamamoto

注　『山本秀煌日記初号』

(1)　明治十一年四月、日本基督一致教会第二回中会において、山本秀煌が、北原義道、青山昇三郎、井深梶之助、雨森信成、瀬川淺、植村正久、篠原銀三、原猪作、藤生金六、伊藤藤吉、稲垣信と共に、「聖役試補」の准允を受けたことについては、『植村正久と其の時代』第三巻、五〇～五二ページ、『七一雑報』三巻、第二九号（明治十一年七月十九日）三ページ参照。

(2)　雨森と植村が高崎伝道に派遣されたことについては、『植村正久と其の時代』第三巻、八ページ、山本秀煌『日本基督教會』（日本基督教會事務所、昭和四年）七六ページ参照。渡瀬常吉『海老名彈正先生』（龍吟社、昭和十三年）

一七四ページに「高崎の傳道は明治十一年の春奥野昌綱翁によって開始された。植村正久君も來って傳道していた。」とある。また、『高崎教会百年小史　明治・大正編』（日本基督教団高崎教会、一九八四年）八ページ参照。

（3）奥野昌綱の高崎傳道報告については、『七一雑報』三巻、第一五号（明治十一年四月十二日）三ページに、「上州高崎に派出の奥野氏よりの抜」という傳道報告がある。

（4）『七一雑報』三巻、一六号（明治十一年四月十九日）三ページによると、「築地第一長老會は此度芝露月町に會堂を新築して　近々落成になるよし　又同會の假牧師にこれまでグリイン氏なりしが三月廿七日の會議にて新に本牧師を投票せしに　近日中に教師は試験を受る長老安川亨氏に當りしより　同氏は亦品川第一長老會をも所轄さるよし」とある。また、明治十一年十月の日本基督一致教会中会では、安川亨教師が芝教会で按手礼を受けたことについて、「安川教師ニ按手禮ヲ授與セシ委員タムソン教師其事ヲ覆告ス　衆之ヲ可トス」（『日本基督一致教会中會記録甲ノ第二』とある。

（5）『七一雑報』三巻、第二一号（明治十一年五月二十四日）三ページには、「本月〔五月〕四日　西久保佐久間町の服部氏方に催されし東京親睦會は　横井君の司會よく　同氏並に粟津氏の演説あり　來衆は八十名前後　よく此日には來る大親睦會の事なりき種々相談ありて　愈々七月中旬には開かるゝよし」とある。

（6）「水星の太陽面經過」については、中山泰昌編『新聞集成明治編年史』第三巻（新聞集成明治編年史頒布会、昭和九年、再版昭和四十年）三八三ページ参照。

（7）『新聞集成明治編年史』第三巻、三八九ページの「凶漢嶋田一郎等六名　大久保利通を紀尾井町に刺す」参照。

（8）『朝野新聞』の停止とその差許しについては、『新聞集成明治編年史』第三巻、三九三、三九八ページ参照。

（9）東京で開かれた大親睦会については、『七一雑報』三巻、第三一号（明治十一年八月二日）三ページ『新聞集成明治編年史』第三巻、四一八ページ参照。

（10）『七一雑報』三巻、第三一号（明治十一年八月二日）四ページには、山本の和戸村伝道について、次のように報道されている。

「東京麹町會と横濱海岸會より先日派出せし傳道者には藤生　雨森（伊豆）　山本（杉戸）　須藤　小原（中仙道）の諸氏なり　又植村氏は名古屋へ派出せらるゝとかいうふこと」

ここには「杉戸村」とあるが、山本が派遣されたのは、「埼玉縣杉戸在和戸村」であり、明治十一年十月二十六日、和戸教会は設立された。山本秀煌『日本基督教會史』（日本

基督教會事務所、昭和四年）七八ページ参照。

(11) 「竹橋の變」については、『新聞集成明治編史』第三巻、四三七、四三八ページ参照。なお、最近のものとしては、「明治11年、近衛兵らの反乱／竹橋事件に新たな史料」『朝日新聞』名古屋版（昭和六十二年六月二十八日）二〇ページ参照。

(12) 山本秀煌は『山本秀煌日記初号』に基づいて、後年名古屋伝道について、「㊟道の草分」『日本㊟道めぐみのあと』（卜部幾太郎編、アルパ社、昭和五年）五〇～七〇ページで回想している。

(13) 植村と山本による名古屋㊟道の事始は、阪野嘉一の故郷有松村伝道であった。この有松村伝道については、『山本秀煌日記初号』と「㊟道の草分」五六ページだけでなく、明治十一年十二月十八日付の植村が井深梶之助に宛てた書簡にも、『七一雑報』三巻、第五一号（明治十一年十二月二十日）五ページにも記されている。前者においては、聽衆は五〇人もいるものの、仏教徒の反対についてバラが心配している様が述べられており、後者については、次のように、聽衆五〇人について、植村が誇らしげに『七一雑報』に寄稿している様子が報道されている。

「麹町會員の山本氏は、本月五日の濕船にて名古屋へ赴かれ　又同地にある植村氏の報知に據れば　近傍有松村には講義所を設けて時々するの景氣随分よく　此處は横濱會員坂野氏の郷里にて　同氏は萬端によく周旋せらるゝよし」

(14) 舟山については、『山本秀煌日記初号』以外には、植村正久が名古屋から発進した井深梶之助宛の書簡（明治十二年二月十四日付）の中で述べているが、彼の姓は「舟山」「船山」といわれても、その名はわからない。ただ、彼は愛知県出身で、母の病気のため愛知県にきていたが、明治十二年二月十七日に上京している（『山本秀煌日記初号』）。彼が信仰を持ち、東京でミロルから受洗し、東京一致神学校に行くことを、植村は願っているが、彼のその後の消息については不明である。ただ彼が上京する際、植村は井深梶之助宛の書簡を彼に託している。『植村全集』第八巻（植村全集刊行会、昭和八年）二六九～二七二ページ、『植村正久と其の時代』第三巻、一〇ページ、拙論「名古屋発植村正久の井深梶之助宛二書簡の年代について」『金城学院大学論集』通巻番号第一一三号（一九八六年）一九～二二ページ参照。

(15) 尾原英吉なる人物は、旧西尾藩士の漢学者で、横浜の某学校で漢学の教師をしていた時、米国メソジスト監督教会（美以美教会）日本宣教総理マクレイの説教を聞いて突然回心し、自費で故郷伝道を計画し、明治九年十二月、西尾に戻って開拓伝道を行う。翌明治十年七月、第四回美以美

教会年会で、他の日本人八名と共に、美以美教会の最初の伝道者として准允を受け、明治十年度は西尾循回の定住伝道者、明治十一年度は、後述する小杉亮平と共に定住伝道者として名古屋に任命される。『山本秀煌日記初号』によると、尾原と山本との親交は深く、互いに協力して名古屋伝道に当たっていた。Annual Report of the Missionary Society of the Methodist Episcopal Church for the Year 1877(1878), p. 151, 159〔『美以美教会宣教会社年報』と略す〕、『一八七八年度美以美教会宣教会社年報』一四八ページ、W. G. Barcly, History of Methodist Missions, Vol. 3 (1957), p. 671, 674〔バークレー『メソジスト・ミッションの歴史』と略す〕、『基督教時代』第八五号（昭和七年一月一日）五ページの「教會成長物語」、拙論「在日メソジスト・エピスコパル・ミッションの三河伝道事始」『金城学院大学論集』通巻第一一八号（昭和六十二年三月）一～一九ページ参照。

(16) 鈴木鉀次郎は、明治二年（一八六九）一月五日、横浜で米国長老教会宣教師・タムソンから小川廉之助（義綏）と鳥屋だいと共に洗礼を受けた元宮津藩士である。彼は明治十一年頃には名古屋裁判所判事の公務の余暇に福音を講じ、毎日退庁後に聖書を輪読し、彼の部下の中から求道者が生まれたので、小川経由で当時麹町教会牧師だった奥野昌綱に伝えたところ、ミッションとの協議の席上で、植村が尾張名古屋の伝道の緊急性を主張し、ジェイムズ・バラがこれを採用して、植村と山本を名古屋に派遣することとなった、その切っかけを作った人物である。拙著『尾張名古屋のキリスト教　名古屋教会の草創期』（新教出版社、一九八六年）二一ページ参照。

(17) 山田菊藏（一八二七～一八九六年）は、名古屋の大曾根で金物屋を営んでいたが、明治八年頃静岡でカナダ・メソジスト教会宣教師マクドナルドから洗礼を受けた人物である。名古屋でプロテスタント・キリスト教の最初の伝道が行われたのは、彼の家の二階座敷であった。植村は彼について批判的であったが、「何時も俺は飯よりも耶蘇が好きだ」と語った彼の言葉は、自分の生涯の試験問題だった、と言って評価している。後年彼は名古屋美以美教会（現日本基督教団名古屋中央教会）の中心的な人物となる。『日本メソヂスト静岡教會六拾年史』（日本メソヂスト静岡教會、昭和九年）一四、一五、三三ページ、『七一雑報』三巻、第八号（明治十一年二月二十二日）三ページ、『植村正久と其の時代』第三巻、九ページ、拙論「在日メソジスト・エピスコパル・ミッションの名古屋伝道事始」『愛知県立芸術大学紀要』第一三号（昭和六十二年三月）二四～三〇ページ参照。

(18) 愛知県春日井郡中水野村伝道は、中水野村の東光寺で行われたが、これが現日本基督教団瀬戸永泉教会の始まりとなる。この点については、山本秀煌「傳道の草分」六三ページ、『尾張名古屋のキリスト教』二五、二六ページ参照。

(19) 小杉亮平は、明治十年七月、第四回美以美教会年会において、尾原英吉と共に日本人として最初に准允を受けた人物で、明治十一年一月、山田菊藏宅おいて、名古屋で始めてのプロテスタント・キリスト教の伝道をしている。彼は、明治十一年七月、第五回美以美教会年会において、尾原と共に名古屋に定住伝道者として任命されたが、『山本秀煌日記初号』には、不思議なことに、この個所たった一回しか登場してこない。山本と尾原の関係は極めて親しかったが、小杉との関係ははっきりしない。彼は明治十二年七月の第六回美以美教会年会で、山形伝道に任命されたが、ある事件のため美以美会から追放されることになる。『一八七八年度美以美教会宣教会社年報』一四八ページ、『一八八〇年度美以美教会宣教会社年報』一五三ページ、バークレー『メソジスト・ミッションの歴史』六七一ページ、『七一雑報』三巻、第八号（明治十一年二月二十二日）三ページ参照。

(20) 『山本秀煌日記初号』にも、『七一雑報』四巻、第二一号（明治十二年五月二日）四ページにも、さらに名古屋中央教会の伝承にも、「服部氏」という姓だけであって、彼の名ははっきりしない。ただ、彼は「服部福治」という可能性がある。それは、①一八八二年度と一八八三年度の『美以美教会宣教会社年報』に“F. Hattori”と記録されている人物の任命地が「盛岡」になっていること、②『日本メソヂスト盛岡教會五十年記念史』（日本メソヂスト盛岡教會、昭和七年）二、三ページに第二代牧師として「服部福治」の姓名が載っていること、③四十代後半の服部夫人の写真が載っているからである。美以美教会会友の服部氏は、夫人と共に名古屋で伝道に当たっていたし、彼は「老服部氏」といわれていたので、おそらく五十代初めころの年齢だった、と思われる。拙論「在日メソジスト・エピスコパル・ミッションの名古屋伝道事始」二七ページ参照。しかし、服部の詳細については、後日の研究に委ねることにする。

(21) 名古屋教会の伝承によると、植村が名古屋教会最初の受洗者、林榮助と初めて出会ったのは雪の降る夕方であったといわれているが、雪が降っていたかどうかは、わからないが、この『山本秀煌日記初号』が、そのことを暗示的に語っている。この林榮助の自宅、つまり清水町講義所は、明治十三年に明治天皇が小休憩された場所でもあり、今なお史跡として保存されている。拙書『尾張名古屋のキリスト教』二七ページ参照。

(22) 有松村の青木金太郎は、父母から迫害を受けながら、信

仰を告白し、明治十三年七月四日、林竹太郎と共に名古屋で稲垣信から洗礼を受け、その後東京の麹町教会の長老になっている。山本秀煌「傳道の草分」五七ページ、拙著『尾張名古屋のキリスト教』三五ページ参照。

(23) 舟山（船山）については、すでに前述注（14）で述べたが、彼の上京の際に、植村は彼が信仰に導かれることを願って、明治十二年二月十四日付の井深梶之助宛の書簡を彼に託している（書簡の原文は、東京神学大学図書館所蔵）。

(24) 清水町講義所での届出文書については、山本秀煌「傳道の草分」六三、六四ページ参照。もちろんこの文書が『山本秀煌日記初号』によっていることは、明らかなことである。

(25) 山本秀煌「傳道の草分」六七、六八ページ参照。

(26) 阪野嘉一が植村と山本の宿に一泊するのは、このとき（明治十二年三月二十三日〔日〕）一回限りである。おそらくこの夜、阪野は献身を決意し、東京一致神学校に入学することについて、二人に相談したのであろう。もちろん『山本秀煌日記初号』にはこの件について何も記されていないが、植村は、明治十二年三月付の井深梶之助宛の手紙の中で、「坂野嘉七モ神學ニ入リ度由　同人は四月中ニハ商用ニテ出京スベシ　其節アメルマン先生ニ面唔仕リ　御依頼申ス筈ナリ　同人ハ上州ノ寺岡同様ニテ　却テ輕躁ナル諸生ヨリハマシナランカ」と記しているので、阪野の献身について、想定することができるであろう。拙論「名古屋発植村正久の井深梶之助宛二書簡の年代について」二〇、二一ページ参照。

(27) 『朝野新聞』第一六五五号（明治十二年三月十九日）二ページによって、人名を一部修正する。ただし、山本秀煌が用いた新聞は、『朝野新聞』ではなかったであろう。

(28) 平野黙二の名前は、名古屋教会伝承でも伝えられている。彼とその娘は、山本が岡崎で伝道していた時、山本宛の手紙を岡崎まで届けている。

(29) 相原尚褧については、『植村正久と其の時代』第三巻、九ページの山本秀煌の言葉によると、「板垣退助を刺した（註　明治十五年、四月六日、岐阜、神道中教院に於ける自由黨の懇親會の席上、板垣退助は、愛知縣横須賀村小學校教員相原尚褧のため、短刀にて胸部を刺され、愛知縣立病院長後藤新平〔後の伯爵後藤新平〕の治療を受けた。この時、板垣は『板垣死すとも自由は死せず』と叫んだと傳へられてゐる事件である。後の高知教會の長老安藝喜代香も、この時板垣に同行した。相原尚褧を知っているのは植村先生と私と二人である」と記されている。相原の名前は『山本秀煌日記初号』に師範学校の学生として、数回出てくる。

(30) 「琉球藩を廃し沖縄縣を置く　鍋島直彬縣令となる」ことについては、『新聞集成明治編年史』第四巻（新聞集成明治編年史頒布会、昭和九年、再版昭和四十年）四四ページ参照。

(31) 「岡本柳之助君　終身官途に就くを禁ぜらる」については、『新聞集成明治編年史』第四巻、四五ページ参照。

(32) 植村正久の上京の理由については、『尾張名古屋のキリスト教』二八～三一ページ参照。『七一雑報』四巻、第一八号（明治十二年五月二日）によると、「昨年來名古屋へ出張の麹町會の植村氏は去月下旬歸京になりしとか」とある。

(33) 「清國公使何如璋　日本政府の琉球處置を非難」については、『新聞集成明治編年史』第四巻、五二ページ参照。

(34) 「舊琉球藩王尚泰候に藩邸下賜」については、『新聞集成明治編年史』第四巻、四七ページ参照。

(35) ここに「會堂開講式あり」とあるのは、朝日町美以美講義所の開講式のことであり、それは明治十二年五月四日であった。このことの服部の報告は、『七一雑報』四巻、第二一号（明治十二年五月二十三日）四ページに載っており、同号および同四巻、第二三号（明治十二年六月六日）四ページには、美以美講義所において讃美歌が一弦琴に合わせて歌われた、と報告されている。拙論「在日メソジスト・エピスコパル・ミッションの名古屋伝道事始」二八ページも参照。

(36) 東京一致神学校の「神学生の討論會」については、『七一雑報』四巻、一九号（明治十二年五月九日）三ページ参照。

(37) 山本秀煌の岡崎伝道開始とその経緯については、山本秀煌「傳道の草分」六八～七〇ページ、拙著『尾張名古屋のキリスト教』三一、三二ページ参照。

(38) 美以美教会宣教師ハリスの来名とその授洗については、『七一雑報』四巻、二四号（明治十二年六月十三日）三ページに、次のように報道されている。

「　○名古屋メソヂスト教會の近況

五月二十四日　ハリス氏到着ありて　同廿五日　同氏より洗禮を受るもの　男二人　女二人　少女一人　凡て五人　又六月一日　同氏より洗禮を受るもの　男五人　少女二人　凡て七人なり　又同氏の妻君はソンデースクールを開設せり　しかしてハリス氏夫婦は　本月〔六月〕三日に名古屋を出發せり」

この『七一雑報』の報道は、『山本秀煌日記初号』の記録と一致している。ただ山本の日記には、受洗者の中に「愛原お銀并ニ松前屋の娘二人及ヒ主人等」がいたと記されているが、この松前屋傳八の家に、尾原英吉が下宿していた

ことは、『山本秀煌日記初号』に記されている住所録「赤塚町壹丁目　松前屋傳八方　尾原英吉」からもわかる。

(39) 「米國前大統領グラント來朝」については、『七一雑報』四巻、第二五号（明治十二年六月二十日）以後、毎号報道されている。また、『新聞集成明治編年史』第四巻、七四ページも参照。

(40) 岡崎市役所編『岡崎市史』第七巻（株式会社名著出版、昭和四十七年）三一四～三二五ページ、とくに三一四～三一六ページによると、この寺の名は、日下寺ではなく、龍海院、別の名を「是の字の寺」といい、明大寺町字西郷中三十五番地にあるという。山本は、東照宮が是の字を握った夢を見た、というが、これは東照宮ではなく、東照宮の祖父松平廣康であり、その夢を解いたのが、大澤龍渓現住模外和尚である。「曰く、斯れ吉夢なり、蓋し是の字を祈る時には日下の人なり、日下の人には天下の主君に非ずや、天下掌握に歸せんこと大君の一世に非んば必ず之子之孫に在らんこと無疑と」。松平廣康の孫徳川家康は、慶長八年（一六〇三）九月十一日、龍海院に「四方膀示の朱印」を与えたという。

(41) 尾原拙郎（一八三七～一九二四）は、天保八年一月二十八日、西尾藩士の家に生まれ、幼名を竹之助といった。明治二年の西尾藩分限帳には、二人扶持の小頭小役人で、藩校の助教を兼ねていた。おそらく、尾原英吉のゆかりの人であろう。彼は明治十年六月、米国メソジスト監督教会日本宣教総理マクレイから洗礼を受け、明治三年七月、定住伝道者として西尾に任命されている。大正十三年十二月二日逝去するまで、彼は西尾教会でよきキリストの証人だった。西尾市史編纂委員会編『西尾市史　近代四』（愛知県西尾市、昭和五十三年）一四二ページ、五月女昇一郎『西尾教会史(1)』『西尾のキリスト者』第五号（一九六六年三月）二ページ、『基督教時代』第八五号（昭和七年一月一日）五ページ、『一八八〇年度美以美教会宣教会社年報』一六七ページ参照。

山本秀煌日記第貳号

【1】(朱書)明治十二年七月　「山本秀煌」ノ實印
(朱書)日誌　(朱書)貳号

【2】明治十二年七月十七日ヨリ

十七日　半晴　水曜日　(朱書)[17]

午前五時起床　今朝名古屋ヘ帰ラント欲シ　人力車ヲ雇テ午前七時頃岡崎ヲ出立シ午後(前)十一時半帰宅ス　留守中国元并ニ米國桑港ヨリ美拉(ミヒル)留ノ書狀来ル　午後清水〔ノ〕山田君來ル　英文典ヲ讀ム　今月初ヨリノ新聞ヲ閲スルニ　虎烈(ママ)病なか〳〵盛ニシテ撲滅ノ姿ナリ　当縣ニ類似証(症)二三名アルヨシ　大坂神戸ハ日々二百人位ノ新患者アリ　斯ク疫病ノ流行スルハ六月上旬ヨリナリ　東京ハ預防厳重ニシテ西ヨリ來ル旅客ハ三島驛ニテ五日間止メ　海路ヲ來ル者ハ相州長浦ニテ十日間滞在サスルヨシ

十八日　晴天　金曜日　(朱書)[18]

寒暖計九拾度

午前亜米利加ヘ差出ス書狀ヲ認ム　午後〔美以美教会員〕服部〔福治〕氏ヲ訪フ

○虎烈(ママ)刺病益々蔓延　大坂府ニテ最初ヨリ去月三十日迄テノ總計三千〇六拾八　内二千二百五十四人死亡

○傳話機ノ発明者エデソン氏の出處　別冊ニ記ス

十九日　晴天　(朱書)[19]

寒暖計九十度、土曜日

午前如常　午後七時森田君同道ニテ【3】清水町ヘ傳道ス　聽衆大凡十名　森田氏ハ丹州宮津ノ藩士　當時裁判所ノ官吏ナリ

○(朱書)去月三月附ヲ以テ大臣ヨリ左ノ通リ達セラレタリ

今般亜米利加合衆國ノ別冊ノ通改定結約相成候　條此自布告候事、(1)別冊ハ巻末ニ記ス

雑　報、

松田大書記官ハ琉球事件ニ其功少ナカラサルニ付キ　勲三等ニ

叙セラレタリ
英國皇帝陛下ハ以太利ヘ幸行　埃及王ハ位ヲ其子ニ禪リテ退ソカレタリ　英國ト希望峰ノ土族ツールトノ戦争ハ中和ニ成リシヨシ
南亜米利加ヘルー、ホリビヤト智利トノ戦争ハナカ〳〵盛ナリ
是戦争ハホル(ヘヒ)ヒヤカ千八百六十六年ノ條約ニ叛キ　硝石ノ輸出ニ税ヲ課セシヨリ起ル

教會新報

浅草ニハ須賀橋ニ會堂ヲ建設シ　去月廿一日開堂式ヲ行ヘリ(2)
麹町教會ノ吉岡氏ノ細君ハ去月十八日ノ夜急病ニテ死去サレタリ(3)
篠原氏ハ信州高遠ヘ六月中旬ヨリ傳道ヘ行カレ　又小川氏ハ桐生ヘ行カレタリ(4)
【4】本願寺宗ニテハ去月ヨリ改革ニ付　大葛藤ヲ生ジタリ(5)
廿日　晴天　九拾度　日曜日　[20](朱書)
午前朝日町服部氏宅ヘ行キ　吉田氏ニ面會ス　午後清水町傳道聽衆一人モナシ　山田　井出ノ両君ハ犬山ヘ行カレタル由
廿一日　晴天　九拾度　月曜日　[21](朱書)
午前午後トモ平常無事
去ル八日東京市民ハ(ヘヒ)クラント氏ヲ招待シ　工部大学校ニテ饗應ス　来會スル者千五百余名　我ガ國未曾有ノ大會ナリ(6)　翌九日横濱市民氏ヲ町會所ヘ招シタル由

教會新報

七一雑報廿九号ヲ閲スルニ　青山氏ノ書狀アリ　其書中ニ云ク山口辺ハ中々眞宗ノ盛ナル處ニテ　青山氏耶蘇ノコヲ語ラレタレバ　宿屋主人ハ顔色ヲ変テ左様ナ御方ハお宿ハ平ニ御断リト言ひし由
大坂府ニテコレラノ侵入セシヨリ　去ル十一日迄ノ患者總計五千三百四拾九人　内死亡四千八十一人　全治四百五十一人
廿二日　晴天　九拾度　火曜日　[22](朱書)
午前九時亜米利加彌拉(ミヒル)留氏方ヘ書狀差出ス
昨夜熱田驛ニテ巡査ト土人ト大喧華(ママ)アリ　其源因(ママ)ヲ探ヌルニ古市町餅屋【5】商森幸助ト云者ガ虎列刺病ニ罹リ死去セシニヨリ　早速巡査二人ニテ付キ添ヒ　火葬ニセント東分町ヲ通リ掛ルト　同町若者ガ五六人出來リ　此町ハ昨日流行病ノ祈禱ヲ行ヒシニ　其レニ死人等ヲ舁(カツ)キ込トハ不埒ナ奴ト　今日ト云今日ハ巡査デモ何デモ糞デモナイト帽子ヲ取リテ溝ノ中ヘ投ケ込ミ　腕ヲ集テ打チ掛ルニゾ　巡査モ迚(トテ)モ叶ハヌト　又道ヲ換ヘ壽福寺町ヲ通リ掛ルト　又以前ノ如ク若者ガ篝火(カガリ)ヲ焼キ待チ構ヘ此処ヲ通レバ打殺スト　大勢ニテ呼ヒ立テレバ據(ヒ)ケリ　又分署ヘ帰リ　今度巡査數人ニテ田中町ヲ通リ掛リケレバ　又同町ニモ竹槍ヲ集メ待タル折ナレバ　言ヲモ掛ス突キ掛ル故　暫時説諭モアリタレド　中々聞クベキ様子モナク　益々怒猪獅武者前後左右ヨリ突キ立ツルヲ暫時棒ニテ支ヘラレシニ　遂四人ノ

査官ハ傷ヲ負ヒ棺桶ヲ其マヽ打捨テ急ニ分署ヘ歸リシヨリ　馬鹿連ハ此勢ニテ分署ヲ打毀ストカ巡査ヲ叩キ殺ストカ　手ニ〳〵得物提ヘテ大搔動(ママ)ナレバ　該署デハ此由警察大署ヘ通知し(7)ケレバ直ク数十人ノ巡査ガ出張とナリ　當今悪徒捕縛中ノ由前琉球王從三位尚泰君ハ源家ノ部ヘ編入サレシト

【6】廿三日　晴天　八拾五度、水曜日　(朱書)[23]

午前如常　午後八時清水町ヘ出張講義　聽衆十人、山田、井出、吉田ノ諸君光來、午後十一時歸宅、留守中丹後峰山谷部、松田ノ諸兄ヨリ書狀來ル　中ニ寫真アリ　両君及高橋君ノ真像ナリ彼等ノ避暑中帰省シタル由、

熱田驛ニハ此頃多分虎烈刺(ママ)病患者アルヨシ、

廿四日　晴天　八十八度　木曜日　(朱書)[24]

午前午後如常異狀ナシ　虎烈刺(ママ)病ハ追ヽ蔓延　大坂ハ追々病勢衰ヘ　當時ハ岡山　堺　愛媛　兵庫ノ諸縣最モ盛ナリ

本願寺宗ノ改革ニ付キ種々ノ葛藤ヲ生ズ　其檄文等載テ　十八日　十九日ノ東京日々新聞ニアリ　巻末に記ス　其主方(法主)思フ當時ノ改革奸黨ニヨルト云フ(8)

外國近報

魯國ノ虚無黨ノ勢力追々盛ニシテ　夫ノ有名ナル陰察警察官リーチエンスチン氏ハ兇徒ノ爲ニモーコー府ニ於テ暗殺サレタリ魯國ノ近報ニ曰ク　兇徒ノ捜索ハ日一日ヨリ厳密ニシテ　國事犯ノ刑罰ニ處セラルヽ者勝テ數フ可ラズ　凡ソ十四歳以上ノ國民ハ居住證書ヲ所持セザレバ大都府ニ於テ居住スルヿ得サルニ至レリ云々

七月廿一日ノ新聞ニ日本國債ノ惣計【7】ヲ載ス(9)　別冊ニ記ス

〔〇　雑記巻ノ一〕

全國虎烈刺(ママ)病患者七月十一日迄ノ通計　二万二千五百七拾八人内死亡一万三千二百八十二人　百人ニ付死亡五拾八人八分五厘ノ割、

廿五日　晴天　九十度　金曜日　(朱書)[25]

午前八時半井出氏光來　暫時對話ス　午後松田　谷部、宿元東京アマルモン氏并ニ横濱〔住吉町五丁目六十四番地　栗村左衛八方〕尾原君ヘ書狀差出ス　夕刻服部　吉田ノ諸兄光來

廿六日　晴天　九十二度　土曜日　(朱書)[26]

午後七時清水町　聽衆八(人)木斗　吉田君光來

廿七日　晴天　九拾度　日曜日　(朱書)[27]

午前九時頃吉田氏光來　旧約書ヲ講ズ　同十時朝日町〔美以美〕講義所ニ至リ祈禱ヲ爲シ愛原君ニ面會ス　午後四時清水町ニ至リ講義ス　聽衆五人　今夜本願寺近傍ニ於テ松方〔正義〕大藏大輔ヲ饗應之爲メ煙花ヲ打　中杉ノ山田君同道ニテ運動方、花(ママ)火見物ニ至ル、今午後三時過岡崎正村君方ヨリノ書留郵便至ル被見スレバ　是東京築地アメルマン氏并ニ井深氏ヨリノ通信ナリ　蓋シ氏等ハ來月上旬ニ當地ヘ来ルト云　又新約前編十冊岡崎ヘ到着シタル趣　〇熱田驛ニハ大凡二十人ノ虎列刺患者アリ

ト云

【8】廿八日　晴天　九拾一度　月曜日（朱書）[28]

午前八時頃山田君光來　英文典并ニリードルヲ讀ム　終テ後

〔美以美教会員愛原〕於銀〔お銀〕來ル

○過日千葉縣會議長櫻井〔静〕氏書ヲ岩手縣縣會議長ニ送り(10)

國會設立ノ義ヲ談セラレタリト

○東京府會議員并ニ商法會議所ノ議員　天皇陛下ヲ上野公園ヘ

招待シ饗應センコヲ議シタリ(11)

七月廿三日刊行ノ日日新聞ニ　明治十二年度歳入豫算表ノ概略

ヲ載ス　抜抽シテ別冊ニ記ス

○小澤陸軍少將ガ其先祖ナル上州碓氷郡里見氏ノ城趾ニ取建ラ

ル碑石ハ　此頃出來シタル由ナリ　其碑文左ノ如シ（以下朱書）

歸厚

明治十一年八月余遊上野國觀我祖里見氏城墟懐彷徨、有不

忍去者矣里見氏出於新田義重、義重一丁義俊、城里見而居

焉爾里見太郎其子義成、従源頼朝而興、任伊賀守叙従五位

下歴事將軍四世以勇武爾子孫支族顯元弘建武之間義成之後

義實嘉吉中崛起於安房、數世至忠義謫於伯耆、實慶長十九

年也、里見氏ノ興廢略如此余欲爲建碑謀諸同族、皆捐資助

功遂成此擧庶幾不湮没也　同【9】族姓名録在碑陰

陸軍大將二品大勲位熾仁親王隷額

遠孫陸軍少將從五位勲三等

小澤武雄撰（以上朱書）

正八位宇都宮紀綱書

午後九時森田氏と共ニ枇杷島ヘ遊歩ス

廿九日　晴天　午後雨　八十五度　火曜日（朱書）[29]

本日午前午後如常　東京亜米留門氏　井深　川村数と森岡　中

水野村鈴木　岡崎正村　植村ノ諸兄ヘ書狀差出ス　今朝魚店通

リ、伏見町東ヘ入ル處ニコレラ病患者アルコヲ見出されり　熱

田驛ニハ初起より三十人ノ患者アリト

○今午〔後〕川村氏より書狀到來　直ニ返書差出ス

○過日來よりあつらへし實印出來　八十五戔ヲ拂フ【1】参照〕

夕刻ヨリ大州〔須〕辺ヘ遊歩ス　九時頃帰宅ス

○廿四日ノ東京新聞ニ曰ク　琉球處分ニ付テ　支那政府ノ擧動

ヲ察スルニ　歐州ヨリ大小ノ武器ヲ購ヒ入レ　三十五頓〔ヤ〕ノ大砲

ヲ有スル強大ノ軍艦六艘マテヲ購求セシト（朱書）

卅日　晴天　八十五度　水曜日（朱書）[30]

午前午後如常　午後七時清水町【10】傳道　同十時帰宅　聽衆

十人　山田菊藏　吉田　村瀬等來ル

尚名古屋虎烈〔？〕刺病漸ミ蔓延已ニ去ル　廿七日迫患者三十五名ア

リシト　又廿七八ノ両日ニ於テ新患者三十五人アリタリ

卅一日　晴天　八十五度　木曜日（朱書）[31]

午後八時服部氏ヲ訪フ　留守中吉田氏來ル、

廿六日ノ朝野新聞ニ曰ク　先般沖縄縣ヘ派出サレタル湯川貫一

君ハ兵庫ヨリ行事ヲ電報ヲ以テ元老院ヘ通知セラレタル趣ニテ議官がた昨日前七時ヨリ同院ヘ集會セラレシト聞ケバ　如何ナル電報ニヤ

愛知ニテ〔コレラ病患者〕最初六月廿五日ヨリ廿九日迄　惣計九拾八人内死亡四拾九人ナリト

八月（朱書）［August］（朱書）

一日　晴天　八十六度　金曜日［1］

終日無事

廿八日ノ日日新聞ニ曰ク　曩（サキ）ニ千葉縣會議長櫻井静ナル者岩手縣議長ヘ書ヲ送テ云々ヲ記セシ處　右ハ誤聞ニテ櫻井ナル者ハ議長ニモ議員ニモアラサルヨシ〔「誤聞」は誤聞〕

東京ノ御臨幸委員（上野）ハ去ル廿五日ニ上野ヘ集會シテ其事ヲ議サレタリ　當日案内ス可キ人ハ大凡ソ三千人ナリト

○七月十四日　日耳曼軍艦ヘスペリヤ号ガコレラ傳染豫防規則ヲ違犯シタル由【11】目今談判中ノ由

二日　晴天　九十一度　土曜日

午前十時相原氏光來　同十一時森岡君光來　相原氏ハ午後五時頃帰宅セリ

午後七時より清水町傳道　聽衆十人　山田　吉田ノ諸氏出席

三日　晴天　九十四度　日曜日

午前八時吉田君來　聖経歴史ヲ講ズ　同十字朝日町服部氏ニ至ル　午後四時頃清水町ヘ傳道　同九時帰宅　聽衆四人　林、井出、山田ノ諸君ナリ

愛知縣コレラ病者六月初旬よ〔リ〕七月三日迄て百七拾五人

○東京繪入新耳ニ曰ク　播州ノ人石見ノ国　沖ノ島ノ西北六十里ニ於テ長サ三十里幅十五里ノ一大島ヲ発見セリト〔其真偽詳ナラズ〕

四日　晴天　九十五度　月曜日

午前九時森岡氏帰宅ス〔名古屋市中ハ虎烈刺（ママ）病流行ニ付キ　其祭ヲ爲ストテ毎夜数万ノ燈ヲ照ス　其雑沓實ニ甚し〕

是頃支那人横濱ニ於テ洋人ヨリ小銃三千五百餘ヲ買テ本國ヘ運送セシト

三十日東京日々新聞ニ曰ク　信憑ス可キ報道ニヨレバ　クルジヤ取戻ノ件ニ関シ　支那公使チユンホー氏ヨリ魯國外務卿ヘ掛合ヒタル談判ハ既ニ其局ヲ結ビタリト　魯ノ決答頗ル隠秘ニ屬スルヲ以テ　未ダ之ヲ明知スルニ由ナシト雖ドモ　若シ魯廷ニシテ一歩ヲ譲リ清廷ノ要求ヲ許シタラバ【12】必ズ其代リニ相當ノ報酬ヲ清朝ヨリ受取ルベシ

○十月二十八日発ノ電報ニ前日ノ戦争ニヅール兵戦死無慮一千人　英兵ハ戦死十人負傷五十三人ナリト　又該戦争ノ豫算ハ日ニ五十万磅ナリト〔憩〕

五日　晴天　九十五度　火曜日

午前五時起床　人力車ヲ雇ヒ岡崎ヘ向ケ発足ス　沿道ノ地方熱

田　鳴海三四人ノ虎列刺病者アリ　知立駅ニテ小憩　大濱茶屋ニ於テ午飯ヲ喫ス　午前十一時岡崎ヘ着　牧氏ノ宅ニ至ル　時ニ東京ヨリ來リシ郵便はがきあり　被見スレバ是なん築地在留ノアメルモン氏ノ郵送スル處　井深氏ノ著述ナルトラクト二十五冊ヲ運送スルトノ報ナリ午後和田傳八君ヲ訪ヒ十時帰宅ス

六日　晴天　九十一度　水曜日

午前八時半郵便局ニ至リ爲替拾五円請取　帰路山路君ヲ訪ヒ暫時對話　午前十時帰宅ス　襦袢足袋等ヲ購求シ八十戔ヲ費ス

午後豊橋桂君光來暫時對話

七日　曇天　午後雨　七十五度　木曜日

過日来炎暑打ツヽキ　人々堪ヘ難キ思ヲ爲ス　折柄今朝ニ至リ一天掻キ曇リ　夕景ニ至テ雨フル　人畜初テ蘇生ス　午前連尺町ニ至リ　英國人約翰遊氏著【13】述ノ字書ヲ購求ス　代價二十戔　今朝ヨリ牧君ニ英學ヲ教授ス　午後七時深井君ヲ誘フ不遇　同十時帰宅ス

八日　曇天　終日雨天　金曜日

今日康生町ノ会議閉場と成りし趣　傳聞す

九日　晴天　土曜日

今朝東京亜米門氏ヨリ郵便はがき着ス　午後四時石橋君光來

馬太〔傳〕十章ヲ講ズ　同六時深井君光來　馬太傳七章ヲ講ズ

午後八時頃山路君光來

十日　晴天　日曜日

今朝山路君ノ宅ヘ出講ス可キ處　事故アリテ延引ス　午後九時開講　聽衆僅ニ三人　風聞ニヨレバ　名古屋区中ハ虎列刺病甚ダ激烈ナリト　又三河國ヘモ追々蔓延　碧海郡、豊橋　西尾辺に頻ニ流行スル由　今日講義日ヲ定ム　則日曜日　火曜日　金曜日ノ三度ナリ〔山本印〔三つ〕〕

十一日　晴天　月曜日

午前十時牧君ニ英學教授ス　午後三時河面君光來　馬太傳三章ヲ講ズ　同五時石橋　深井ノ両君來ル　馬太傳十章ヲ講ズ

十二日　晴天　火曜日

午後八時集會　石橋　和田　正村　河面ノ諸君光來　約翰傳一章【14】を講ズ

十三日　晴天　水曜日

午前九時伊賀村林氏ヲ訪フ　氏ノ老父ハ過日遠行サレシ由　午後四時河面君光來　馬太傳五章ヲ講ス　同六時石橋　深井ノ両君來　馬太傳十一章ヲ講ズ　同八時正村君光來　馬太傳八章ヲ講ズ　今朝井深氏著述耶蘇教問答アメルモン氏より到來、

今日ノ愛岐日報ニヨレバ　去ル十一日ヨリ十二日ニ至ル迫新患者三十八人　死亡二十一人　六月廿六日ヨリ八月十二日ニ至ル迫總患者五百六十八人　内三百三十四人死　虎烈(ママ)刺病追ミ蔓延既ニ岡崎ヘ及ベリ

十四日　半晴　木曜日

今朝八時頃俄然一天掻キ曇リ雷鳴風雨甚し、午後ニ至リ暑氣頓

ニ増長シ寒暑表九十三四度ニ至ル　午後四時河面君光來　馬太傳五章ヲ講ス　五時石橋君光來　馬太傳十二章ヲ講ジ　六時深井君光來　馬太傳十二章ヲ講ス　午後八時和田　正村ノ両君光来、

十五日　晴天　金曜日

午後四時石橋君光来　馬太傳十三章ヲ講ス　同八時正村　和田石橋ノ三兄光来　約翰傳一章【15】ヲ講ズ

愛知縣虎列刺病八月十三日正午ヨリ十四日正午ニ至ル　新患者五十六人真症卅四人　類廿七人　内廿七人死亡　總患者六百四拾八人　内三百九十四人死亡　二十二人全治　二百三拾二人治療中

本月七日　新潟縣下新潟市中ヲ隔ツル五六町大川向ヒ沼垂驛辺農夫米價騰貴ニ付テ苦情ヲ鳴ス　六百餘人起リテ　米穀ノ舟積ヲ支ヘ或ハ警察署ヲ毀チ　容易ナラサル暴動ヲ極ム　既死重傷三十人ノ餘ナリシト　當時ハ追ヽ鎮滅ノよし(12)

十六日　晴天　土曜日

一昨夜ニリ風邪氣ニテ頭痛甚し　夜ニ至テ少ク快氣ニ趣く　午後四時石橋君　深井君光來　馬太傳十四十五章ヲ講ズ　夜ニ入テ熊谷　正村　和田ノ諸君光來　馬太傳八章ヲ講ズ　幡豆郡平坂村ニテハコレラ病一件ニ付ニ暴動ヲ起シ　巡査二名ヲ殺し三十人ノ負傷アリシト　又愛媛縣令岩村君ハコレラ病ニテ死去サレシ由、誠ニ惜ム可キコトニコそ　又一昨日來ヨリコレラ病ニカヽリシ岡崎〔在〕住ノ人　諱名狐ト云者今朝死去シタリト其外今日ニ至ル迄未ダ一名モ死去シタル者ナシ

○今午後知多郡出村岡【16】氏ヨリ基督一代記ノ草稿送リ來ル

十七日　晴天　日曜日

今日ハ安息日ナルヲ以テ山路君宅ニ至ラント既ニ其支度ニ及フ折柄　門前音ヲナシテ小生ヲ訪ヒ來ル者　走リ出テ見レバ　則神學校生徒ノ角屋省吾氏ナリ　互ニ一別以來ノ口義ヲ述ベ扨テ何故ニ今日不意ニ當地ヘ來リシヤヲ尋問スルニ　氏ハ大坂親睦會ヘ北陸道ヲ歴テ行カント志シ　六月下旬東京ヲ出立シ江州彦根ニ立寄リ本多氏ヲ訪ヒ　大坂親睦會コレラ病ニ付キ延引ノ趣ヲ傳耳シ　京都　神戸　有馬等ヲ遍歴シ　昨夜名古屋ヨリ到着セリト　午後小生氏ノ旅宿ニ至ル　四時頃　今夕來リテ講義スルヿヲ約シ　四時頃帰宅スレバ　正村　河面　石橋ノ諸兄來ル在り　依テ馬太傳十五章ヲ講ズ　午後九時開場　角屋君講義　聽衆石橋　河面　正村　和田及ヒ他ニ両三名アリ　終テ後小生旧約創世記ヲ講ズ　十二時開散、今日東京アメルモン氏ヨリノ旧新約全書二部到來

十八日　晴天　月曜日

午前少シク雨降リタレドモ直ニ休ム　午後鍵屋ニ至リ角屋君ヲ訪ヒ　同道ニテ山路君宅ニ至リ　暫時對話後分袖ス　午後四時河面　深井ノ両君光來　馬太傳十六章ヲ講ズ　夕景ニ至リ　深井氏ヲ訪ヒ　同九時正村　和田ノ両君來ル　馬太傳九章【17】ヲ講ズ　終テ後石橋君光來、

當地ニモコレラ病追々流行　既ニ去ル十六日死去シタル後　ツ、いて一人ノ患者出來　直ニ避病院ニ至リ　今夕又両町ノ戸長該病ニ罹レリト

十九日　晴天　火曜日

午後四時河面　石橋ノ両兄光來　馬太伊十七章ヲ講ズ　午後九時開講　聽衆五人　正村　河面　石橋　林　々□(林しげ〻)ノ諸君ナリ

愛知懸下ノ虎列刺病新患者ハ大ニ減少　二三十名ニ至レリ　當月十八日迄ニ至ル總患者九百十一人ナリ

廿日　晴天　水曜日

今月ハ岡崎市中虎烈(ママ)病流行ニ付　疫病除祭ヲ爲ストテ町々ヨリ無底屋臺ヤラ飾物等ヲ出シテ大賑ナリ　午後深井光來　夜ニ入テ正村君光來

廿一日　晴天　木曜日

今午前十一時名古屋ヨリ平〔野〕黙〔二〕來リテ故郷ヨリノ音信ヲ持參ス　彼地ニ於テセ虎烈(ママ)病流行シ　三四人患者アルヨシ

廿二日　晴天　金曜日

愛知懸ノ惣患者廿一日迄千十六人アリ　之ヲ人民ノ数ニ比例スレバ　千五百五十人ニ一人ノ比例ナリト

今夕正村　和田両君光來

【18】廿三日　曇天　土曜日〔喫〕

今朝未明ニ起キ帰宅支度ヲ爲シ　三十五戔ニテ名古屋迄人力車ヲ雇ヒ　午前七時出立　大濱ニテ小憩　地鯉鮒ニテ人力車ヲ換ヘ　榮村ニテ午飯ヲ喫シ　宮ニテ再ヒ人力ヲ換ヘ　午後二時帰宅ス　旅行中車中ヨリ眼ヲ凝シテ諸方ヲ眺望スルニ　秋氣已ニ催シ颯ミタル風ト共ニ田野已ニ半ハ熟シ　早稲ハ已ニ穂ヲ出セリ　土人ニ聞クニ　今年ハ近來稀レナル豊作ナリ　大濱茶屋ノ西今村ノ東ニ第二新堀割成就セリ　抑此堀割ハ今ヲ去ル二十年前碧海郡ノ某村ノ大家某氏(伊予田與八郎)(イヨ田)初テ企テ　漸ク今年ニ至リテ成就セリ　其間ノ辛苦艱難實に名狀ス可ラズ　此が爲め其家産ヲ傾ケ妻子親族ニハ狂人ト呼ハレタレバ　某氏ノ剛氣ナル遂ニ此ノ不忍患苦を堪忍シテ此ノ成功ヲ遂ケタリ　此割堀(堀割)ヨリテ得ル所ノ利益少々ナラズ　此迫近辺ノ田地ヲ耕スニハ　皆水溜ヲ集テ之ノ水ヲ以テ耕作セシ處　此度ノ成功ニヨリテ遂ニ此大小五六十ノ水溜ヲ変シテ田畑トナシタレバ　此ヨリ得ル處ノ収穫殆五千石ニ至ル　又其近傍ノ田地モ此ノ御蔭ヲ蒙ルヿ少々ナラザルナリ　如是ノ大事業ヲ企テ艱難辛苦シテ成功ヲ遂ケタル某氏ノ名望こそ千歳不朽　彼ノ西國立伊中ノ堪忍ノ幸福ノ【19】源タルノ部ニ記シテ可ナリ(13)

名古屋ヘ帰宅シ見レバ　井深　アメルモン兩氏ヨリノ書狀アリ　被見スルニ　アメルモン氏ハ井深氏ト共ニ相州三島ニ至リ　六人程ニ授洗シタリト　然モ少シ不快ニ付直ニ帰國サレ　井深氏ハ箱根ニ三周間程滞在ノヨシ

廿四日　晴天　日曜日

午前服部氏ニ至リ讃美祈禱ス　蓋シ聞ク　氏ノ妻君并ニ栗村氏

夫婦ハ去ル金曜日四日市ヘ着サレ　桑名ニテ一宿　昨夕當地ヘ着サレタリト　最モ栗村氏ハ未タ桑名ニ滞在ノヨシ(14)

午後不快ニテ清水町ヘ行クヿヲ果サヽリシ　夕景ニ至　雷鳴風雨甚し　本月上旬ヨリ教會并ニ他ノ雜報左ノ如シ

クラント氏ノ一行ハ去月三十一日　日光ヨリ帰ラレタリ(15)

○愛媛岩村縣令ハコレラ病ニ罹ラレタリ　又熊谷裁判所長判事并ニ新潟新耳記者モコレラ病ニ罹リテ死去シタリト

○三品威仁親王ニハ去四日勲一等ニ叙セラレタリ（因ニ云　王ハ近日中歐州ヘ留學サル、由）

○新潟人民ノ蜂起ハ一旦鉆定(チン)セシガ　又々去ル八日集合シテ乱暴ヲ極め　警察官ニテハ少人数ニテ手廻リ兼ヌルヲ以テ(16)　新発田〔警察署〕ヨリ出兵〔巡査派遣の意〕ヲ請ハレタリト

教會雜報

【20】○山口服部氏ノ妻君阿静愛姉ハ本月二日死去サレタリト

○横濱在留ノブラオン氏ハ病氣ニ付キ　去月廿七日チヤ〔イ〕ナ号ニ駕シテ帰國サレタリ　信州飯田ニハ上田教會ノ久保氏ノ任力(壽)ニヨリ八九人ノ信者出来タリト

横濱海岸教會ノ信者森川忠兵衛氏妻君ハ去月廿六日死去サレタリ

本年大坂ニアル大親睦會ハコレラ病流行ニ付キ流会トナリタリ

外國新耳

南北亜米利加ヲ接續スル海峡「パナマ」ヲ堀割リノ義　此度巴理斯ニ於テ萬國工學士會議ヲ設ケテ此事ニ着手スルヿヲ決シ資本金百五十万ヲ募集スルヿニ決セリト

廿五日　晴天　八十二度　日曜日

聖上ニハ今日府民ノ招待ニ應シ　上野公園ヘ臨幸アラセラレル、由

虎列刺病初発ヨリ八月十九日迄全國ノ總計八万千四百八十八人内死亡四万四千五百貳拾八人　此比例患者百人ニ付キ死亡五十四人六分五厘弱ナリ

上野公園ヘ聖上御臨幸ノ節ハ兼而取調いたす府下人民八拾才以上ノ者（二千三十九人）ヘ園内ニテ拝謁ヲ仰付ケラル、ニ付雜沓セさる様休息所ヲ設ケ　同所ニ扣(ヒカ)ヘサセ　御通輦ノ折　此ニ御【21】駐輦アリテ　辱クモ勅語アリテ御物ヲ賜はる由ニ承ハル(17)、

廿六日　晴天　八十一度　火曜日

今朝丹後峰山宿元并ニ河辺村岩井ヘ書狀差出ス

聞ク　先年魯土ノ戦争ニ費セシ所ノ戦費ハ一億五千万ニシテ魯國ノ死人ハ無慮二十万人ナリト

廿七日　晴天　水曜日

今午前朝日町ニ至リ　美以美教(メソ)教師栗村氏ニ面會ス　午後清水町ニ至リ　山田　林ノ諸兄ト祈禱ス

廿八日　晴天　木曜日

クラント君ハ現今東京ニアリテ諸方ヲ遊覧サレ　過日三島神社

祭日ニ該驛ニ於テ静岡縣會議員ノ饗應ヲ受ラレ　東京ニ於テモ有栖川親王ヨリ饗應ヲ受ラレタリ　又獨逸皇孫ハ箱館　以太利(ママ)皇子は長崎ニ滞在中ナリ　流行ノ虎列刺日本全國ヘ蔓延　石川縣最モ甚シク毎日ノ新患者千人ノ餘ナリ　最モ是廿日廿一廿二日東京日々新耳ニヨル

廿九日　晴天　金曜日

愛知縣ノ虎烈(ママ)刺病頓ニ増加シ　去ル廿七日ノ新患者四十人　昨日三十人ナリ……

今年四月十四日魯國皇帝ヲ暗殺セントシタル兇徒ソルフアーアレキサンドル【22】ハ過日異変ナク極刑ニ處セラレタリト

卅日　晴天　土曜日

午後七時より清水町傳道　聽衆九人　山田　井出　林ノ諸兄光來

卅一日　晴天　午後雨　日曜日

今朝未明ニ余訪ヒ来リシ者アリ　誰ナラント出テ見レバ　則瀬川浅君ナリ　久々ノ對面互ニ無事ヲ祝シ　双方傳道ノ景況ナトヲ話シ合　大ニ慰ヲ得タリ　聞ク所ニヨレハ　氏ハ今月上旬鹿(兒島)古鳥ヲ発足　山口ニ至リ服部　青山ノ偶居ヲ訪ヒ　京坂ノ地ヲ経過シ　濕船ノ都合悪く不得已　東海道ヲ上京スル積ニテ昨夜當地ヘ着セリト　又聞ク　鹿兒鳥(ママ)ニテ六七人ニ洗ヲ受ケントスル者アリト　午前九時ニ至　小生ハ朝日町ノ服部　栗村ノ講義ニ至リ　氏ハ昨夜ノ罷勞ニテ暫時休息ス

午後三時瀬川君同道ニテ清水町講義〔所〕ニ至ル　暫時ヲ経テ栗村君美以美教會ノ信徒三四人ヲ携ヘ會ス　聽衆合テ十五人

栗村祈禱　瀬川講義　山本祈禱ス　同六時帰宅　晩餐ヲ喫シ暫時休息ノ後　再ヒ朝日町ニ至ル　聽衆五六拾人　瀬川氏講義ス(18)

同氏ノ持参〔セル新聞〕ニヨリ　聖上ニハ去ル二十五日　上野公園ヘ御臨幸アラセラレ　養老ノ典ヲ行ヒ玉ヒ　終テ流鏑馬(ヤブサメ)【23】犬追物　槍剣術ヲ御覧遊ハサレ　午後五時還幸遊ハセラレシ由　當日案内ヲ受ラレタル人ハ　クランド氏夫婦ヲ始メ　皇族大臣　参議　其他内外ノ紳士三千六百人　拜見人ハ幾万ナルや知らズ　實ニ前古無比ノ盛會ナリシト　又タ聞ク　クランド君ノ一行及ヒ外國公使モ如是ノ盛事ハ我々ノ曾テ見サル處ナリト讃歎シ　世界漫遊者ノ稱アル英婦人某（英ノ議員ニテ有名ナル（ジョン　ブライト氏ノ姪女ニテ四十餘ノ婦人）モ東洋ノ日本ニテ是ノ如キハ歐西ノ文明國モ爲ニ耻ス可シ　我ガ英人トイヘドモ　斯整頓セル大會ヲ開ク能ハスト感歎セルヨシ

此日クラント氏并ニ婦(ママ)人ハ公園内鐘楼堂ノ後ろナル小高キ地ヘ手ツカラ扁柏ト王蘭ヲ植ラレタリ　仍(ヨッ)テ周圍ニ埒ヲ結ヒ　其前ニ寒水石ノ碑ヲ立テラル　銘ニ曰ク

クラントノひのき

明治十二年八月廿五日　米國前大統領格蘭徳君手植ノ扁柏及冠之以君之名、下ニ碑文アリ　略ス

ぐらんどぎょくらん

明治十二年八月廿五日米國格蘭德夫人手植ノ玉蘭及冠之以夫人ノ名

○夫ノ世評ノ高キ横濱ノ瓦斯訴訟ノ一件ハ和解ニ成ルやノ風説ヲ前号ニ記セしが　いよ〳〵此程高島嘉右衛門氏ヨリ共有金ヲ受取リシ頃　自分ハ代議人ノ一人ニテ殊ニ【24】議長ノ選ニ當リタル金額者ナルニ　他ノ代議人ニモ謀ラズ　獨リ區戸長ト共有金ヲ授受シタルハ　如何ニモ不住意(ママ)ナリ　依テ自分ヨリ彼ノ受取タル金額〔一〕万三千五百円ヲ返償スヘキニ依リ是ニテ原被ノ訴訟ヲ解かれたしト云ヒ出テ至シニぞ　原　茂木　中村　朝田ノ諸氏か原被ノ中ニ立チ入リテ和解ヲ勸メ　双方熟〔シ〕調ヒタレバ本日頃解訴願ヲ差シ出スト云ヘリ(19)

九　月

一日　晴天　月曜日

今朝瀬川君発足ニ付　余モ同道いたし　大州觀音〔須〕　熱田神宮ヲ見物シ　熱田驛茶屋ニテ暫時休憩　互ニ尓後ノ安全ヲ祝シ　東西ニ分ル　午後九帰宅ス

石川懸下ハ虎烈(ママ)刺激烈ニシテ　去月廿日頃ヨリ毎日ノ新患者千人ノ餘ニ至ル

去ル廿九日東京新耳ニ曰ク　コレラ病初発ヨリ本月廿六日まて全國中同患者惣計十万二千二百十七人　内死亡五万四千六百十五人ナリ

二日　晴天　火曜日

昨夜ヨリ頓ニ冷氣ニ相成　今朝ハ寒暖七十度位心ち甚ダよし

午後七時宿許ヨリノ書狀到來　云ク　峰【25】山ニモ虎烈(ママ)刺病蔓延　患者三人ノ内二人死セリ　又近在沿海ノ地方ハ三十人ヨリ四拾人ノ患者アリト

○先頃ヨリ評判ノ高カリシ西本願寺改正ノ葛藤モ去月廿四日光尊法王帰山サレ　同夜直ニ大洲鐵然以下二十三名ヲ呼ヒ出サレ改正ノ趣意ヲ親諭サレ　役員一同敬承ノ意ヲ表し事故ナク　平穏ニ其局ヲ結ビタリト

○七月二日キングストン発　ハイチー（南米ノ共和國）ノ首府ポルトオープリンスノ急報ニ據レバ　下議院ノ議員黨ヲ成シテ上議員ニ発砲シ　上院議員ハ孰(イヅレ)モ逃走シタレトモ　其内砲彈ニ中リテ斃レタル者尠ナカラズ　只今尚ホ争闘中ナリト云

七月二十日ハバナ発　郵船ノ來着ニヨリテ　ハイチー騒動ノ詳報ヲ聞クニ　抑モ此ノ騒動ハ改進黨ト保守黨ト轢軋ニ原因シ六月三十日ニ下議院ノ改進黨ト保守黨(ママ)トガ会議中ニ大統領ノ弟ニテ下議員ナルセ子ラルカナル氏ニ向テ発砲ヲ試ミタルヨリ議場ハ忽チ変(カワリ)テ修羅ノ巷トナリ　一場ノ劇戦ヲ兩党議員ノ間ニ開キタリ　此時改進黨ハ胸壁ヲ人家ノ中ニ築造シテ奮戰シ鎮定ノ爲メ主張シタル陸軍卿ヲモ砲殺シ　其勢頗ル猖【26】獗ナルニ付　大統領カナル氏ハ寞(ママ)大ノ處分ヲ以テ鉆定セント試ミ　七月

一日ヲ以テ凡ソ改進黨ノ暴擧ニ与ミシタル者ハ盡ク容赦シテ其罪ヲ問ハサルニ付キ　各欲スル處ノ海港ニ向テ去ル可シト布告シタレトモ　改進黨敢テ其布告ニ從ハズ　戰爭愈ミ盛ナリ　斯クテ七月二日モ終日戰爭ニテ打過キ　翌三日ニ至リテ大統領ハ意ヲ征討ニ決シ　大砲ヲ暴徒ノ巣窟ニ向テ連発シタレバ　巣窟ハ忽チ燃ヘ上リ　間モナク灰燼ニ　暴徒ハ四方ヘ散乱シ戰爭ハ一旦平定セシガ　此ノ騷亂ノ爲死亡シタル人員ハ凡ソ三百名ニテ　此ノ火事ノ爲ニ燒失シタル人家ハ凡ソ百三十戸ナル可シ

三日　晴天　水曜日

今晩例ノ如ク清水町ニ道ノ日ナルヲ以テ　早朝ヨリ終日講義ノ支度ヲナシ　午後七時清水町ニ至リ　山田氏ニ英學ヲ教授シ終テ後説教　聽衆僅ニ七人　井出氏ハ不快ノ趣ヲ以テ欠席ス

土佐ノ立志社ニ領袖ト重セラレタル片岡健吉氏ハコレラ病ニ罹リテ死去セシ由〔誤聞〕

去ル八月三十一日　左ノ如ク仰セ出サレタリ

今三十一日午前八時十二分　典侍柳原愛子分娩　【27】皇子御降誕被遊候　此旨布達候事、

明治十二年八月卅一日　大政大臣　三條實美(20)

四日　雨　木曜日

今日ハ終日大雨ニテ冷氣大ニ催シ　寒暑表七拾度ニ降下ス

午後東京亜米留門氏并ニ丹後峰山ヘ書狀差出ス

五日　曇天　金曜日

今朝ハ心ち例ナラズ　夜ニ入テ熱氣甚しく煩之至ニ堪ス

嚮ニ清廷ガ公使崇宮保ヲ魯聖彼得堡ニ派遣シテ伊犁取戻ノ談判ヲ開キシヨリ既ニ数月ヲ経過スレド　未タ其局ヲ結ハズ　今慘澹タル妖氣ハ清魯ノ間ニ横ハリ　昏々タル殺氣ハ伊犁ノ天ヲ蔽ヒ將來ノ刑勢頗ル憂慮ス可キモノアリト

ゴロス新耳ニ曰ク　清兵ハ引續キ伊犁ノ境内ニ闖入シテ各々乱暴ヲ逞フシ　魯ノ兵ノ人員僅少ニシテ清兵ノ乱暴ヲ防クアタハズト

又曰ク　清兵ノ乱暴ヲ防制スル爲派遣サレタルコサック騎兵二百人ハ敵兵ノ勢盛ナルヲ見テ　一戰ヲ試ミスシテ敗走セリト

ユニベルス新耳ヲ開スレバ　魯國ノ議論ハ概子主戰非戰ノ二派ニシテ　其一ハ【28】土耳基戰爭ノ時ニモ戰爭論ヲ主張シタル者ナリト

日清ノ関係ニ付テ嘆シスル者アレト　未ダ憂慮ス可キニアラズ

本年ノ初ニアツタ清廷ヨリ我北京駐箚ノ公使ニ掛合　書ヲ送リ公使ヨリ我政府ニ轉送シタルニ付キ　政府ハ乃チ時日ヲ移スヿナク　其返翰ヲ公使ニ廻送　之ヲ彼ノ總理衙門ニ轉向シタリト云ヘリ　是後再度ノ掛合アリタルヿナク

又清國公使某大臣ニ向ヒ　琉球一件ニ付キ　早晩日清ノ間ニ不和ヲ釀スノ憂ナキヲ保セスト云ヒタルニ　某大臣從容トシテ之ニ答テ曰ク　琉球ノ事件ハ小事ナリ　設ヒ兩國間ニ紛議ヲ生スルトモ　兩國大臣ノ處辨ニテ容易ニ其葛藤ヲ解クヲ得ベシ　今

日ノ急務ハ日清両國相ヒ合從シテ事ヲ謀リ　倶ニ共ニ外邦ニ向テ其國權ヲ維持スルニ在リ

又李伯堂ハ我天津駐留ノ領事池田寛治氏ニ面會シ　琉球ノ處分ニ付キ日廷ハ兎角ニ我公使ニ満足ノ談判ヲナサズ　此上ハ日本ノ大臣我國ヘ來ルニアラサレバ　我將ニ自ラ日本ニ赴クベシト申シタルニ　池田領事ハ日本大臣ハ　迚モ貴國ニ來ルヿ得サル可シ　然モ若シ閣下ニシテ日本ニ赴キ給ハヽ満朝ミナ閣下ノ英名ヲ欽望スルヿナレバ　必ス閣下ヲ【29】禮遇シ　閣下ノ満足ヲ得ンヿ疑ヲ容レスト答ヘタレバ　李伯堂ハ大ニ笑ヒ　卿ハ我日本ニ赴クヿ能ハサルヲ知テ　此大言ヲ放ツトヘシト云ヒ止ミタル由ナリ

六日　晴天　土曜日

終日氣分不快　熱氣甚ダ盛ナリ　キナエンヲ服シテ熱氣防カントス　夕景ニ至リテ大ニ快氣ヲ覺フ

午前九時深井完一君光來　蓋シ氏其故郷大垣ニアル區裁判所ヘ転任シタルヨシ

午後清水町傳道　死後ノ處置ト云題ニテ講義　聽衆九人　同十時帰宅

○虎列刺病ノ激烈ナルハ石川縣ナルガ　越中國柿澤村ニテ僅百軒斗リノ小村ナルガ　其中虎列刺病ニテ死セシ者三百人ニテ生存スル者僅ニ二十二人ニ過キズト　又外ニ二十家斗リノ小村ニテ二人ヨリ残リシ者アラス　殆ド無人ノ境ニ入ルガ如シ

○クランド氏ハ［明治十二年］去月（八月）三十日御暇乞にて米國公使ヒンガム氏同道ニテ參内サレ　左ノ謝辞ヲ奉ラル[21]

僕今奉別ノ爲參内シテ陛下ノ謁見ヲ辱ウシ　敢テ謹テ陛下政府ノ百官及貴國人民ニ向テ僕ガ貴國在留中ニ拜受シタル歓待優遇ノ厚意ヲ感謝ス　僕ガ東京及ヒ其近傍ニ遊寓スル實ニ二ケ【30】月ニシテ　前二週間ハ貴國ノ南部ニ在リ僕貴國ニ來ルヤ　到ル處トシテ満足ノ歓待ヲ受ケサルナク未ダ嘗テ一タヒモ不愉快ノ事ナカリキ　恭ク惟ミルニ　貴國人民ハ一般ニ安寧ノ有様ニテ非常ノ豪富者アルヲ見サレドモ　亦タ必ス貧窮人（必死ノ）アルヲ聞カズ　是僕ガ是マテニ遊歴セシ諸國ノ人民ト全ク相反スルノ情態ニシテ　僕ガ頗ル喜ヒ且ツ好ム所ナリ　（僕ガ將來ノ望ヲ貴國ニ屬スルヤ大ナリ）僕ガ貴國ニ屬スル將來ノ望ハ大ナリ

何トナレバ貴國ニハ現ニ未墾ノ地尚ホ多ク　其地味ハ豊饒ニシテ頗ル未鑿ノ鑛山ニ富ミ海岸ハ廣ク　良港ハ多クシテ魚獵ノ利ハ蓋シ盡クル時ナク　其人民ハ概子（オホムネ）勤儉智巧ノ良民ナレバナリ　是ノ如ク富源ニ饒（ユタ）［カ］ナルガ故ニ只政府ノ智策ヲ以テ内外ノ平和ヲ保チ　外人ヲシテ敢テ貴國ノ内政ニ干渉セサラシメバ　貴國ノ富ハ自カラ内ニ盛ニシテ外ニ求ムル處ナカル可シ　僕ハ貴國ノ愈々富ミ益々強クシテ西洋諸國ト同ク外人ノ干渉ヲ受シテ　其獨立ノ体面ヲ保全センヿヲ望ミ　又貴國ノ政務ノ愈々振擧シテ開明世界ノ尊敬スル所トナランヿヲ冀フヤ切ナリ　是蓋シ僕一人ノ

望ム所ニアラズ　實〔寔〕ニ合衆國人民ト共ニ冀フ所ナリ　僕ハ今陛下ニ【31】別レテ本國ニ歸リ復タ貴國ニ來遊スルノ期ナシト雖モ　僕ガ貴國ニ於テ見聞シタル諸事ノ生涯〔ノ〕コレヲ忘レザル可シ　伏テ冀クハ　陛下永ク此ノ昌盛安寧ナル國民ヲ統治シテ久〔シ〕ク天福ヲ享有セラレンコトヲ

佛國皇子陣没ノ顚末

佛國皇子ガ六月一日ヲ以テ英軍ノ本營ヲ置ク可キ地位ヲ檢定センガ爲斥候トシテ防禦線外ニ出張セラルヽト聞キ　余ハ嘗テ其辺ノ地理ニ熟スルヲ以テ　皇子ニ從行センコトヲ請ヘリ　出発ノ時ニ當リ　余護衛兵ノ用意ナキヲ察シテ之ヲ騎兵隊長ニ請求〔シ〕タルニ　午前九時十五分頃騎兵大尉ヘツチントン氏ヨリ本營附キノ騎兵六名ヲ廻サレタルニ付キ此ノ兵トスルー人一名(道案内)トヲ從ヘ　皇子ト共ニ騎馬ニテ本營ヲ出発シタリ　尚ホ大尉シプストン氏ノ隊中ヨリモ護衛ノ爲ニ若干ノ兵士ヲ廻サル可キ筈に付キ　余ハブラッド河ヲ渡ルノ前ニ其兵士ヲ召寄ント欲シ　專令使ヲ以テシヲストン氏其旨ヲ掛合ヒ　兵士ノ到着ヲ待ナ〔チ〕皇子ノ左右ニ護衛兵ヲ增シ　漸ク進テ小丘ニ登リ　馬ヲ下リテ方位ヲ視定スル折カラ　少佐ハルリハン氏騎馬ニテ茲ニ來リ他ノ護衛兵若干名モ【32】程ナク參着ス可シト報セラレタルニ付キ　護衛兵ノ盡ク參着スルヲ待テ後ニ進ム可シト皇子ニ忠告シタレドモ　皇子ハ此ノ護衛兵ニテ十分ナリト答テ直ニ進ミ行クコト一英里半ハかリニシテ　イヽヨトン河ヲ渡リテ又一小山ニ登リ馬ヲ下リテ其辺ノ地理測量スルコト凡ソ半時間　夫レヨリ徒歩ニテ山ヲ下リ谷間ナル敵營ニ近寄リタルニ　營中ニハ申スニ及ハズ其近傍ニ絶テズール兵ノ出没スル模様ナキヲ以テ皇子ノ一行ハ稍〻戒心ヲ怠リ　皇子ハ大ニ疲レタリトテ敵營中ニ安坐シ　從者ヲシテ加非ヲ奠セシム　斯クテ休息ニ時ヲ移シ　午後三時卅五分ニ余ハ皇子ニ最ハヤ歸途ニ就カルヘシト勤メタルニ　皇子ハ尚十分間茲ニ留マル可シトテ未ダ馬ニ乘ラレズ　余ハ仍ハチ先ツ馬ニ乘リテ徐々ニ歸途ニ向ヒケレバ　皇子モ亦乘馬ノ用意ヲ從者ニ命セラレタリ　此時黒面ノズールー人忽チ余ヲ距ツルコト二拾「ヤルド」ノノ処ニ現ハレ余ニ向テ小銃ヲ乱発シタルヲ以テ　余便チ馬ニ鞭テ其場ヲ逃レ　皇子ヲ初メ同行ノ人々モ定テ殘ラズ　騎馬ニテ疾ニ其場ヲ逃タル可シト考ヘナガラ　既ニドンガ河ヲ渡リシ頃　一騎ノ僚屬馳セ來リ　余ニ告テ曰ク　皇子ハ不幸ニシテ賊彈ニ【33】斃レタルモ計ル可ラズト　余コノ報ヲ得テ大ニ驚キ　頭ヲ回シテ背後ヲ顧ミレバ豈計ンヤ　皇子ノ馬ハ放タレテドンガ河畔ニ在リ　於是乎急ニ人ヲ馳テ皇子ノ安否ヲ偵察セシメタルニ嗚呼皇子ハ既ニ斃ヽ矣ヽ

七日　晴天　日曜日

午前十時朝日町ニ至リ　服部氏ノ講義ヲ聽耳　讃美祈禱ス　午

後如常　清水町ニ至リ傳道ス　聽衆僅四人　林、井出、山田及ヒ他ノ諸兄ナリ

○華族尚泰君ハ先頃歸縣ヲ出願セラレシガ　御聞届ニナラサル故其儘在京ナリシガ　夫人何某コレラ病ニ罹リ　本縣ニテ病死サレシ由　誠ニ痛マシキ事ニそアル

○皇子ハ其後益々御機嫌ヨク　去ル六日ニ御名付ケノ御式ヲ行ハセラレ　從一位中山忠能君ノ邸へお引移リニ成ル由

八日　晴天　月曜日

病氣未ダ全快セズ　午前門前町ニ至ル　午後清水山田君光來英文典　リードル　旧約書ヲ素讀ス　其他諸事如常　異狀ナシ

九日　雨　火曜日

未明ヨリ少シク雨催ヒナリシガ　午前六時頃ヨリ大雨車軸ヲ流スガ如シ　終日止マス　終日異狀ナシト雖モ［天草兵乱征代記、ヲ讀ム］　夕京ヨリシテ【34】心ち例ナラス　少シク腹痛ノ氣味アリ　今午後森岡氏より報知アリ　曰ク　氏ハ用向ニテ三十日間京坂ノ間ヲ遊歴スト

去ル六日皇子御名付ノ式ヲ行ハセラレ趣ニテ左ノ達シアリタリ

皇子御名嘉仁（ヨシヒト）［後大正天皇］ト被命　明宮（ハルノミヤ）ト可奉稱　此旨布告候事

明治十二年九月六日　太政大臣　三條實美(22)

八月十五日発　英國ノ出納尚書（ヤヤ）ハ議院ノ問ニ答テ曰ク　テツサレイト、エピルストノ交界ニ於テ物情穩カナラサルヨリ　希臘及土耳基ハ共ニ其守境兵ヲ增加シタレモ　英廷ニ於テ之ニ關繫セサルナリト云ヘリ

八月四日倫敦発　信憑ス可キ報知ニ據レバ　英國ノ中尉ケレー氏ハ陸軍裁判所ニ於テ死刑ニ處セラル可シト

七月十一日伯林発　若シルーマニヤ政府ガ猶太教徒ニ自由ヲ許サヽルニ於テハ　歐州諸國ハ墺廷及ビ土廷ニ迫テ　ルーマニヤノ獨立ヲ認可セサル可シト云

十日　晴天　水曜日

昨夜より少ミ雨降リ　今朝六時頃迄ハ曇天ナリシガ　七時過キヨリ晴天トナリ　寒暖計八十度ニ昇ル

午後七時清水町講義　今日ハ旧暦ノ七月廿四日ニテ地藏祭日なるがゆへに　聽衆大ニ少ナク僅ニ四人ニ過キズ

【35】十一日　晴天　木曜日

明日岡崎へ赴カントテ終日其準備ヲ爲ス　午後朝日町ニ至リ服部　栗村ニ面會暇乞ヲナス　夕景ニ至リ大雨

十二日　晴天　金曜日

今朝未明ニ出立ノ心組ナリシガ　支度ノ用意ニテ彼是手間取リ漸ク七時半ニ至リテ名古屋ヲ発足ス　廣小路ヨリ宮迄ノ人力車ヲ雇ヒ　熱田神宮ノ横午ニテ暫時休息ノ折柄　計ラスモ坂野氏ガ余ノ偶居ヲ訪ハンガ爲ニ來ルニ會シ　互ニ東京名古屋信徒ノ近況ナトヲ談シ　三十分斗リ過キシ後道スガラ談話セんと　此處ヲ立出テ此駅ノ端ニテ人力車二臺ヲ雇テ鳴海ニ至リ　直ニ歩

シテ有松坂野氏ノ宅ニ至リ　午飯ヲ喫ス　蓋シ聞ク　坂野氏來月上旬上京ノ心組ナリト　故ニ岡崎より帰路立寄ランヿヲ請フ余之ヲ諾シ　午後二時出立　一里斗リ歩行ス　今朝ハ近日来ノ熱サニテ実ニ堪ヘ難シ　已ヲ得シ再ビ人力車ヲ雇ヒ　急進直行　午後四時頃岡崎へ着ス、沿道ノ地方虎列病四五軒アリ板野町〔板屋町カ〕辺ニモ二軒アル由ナルガ　余ハ一軒ヨリ見ザリシ、華族尚泰君ノ夫人　本國ニアリテコレラ病ニ感染死去サレタリ

〔拾〕

杉田定一氏ハ大坂愛國社員ナルガ　【36】近頃其故郷越前國被寄村ニ於テ自郷社ト云民〻ノ社ヲ設立サレシトゾ

○陸軍省ニテ本年六月調査セラレタル一管鎮臺ノ國民軍（年齢十七ヨリ四拾マデノ者）人員表ニヨレバ　則チ其第一ノ合計百六拾三萬零十八人　第二同七拾三万七千八百四拾八人　第同九拾一万七千九百人　第四同百卅万零四千五百六拾一人　第五同百零八万零二百五十四人　第六同九拾四万六千四百六拾五人ニシテ　總計六百六拾壹万七千零七拾六人ナリ

拾三日　曇天　土曜日

午前半日讀書　午後四時頃石橋兄光來　馬太〔傳〕拾八章ヲ讀ム　同七時後正村　和田ノ両兄光來　馬太傳十章ヲ讀ム

愛岐日報ニ曰ク　曩（サキ）ニ千葉縣〔會議長〕櫻井静氏ガ國會開設ノ事ニ付各府縣會議員ニ書簡ヲ送リしより　岡山縣會淺口郡ノ議員忍峡稜威氏ハ大奮発シ　議長坂田丈平氏及諸議員ハ協議シ山陽道諸縣ノ縣會議員ニ聯合會願望書ヲ贈リ　先ツ山陽道ノ諸縣より聯合協議シテ　國會興起ノ事ヲ懇請ス〔ル〕所アラントスル赴（其文書ハ略ス）[23]

佛國ハ當今専ラニユーヘブリデスヲ横領セント企テル由

【37】拾四日　晴天　日曜日

今日ハ晴天ナリシカド　終日大風ニテ土煙天ヲ掩フ　午前九時山路君ヲ訪ヒ　暫時談話　午後四時頃石橋君光來　馬太傳十九章ヲ讀ム　午後八時頃ヨリ正村　和田　河面　吉田ノ諸兄姉光來　列王紀畧ヲ講ズ

○愛知縣管下本年一月ノ調査社寺数ハ　社ガ一萬一千〇〇五ニテ　寺ガ三千三百九拾七ナリト

拾五日　半曇　月曜日

今未明ニ牧龍五郎氏名古屋ヘ向ケ発足ス

○虎烈刺病ハ暑氣ト共ニ退捨セシト思ノ外　此ノ近傍ハ激烈ニシテ　今日ニモ康生町裁判所ノ隣ナル車夫発病シ　直ニ極楽寺山ノ遊病院ヘ入院セシカド　遂ニ養生叶ハズシテ　其夜死去シタリト　此迫近傍ニ疾病ノアリシハ度〻ナレトモ　康生町ハ未ダ初テノ事故　人〻急ニ（ニワカ）畏懼ノ思ヲナシ　石炭酸ヲ求めんとテ樂種（ラクシュ）屋ノ前ハ殆ト人ノ山ヲ爲セリト云　又是より爲ス集會ナドアリシ趣ニテ　聖會ニ来集スル者一人モナシ

○今朝東京亜米留門氏并ニ峰山松田　荻野　谷部ノ諸氏よりノ書狀　名古屋平野方ヨリ到來、〔亜米留門〕教師ノ【38】書狀

ニ曰ク　奥野教師中會後直當地ヘ出張　一ヶ月間滞在スルヲ以テ其度ニ〔丹後國中郡峰山ニ〕帰國ス可シ　來年ニテヨケレバ又ゝ植村氏ヲ差遣ス可シト

拾六日　雨天　火曜日

秋雨霏ゝ昼夜寂寥　終日人ノ到ルナク　獨窓下ニ坐テ讀書ス

実ニ古人ノ言サレシ通リ　秋ハ何トヤラ物淋しく族〔旅〕人ノ心ヲ傷マシム　ゴー〳〵ト響き渡ル遠寺ノ鐘声は故郷ノ音信ヲ報スル如く　くさむらに鳴く蟲ノ音ニ帰省ヲ逞スかと疑ハル　茫然トシテ□天ヲ望ムヿ□久し　夕景ニ至リ遊歩方ゝ傳馬町ヘ到リ愛岐日報ヲ講〔購〕求ス　中ニ大政官録事アリ[24]　御輔ノ傳任ヲ載ス　左ノ如シ　九月十日

兼任文部卿　参議兼外務卿正四位勲一等　寺　島　宗　則

同　外務卿　参議兼工部卿法制局長官従四位〔勲一等〕　井　上　馨

同　参議工部卿　陸軍中將兼司法大輔議官従四位勲二等　山　田　顯　義

同外務〔兼保〕〔省〕二等出仕　海軍中將兼特命全権公使従四位勲二等

兼特命全権公使如故　榎　本　武　揚

○川路大警視彼地ニ於テ（佛國）何カ異変アリシ赴ナレト　眞偽ハ知ラスト（横濱新耳[25]）

○今夕　吉田　小藤氏光来　旧約書ノ話をナス

拾七日　晴天　水曜日

午後正村　和田ノ諸君光來　馬太傳ヲ講ズ　四時頃入湯ノ砌リ糸取機【39】械ヲ檢ス　蓋し是機ハ岡崎旧藩某氏ノ発明スル所思ニ是機械ヲ吾丹後國ニテ用ヒナバ　大ナル益アラン

一臺を購求セン事ヲ約ス

拾八日　晴天　木曜日

學校試檢近キニアルヲ以テ　河面　石橋ノ諸兄來ルヿアタハズ

午後山路君光來　傳耳スル處ニヨレバ　山口縣寄留青山昇三郎氏ハ吉木村〔吉敷郡〕より下ノ関ヘ帰られたる赴

午後八時開講　聽衆五人　山路　正村　和田　小ふし〔小藤〕　其他ノ諸兄姉ナリ

高知縣下ハ目下頻リニ人心動揺シ　何故か物情洶然タルヨシニテ其筋ヨリモ巡査三百名至急同縣下ヘ派遣サレシトヤニキク

報知新耳

［則ち全ク聯合會ノ遊歩ナトニテ　雑□フエルヿヨリ起レリト］

拾九日　晴天　金曜日

過日康生町ニテ発病セシ者アリシヨリ　虎列刺病モ絶ヘタリト

思ノ外今日ニ至リ　隣町籠田町ニ於テ該病ニ罹リシ者アリテ家内中ヘ傳染シタル模様ナリト　愛知縣下ノ患者を平鈎スレバ毎日十人ヨリ多ラズ　愛知郡其最タリ

午後四時過ル頃石橋兄光來　ヤがて馬太傳を講し　夜ニ入テ正村　和田　石橋ノ諸兄來訪　馬太傳を講ズ　終て後暫時對話

拾二時頃（ママ）對散

【40】コノ程魯國皇帝陛下ヨリ特誼ヲ表センガ爲　我天皇陛下ヘ「アントレーペルウオスワニー」(イ)勲章ヲ贈ラレタリ　又同帝ヨリ三條　岩倉ノ両大臣ヘ白鷺勲章ヲ贈賜セラレタリ(26)

廿日　半晴半雨　土曜日

今朝未明ヨリ少シク曇リ出セシガ　今日ハ八町ノ祭日ニテ煙火ヲ打揚ルトノヿ故　人〻手ニ汗ヲ握リ　今ヤ晴レ渡ラント待カマヘシ處　少〻晴天ノ氣味故　二発程打揚ケシガ　午後ニ至リ又〻曇リ出シ二時過ル頃ヨリ俄然暗黒トナリ　大雨盆ヲ傾クガ如シ　雷鳴霹靂タリ　四時頃ニ至リ少シク小雨トナリ　終ニ微(微)々然タリ　四時過ル頃石橋兄光來　仝八時正村兄來訪　馬太傳を講ズ

東京瀬川氏ヨリ書狀到來　是先日誂ヘシ處ノアナロジー及ヒ英華字典ヲ講(マヽ)求シテ　去ル十五日通運會社ヘ差出サレタル由　書物ノ代價及ヒ運送賃共ニて金二円四拾戔餘ナリト

廿一日　半晴半雨　日曜日

朝ノ中ヨリ兎角ニ曇リ勝ちナリシガ　午後ニ至リ一天晴れ渡リ眞の好天氣となりしかば　煙火連中は大喜ひニて　見物人陸續として【41】出で往還甚ダ雜沓セリ　午後二時頃石橋兄光來

馬太傳廿一章を講ズ　終て後桂兄光來　夜ニ入煙火ヲ打揚ルヿ頻ニナリ　其火西南ニアラハル　正村基君光來　馬太傳を講ズ

廿二日　雨天　月曜日

今朝秋田君よりメイセん機械一臺を購求ス　代價七円五十戔(27)

午後四時石橋　日置ノ両君光來　馬太傳を講ス　夜ニ入テ小藤姉光來

廿三日　雨天　火曜日

午後七時石橋　正村　和田ノ諸君光來　馬太傳を講ズ

廿四日　雨天　水曜日

午前八時岡崎ヲ出立　知立駅ニて小憩　榮町ニて午飯を喫し有松村坂野氏ヲ訪ヒ　午後三時帰宅　亜米留門氏よ〔リ〕ノ書留郵便を讀ム

去ル十五日東京警察派出ノ警視補初メ巡査三十人斗大坂ノ豪商藤田傳三郎　中野梧一ノ宅ヘ出張シ　彼等数名ヲ捕縛シ東京ヘ護送セリ　其犯罪ノ件ハ分明ナラサレド　道路ノ風説ニヨレバ紙幣ノ贋造ニ出ツルナラント(28)

廿五日　雨天　木曜日

聖彼得堡ノ通信ニヨレバ　魯廷ハ支〔那〕ヨリ【42】五百万ルーブルヲ受取リテ伊犁ヲ支那ニ還付ス可シト云〻

此頃佛蘭西ノ里昂府ニテ麻糸ヲ合密術ニテ絹糸ニスルヿヲ発明セリト

廿六日　晴天　金曜日

今午前東京奥野氏ヘノ書狀ヲ認ム　午後山田菊藏氏ヲ訪ヒ清水町ニ至リ留守　道ニテ山田氏ニ遇ス　東京亜米留門氏ヨリ奥野氏ノ出張ハ唯授洗ノ爲ナル由申來ル

廿七日　晴天　土曜日

午前郵便局ヘ至リ　金拾五円ヲ受取ル　帰テ東京亜米留門氏ヘ返書并ニ傳道費計算ヲ送ル　午後三時頃清水山田氏光來　アリサメチツクヲ讀ム　午後清水町傳道　聽衆七人、〔井深氏ノ書狀來ル〕

廿八日　晴天　日曜日

午前朝日町ニ至ル　今朝〔栗村左衞八夫人〕おさへ〔さい子〕姉ノ実父急病ノ由電報アリ　依テ姉ハ桑名ヘ出立サレタリ　午後清水町傳道　聽衆大凡八人

廿九日　晴天　月曜日

今朝井深氏ヘ書狀差出ス　荻野君ヨリ書狀到來　和透兄御死去之由傳聞ス　多田和就兄ヘ悔狀認ム　師範學校牧君ヘ書狀差出ス

卅日　雨天　火曜日

終日病臥

【43】十月

一日　雨　水曜日

今朝ハ未明ヨリ秋雨終日ふり　午前八〔時〕陸運會社ヘ至リ瀬川氏ヨリ運送サレシ書物ヲ督責ス　九時ニ至テ着ス　蓋シ其書物ハ華英字典并ニハツトラル　アナロージーナリ　國元并ニ荻野多田ヘ書狀ヲ差出ス　午後清水町傳道　聽衆四人　山田井出ノ両君光來　今夜清水町講義所ノ代價貳円五十錢ヲ拂　蓋シ八月分ノ残リ并ニ九月分ナリ

二日　曇天　木曜日

今朝奥野氏ヨリ返書到來　氏は六日彼地発足　陸地ヲ下縣セラル、由、午後遊歩、傘并ニ紙入等ヲ講求(ママ)ス

三日　晴天　金曜日

午後栗村君光來　東京瀬川氏ヘ書狀差出ス　朝日町ノ服部氏ヨリ桑名町トカヘ傳居されし由

○　伊犁(イリ)事件

嚮(サ)キニ該事件ニ付テ種々電報アリシガ　最後ノ電報ニヨレバ魯清ハ共ニ既ニ戰ヲ伊犁ト開キタリト云　今是ニ伊犁ノ地理ト沿革ヲ略叙ス

伊犁(一名クルジヤ)ハ北緯四十三度【44】東經八十二度ノ処ニ在リ　石垣ヲ以テ其外圍トナシ　處々ニ兵營砦壁及ヒ貯穀所アリ　政府ノ公署モ亦タ尠ナカラズ　是ミナ嘗テ清廷ヨリ建設シタル所ナリ　而テ清國ノ甘肅及ヒ其他ノ地方ト盛ニ貿易ヲ行ヒ通商ノ爲ニハ頗ル緊要ノ場処ナリシ(カ)　若シ夫レ伊犁ノ沿革ハ嘗テ千七百年間ニ清國兵ヲ塞外ニ出シ　始テ伊犁地方ヲ収テ版図ニ入ル　即チ千七百五拾七年ニシテ　我寶暦七年　清ノ乾隆二十二年丁丑ノ歳ナリ　是ヨリ先キ伊犁ノ酋長葛沓死シ　其子兩人父ノ位ヲ争フ　是所謂黒帽国ト白帽国ノ争闘ナリ（之ヲ国ト云ハ国教ノ位ナルヲ以テ）白帽国適ミ勢ノ黒帽国ニ敵セサルヲ以テ援ヲ清廷ニ乞フ　清國ノ主兵者(ママ)及チ白帽国ハ力ヲ併セテ黒

帽国ヲ攻ム　黒帽国全ク敗シテ浄盡声影ヲ留メザルニ至ル　嗣テ白帽国モ亦々清兵ノ爲メニ逐ハレ　清兵甫メテ伊犁ヲ全領シタリ　是ヨリ清兵ハ漸ク其領境ヲ擴メテ遂ニ天山南北路ノ各部落ヲ併セ　將軍ヲ伊犁ノ懐遠城ニ駐メテ控制ス　斯クテ清國ノ版圖ニ属セシ後數十年ノ間ハ稍〻寧謐ナリシガ　霍罕ノ各城ニ竄跡セル国民等ガ葛査ノ後裔ヲ視ル　恰モ磁ノ鐵ニ於ケルガ如ク　遂ニ其後裔ヲ推シテ乱ヲ爲シ　甘肅ノ父洲【45】及ヒ哈密ノ地方ヲ蹂躪ス事　實ニ千八百六拾二年即チ我ガ文久二年清ノ同治元年ニ在リ　此時ニ當リ東干ノ国民清人ヲ戮傷シタルヲ以テ有司ハ兇犯ヲ捕ヘントス　国民抗シテ遵ハズ　激シテ乱ヲ謀リ　陝省西安城ニ據シ　甘肅ノ乱首沙公章風ヲ聞テ西安ニ赴キ相聯合シテ大ニ邊省ヲ騒乱ス　清処軍ヲ遣テ之ヲ討滅セント試ミタレモ　兵力足ラズシテ国勢愈〻熾〻　四方ノ国民機ニ乗シテ動キ　千八百六拾三年即チ我ガ文久三年　清ノ同治二年ニ至リテハ賊衆蔓延シテ甘肅　火州　哈密　迪化即チ鳥魯木齊ヨリ伊犁ニ及フ　時ニ清兵各城〻モノ無慮六万人ナレモ　其大半ハ東干ノ国民ナレバ　漸ク叛テ国匪ニ與ミシ　遂ニ鳥魯木齊ヲ陷シテ之ニ據ル　而テ国兵ハ両路ニ分レ　其天山北路ニ向フモノ馬耐司ヨリ爾喀剌烏蘇城ニ至ルノ途中ニ於テ清兵ト接戦シ　清兵大ニ敗ル　是ニ於テ伊犁ノ民心震恐シ　国匪ニ從フモノ頗ル多ク国兵勝ニ乗シテ天山北路ノ各部落ヲ席巻シ　漸ク魯國ノ境内ニ侵入シテ魯人ヲ擾害ス　魯廷清兵ガ国匪ヲ平クルヿアタハズ国兵ヲシテ魯境ニ侵入スルヲ怒リ　乃チ大軍ヲ調集シテ国兵ヲ撃破リ　遂ニ伊犁ニ據レリ　是レ【46】魯國カ伊犁ヲ占領シタル縁起ニシテ　近時ニ清廷ハ顎リニ其取戻ヲ魯廷ニ要求スルナリ

四日　雨天　土曜日

今午石田啓藏君來リタレト　余留守中ニテ面會セザリキ　午後清水町傳道　聽衆僅ニ三人

五日　曇天　日曜日

午前聖書其他ノ書類ヲ讀ム　午後清水町傳道　栗村　服部　吉田其他ノ諸信徒并ニ三四ノ聽衆人光來　留守中牧龍五郎氏來ラレタル由　夜ニ入テ桶屋町ニ至リ　栗村氏ノ講義ヲ聽聞ス

六日　雨天　月曜日

昨夜ヨリ風邪氣ミ　終日床ヲ離レズ　夕景ニ至リ雨晴レ病氣も少シク快シタリ　五時頃師範學校ヘ至リ牧氏ヲ訪フ不在　相原氏ニ面會　帰ニ聞ケバ　留守中牧氏ハ余ヲ訪ハレし由

七日　曇天　火曜日

未明ヨリ曇リ出シ　曇天なるべき模様ナリシニ　岡崎行暫時見合セとし　午後までに少しくあれはたるのち　直ニ発足せんと支度を整へてなとする中　石田兄来り十二時午砲迚て對話ス帰られ〔し〕後直ニ師範學校へ【47】至リ牧氏ニ面會し　再ヒ旅宿ニ帰ル　午喫シ　空ノ模様をながめしに雨ノ催もなカリし故岡崎へ向ケ発足ス　人力車ニ乗し急進直行矢矧橋詰ニ至レバ傳馬天神祭礼ノ煙火打揚ノ声ヲ聞ク　午後五時半頃岡崎牧氏宅

ニ着ス　今夜ハ大花火アルヨシニテ　食事ノ間モポン〳〵ト声タヘサリシ　夜ニ入テ二階ヘ登リ屋根瓦ノ上ニ蒲團ヲ敷キ牧氏ト共ニ煙火ヲ見物ス　其煙火ノ功(ママ)ナル実ニ人目ヲ驚セリ　如此ノ者ヲ東京地方ノ人ニ見セシなば　実ニ驚愕スルヿならんと思はル

八日　晴天　水曜日

午後博馬　近野ハ天神祭ニ付ニ賑(ママ)シキ由傳聞し　牧氏と共ニ両町近傍ヘ至リシ〔ニ〕屋臺なとを出し踊躍を爲ス見物人ノ雑踏思フ可シ　夕景ニ至リ帰宅ス

九日　晴天　木曜日

午前秋田氏ニ至リ　新製ノ機械ヲ見ル　午後満田氏ト共ニ〔日名村〕雛村ニ至リ煙火ヲ見物ス

十日　曇天　金曜日

午後二時頃奥野氏着　東京ノ近況ヲ聞キ　喜ヒノ至ニタヘズ

亞米留門并ニ井深　瀬川ヨリノ書狀ヲ受取ル　午後正村　和田石橋　河面　吉【48】田ノ諸兄姉至ル　奥野氏説教

十一日　曇天　土曜日

午後八時頃開講　聽衆五人　今日　東(ミセノウチ)京都宛にて器械ヲ運送ス

十二日　曇天　日曜日

午後石橋君光來　奥野氏説教　山本馬太傳を讀ム　午後七時頃開講　聽〔衆〕七人　山本安息日ノヿヲ講シ　且ツ離別ノ辞ヲ述ブ

十三日　曇天　月曜日

午前正村　河面　和田　石橋ノ諸兄光來　奥野氏説教ス　十時岡崎発足午後三時名古屋ヘ帰ル　ミラル氏ヨリ書狀來ル

十四日　晴天　火曜日

午前奥野氏ト共ニ栗村氏宅ヘ至ル　森岡　鈴木　深井　有松ヘ書狀差出ス　午後清水町説教　聽衆二十人

十五日　晴天　水曜日

午後大曾根ヘ至ル　清水町七時半ヨリ開講　聽衆三十人

十六日　晴天　木曜日

午前鈴木氏　服部氏ヲ訪ふ　午後鈴木氏モ來ル　清水町聽衆二十人

十七日　晴天　金曜日

午後林榮助來リ洗礼ヲ乞フ　清水町聽衆二十人　東京ヨリバフ(ママ)テスマノ式ヲ郵送シ來ル

十八日　晴天　土曜日

午後中水野鈴木〔雅彦〕氏來ル　夕七時ヨリ開講　聽衆二十人

〔七月〕十九日　晴天　日曜日

小生一人昨夜清水町ニ泊シ　午後桶屋町ニ講義　午後十二時鈴木　岡村　林榮助　山田ノ諸〔氏〕光來　中水野鈴木及林榮助二人ニ〔奥野〕洗礼を授ク〔コレ名古屋教会ノ初穂ナリ〕(29)　午後三時ヨリ又夕七時ヨリ講義　聽衆二十人程『洗礼』

廿日　雨天　月曜日

【49】今朝奥野氏東京ヘ発足ス　後ニテ栗村　尾原〔拙郎〕ノ諸兄并ニ服部氏來ル　東京ヨリ奥野氏ヘ書狀至ル　夕ニ入テ吉田兄來ル

川路大警視ハ去ル十三日死去(30)　陸軍中将大山〔巌〕君大警視兼内務大輔ニ(亟)任サレタリ

○伊犁ノ談判モ魯國ヨリ伊犁ヲ清國ニ譲リ渡スヿニ決定セリ　魯廷ハ五百万テールヲ受取ラン〔ト〕要求シ　清使崇氏ハ二百万テールヲ拂渡サント言張リテ金額未ダ定マラズト

廿一日　晴天　火曜日

今日西京松田　東京井深及ヒ川村ノ諸兄ヘ書狀差出ス　袖時計ヲ購求ス　代價六円五十戔　磁器代價六十戔　竿扇子等ヲ購求ス

廿二日　晴天　水曜日

午後七時ヨリ清水町講義　聽衆八人　吉田兄光來

廿三日　雨　木曜日

今朝未明ニ発足スベキ處　昨夜ヨリ大雨ニテ暫時ノ後ニ晴レ渡ル可キ模様見ヘズ　明日迫延引センヤ種々思考セシガ　十時頃ニ至リ少シ小雨トナリシ故　イサ発足セント直ニ人力車ヲ呼ヒニ遣シタル處　雨天故カ其代價非常ニシテ七拾五戔ナラテハ大垣迄行カズト云(イフ)　已ヲ得ズ其代價ヲ拂ヒ　午後十二時上園町発足清水ニテ小憩　沿道ノ地泥濘車輪ニ粘シ運轉自在ナラズ　午後三時四十分頃漸ク荻(萩)原ヘ至ル　是ヨリ大垣迄ハ未ダ五里餘ノ路程ナレバ　迚モ日ノ中ニハ彼地ヘ到着スルアタハズ　荻(萩)原ニ一泊スル方　却テ便利ナリトノ車夫ノ勸ニ從ヒ　此ニ一泊ス

宿料茶代トモ十七戔ヲ拂フ

廿四日　晴天　金曜日

午前七時荻(萩)原宿発足　立石　竹ヶ鼻ヲ過キ　木曾川及ヒ他ノ二川ヲ渡リ　州股(墨股)ヲ経テ　午前十時三十分大垣ヘ着　深井氏を訪フノ暇ナク直ニ馳セテ垂井ニ小憩中食(ママ)ス　関ヶ原ノ故戦ヲ過ぎ伊吹山ヲ前ニ見　粕(柏原)驛等ヲ経テ米原ニ着　時ニ四時三十分蒸溟〔船〕出航時刻ハ今夕九時ナレバ四時間餘ノ猶豫アルヲ以テ暫時休息　入湯夕飯ヲ終リ床ニツク　將ニ眠ニ垂ントスル際宿屋ノ婢僕ノ御客様只今御乗船ノ声ニ呼ヒ起サレ　直ニ乗船ス時辰儀八時半ヲ報ス　【50】今夕ハ晴天ト云ニハアラ子*トモ風雨ノ船ヲ支フルナリ　水面恰モ鏡ノ如ク至テ平穩ナリキ　名古屋ヨリ米原迄人力車代價一円四拾五戔　茶代四　荻(萩)原宿代十五戔他ニ二戔　茶代前(米)原夕飯代八戔　船賃三拾四戔

拾五日　晴天　土曜日

午前三時半船大津ヘ着　直ニ上陸　宿屋投テ一泊　同七時大津発足　拾六戔ヲ以テ大津ヨリ四条迄人力車ヲ雇ヒ　急進直行糸兼ヘ着ス　時ニ午前十時ナリキ　折節主人ハ留守中ナリシガ御内室ニ面會　多田和就君ノ死去ヲ聞驚愕ニ不堪　又峰山ヨリノ坂部庄作君當地ヘ滞在ノヨシ　來リ同宿ス　午後松田君　高

橋君を問

廿六日 晴天 日曜日

午前同志社ニ至ル 市原君不在 午後病臥ス 夜ニ入テ松田君光來

廿七日 雨 月曜日

今朝出立ス可キノ處 大雨にて暫時見合(ミアワセ) 午後ニ至リ少し晴レ此吉崎 坂部ノ諸君同道 京都ヲ発足 堅木(ママ)原迫十戔にて人力車ヲ雇ヒ 追ミ場ヲ過キ 水戸王子ヨリ人力車ヲ雇ヒ 八木ニ至リ宿ス

廿八日 晴天 火曜日

午前七時八木発足 園部ニ至ル程路三里八戔三厘ヲ以テ人力車ヲ雇フ 須知ヨリ水原迫十九戔 千束ヨリ生野迫六戔 生野ヨリ福知マテ十八戔 午後八時福知ニ宿ス [水戸順知繪木(ママ)]

廿九日 晴天 水曜日

午前七時福知発足 行程二里人力車ヲ雇フ 今朝ハ殊ノ外晴天ニて四方雲霧ヲ以テ閉ス 是所謂丹波ノ名物霧海ナル者ナリ

(河内) 佛谷等ヲ経 二ツ岩にて中食(ママ) 加悦ヲ過き四ッ辻へ至ル時ニ降雨頻(シキリ)ナリ 人力車ヲ雇ハントスルニ 今日ハ祭ノ前日ナルヲ以テ思フマヽニ行カズ 彼レ是二時間半ヲ経漸ク四時頃ニ至リテ 二人乗リ一臺ト一人乗リ一臺出來(シュツライ)ス 大野迫八十戔ナリ 大野ニ達セシハ最早夕景ナリシ 折ヨク峰山帰リノ車アリシヲ以テ直ニ之ヲ雇ヒ 柴崎 坂部ノ諸君ヲ辞シ去ル 帰宅シ見レバ留守中ニて誰モアラズ(ママ) 如何トモスルナク 佐藤氏ヲ訪ヒ 彼所ニて夕飯【51】ヲ饌ス

卅日 晴天 木曜日

荻野 谷部ノ諸士ニ面會 戸長役場へ帰宅并改印届ヲ差出ス

卅一日 半晴 金曜日

午後高木君宅へ集會 來會ノ諸士荻野 谷部 石原ノ三兄ナリ

漢學校設立ノ爲 社員ヲ召券(カ)スルヿ〔ノ〕方法ヲ議ス

十一月

一日 半晴 土曜日

午前學校へ集會 昨夜ノ事柄ヲ議シ 立則委員ヲ撰ス 荻野君ヲ訪フ 谷部君宅へ招カル

二日 半晴 日曜日

今日諸人ノ來ランヿヲ恐て 岩井へ至ル 折悪く多可楽君留守中ナリキ

三日 半晴 月曜日

四日 半晴 火曜日

五日 半晴 水曜日

午後學校へ集會 社員ノ規則ノ正否ヲ計議(ママ)ス

六日 半晴 木曜日

金峰山掃除ニ至ル 帰路樫村宅ニ至リ茶ヲ喫ス

再ヒ馬淵君宅ヲ訪ヒ 午飯ヲ喫ス

七日　半晴　金曜日
馬淵　石原　荻野ノ諸兄光來　牛肉ヲ喫ス
八日　雨天　土曜日
佐藤氏佛事
九日　曇天　日曜日
午前馬淵兄光來　松田直考ヨリ書狀到ル

十二月
三日　丹後発足　同八日尾州名古屋へ着　同伴ハ常立寺住職ナリ
九日　清水町ニ至リ　林榮〔助〕　山田ノ諸兄を訪フ
十六日
岡崎へ出張　同廿九日帰宅、林榮〔助〕へ宿ス　蓋シ該所へ引移リシハ當月十五日ノ事ナリ

【52】明治十三年
一月
四日　火曜日　清水町へ會スル者僅ニ四人
五日　此夕ヨリ美以美教會ト共年首一周間ノ祈禱會ヲナス(31)　集會スル者十五六名
十三日　岡崎へ出張
十九日　故アリテ牧氏方ヨリ下宿ヲ断ハラレ　籬田へ移轉ス

廿二日　名古屋へ帰宅

二月
二月十日　岡崎へ出張　同廿三日帰宅
〔此頃天下ニ國會論盛ニ行ハレ　岡山縣　福岡縣　其他ノ諸縣有志輩元老院へ上書ス　又愛國社ニテハ　三月下旬ヨリ天下ノ有志輩集リテ國會設立ノ義ヲ議ス〕

三月
八日　鈴木甲次郎君上京(32)　中水野鈴木氏光來
廿七日
午後九時頃バラ教師着　清水町ニ宿ス
廿八日
午前ヨリバラ教師ト共ニ名古屋城内　大州〔須〕　東本願寺等へ遊歩ス　午後七時ヨリ説教　聽衆四五拾人
廿九日　日曜日
午前講義　聽衆六人　午後西魚町〔美以美講義所〕ニテ講義
夜清水町ニテ講義
卅日
バラ氏ト共ニ岡崎へ出立　鍵屋ニ宿ス　聽衆四人
卅一日
〔バラ〕教師ト共ニ豊橋へ至リ　正〔午〕後十二時道ニて分袖　余ハ

直ニ〔人力〕車ニ乗リ　豊嶋村アハラ〔安原〕學校ヘ至リ　山口氏ヲ尋子テ不遇　返テ朝倉利清方ニ宿ス

【53】四月一日　大雨

午前車ヲ馳テ岡崎ヘ帰ル　大雨盆ヲ流スカ如シ　岡崎にては信徒ノ信仰少ク衰ヘタル様子ニテ　甚タ心痛ノ至ナリ

三日　岡崎ヨリ帰宅ス　林榮助氏旧宅ヲ去テ新宅ヘ移ル　午後講義如常

〔バラ氏静岡ヨリノ手紙ヲ拝見ス〕

四日　日曜日　午後講義如常　山田　林ノ諸氏來ル

〔今月四日　政府集會條例ヲ頒布ス　天下ノ人心恂ミタリ〕

六日　美以美會ノコレル氏着　二周間ノ滞在テ　四月十七日帰濱

十日　十一日　講義如常　山田　井出ノ諸氏ハ此頃頓ニ來ラズ林氏ハ熱心ニ道ヲ聞ケリ　十一日ノ日曜日　栗村氏方ニテ授洗シタル者五人其後又五人授洗シタル由(33)

十二日　岡崎ヘ出張

十七日　岡崎ヨリ帰宅　ハラ(ママ)教師ヨ〔リノ〕手紙ヲ拝讀　奥野名古屋六月間出張サル、旨并井深氏水上関女ト來ル廿三日婚因(ヘマヽ)サル、由ヲ　又吉田氏モとり女ト婚因(ヘマヽ)ヲ取結ハントサル、由ヲハラ(ママ)氏ヨリ傳聞ス(34)　山口氏ノ書狀ヲヨム　今夕講義　高取　吉田　林ノ諸氏光來

十八日　日曜　今日ヨリ日曜日二度講義ト定ム　午後及ヒ夕方集會　聽衆二三人

廿一日　峰山ヘ金四円郵送ス　前日井深氏ヨリ書狀來紙幣ノ下落最モ甚しく　米一石金十円五六十戔　銀貨一円六十戔ニ至　依テ去ル十二日天下ニ令シテ　銀米ノ限月賣買ヲ禁停(ミセケチ)止ス〔四月中ノ入費　岡崎ヘノ旅費二円　名古屋一円五十戔〕

廿四五日　常ノ如ク講義

廿六日　岡崎ヘ出張

五月一日　帰宅　今夕集會如常　山田　高取ノ諸氏光來　ハラ(ママ)教師ヨリ書狀并ニ金子郵送し來ル

二日　午後及び夕方集會スルヿ如常　聽衆堕したり

十日　岡崎へ出張　仝

十三日　岡崎ヨリ帰宅　今夕ヨリ押切町五丁目山田方ニテ講義ヲ開ク　聽衆三四拾人

十六日　日曜ニ付キ講義　聽衆四五人　昨土曜日ノ集會ニハ聽衆八名

【54】六月廿七日　七月四日(ミセケチ)　午後東京より坂野兄來ル

廿八日　稲垣〔信〕氏東京ヨリ來ルノ報ヲ得　岡崎ヘ至ル

七月一日　岡崎ヨリ帰宅　押切講義所ヘ坂野氏ト共ニ至ル

二日　今午後稲垣氏東京ヨリ着ス

三日　午後林方ヘ集會　聽衆十人斗リ

四日　日曜日

午後集會ヲ開ク　聽衆十五人斗リ　中水野鈴木氏モ又至ル　洗ヲ受ル者二人　青木金太郎并ニ林竹太郎氏ナリ[35]　終テ後晩餐ノ礼ヲ行フ［洗礼二人］

六日　稲垣氏ト共ニ岡崎ヘ至ル　今夕石橋氏光來

七日　岡崎學校ヲ訪フ　午後河面氏宅ヘ集會ヲナス　集ル者十人

八日　岡崎より帰宅　押切町講義　聽衆四十人斗リ

九日　稲垣氏大坂ヘ向ケ出立

十一日　日曜日

清水にて講義ス　午後坂野氏講義　終て後羅馬書ヲ講ス

十五日　桶屋町壱丁目ニ講義所ヲ借リ受ケ　今日引移ル　押切町ノ講義　聽衆三十人

十七日　土曜日　清水町講義　聽衆十人

十八日　日曜日　桶屋町講義

廿五日　三浦［徹］南小柿［洲吾］ノ両氏大坂親睦會ノ帰路至ル[36]［三浦　南小柿　名［古屋］至ル］

廿八日　三浦氏ト共ニ岡崎ニ至リ　泡雪ニテ分袖ス

七月

十九日　坂野氏ト共ニ岡崎ヘ至リ　河面氏ニテ講義ス　此夜大雨　出水甚シ　翌日坂野氏西尾ヘ至ル　午後岡崎ヘハ二周間毎ニ出張　名古屋一周三度ノ集會　別ニ記スヘキナシ

山本秀煌日記第貳号

【55】八月

三十日　岡崎ニ至ル　此夜有松ニ宿ス　青木氏至ラズ　翌日岡崎ヘ着

九月九日　帰ル　帰路高取　山田ノ両氏東京ニ至ルニ遇フ

九月廿五日

新約四福音書　十九冊　壱円六拾弐入

一　天道遡原　二冊　四十弐

一　新約全書　二冊　五十弐

一　天路歴程　二　十弐

馬太傳　行傳話　佛道新論一　旧約　訓点新約　テモテ　天道遡原　〆壱円八拾五弐　三拾弐

六合雑誌　〆四円九拾七弐［計算合ハズ］

聖［書］會［社］ヘノ壹円八拾五弐　二割　三拾七弐ハ舛（タガイ）ニ六合雑［誌］此次ニ代リニとらさしム

十月末　押切町講義両三回　聽衆ナキヲ以テ閉講ス

十一月三日　天長節ヲトシ清水町ニ於テ親睦會ヲ催ス　會衆二十有餘名[37]

八日　岡崎行　十一日帰宅ス

十五日　加藤〔虎彦〕氏東京ヘ出発ス[38]　氏ニ託シ聖書會社ヘ金貳円五拾戔送ル

加藤氏ノ上京ト共ニ金曜日ノ會讀消滅ス

ハラ氏ヘ送ル書中〔ニ〕左ノ要件アリ

明治十二年十一月より今年〔十三年〕十一月ニ至ル

十一月　壱円五十戔　小生帰省中

十二月　三円　名古屋　壱円五十戔　岡崎　壱円五十戔

一月　八円　名古屋　四円

二月　岡崎　四円

三月　三度　牧氏宅断ハラル

四月　三円五十戔　名〔岡〕　壱円五十〔戔〕　二円

【56】五月　四円　名　二〔円〕　岡　二〔円〕

六月　五円　名　三〔円〕　岡　二〔円〕

七月　九円六十戔　名　六円六拾〔戔〕

八月　拾円十一戔　岡　三円五十戔

九月　八円八拾戔　岡　三円五十戔

十月　拾円拾五戔　岡　三円五十戔

十一月　拾円七拾戔　岡　三円五十戔

今月ヨリ留守宅ノ料金　三円五十戔

十二月　中　要件

廿四日　東京バラ氏ヨリ金貳拾二円七拾八戔郵送し來ル

明治十四年一月〔十四年一月〕

二日　第一安息日ヨリ一周間祈禱會ヲ開設ス[39]

十四日　バラ氏岡崎ヘ着　前後五度ノ集會ヲナス　聽衆四五拾名

十六日　安息日　石橋重則、正村基、河面晋ノ三氏　バラ氏より洗礼ヲ受く[40]

十七日　名古屋ヘ着　集會ヲナス前後三度　林たぬ〔ね〕并ニ榮吉君洗ヲ受ク[41]

十九日　バラ氏四日市ヘ向ケ出発ス

佛道新論ノ代價　鈴木氏より受取

天道遡原ノ代價　三原氏より受取

五経通考　山田氏より受取

二月

二月〔重記〕

十一日　大雨ヲ冒シテ三河西尾ヘ至ル　同十二日岡崎ヘ至リ

十四日栗村氏ト共ニ岡崎ヨリ帰ル

【57】廿二日　栗村氏ト共ニ中水野鈴木氏ニ至リ　廿三日帰宅ス　バラ氏ヨリ二ケ月分拾五円郵送し來ル

三月十日　〔一八八一年　明治十四年　十五年カ　三月十日〕

希哇(布)島皇帝横濱海岸教會ニ於テ日本基督信徒ヘ面會ス(42)

去ル十日ノ夜　横濱居留地百六拾七番館ノ耶蘇教會ヘ成ラセ玉ヒ　我國ノ基督教徒ト御面會ヤラセラレシ時　同信徒總代奥野昌綱氏ヨリ左ノ書ヲ上ツレリ〔以上は山本の言葉〕

日本横濱第一基督教會信徒總代奥野昌綱　謹テ希哇(ヤマ)國皇帝陛下ニ白ス　今ヤ何ノ幸カ　弊會建設ノ第九年期ニ當リ陛下鳳駕ヲ此堂ニ枉ケ　尊顔ヲ拜スルヿヲ得セシメ玉フハ実ニ我ラノ光榮ニシテ　貴國政府ト人民ノ開明ニ進ミ　其仁愛ノ寛大ニ至レルノ明徴ナリト思ヒ　欣然祝賀シ奉ル処ナリ　コヽニ歴史ヲ考フルニ　コロンブス氏ガ曾テ大西洋ニ航シ　我日本國ト印度國トヲ指シテ出帆シ　遂ニアメリカノ大陸ヲ看出セシ時ニ當リ　豈ニ今日基督教ノ感化陸下(ヤマ)ノ美島ニ普及シ　又我日本國ニモ福音傳來スル此ノ如キノ盛ヲ致スヿアルヲ知ランヤ　我ラハ已ニ貴國ノ獨立ナルヿ及ビ學藝教育ノ盛ナルト　自由ナル政事ノ行ハルヽヲ聞テ欣喜ノ至ニ堪ヘズ　貴國ノ皇祖カメハメハノ皇統及ビ我神武天皇ノ皇統連綿トシテ世ニ限リナカランヿヲ願フナリ

今日我ラガ恭シク陛下【58】ニ謝シ奉ラント欲スル処ノヿハ　今我ラガ集テ尊顔ヲ拜スル処ノ此堂　曾テ貴國ハノルヽノ信信徒(ヤマ)ヨリ寄贈セラレシ処ノ若干金ヲ基礎トシ〔テ〕米國リホウム傳道會社ヨリ派出シテ我ラニ始メテ道ヲ傳ヘタル二三教師ノ盡力ニヨリ　有志者ノ寄附金ヲ合セ以テ會堂建築ノ費ニ充テ　終ニ明治八年六月十日工竣リテ乃開堂ノ式ヲナシ神ニ獻ゲタリ　然テ其時ヨリ今ニ至ルマデ之ヲ自由ニ用ルヿヲ得ルハ何ノ幸福ゾヤ　其已ニ此ノ如ク我國民ノ爲ニ大金ヲ惜ムヿナク之ヲ寄贈セラレタルハ　神ノ獨子ヲ賜ヘル大ナル愛ニ本ケルヲ知ルナリ　是故ニハノルヽノ信陛ニ面謝セント欲スルノ情切ナレヒ　万里之波濤を隔ルヲ奈何セン　今陛下ニ由テ感謝ノ意ヲ達スルヲ得ルハ望外ノ大幸ト云フ可シ　且ツ貴國ノ教會既ニ盛ニシテ道ヲ海外ニ傳フルト聞テ祝謝ニ堪ヘザルナリ　弊邦全教會ノ如キハ未ダ盛ナラスト雖ヒ　幸ニ教法ノ自由ヲ得テ内國ノ傳道日ニ増シ月ニ進ミ　教會已ニ七十信徒凡ソ四千名ニ及ヘリ　日ナラズシテ海外ニモ亦道(衷)ヲ傳フルノ志アリ　今我ラ聊カ陛下ヲ尊榮シ奉ルノ微忠ヲ表センガ爲メ　我國語ヲ以テ譯セル処ノ新約全書一部ヲ獻シ　幷ニ貴國及ビ弊邦ニ於テ此聖教ノ行ハ國民ノ自由ヲ得　益々繁榮ナランヿヲ　是我ラノ伏シテ祈ル処ナリ〔以上『六合雑誌』第六号より〕

時ニ帝モ亦左ノ勅語ヲ下シ給フ〔山本の言葉〕

【59】朕今貴邦ニ客トナリテ基督ニ就テノ兄弟ニ接シ　其懇親ナル待遇ヲ受ケ　又貴國ノ邦語ニ譯シタル最モ貴重ナル聖書ノ贈リ物ヲ辱フス　實ニ感謝ニ堪ヘザルナリ　朕ガ國ハ基督ノ聖敎盛〔ン〕ニ國内ニ行ハル　貴國モ亦基督聖敎ノ速〔カ〕ニ國内ニ行ハレン丁朕ノ熱望スル処ナリ　今此兄弟ガ贈ラレシ貴重緊要ナル聖敎ハ　朕將ニ永ク之ヲ秘藏シテ他日ノ紀念ト爲サントス　依テ聊カ一言ヲ演ベテ兄弟ガ懇親ナル待遇ヲ謝ス〔以上『七一雜報』六巻、第十二号より〕

又帝ヨク同敎會ヘ弘敎費トシテ洋銀千弗ヲ下サレシト申ス〔山本の言葉〕

三月十三日　魯國皇帝反徒ノ爲ニ滅セラル

同　十九日　金澤ノ傳道者林〔清吉〕氏來ル

バラ敎師ヨリ一月廿五日郵送ノ書簡　三月十日ニ着ス

三月十三日　魯國皇帝凶徒ノ爲ニ殺サル

十五日　バラ氏ヨリ耶蘇敎畧解　廟祝問答并ニ聖書ノ鏡等ヲ郵送シ來ル

三月廿一日　横濱バラ氏より三月分一月分傳道費二十円并ニ三月分給料十円郵送シ來ル

希哇〔希〕（或ハ）サントウリチ王國

政体　立憲政治

憲法ハ一千八百六拾四年八月廿日　先王カメハメハ第五世ノ設定スル処ニシテ　國會ハ上下二院ニ別ナ國語或ハ英語ヲ以テ討議ヲナス　國ノ大事ト茲メバ　國王ハ特別會ヲ開キ【60】之ヲ議ス　其會員ハ各省ノ長官及ビ特選ノ議員ナリ　特撰議員ノ半數ハ本國人ヲ撰取シ　半數ハ外國人ヲ撰ブ　又全國人ヲ悉皆招集シテ評議スルノ事ハ國王ニ屬ス　王族カラカクア第一世一千八百卅六年降誕　一千八百七拾四年即位　カヒヲラニ王妃一千八百三十四年降誕　リヂヤカマカエハ春宮　ミラム　リケリケ王妹　エマ大后　先王カメハメ第五世ノ后　ルツ　ケーリコラニ先王妹

内閣外務卿カペナ　内務卿ウィルドル　検事長ブレストン　大藏卿カアイ、　大警視パーク　税関長アレン「チアンセロール」パリス　大審院及ヒ刑事長ヲ兼　又耶蘇旧教大僧正マイグレット　同新教大僧正ウィリス

島數ハ布哇　マヲウイ。モコクイ。ライナ　ヲアヒコ　カヲウマイ　ニハウ　カフラヒ

人口　男　三万四千百三人〔人口　一九〇〇年〔錯誤?〕〕

女　二万三千八百八拾二人

計　五万七千九百八十五人

土　人　四万四千八十一人

支那人　五千九百十六人

白　人　四千五百六十一人

米　人　千二百七十六人

英　人　八百八十三人
葡　人　四百三十六人
日　人　二百七十二人［横濱教會史ハ百十五人とある］
佛　人　八十一人
其他外國人
【61】歳入　一百十五万一千七百十三弗（八百七十六）
〃費　百十一万四百七十二弗
千八百七十五年　輸入　一百六十八万二千弗
輸出　一百八十三万五千弗
物産　砂糖　米　加比　蠟　脂肪　牛皮
商船　五十五艘　内五艘蒸氣船
鐵道　マウイ島ニ建設中
電信　全國ニ布設ス

四月一日
名古屋大曾根［山田菊藏宅］ニ於テ親睦會ヲ開ク　集會スル者二十名

四月六日
栗林　服部ノ両兄ト當地近傍ヲ散歩ス

四月八日
岡崎ヘ至ル　道ニテ正村氏ノ名古屋ヘ行クニ遇ス

石橋重則氏より新約支那訓点ノ三冊代價　壱円五戔　河面氏より支那訓点二部并ニ日本訳□□書義ノ部壱円十二戔　并テ（アワセ）貳円十七戔ヲ受取ル

四月十七日　日曜日
山田　林氏光來　坂野氏より書狀到來　坂野氏ノ宅
東京築地南飯田町三番　小野木清吉方にて　坂野嘉一
○正村氏より一円三十八戔受取
【62】支那譯訓点新約　七　三円四十五［戔］
日本譯　四十五　八十七戔
佛道新論　一　三十戔
五教通考　一　二十戔
天道遡原　二　四十戔
詩　二　二拾四戔
羅馬書　一　二十戔
旧約ノはなし　一　二十五戔
○ハイテルボルグ　五戔
○五月　ハラ（ママ）氏より　四月五月分トシテ四拾円受取リ［五月］
○天道遡原　馬太註　新約訓　行傳ノ話ノ代價　栗村氏に宅（ママ）ス
○五六七月分トシテ栗村氏ニ新聞代價ヲ托ス

五月十七日　尾張名古屋発(43)

同　廿日　峰山へ着す［別帳(朱書)を見よ］

八月末　天道遡原二部　訓点二部ノ代價　壱円十三戔會社へ拂フ

十四年十一月

九円七拾四戔ノ書籍　栗村氏ニ托ス　此同會社へ通知ス

明治十六年三月一日

二円四十戔　通鑑第六七回分ノ代價

同　二円　三四月ノ掛金

四月下旬　林氏へ托シ　通鑑第八回分并ニ壱円五十錢　石原氏へ送ル。

【63】［このページは、ペン書き］

ヒリツピンの事　朝日明治十七年一月六日朝刊

庄公と呼ばれて勇敢な日本人の比島に於る活躍ぶり

庄公は李馬奔(リマホン)と云ふ支那人とともにジャンク六十二隻　海兵二千人　陸兵婦女子千五百人を引率してマニラ湾を襲つた。庄公は、兵六百の将として大いにスペイン兵を悩ましたが、不幸暴風が起り　ジャンクは多く沈没し、二百名はかりが溺死した。そこで彼は残兵をまとめてマニラ城外に上陸し、部将マルチンデ　ゴイトを殪した。時にスペイン軍の援兵がいたつた。庄公之を大軍と誤認して退却し　スペイン軍勢に乗じて追撃、血戦の後兵を引いた。やがて又スペイン軍ウーアン　サルセドに率あられ、大挙李馬奔軍攻撃を開始し　庄公は千五百人を率ゐてマニラに上陸し、市街に火を放【64】つて堡壘を圍み　海上部隊からも砲撃に應呼して城内に突入し　血戦の末終に陣歿した。その爲め李馬奔軍は破れ、スペイン軍はマニラ占拠を全ふすることが出來た

【65】明治八年五月七日　即一千八百七十五年（四月廿五日五月七日）比特(被得)堡府ニ於テ

榎本武揚（印）

ゴルチヤコス（印）

朕親［シ］ク右條約ヲ通覧シ　其旨ヲ至當トス　故ニ今此書ヲ以テ之ヲ全ク証認批准シ　大地ト悠久ヲ期シ　總テ條約中所載ノ條款ハ正ニ之ヲ遵行セム事ヲ約ス　右定証トシテ爰ニ朕ガ名ヲ親記シ　國璽ヲ鈐(ケン)セシム

神武天皇即位紀元二千五百三十五年

明治八年八月廿二日

御名　國璽

奉勅　外務卿　寺島宗則（外務卿印）

【65】明治八年五月七日(44)　彼得堡ニ於テ其條約ヲ締結調印セリ即其條款左ノ如シ

樺太千島交換條約

大日本國皇帝陛下ト　全魯西亜國皇帝陛下ハ　今般樺太島（即チ薩蛤連島）　是迄両國雜領地タルニ因〔リ〕テ屢次其間ニ起〔レ〕ル紛議ノ根ヲ斷チ　現下両國間ニ存スル交誼ヲ堅牢ナラシメムガタメ　大日本國皇帝陛下ハ樺太島（即薩蛤連島）上ニ存スル領地ノ權理ヲ〔全魯西亜國皇帝陛下ハ「クリル」群島上ニ存スル領地ノ權理ヲ〕互ニ相交換スル〔ノ〕約ヲ結ント欲シ大日本國皇帝陛下ハ　海軍中將兼在魯京特命全　公從四位榎本武揚ニ其全權ヲ任ジ　全魯西亜國皇帝陛下ハ大政大臣金剛石裝飾魯國「シント〔、〕アンドレアス」褒牌　シント〔、〕ウラジミル一等褒牌「アレキサンドル〔、〕子フスキー褒牌　白鷲褒賞牌　シントアンナ一等褒牌　及シントスタニスラス一等褒牌佛蘭西國レジウレ〔ン、〕ド、オ〔ノ〕ール大十字褒牌　西班〔牙〕國金膜大十字褒牌　澳太利國シント〔、〕ェチー子大十字褒牌　金剛石裝飾學露生國黒鷲褒牌　及其他諸國ノ諸褒牌ヲ帶ル公爵「アレキサンドル、ゴルチヤコフ」ニ其全權ヲ任スリ　右各全權ノ者左ノ條款ヲ協議シテ相決定ス

【67】第一款　大日本國皇帝陛下ハ其後胤ニ至ル迄　現今樺太島〔即薩蛤連嶋〕ノ一部ヲ所領スル權理及ヒ君王ニ屬スル一切ノ權理ヲ全魯西亜國皇帝陛下ニ讓リ　而今而後樺太全島ハ悉ク魯西亜帝國ニ屬シ　「ラペルース」海峡ヲ以テ兩國ノ境界トス

第二款　全魯西亜國皇帝陛下ハ　第一款ニ記セル樺太島〔即薩蛤連嶋〕ノ權利ヲ受し代トシテ其後胤ニ至ル迄　現所領〔ロ〕クリル〔ロ〕群島即第一「シユムシス」島第二「アライト」〔島〕第三「バラシムル」〔嶋〕第四「マカンルシ」〔嶋〕第五「チ子コタン」〔嶋〕第六「ハリム〔マヨ〕タン」〔嶋〕第七「ヱカシルマ」〔嶋〕第八「シヤスコタン」〔嶋〕第九「ムシル」〔島〕第十「ライコケ」〔島〕第十一「マツア」〔嶋〕第十二「ラスツア」〔嶋〕第十三「スレト子リ」及〔ロ〕ウシ、ル〔ロ嶋〕第十四「ケイト」〔嶋〕第十五「シムシル」〔嶋〕第十六「ブロトン」〔島〕第十七〔ロ〕チエルポイ〔ロ〕幷ニ「ブラット〔、ロ〕チエルボエフ」〔國〕第十八「ウルツプ」島共計十八島ノ權理及〔ビ〕君王ニ屬スル一切ノ權理ヲ大日本國皇帝陛下ニ讓リ而今而後「クリル」全島ハ日本帝國ニ屬シ　東察加地方「ラパツク」岬ト「シユムシユ」島ノ間ナル海峡ヲ以テ両國ノ境界トス第三款、前條所載各地幷ニ其地産ハ此條約批准爲取換ノ日ヨリシテ　直ニ全ク新領主ニ屬スル者トス　但其各地受〔取〕渡シノ式ハ批准後雙方ヨリ官員一名又ハ数名ヲ撰テ受取掛リトシ實地立會ノ上執行ス可シ

第四款　前條所記交換ノ地ニハ其地ニアル公同ノ土地　人ノ下手セザル地所一切　公共ノ造築壘壁屯所及〔ビ〕人民ノ私有ニ屬セザル此種ノ建物等ヲ所【68】領スルノ權利モ兼存ス　現下各政府ニ屬スル一切ノ建物及動産ハ第三款ニ載スル雙方〔ノ〕受取掛役取調ノ上　其代價ヲ檢査シ其金額ハ其地ヲ新ニ領スル政府ヨリ出ス者ナリ

第五款　交換セシ各地ニ住ム各民〔(日本人及魯西亜人)〕ハ各政府ニ於テ左ノ條款ヲ保証ス　各民幷共〔ニ〕其本國籍ヲ保存スルヲ得ルヿ　其本國ニ歸ラント欲スル者ハ　常ニ其意ニ放テ歸ヲ得ルヿ　或ハ其交換ノ地ニ留ルヲ願フ者ハ　其生計ヲ充分ニ營ムヲ得ルノ權理及其所有物ノ權理及隨意信教ノ理ヲ悉ク保全スルヲ得ル全ク其新領主〔ノ〕屬民〔(日本人及魯西亜人)〕ト差異ナキ保護ヲル受事　然リト雖(然)モ其各民ハ幷共ニ其保護ヲ受ル政府ノ支配下ニ屬スルヿ

第六款　樺太島〔即薩蛤連嶋〕ヲ讓ラレシ利益ヲ酬ル爲〔メ〕全魯西亜皇帝陛下ハ　次ノ條件ヲ准許ス

第一條　日本舩ノ「コルサコフ」〔即「クシユンコクン」〕港ニ來ル者ノ爲〔メ〕ニ　此條約批准取換ノ日ヨリ十ケ年間　港税モ海関税モ免スルヿ　此年限満期ノ後ハ猶之ヲ延スモ又税ヲ収シムルモ　全魯西亜國皇帝陛下〔ノ意ニ任ス　全魯西亜國皇帝陛下〕ハ日本政府ヨリ「コルサコフ」港ヘ其領事官又領事兼任ノ吏員ヲ置ク權理ヲ認可ス

第二條　日本舩及〔ヒ〕商人通商航海ノ爲メ「ヲホツク」海諸港及東察加海港ニ來リ又ハ其海及海岸ニ沿テ漁業ヲ營ム等　渾テ魯西亜最懇(親)新ノ國民同様ナル權理及特典ヲ得ルヿ

第七款　海軍中將榎本武揚全權委任狀ハ未ダ到來セスト雖モ電信ヲ以テ其送致スル旨ヲ確定セラルヽニ由リ　其到ルヲ待〔タ〕ズシテ此條約面ニ記名シ　其到ルヲ待テ各全權委任狀ヲ相示スノ式ヲ行ヒ　別ニ其事ヲ記シテ以テ左券トス可シ

第八款　此條約ハ大日本國皇帝陛下幷ニ全魯西亜國國(ママ)皇帝陛下互ニ相許可シ　而批准スベシ　但シ各皇帝陛下ノ批准爲取換ハ各全權記名ノ日ヨリ六ケ月間ニ東京ニ於テ行フ可シ　此條約ニ權力ヲ附スル爲メ　各全權各其姓名ヲ記シ　特ニ其印ヲ鈐(ケン)スル者ナリ○(ママ)(以下朱書)

【69】明治十二年七月一日御達

日本國合衆國間現在條約中或箇條ヲ改定シ　且ツ兩國ノ通商ヲ増進スル爲ノ約書

日本國

皇帝陛下及亜米和(利)〔加〕合衆國

大統領ハ從來幸ニ兩國間ニ現存スル所ノ親睦ナル交際ヲ維持センヿヲ希望シ　且ツ追加ノ約書ニ因テ庶幾クハ尚一層其交誼ヲ固クシ　両國間ノ貿易ヲ擴張シ且ツ堅實ナラシメントス其爲メ雙方ニ於(ママ)テ各自ノ全權委員ヲ選フ　即〔チ〕日本國皇帝陛下ハ亞米利加合衆國ニ駐劄スル特命全權公使從四位勲三等吉田清成

合衆國大統領ハ國務卿ウイルリアム(ウキリアム)〔ヽ〕マツキスウエル、エウワーツ右雙方ノ全權委員ハ各其委任狀ヲ相示シ　雙方其確實正當ナルヲ識認シテ　左ノ各條ヲ協議決定セリ

第一條

慶應二年五月十三日　即チ西暦一千八百六十六年六月廿五日

一方ハ日本國委員　他ノ一方ハ亞米利加合衆國　大貌利太泥亞　佛朗西(蘭)　和蘭ノ委員　江戸ニ於テ調印シタル改税約書幷ニ右約書ニ載〔セ〕タ【70】ル輸出入品運上目録及借庫規則ハ日本ト合衆國トノ間ニ於テハ　茲ニ之ヲ廢棄シ　而シテ現ニ其施行ヲ止ムルハ　此約書ノ第十條ニ掲載スル約束實施ノ時ニ於テス可シ　又江戸ニ於テ取リ結ビタル安政五年　即西暦一千八百五拾(十)年條約ノ中　港海開(ママ)税及諸税ノ諸規則ニ関スル條款幷ニ右安政五年　即西暦〔一〕千八百五十八年ノ條約ニ添ヘタル貿易章程モ悉背之廢棄ス可シ　此約書實施ノ日ヨリ日本海関税幷ニ其他ノ諸税ヲ自由ニ賦課シ　及日本開港場外國貿易ニ関スル諸規則制定ノ權利ハ獨リ日本政府ニ屬スルヿヲ合衆國ハ識認ス可シ

第二條

然レドモ合衆國ヨリ日本ヘ輸出スル諸物品ニ課スル税額ハ他ノ外國ヨリ輸入スル同種類ノ物品ニ課スルモノニ超過ス可ラズ　而シテ若日本政府ニ於テ其領地内ヘ或物品ノ輸入若クハ輸出ヲ禁止スルヿアルトキハ　合衆國ノ産物　舩舶　或ハ人民ニ對シ　他ニ異ナル所ノ禁止ヲ爲サル可シ

第三條

合衆國ハ日本ニ向テ輸出スル物品ニ輸出税ヲ課セサルヲ以テ此約書實【71】施ノ後　日本ニ於テモ亦合衆國ヘ向ケ輸出スル物品ニ輸出税ヲ課サル可シ

第四條

安政五年　即西暦〔一〕千八百五十八年ノ條約第六條第一節即チ最初ノ三句現存スル間ハ　右現存條約ノ違犯若クハ此約書ニ因テ　日本政府ニ於時々制定スル海関税借庫及港ノ諸規則違犯ニ関スル没入品或ハ罰金ニ付　日本政府ノ要求ハ悉〔ク〕合衆國領事裁判所ニ訟フ可シ　而テ該國領事ハ各訴訟ヲ公正ニ審按シ　右條約及諸規則ノ條款ニ照シ　之ヲ裁断ス可シ　而テ右没入品或ハ罰金ハ日本官員ニ交付ス可シ(以上朱書)

第五條

日本沿海貿易統轄ノ權利ハ獨リ日本政府ニノミ屬スル者タルヿハ　固ヨリ雙方ノ識認スル所タルヲ以テ　此ニ之ヲ明言ス

第六條

然ヒ日本開港場ニ來着スル合衆國ノ舩舶ハ　日本海關税則ニ從ヒ　其舶載スル物品中幾部分タリトモ其望ニ任セ陸揚スルヲ得ヘシ　而テ其舩舶ハ右陸揚シテ積荷目録中ニ其事由ヲ記載シタル部分ノ外ハ　輸入税其他一切ノ諸税ヲ拂ハスシテ【72】其残餘ノ物品ヲ載セ出港スルヲ得ベシ　右舩舶ハ其後他ノ日本諸開港場ニ航行シ　其望ニヨリ残〔リ〕ノ物品ヲ右諸開港場ニ陸揚スルヲ得ヘシ　然レトモ凡テ舩舶ノミニ對シ課スル諸税諸費ハ最初其積荷ノ幾部分ヲ陸揚スル港ノミ於テ拂フ可シ　而〔シ〕テ該舩舶其後引續キ航海シテ到ル所ノ港ニ於テハ　其地方港内諸税ノミヲ入港ノ爲ニ拂フ可シ

第七條

合衆國ハ上文第一條ニ約スルカ如ク　日本輸出入品運上目録運上規則及ヒ其他ノ諸規則ニ關シ　讓与スル所アルヲ以テ日本政府ハ互相ノ理ニ基キ　左ノ事を讓与ス　即チ從前開港場ノ外ニ更ニ二港ヲ此約書實施ノ日ヨリ合衆國人民幷ニ商船來往貿易ノ爲メニ開ク可シ〔但シ二港中一港ハ下關タルヘシ〕而〔シ〕テ他ノ一港ハ此後雙方協議ノ上決定ス可シ

第八條

両國間ニ結ベル安政五年　即チ西暦一千八百五十八年〔ノ〕條約第五條ハ必用ナラズト認ムルヲ以テ　右條款ハ此約書實施ノ日ヨリ廃棄ス可シ

第九條

從來両國間ニ結約シタル條約或【73】ハ約書ノ條款中今茲ニ廃棄ヲ明掲セサルモノニシテ　此約書ノ條款ニ抵觸スルモノハ悉皆廃棄ス可シ　且ツ此約書ハ両國間現存約條ノ一部分ト爲ス可シ　又右條約中此約書ニ因リテ変更若クハ廃棄セサル部分ハ重修幷ニ此約書ノ重修ハ此後雙方ノ中ヨリ要求スルヲ得ベシ　又此約書幷ニ此約書ニ因テ変更スル所ノ右條約ハ其全部或ハ其部分ノ重修ヲ爲ス時ニ臨ミ　廃止若クハ年限ヲ約定スル迄ハ引續キ之ヲ施行ス可シ

第十條

此約書ハ日本ト他ノ締盟各國ト現實此約書ト均シキ所ノ約書或ハ現存條約ノ重修ヲ取結ヒ　右現行ノ時ニ至リ實施ス可シ

此約書ハ批准ヲ要スルモノトス　而テ其交換ハ此約書調印ノ日ヨリ十五ケ月以内成ルヘク速ニ華盛頓府ニ於テスヘシ

右ノ証トシテ上文記載ノ全權委員各自カラ其名ヲ署シ印ヲ鈐ス

華盛頓府ニ於テ

明治十一年七月廿五日　　吉田清成　印

西暦千八百七十八年七月廿五日　ウヰリアム〔、〕ヱム〔、〕ヱウワーツ印

天祐を保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐タル日本國皇帝（御名）此書ヲ見ル【74】有衆ニ宣示ス　善良適宜ナル朕ガ特別ノ全權ヲ有セル特命全權公使吉田清成ヲ以テ　千八百七拾八年七月廿五日華盛頓府ニ於テ日本國及合衆國ノ間ニ取結ヒシ約書ヲ朕親ラ閲覧點検セシニ　能ク朕ガ意ニ適シ　更ニ間然スヘキナシ　故ニ凡テ其約書條款ニ掲クル本趣ハ朕茲ニ之ヲ嘉納批准ス

神武天皇即位紀元二千五百三十九年　明治十二年二月七日

東京宮中ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名國璽

奉勅　外務卿　寺島宗則　印

第四拾号

明治五年（八月）第貳百貳拾四号ヲ以テ布告候學制相廃シ更ニ教育令別冊ノ通リ相定候條此旨布告候事

明治十二年九月二十九日

大政大臣　三條實美

教育令

第一條　全國ノ教育事務ハ　文部卿之ヲ統攝ス　故ニ學校　幼稚園書籍館等ハ　公立私立ノ別ナク　皆文部卿ノ監督内ニアル可シ

第二條　學校ハ小學校　中學校　大学校　師範學校其他ノ各種學校トス

【75】第三條　小學校ハ普通ノ教育ヲ児童ニ授クル所ニシテ其學科ヲ讀書　習字　算術　地理　歴史　修身等ノ初歩トス　土地ノ情況ニ随ヒテ　罫畫　唱歌　体操　歌(うたヒ)体操(ヒカヒ)　等ヲ加ヘ又物理　生理　博物等ノ大意ヲ加フ　殊ニ女子ノ爲ニハ裁縫等ノ科ヲ設ク可シ

第四條　中學校ハ高等ナル普通學科ヲ授クル所トス

第五條　大學校ハ法學　理學　醫學　文學等ノ専門諸科ヲ授クル所トス

第六條　師範學校ハ教員ヲ養生(成)スル所トス

第七條　専門學校ハ専一科ノ學術ヲ授クル所トス

第八條　以上掲クル所向ノ學校ヲ論セズ　各人皆之ヲ設置スルコトヲ得ヘシ

第九條　各地方ニ於テハ　毎町村或ハ數町村聯合シテ公立小學校ヲ設置ス可シ　但シ町村人民ノ公益タル可キ私立小學校アル時ハ　別ニ公立小學校ヲ設置セサルモ妨(ゲ)ナシ

第十條　町村内ノ學校事務ヲ幹理(管)セシメンカ爲ニ　學校委員ヲ置ク可シ但シ人員ノ多寡給料ノ有無ハ其町村ノ適宜タル可シ

第十一條　學務委員ハ其町村人民ノ撰擧タル可シ

【76】第十二條　學務委員ハ府知事縣令監督ニ屬シ　兒童ノ就學學校ノ設置保護等ノ事ヲ掌(ド)ル可シ

第十三條　凡兒童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年ヲ以テ學齢トス

第十四條　凡兒童學齢間少ナクトモ十六箇月ハ　普通教育ヲ受ク可シ

第十五條　學齢兒童ヲ就學セシムルハ　父母及後見人ノ責任タル可シ　但シ事故アリテ就學セシメサル者ハ　其事由ヲ學務委員ニ陳述ス可シ

第十六條　公立小學校ニ於テハ八箇年ヲ以テ學期トス　土地ノ便宜ニ因リテハ此學期ヲ縮ムルコトヲ得ヘシト雖モ　四ケ年ヨリ短クス可ラズ　此四ケ年間ハ毎年授業スルコト必ズ四ケ月以上タル可シ

第十七條　學校ニ入ラスト雖トモ　別ニ普通教育ヲ受ルノ途アルモノハ就學トナス可シ

第十八條　學校ヲ設置スルノ資力ニ乏シキ地方ニ於ハ　教育巡回ノ方法ヲ設ケテ兒童ヲ教授スルヿヲ得ベシ

第十九條　學校ニ公立私立ノ別アリ　地方税若クハ町村ノ公費ヲ以テ設置セルモノヲ公立學校トシ　一人若クハ數人ノ私費

ヲ以テ設置スル者ヲ私立學校トス

【77】第二十條　公立學校ヲ設置或ハ廃止セント欲スルモノハ府〔縣〕知事縣令ノ認可ヲ経ベシ〔第二十一條から第四十七條は省略〕

【78】〔明治十四年三月改正〕

聖書會社書籍

詩訓点十一冊　新約訓点三冊　仝日本〔新〕約一冊　旧約二　馬太註解一　馬可一　かな馬太十冊　新道(ママ)總論二部　ハイデルホルグ二冊　加拉多(ママ)一　希伯來二冊　行傳二冊

右名古屋ノ分

詩篇(ミセケチ)

旧約ノはなし四冊　〔耶蘇に來れよ〕耶蘇ニ来(略)レ三冊　祈禱ノ理三冊　天道遡原二冊　馬太註三冊　天道歴程二冊　右岡崎

【79】

河〔面　晋〕　三十一年十ヶ月〔洗礼ノ歳カ〕

石〔橋重則〕　二十九年三ヶ月

正村　〔基〕　三十七年八ヶ月

東京麹町平河町六丁目廿二番地　井深梶之助

【80】〔△ハ受取ノ兆　十三年十二月改　十四年三月改〕

貸渡シ書類

一　アリサメチツク　一冊

一　Conversation　〃

△一　自然神教　五冊

▲一　訓附喩道傳　坂野氏

清水町講義所ニアリ

△一　性理略論　清水信徒山田氏

買取　二冊

一　天道遡原　清水氏(ミセケチ)　岡崎　伊賀村

林氏并ニ名古屋宮城　一冊

△一　喩道(ミセケチ)傳　岡崎(ミセケチ)　石橋氏(ミセケチ)　一冊

▲一　日本譯(ミセケチ)馬太(ミセケチ)傳　清水(ミセケチ)　林氏(ミセケチ)　一冊

▲一　近事評論(ミセケチ)　附東京新報　山田氏

一　支那譯羅馬書　深井氏　一

一　旧約はなし　森岡氏　一

一　フルベッキ耶蘇教証據〔論〕吉田氏　一

一　天路(ミセケチ)歴程　原書并新約　石田啓藏氏

一　英新約小本　山田氏

一　講義作法　鈴木甲次郎氏

一　新約四福音書　一冊　舩橋氏

一　使徒行傳　正村基

一　格物探源(ミ)并ニ馬太註(ミセケチ)譯　岡崎へ

△一　神道惣(ママ)論　三冊　清水山田氏へ

一　日本譯新約　馬可　約翰　馬太注(ママ)解　羅馬　可林多前後

加拉多ヨハ子ノ書［幷ニ支那訓点四福音書一冊］清水町
講義ニアツケオク
一　詩篇　五教通考　ハイテルブルク等　岡崎
一　佛道新論　林氏□□
一　エツセイ地理書　六合雑誌　第三　森［岡］氏
一　五教通考　聖書會社ノ部

【81】教會所有書籍類
一　格物探原　五冊
一　天道遡原　一冊
一　新約聖書前編　四冊
一　旧約ノはなし　一冊［森岡］
一　讃美歌　十五冊
一　羅馬書日本訳　四冊

【82】［［バラ］教師より受取書類覺］
△三月　初學問答　四円　二百冊
七月二日
八月二日
新約聖書前編　二円五十二　十四冊
〃　天道遡原　六十戔　三冊
〃　天路歴程　十戔　二冊
△〃　眞理易知　二十戔　十冊
八月十日

山本秀煌日記第貳号

一　耶蘇教問答　二十五冊
一　支那聖書　五十戔　二部
△一　耶蘇教畧解　数部
△一　廟祝問答
△一　耶蘇教問答
△一　聖経初要

【83】［九冊　二冊　二冊　二部］
賣　例　書　籍
七月
一　新約聖書　一冊　代價受取　深井君
一　〃　〃　〃　正村君
一　〃　〃　石橋君
一　〃　〃　河面君
一　天道遡原　一冊　〃　石橋君
一　天路歴程　〃　受取　吉田君
一　〃　〃　森　岡［星上］
一　新約聖書　〃　〃　牧　君
四月ヨリ六月迄［中十冊代價ハ植村氏ヨリ受取　傳道費内ヘ入ル］
一　初學問答　二十冊代價受取
八月十日
一　新約聖書　〃　代價受取　鬼頭君

山本秀煌日記第貳号

八月十一日

一　新約聖書　〃　代價受取　井上君

一　天道遡原　牧　君

八月廿七日

一　新約聖書　一冊　代價受取　清水町一信徒

九月四日

一　新約聖書　一冊　代價受取　清水町一信徒

一　両約全書　一部　代價受取　清水山田氏

九月廿一日

一　新約聖書四福音書　一冊　代價受取　鬼頭君

一　初學問答（ミセケチ）　二十冊（ミセケチ）　中十冊（ミ）ハ植（セ）村ヨリ代價受取（ケチ）

新約聖書　代價　一円八十戔

天道遡原　両約書幷ニ天路歴程　代價　九十戔

惣〆二円七十戔ナリ

一　両約全書　中水野鈴木〔雅彦〕氏ヘ賣ル　代價受取ルオルハス

漢書

古輯（ヤマ）入　但古書目録　二冊　郵税トモ九戔　御納（カ）上逓送ス

東京本町三丁目　瑞穂屋卯三郎

注　『山本秀煌日記第貳号』

（1）「日米和親通商條約改定」については、『七一雑報』四巻、第二八号（明治十二年七月十一日）一～二ページ参照。

（2）明治十二年六月二十一日に会堂を建築し、開堂式をあげたのは、浅草教会である。『七一雑報』四巻、第二八号（明治十二年七月十一日）三ページ参照。

（3）『七一雑報』四巻、第二八号（明治十二年七月十一日）三ページ参照。

（4）『七一雑報』四巻、第二八号（明治十二年七月十一日）三ページ参照。

（5）京都の本願寺寺務役員が「檄有志門徒」を送り、「突如改革の命下つて本願寺役員憤激」として話題をさらったことについては、『新聞集成明治編年史』第四巻、七九、八〇ページ参照。

（6）「グラント歓迎の工部大學大夜會」については、『七一雑報』四巻、第二九号（明治十二年七月二十八日）三ページ、『新聞集成明治編年史』第四巻、七六、七七ページ参照。

（7）『愛知新聞』第九八九号（明治十二年七月二十三日）二ページにも掲載されているが、山本秀煌が読んだのは『愛岐新報』らしい。しかし、国立国会図書館にも愛知県図書館にも、また名古屋市鶴舞中央図書館にも、当該『愛岐新報』は所蔵されていない。当時の新聞は、毎日コレラについて報道している。

(8) 『新聞集成明治編年史』第四巻、七九、八〇ページに報道されている。

(9) 「經濟不安を一掃して明治政府の國債紙幣銷還の方策を樹つ」については、『新聞集成明治編年史』第四巻、八〇～八二ページ参照。

(10) 『各府縣會議長へ配られた國會開設懇請議案―（上總の櫻井静より）―』については、『新聞集成明治編年史』第四巻、八三ページ参照。

(11) 「東京府民より臨幸の請願」については、『七一雑報』四巻、第三一号（明治十二年八月一日）三ページ、『新聞集成明治編年史』第四巻、八三、八四ページ参照。

(12) 「新潟港の貧民米價暴騰に狂い立ち、大擧米商を襲撃」については、『新聞集成明治編年史』第四巻、八九ページ、「新潟縣米騒動情報」については、『新聞集成明治編年史』第四巻、九〇ページ参照。

(13) 『安城市史』（安城市編さん委員会編、愛知県安城市役所、一九七一年）八一五～八二二ページによると、「明治用水」といわれる第二新掘割の完成についての経緯が述べられている。これは旧岡崎藩以来の懸案で、岡崎藩内の大庄屋、阿彌陀堂村伊予田與八郎と、石井新田の岡本兵松両人の計画で、伊予田が財政面を、岡本が農民の説得を受け持ち、最終的には愛知県がその計画を承認して完成させた。用水成業式には、内務卿松方正義も出席し、「之ヲ往時封建ノ世ニ比シテ考フルトキハ　即チ一朝ニシテ拾萬石以上の大名ガ土地ノ所得ニヒトシキ利益ヲ生ジタルノ理」と祝辞を述べている。当時の大事業であった。

(14) 美以美教会の定住伝道者栗村左衛八は、旧桑名藩士小山正武の妹さい子と結婚したので、栗村の一行は彼の妻の実家に泊まったのであろう。拙著『尾張名古屋のキリスト教』一八、一九ページ参照。

(15) 「グラントの日光見物」については、『新聞集成明治編年史』第四巻、八九ページ参照。

(16) 前述注(12)参照。なお、『新聞集成明治編年史』第四巻、九六、九七ページの「新潟縣に又コレラ騒動　暴民數百人集合、遂に發砲に至る」の報道も参照。

(17) 「聖上上野公園に御臨幸」の報道については、『七一雑報』四巻、第三五号（明治十二年八月二十九日）三ページ、『新聞集成明治編年史』第四巻、九三～九五ページ参照。

(18) 瀬川淺の来名については、「傳道の草分」六七ページ参照。

(19) 「横濱瓦斯買収問題　日本の一大訴訟」については、『新聞集成明治編年史』第四巻、九六ページ、『朝野新聞』第一七九一号（明治十二年八月二十九日）二ページ参照。

(20) 「皇子御降誕」（後の大正天皇）については、『七一雑

報』四巻、第三六号（明治十二年九月五日）三ページ参照。

(21) 「グラント御暇乞の爲參内　聖上御引見勅語を賜ふ」については、『七一雑報』四巻、第三七号（明治十二年九月十二日）三ページ参照。なお、これは「ヘラルドより署譯」。ただし、「處」を「所」に、「トモ」を「ヒ」に等については、訂正しなかった。

(22) 「明宮嘉仁親王御命名式」については、『新聞集成明治編年史』第四巻、九九ページ参照。

(23) 『山陽新報』第一五九号（明治十二年八月三十日）一ページ（国立国会図書館所蔵）の論説に、「山陽道諸縣ノ縣會議員岡山に聯合協議會ヲ催フシ　國會開設ノ事ヲ懇願セントス」という見出しがあるが、この内容が『愛岐日報』の報道源である。

(24) 「文部卿外務卿兼任決定」については、『新聞集成明治編年史』第四巻、九九ページ参照。

(25) 川路大警視の事件は、「佛國で重体」であった。『新聞集成明治編年史』第四巻、一〇五ページ参照。

(26) 「露國最高勲章我皇室へ贈呈」については、『新聞集成明治編年史』第四巻、一〇〇ページ参照。

(27) 山本は故郷丹後国峰山が「丹後ちりめん初祖の地」であるので、メイセンの機械を送ったのであろう。

(28) 「藤田傳三郎中野梧一の拘引は　贋札事件か或は他の犯罪か」については、『新聞集成明治編年史』第四巻、一〇五～一〇七、一一四、一三九、一五二～一五六ページ参照。

(29) 名古屋教会の初穂については、『山本秀煌日記第貳号』以外には史料はない。ただ、『七一雑報』四巻、第四三号（明治十二年十月二十四日）三ページによると、「麹町教會の奥野氏は尾州名古屋の町に住む植村氏方にて受洗を願ふものあるよし報知により　本月六日該地へ出立せられしよし」とあり、また『七一雑報』四巻、第四六号（明治十二年十一月十四日）三ページによると、奥野は「該地にて兩人に洗礼をほどこし」とあるが、その「兩人」が誰であるのか、はっきりしなかった。しかし、この『山本秀煌日記第貳号』によって、名古屋教会の最初の受洗者が明らかになったのである。

(30) 川路大警視の死去と大山巌大警視兼任については、『新聞集成明治編年史』第四巻、一一八、一二〇ページ参照。

(31) 明治十三年一月五日から始まった年首祈禱会は、その後百年を経ても、日本基督教団中部教区西地区において継承されている。拙著『尾張名古屋のキリスト教』三九、二一一、二一二ページ参照。

(32) 日本基督一致教会の名古屋伝道の糸口をつくった鈴木鉀次郎が、この度上京することになったことは、山本にとっても打撃であったであろう。名古屋伝道が地元の人ではな

く、余所者であったところに、問題がのこる。

(33) 美以美教会宣教師コレルの来名は、十名の受洗のため、および美以美教会建設のためであった。このことについては、『山本秀煌日記第貳号』の外に、『七一雑報』五巻、第一九号（明治十三年五月七日）四ページに栗村左衛八が「名古屋 導道ノ景況」と題して報告している。その中には、

「今般横濱ヨリコルレル氏出張アリ　高取〔六太郎〕氏始男八人　女二人　聖父聖子聖靈ノ名ニ依リ洗禮を受ケタリ是ノ如キ荒れたる名古屋ニモ主ノ兼テヨリ撰ビ玉フノ處ノ民タルヿヲ深ク感ゼリ　其他にも受洗を願フ人アレヒ　未ダ聖書通暁セザルヲ以テ今支度中ナリ　現今ノ會友都合二十二人ノ小群レトハナレリ」とある。また、『一八七九年度美以美教会宣教会社年報』一七三ページには、次のように報告されている。

「横浜第二連回　担当宣教師・R・S・マクレー

この連回は〔横浜の〕尾上、名古屋、西尾循回、および上ノ原の新しい伝道地を包括する。上ノ原では最初から自給を前提としてその活動を指導するように提案されている。尾原英吉兄弟は上ノ原での新しい企画を担当し、栗村左衛八兄弟は名古屋のわれわれの働きを指導し、尾原拙郎兄弟は西尾の小さい教会の世話をする。横浜におけるわれわれの伝道活動は、主に地方伝道者、奨励者、および神学生たちによって行われている。一八八〇年三月〔明治十三年四月の錯誤〕の間、コレル兄弟は名古屋を問安し、一〇名の成人に洗礼を授け、教会の会友たちを組織した。彼の問安は最も時機にかなったものであり、その結果、そこにおけるわれわれのミッションの働きに大きな利益をもたらしたのである。」

ここには、「コレル兄弟は名古屋を問安し、一〇名の成人に洗礼を授け、教会の会友を組織した」とあるが、この「教会の会友を組織した」ということは、名古屋美以美教会の建設を意味している、といえよう。拙論「在日メソジスト・エピスコパル・ミッションの名古屋伝道事始」三一ページ参照。

(34) 井深梶之助の婚姻については、『七一雑報』五巻、第二〇号（明治十三年五月十四日）三ページに、次のように報道されている。

「去月〔四月〕廿三日午后三時　麹町教會の牧師井深梶之助氏と牛込教會の水上せき女と　築地明石町十九番アメルマン氏宅に於て婚姻式を執結ばれ　式を司しは奥野教師にて　同席に列る者大凡四十人なりし」

また、吉田信好の婚姻については、『七一雑報』五巻、第二九号（明治十三年七月十六日）四ページに、次のように

報道されている。

「去月〔六月〕廿三日　下谷教會長老吉田信好氏と新榮橋教會の志村とり女と　横濱山手二百十二番女學校にて結婚の式を行なはれたり　式を司りしは稲垣氏にて式終り茶菓を饗されたりと」

(35) 明治十三年七月四日（日）に、青木金太郎と林竹太郎が稲垣信教師から受洗したことについては、横浜『海岸教会人名簿第一号』にも載っている。当時は、一人の受洗者でもニュースになる時代だったので、青木・林の受洗の記事が『七一雑報』に載ってもよいはずだったが、毎回の「大坂大親睦會」の報道記事で、『七一雑報』には報道されていない。

(36) 三浦徹と南小柿洲吾が大坂で開かれた大親睦会の帰りに、名古屋の山本を問安したことについては、山本も忘れがたく、「傳道の草分」六七ページで述べている。また、三浦の名古屋伝道については、『七一雑報』五巻、第三四号（明治十三年八月十三日）三ページに次のように報道されている。

「東京の三浦氏は大坂大親睦会の歸途、駿河の沼津並に豆州戸出浦より送られし書簡中に。七月廿三日　中仙道より大垣街道を經て名古屋に至る　直に西魚町の栗村氏を訪ひ　夜桶屋町の山本氏を訪ふ云々　廿四日の夜清水町の説教所に至る　場所は餘り繁易の地にあらねど　聽聞人は二十余人あり　山本氏に代り講義す　廿五日の夜は栗村氏の爲め西魚町で講義す　廿六七人の聽衆を得たり」

(37) この記述については、『七一雑報』五巻、五〇号（明治十三年十二月十日）二ページに、栗村左衛八が「尾州名古屋會事近報」として、次のように報道している。

「去月〔十一月〕三日天長節には、清水町に於て一致會とメソヂスト會とは親睦會を催し　幸にコルレル氏巡廻されしを以て同氏をも招待し　上野大説教の景況などを聞き　皆大に喜悦せり　翌四日コルレル氏は三州西尾に行　同所に四日滞留　毎夜説教あり　聽衆は毎夜百名を下らず　又同月十四日の日曜日には　名古屋メソヂスト會にて同氏より男一人　女一人受洗したりと　栗村氏より報」

(38) 加藤虎彦の名前は、『山本秀煌日記第貳号』にはここに初めて登場する。彼は明治十三年十一月二十八日、横浜海岸教会で稲垣信教師から洗礼を受け、東京一致神学校に入学する。彼の教会籍は、海岸教会にあるが（『海岸教会人名簿第一号』）、名古屋教会員として『七一雑報』五巻、第五一号（明治十三年十二月十七日）三ページに、「此度名古屋教會の加藤〔虎彦〕氏は傳道者志願にて　東京一致神學

校に入門されし由」と報道されている。

(39) 明治十四年一月二日から始まった「一周間祈禱會」も、一致・美以美両教会の会員たちによるものであることは、明らかである。

(40) 明治十四年一月十四日（日）、石橋重則、正村基、河面晋の三名は、岡崎の康生町講義所においてバラから洗礼を受けた。『海岸教会人名簿第一号』の記述と異なるが、山本の記述の方が正確であることは、岡崎の三名より、後述する名古屋の受洗者（林たねと林榮吉）のほうが、早く記述されていることからもわかる。なお、『七一雑報』六巻、第四号（明治十四年一月二十八日）三ページには、バラの名古屋への伝道旅行について報道されているが、受洗者については、報道されていない。

(41) 明治十四年一月十七日（水）、林榮助夫人・林たねとその長男・林榮吉は、名古屋の桶屋町講義所において、バラから洗礼を受けた。この頃の林榮吉は信仰に燃え、伝道説教に従事することは、『尾張名古屋のキリスト教』四五ページ以下参照。

(42) ハワイ皇帝カラカワの横浜海岸教会訪問については、『七一雑報』六巻、第十二号（明治十四年三月二十五日）三、四ページ、『六合雑誌』第六号（明治十四年三月十九日）一〇二～一〇四ページおよび『植村正久と其の時代』第二巻、一八八～一九七ページを参照。『七一雑報』は平仮名、また『六合雑誌』は片仮名になっているが、山本は片仮名で記述している。山本は両者を史料として用いていることは明らかである。奥野昌綱がハワイ皇帝に述べた史料は『六合雑誌』に基づき、他方、ハワイ皇帝の勅語は『七一雑報』に基づいている。なぜなら、『七一雑報』は「ど」を用いているのに、山本は『六合雑誌』のように「ヒ」を用い、また『六合雑誌』のように片仮名を用い、さらにハワイ皇帝の勅語は、『七一雑報』と『六合雑誌』とで、その内容が異なり、山本はこの点については『七一雑報』を史料として使用しているからである。従ってここでは、前者を『六合雑誌』に、後者を『七一雑報』に基づいて、修正しておく。なお山本は『六合雑誌』を「尾州名古屋本町石版舎」（『六合雑誌』第六号の裏表紙参照）で購入した可能性が高い。

(43) 明治十四年五月十七日、山本は名古屋を去るが、これで彼の名古屋伝道が終わる、ということについては、何も述べられていない。それは丁度、高知教会の初代牧師山本秀煌が、何時教会を辞任したのか、はっきりしないのと、同じである。高知教会百年史編纂委員会編『高知教会百年史』（日本基督教団高知教会、一九八五年）三五、三六ページ参照。

(44) 「樺太千島交換條約」については、『東京曙新聞』第六三六号（明治八年十一月十六日）一、二ページ（国立国会図書館所蔵）参照。今日、北方問題が騒がれている時、この「樺太千島交換條約」は、興味ある史料である。なお、山本の写の修正は『東京曙新聞』よる。なお、「丁」を「事」に、「島」を「嶋」に等については、訂正しなかった。

(堤) 「日米和親通商條約改定」については、『七一雑報』四巻、第八号（明治十二年七月十一日）一、二ページおよび『七一雑報』四巻、第二九号（明治十二年七月十八日）一、二ページ参照。なお、山本が『七一雑報』によって写を作成したことは、朱で書かれた個所が『七一雑報』の明治十二年七月十一日号に、墨で書かれた個所が、同明治十二年七月八日号によることからも明らかである。従って、山本の写の修正は『七一雑報』による。

(46) 明治五年布告の学制を廃した「教育令の發布」については、『七一雑報』四巻、第四一号（明治十二年十月十日）一、二ページ参照。なお、山本の写の修正は『七一雑報』による。山本は、この「教育令」の第二十一條から第四十七條までを省略している。なお、山本の「教」を「敎」に、「ケ」を「箇」に等は、訂正しなかった。

執筆者紹介（掲載順）

秋山繁雄　（元明治学院大学図書館史料室）
岡林清水　（徳島文理大学文学部教授・高知大学名誉教授）
木戸昭平　（国立高知工業高等専門学校非常勤講師）
平林武雄　（明治学院大学名誉教授）
真山光彌　（金城学院大学教授）

昭和六十二年十一月十日　印刷
昭和六十二年十一月二十日　発行

明治学院史資料集【第十四集】

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
編集代表　清水　徹

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
発行者　森井　眞

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
発行所　明治学院大学図書館
電話（〇三）四四八—五一八八

東京都港区南青山二ノ一一ノ一七
印刷所　第一法規出版株式会社
電話（〇三）四〇四—二二五一